

連載専門誌

# 対人援助学マガジン



Vol. 3 No. 1

第九号

JUNE 2012

対人援助学会

目次		002
執筆者@短信	執筆者全員	003-009
知的障害者の労働現場 009	千葉 晃央	010-013
社会臨床の視界 (9) -ケア・リーパー Care Leaverたち-	中村 正	014-025
ケアマネの会った家族たち (9) ~家族理解と家族支援~	木村 晃子	026-029
街場の就活論 vol.9 -新卒採用とキャリア教育に関するハナシ-	団 遊	030-032
心理療法が始まるまで (9)	藤 信子	033-035
第9回 誌上ひとりワークショップ その5-家族援助は街のアパレル-	岡田 隆介	036-040
映画の中の子どもたち 9 「少年と自転車」	川崎 二三彦	041-042
子どもと家族と学校と	中島 弘美	043-046
蠅螂の斧 社会システム変化への介入 第9回 (1990年の兎相)	団 士郎	047-053
学校臨床の新展開	浦田 雅夫	054-056
学びの森の住人たち (4)	北村 真也	057-071
幼稚園の現場から おやこんぼプロジェクト-	鶴谷 主一	072-076
福祉系対人援助職養成の現場から	西川 友理	077-083
我流子育て支援論 (9)	河岸 由里子	084-091
不妊治療現場の過去・現在・未来 9	荒木 晃子	092-101
対人援助学&心理学の縦横無尽 (6)	サトウ タツヤ	102-106
小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー (8)	尾上 明代	107-114
家族造形法の深度 (9)	早樫 一男	115-118
旅は道連れ、世は情け 9 (女性LC研究所20年)	村本 邦子	119-123
きもちは言葉をさがしている 「紅茶の時間」とその周辺 第8話	水野 スウ	124-129
やくしまに暮らして 第八章	大野 睦	130-132
お寺の社会性(七) 生奥坊主のつづやきー	竹中 尚文	133-136
こころ日記 ぼちぼち(5) (中学生日記)	脇野 千恵	137-140
これからの男性援助を考える 第七回 セクシュアリティ相談を聴くコッ	坊 隆史	141-146
ノーサイド 第5回 被害と被害を超えた論理の構築 -混乱からの脱出-	中村 周平	147-152
それでも「遍照金剛言う」ことにします(4) 脱精神科病院	三野 宏治	153-164
「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い(4)	山本 菜穂子	165-170
男は痛い! 第三回 「ノルウェーの森」	國友 万裕	171-179
援助職のリカバリー (2) ~たぶん、私は「新型うつ」でした~	袴田 洋子	180-183
周旋屋日記 (2)	乾 明紀	184-186
新連載 トランスジェンダーをいきる	牛若 孝治	187-190
新連載 役場の対人援助論	岡崎 正明	191-193
編集後記	編集長&編集員	194-195
<b>目次</b>		

執筆

33人

@短信

## 岡崎 正明 新連載

お付き合いを始めて、はや干支が3周目に突入した。「自分」とである。

はっきりって自分大好き。おかげですぐ甘やかすので困る。何も課題がないと、楽な方へ流れてしまうのは、生き物のサガだろうか。

編集長からマガジンの話を聞いて、参加させていただいたら、仕事を客観的に見直したり、それを人様に発信する力が身に着くのでは？少なくとも努力するのは？と考えた。

ダラダラが好きなくせに、目標は高い。こういう人間は、努力しないといけない環境に身を置くのが1番だ。ダイエット然り。「マガジンの締め切り」というハードルを自分に与え、「よしよし」と勝手にほくそ笑む。あとは過剰なご褒美を与えればいつものパターンだ。

多少なりとも興味をもたれた方は、しばしお付き合いを。けっこういいヤツなんですよ、これが。

## 牛若 孝治 新連載

初めまして。牛若孝治と申します。このたび、編集長にお願いして、「トランスジェンダーをいきる」を連載させていただくことになりましたのでよろしく申し上げます。2012年3月、立命館大学大学院応用人間

科学研究科修士課程を修了しました。その際、視覚障害・FtM(Female to Male)トランスジェンダーの自己のライフストーリーの中で構築してきた自己の男性性のあり方を、「自己物語の記述」という方法で修士論文にまとめました。実際に、身体障害とトランスジェンダー(性同一性障害)を併せ持つ人がどれくらいいるかはわかりませんが、私のような生き方をしている人がこの社会に存在していることを知っていただくために、連載しようと考えました。現在、立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程に進学しています。趣味は、マラソン・筋トレ・自己の見た夢を小説や演劇・創作ダンスにすることなど多数です。連載に当たっては、長期戦が予想されますが、どうかよろしく願います。

## 袴田 洋子

私は埼玉県朝霞市というところに住んでいます。「地域福祉を考える市民の会」という会に、最近、参加させてもらうようになりました。

行政主催の「地域福祉計画」に関する委員会で知り合った市民代表の人たちが、委員の任期が終わった後も勉強を続けていこうという有志のもとに発足した会だそうなので、「地域づくり」に熱心な方達の集いに、今、とても刺激を受けています。

これまで私は「仕事」として、地域という在宅にいる方の介護や療養生活に関するお手伝いをしてしていますが、本記事で述べているように、他者評価を得たいために援助職をしているのかどうか、今でも悩むときがあります。

でも、この市民の会に参加していると、「明日は我が身」という気持ちが強く感じられ、人からどうこう思われるために、じゃなくて、自分たちのために、と、しっかり思えて、ちょっと居心地がいいです。「市民の会」が主催する7月に行うシンポジウムで、在宅介護の事例をパネリストとして紹介する予定です。

独立自営でふだん、ひとりで仕事をしていて、子どももない自分は、仕事がらみでなく、一人の住民として「地域」の人と知り合いになれたことが、嬉しいです。

## 乾 明紀

マガジンへの2回目の投稿となる原稿を書き終えて、立命館大学に向かおうとしている。そこでは、「どんな環境に身を置けば人は積極的になるのか」なんてことをテーマにあれやこれやと考えるのがお仕事である。人は一人ぼっちだと積極的にはなれないもので、私もこのマガジンのお陰で「書く」ってことが積極的になってきた。

## 國友 万裕

この頃、エスニック料理に凝っています。これまで、トルコ料理、フランス料理、スペイン料理、タイ料理、マレーシア料理、ベトナム料理、メキシコ料理、モロッコ料理などを食べました。色々な人と食べに行くのですが、最近、映画好きの友達ばかり数人集まって、2か月に一度くらいのペースで、食べながら、楽しく映画の話に花を咲かせています。次は、イラン料理の予定です。というのが、イラン映画『別離』に大感激したからです。

そんなわけで、かつては引きこもりだった僕ですが、映画友達はしっかりつかまりました。今、欲しいのは、スポーツ友達。僕はキャッチボールができないので、それが今でもコンプレックスです。元々運動音痴で、そのコンプレックスを解消しようと、21の頃からプールに通っていて、水泳はできますが、キャッチボールは相手がいないと練習できないんですよ(泣)。誰か付き合ってくれる人、募集中。でも、相当下手なので、上手い人よりも下手な人で、相手になってくれる人募集です(笑)。そういう人がいたら紹介してくださいね。

それと、宣伝になりますが、5月10日に共著『越境する文化』(英光社)が出ました。僕は『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』について書いています。こちらも、ご一読ください。

## 鶴谷 圭一

ツルヤシュイチ(原町幼稚園 園長)

前号で障がい児の受け入れについて短信を書いておりましたが、昨年の受け

入れの時点で在園 2 名に加えて、新たに 3 人の障がいを持った子どもが加わるということで、教員を増員して体制を整えておりました。ところが、2 人はとても良く発達して手がかからなくなり、入園した 3 人もそれほど手がかからず、先生の手が足りすぎている状況になってしまいました。

なかなかうまくいかないものですが、子どもが発達することこそ私たちの仕事なので喜ばしいことだと、手が空いた先生はせっせと掃除をしております。

<http://www.haramachi-ki.jp>  
メール:osakana@haramachi-ki.jp  
ツイッター:haramachikinder

## 河岸 由里子

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし  
主宰 (臨床心理士)

先日 10 年ぶりに海外に行った。その時のことをちょっと書こうと思う。

ボストンが目的地だったが、直行便はとれず、トロント経由で往復取った。成田からトロントの機中、まず驚いたのがエグゼクティブ・クラスの椅子。こんな形の椅子を見たことが無かった。一人分の座席がブースのようになっていて、曲線で仕切られている。今ウラシマを感じた瞬間だ。機内サービスは特に驚かなかったが、カップヌードルは意外だった。正直余りおいしくなかった。12 時間余りの飛行時間を終えてトロントにつき、そこで US の入国審査と税関検査があった。US の検査をカナダで済ませてしまう。アメリカ人にしてみれば合理的なのかもしれないが、さて、税関検査では、申告書のみチェックでバゲージを開けることもなく、まずびっくり。入国審査では、指紋の採取があって又びっくり。10 年前はなかった。しかもボストン行の便が出る時刻になっても入国審査は長蛇の列。スタッフにかみつく人、ため息をつきながら待つ人。入国審査をクリアしてゲートに行ったら、結局フライトは遅れていて十分間に合ったし、乗った後も数名の到着を待って更に待った。まあ、日本の航空会社でも、自社便のコネクションの場合、入国審査で遅れる人が沢山いれば待つだろう。納得してボストンに向かった。

ボストンでは友達との旧交を温め、ロブスターに舌鼓を打ち、ハーバード・スクエアの昔からあるチョコレートショップで土産を買い、短い滞在時間があっという間に過ぎ去った。ボストンは 10 年前とほとんど変わらなかった。

そして帰路。空港で待っていたら、トロント行の便が 1 時間遅れに。乗り継ぎ時間が 1 時間ちょっとだったのでミスコネクションの可能性大で、空港係員とコンタクトをとったものの、別便へのトランスファーも難しく、取りあえずトロントまで行くことになった。私のほかに初老の日本人ご夫婦が同じ便に乗ることになっていて、とにかく 3 人トロントに到着。私の頭の中では当然地上係員は了解しているものと思ったが、誰も知らない。係員に申し出たところ、税関を通過して行ってみると言われ、大急ぎでゲートに向かった。出発 15 分前に到着したので、ぎりぎりなのは分かっていたが、ゲートにつくと同時に乗る筈の飛行機が **オンタイム** でゲートアウト！大ショック！！日本だったら自社便のコネクションで、この時間内であれば当然待たせよう。

結局ご夫婦と 3 人、市内のホテルに 1 泊する羽目になった。それから荷物を引き取るまでなんと 1 時間もかかり、やっとホテルに入ったのが午後 5 時過ぎ。日本時間で朝 4 時と言う時間だったので、連絡も出来ないからと、自棄のやんばちでトロント観光に行つて気分転換。ホテルに 7 時過ぎに戻り、1 日分の仕事を全部キャンセルするため、あちこちに電話やメールをして、やっと一息。翌日の便は平和に **10 分遅れ** で出発し無事日本に帰ってきた。(この怒り、分かってもらえますか?)

## 中村 周平

先日、いつも自身の生活を支えてくれているヘルパーの方の結婚式に行かせていただきました。支援に入ってくれるようになってから、あっという間に仲良くなりました。彼と私を繋いでくれたのは「ラグビー」でした。2 つ下の彼も中学校からラグビーを始めたラグーマンでした。自身が出場していた試合も観たことがあるとか。同じようにグラウンドを駆けまわり同じように

泥だらけになりながら楕円球を追いかけたい経験が、お互いの距離をぐっと縮めてくれたんだと思います。結婚式も本当に幸せそうでした。

結婚おめでとう！絶対幸せになってよ！！

## 北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>) 代表。

今年度、新たに文科省の「生徒指導・進路指導総合推進事業」の受託が決まりました。これで今年 8 年目となる京都府教育委員会の「フリースクール連携推進事業」、4 年目となる京都府青少年課の「若者自立支援訪問事業」とあわせて 3 つの公的事業をお引き受けさせていただくことになりました。

思い返せば、すべて私たちの活動は、たまたまアウラへとやってきた子どもたちのかかわりの中から広がってきました。「目の前にいる子どもをどうするか」が、すべての活動の原点でした。私たちは日々の実践を粛々と重ねながら、理論を介してそれらを評価し、再び実践の中へと落とし込むという循環をただひたすら続けているのです。

## 村本 邦子

月曜の授業の後、「なんかしんどいな～」と思っていたら、風邪だったようで、火曜から熱が出た。ふつうに仕事はしていたが、さすがに夜は早く寝るようにしていたので、予定が狂って、私にしては珍しく、締切前夜になって原稿を書いた。それにしても、なんて私はまじめな性格なんだろうと、つくづく呆れている。原稿にも書いたが、私はこれまで仕事を休んだことが皆無に近い。決して病気になるわけではなくて、病気になっても、ふつうの顔で仕事をする。いい加減この性格をやめようと思って、間もなくヒンシュクな理由で仕事を休んでみる予定だが、どう転んでも誰かを困らせるような休み方はできまい。死ぬときくらいは心残りなく人々に迷惑をかけてやろうと密かに思っているの、お楽しみに(もっとも私の砂時計はまだひっくり

返したばかりなので、みなさんの砂より多  
いかも!?)。

## 荒木 晃子

最近、身辺が“わさわさ”している。  
昨年、立命館大学で開催した「不妊と家  
族のシンポジウム」に続き、本年も同大学  
で、9月1日(土)「不妊患者団体(iCSI)国  
際会議」を開催予定だ。去年は主催した  
立命館の研究者として、さらに今年は、国  
内の不妊患者団体のメンバーとしても、会  
議の開催に関わることになる。ちなみに、  
「不妊+生殖医療×海外=生殖ツーリス  
ムの問題」という方程式も一部にあるが、  
私の研究テーマは「人を援助すること」。  
問題の中心に潜む当事者支援に尽きる。  
ゆえに、周辺の雑念に惑わされることは  
ない。今回、世界30か国の不妊患者団体  
が加盟するという国際不妊患者団体創立  
以来、初めて一般に公開される国際会議。  
はてさて、世界各国の当事者たちが、何  
を語り、何を伝えたいのか。どうかみな  
さんも自身の耳で、しかとご拝聴あれ。

さて、生殖医療といえば、近頃、マスメ  
ディアの「卵子の老化」にスポットを当てた  
テレビ番組や新聞報道が続く。奇しくも、  
その報道に一喜一憂するのは、不妊当事  
者ばかりではない。社会的キャリアを持つ  
妙齢の独身女性たちも、“他人ごとでは  
ない”と口々につぶやく。「子どもを産み家族  
をつくる」という、自分で意識しない限り全  
く問題にならない、という不思議なテーマ  
の中心には、晩婚化・晩産化・不妊という  
社会的課題が当事者を取り巻いている感  
がある。

筆者の知るところによると、自宅で長年  
家族の在宅介護を担う、こころ優しい娘や  
息子たちも、晩婚・晩産・不妊といった報  
道を目にしたその日から、自分の人生を  
家族のために使い果たしてきたことに気  
づくという。人がその状況になるまでには、  
その人なりの理由や事情がある。ある介  
護職者は、「私たちは介護を必要な方  
のお世話をするのが仕事だけれど、一番き  
つい思いをしているのはご家族です。な  
かには、仕事と介護で精いっぱい、自  
分の楽しみや結婚も、とうの昔にあきらめ

ているご家族もいる。そのようなご家族に、  
ご自身の幸せも大切にしてほしいと、今度  
お話ししてみようかと思ひます」と語った。

うへは、現在継続開催中の家族ワーク  
ショップで知り合ったケアマネさんとの会  
話だ。島根県松江市で続く家族理解ワー  
クショップも、今年で3年目を迎える。児  
童・高齢者福祉、医療、教育、心理、行政、  
司法の各領域から集う援助職の有志達  
が、団士郎教授の教育指導と事例検討会  
のセッションに集中するその姿は、頼もし  
い助っ人たちが力をつけていく様を見るよ  
うで毎回まぶしい思いがする。引退後は、  
彼らのいる島根県で安心して暮らすのも  
いいかと、ふと考えてしまうほど。本件に  
関するお問い合わせは、島根家族援助研  
究会 [simanekazoku@yahoo.co.jp](mailto:simanekazoku@yahoo.co.jp) まで。

今年が攻めとチャレンジの一年になり  
そうなる予感がする。9月は、前述した「不  
妊患者団体国際会議(於:立命館大学)」  
に続き、「生殖テクノロジーとヘルスケアを  
考える研究会(於:東京大学)」、日本生殖  
看護学会(於:国際医療福祉大学)での発  
表。10月に入ると、「日本生命倫理学会  
(於:立命館大学)」、以降、日本生殖医学会  
(長崎県)ほかで講演・発表の予定がある。  
今月はすでに、島根県医師会・島根産科  
医会総会での発表を終え、結果は上々。  
これらは、当事者支援の社会システム拡  
張を狙う、私の研究戦略の一環である。

願わくば、母よ、こんな娘を見届けてほ  
しい。あなたの最期は、私が看取るのだ  
から。

## 尾上 明代

今号で、「小さな『怪獣たち』とのドラマ  
セラピー」の連載を終わりました。

A施設での実践については、忙しさに紛  
れて、せつかくとってあった記録を振り返  
って評価することをしておらず、このマガ  
ジンへの連載で、その作業をすることがで  
きました。PCに向かって執筆しながら初  
めて気づくことも多々あり、3ヶ月に一回、  
私自身にとって興味深い内省の時間が持  
てました。

編集長、そして感想やコメントを下さ  
した読者の皆様、ありがとうございました。

次号からは、まだ何について書くか決め  
ていませんが、8月までに考えます…。

## 木村 晃子

この4月には、介護保険の報酬改定が  
ありました。毎度、改正(改悪?)の度に、  
制度が使いにくくなっているのは否定でき  
ません。利用者さんに対しては、「制度が  
変わったのでごめんなさい。」そんな簡単  
には済まされないな、とケアマネジャーと  
して感じています。生活者の権利を守る。  
何だか悪戦苦闘した、3月4月でした。一  
頃、利用者さんの要望ばかりを受け入れ  
るケアマネジャーのことを「御用聞きケア  
マネ」などと揶揄されていましたが、御用  
聞きとは、利用者さんの要望だけでなく、  
国の御用聞きケアマネであっていいな  
い~と感じます。若いのか、青臭いのか、  
よくわかりませんが、時には声を大にする  
こともありながら、出来る限り職業倫理に  
則りプロフェッショナルな仕事をしたいな  
と思う今日この頃。またどこかで私の叫  
び声が聞こえるかもしれません。

北海道 当別町 普段はケアマネジャ  
ーとして高齢者支援をしています。

## 団 遊

スカイツリーが OPEN しました。私の事  
務所のひとつが蔵前という下町にあり、窓  
からツリーが丸見えです。毎日ライトア  
ップが違って、美しいですよ。そんなスカ  
イツリーですが、運営主体は東武電鉄です。  
これがなかなかに冴えない電鉄会社で、  
おひざ元のソラマチというショッピングセ  
ンターも、いまいちニュース性の低いお店が  
並んでいます。奇しくも同時期にヒカリエと  
いう東急電鉄主体のショッピングセンター



が渋谷にでき、より一  
層実力差が浮き彫りになってしまいました。  
また、OPEN 初日は、その日に限って雨。  
前後一週間、雨はなかったのに、まるで  
嫌がらせのように、雨でした。さらに強風  
で営業時間終了前にエレベーターを止め

ないといけない始末。地元っ子たちは、「無理して建てても、やはり東武だねえ」と囁き合っています。関西出身者としては、そんな東武に、弱小だったころの阪神タイガース&阪神電鉄を重ね合わせています。

## 藤 信子

7月中旬にIAGP(国際集団精神療学会)に参加するために、コロンビアに行くことにした。すると多くの人から、なんと!!…大丈夫ですか?と聞かれる。コロンビアと聞くと、麻薬や誘拐などを思い浮かべるのだと思う。私も最初はちょっと躊躇したけれど、今は大分落ち着いているらしい。JAGP(日本集団精神療学会)が続けている「東日本大震災関係者の相互支援グループ」の報告の共同発表者として行くのだけれど、昨年のLondonの15th European Symposium in Group Analysisで多くのグループサイコセラピストが日本の震災について心配してくれていたの、少しは報告があるだろうという判断からだった。それにトラウマへのアプローチに関して、私は中南米のコミュニティ心理学に関心を持ち始めているので、行ってよかったと思った次第。会場はカルタヘナというカリブ海に面したユネスコの世界遺産の町だけれど、なかなかピンと来ないのでコロンビアの旅行書を読んでいる最中である。

## 水野 スウ

5月の秋田に行ってきました。県の職員さんが、たまたま旅先の金沢21世紀美術館のショップで「ほめ言葉のシャワー」の冊子を見つけてくれて、そのご縁で、健康福祉課からの出前注文をお受けしたのです。けれど石川からはかなりの遠さ。飛行機を乗り継ぎ、宿に2泊するのに、話は正味2時間弱。あらあら、なんてもったいない。そこで、「ほめシャワ」冊子つながりの秋田の若いお母さんに、ちいさな出前紅茶しませんか、と声をかけたら、早速、10人サイズと20人サイズ参加費ワンコイン、のちい出前を二つ企画してくれました。

会場の一つが、週に2日、自宅でサロンをひらいているという人のお家。「赤ちゃん連れでゆっくりできる、実家みたいな場所がほしいな」と、家主さん自身が子育て真っ最中だった7年前にはじめたとのこと。ちょっと紅茶みたい。違うところは、1回ごとに300円の利用料をいただくこと、また別枠で、ベビーマッサージ体験、マタニティママ用写真講座、虫除けスプレーづくり、等などの、ごく少数人数制の有料ミニ講座も度たび展開してるとこ。



その日の紅

茶に参加した人の中には、助産師さん、コミュニケーションファシリテーターで栄養士さん、押し花インストラクターさん、サロンで作品展示中のガラス作家さんもいて、その人たちにとっては、そこが自分の仕事を表現する場にもなってる模様。家主さんにも、その場を利用する人たちにも、講師役の人にも、負担のかかりすぎないシステムで運営されてる、その知恵と工夫がいいなあと思いました。

紅茶の時間をはじめた昭和の時代には、子育て支援、って言葉自体、あんまり聞かれなかった気がします。今は行政がお金を出しての、支援センターがあちこちに。曜日ごとでセンターをはしごするお母さんたちも結構いるようで、密室育児にならないのはいいことだけど、いつも他人がたくさんいてにぎやかすぎないかしら、母とおさな子だけでしっかり静かにむきあう時間ってのも必要なんだけどな、と、親しい金沢の絵本やさんが少し危惧してたのを思い出します。

秋田のサロンは、サイズこそミニだけど、

行政の支援とはまた違う、子育てをあたたくほっこりと支える場を、ひらく人来る人かかわる人とで、ともに育てて行こうとしている場のようだ、とうれしく感じながら帰ってきました。

さて次の本の原稿書きは、いまだ続行中。だけど本の生まれる日だけは、今年11月の紅茶の時間29歳の誕生日に、と先に決まっています。このマガジンが印刷されて本になるころには、もう“出産”まぢかかもしれませんね。

週いちオープンハウス「紅茶の時間」の家主。石川県在住。

「紅茶の時間」URL

<http://www12.ocn.ne.jp/~mimia/sue.htm>

## 山本 菜穂子

異動です。せっかく児童相談所に戻って、やっと課長という職責にも慣れてきて、これから少しは役に立てるかなと思ったのに。(これ自体が幻想とは思いますが…)次は何年後に大好きな児童相談所に戻れるでしょう。大好きな仕事は頑張れるのにな~。良い仕事するのにな~。(いるときには決して言えないことばです。)今時、児童相談所を希望する職員も少ないと思うのに。置いておけばお得なのに。(ハハハ、ちょっと空しい、無駄なつづやき)

これからしばらく、また、本庁に行きます。今度は、健康福祉政策課包括ケア推進グループ。青森県では15年も前から、「保健・医療・福祉包括ケアシステム」という考え方を打ち出していて、高齢者だけでなく、命を授かってから亡くなるまでの全ての住民が健やかで安心した生活を送ることができるよう、必要な機関が適時適切に連携してサービス提供できる仕組みづくりをしようと謳ってきました。それを推進するための仕事です。

24時間365日携帯電話を片時も放せない気分!という圧迫感からは解放されます。それをせめてもの唯一のメリットとして、気持ちを切り替えて、しばらく行ってきますね。まずは、私にできることを誠実に探ってきます。

## 脇野 千恵

最近、沖縄三線を始めました。いくつかの手習いになるのかなあ？弦のある楽器は、ギターを高校生の時に少し、琴は随分と長くやった記憶があります。

5、6年前に沖縄で買って来たのですが、家族から「あれはどうするんだ！」と言われ続けていたので、少し言い返せるかなと思っています。習ってみて、たかが三線とちょっと軽くみていましたが、なかなか奥が深い楽器ということがわかってきました。いや楽器というものは、奏できるようになってくるとそう思うものなのでしょうが。

三線は弾き語りができなくてはなりません。それにはまだまだ時間がかかりそうですが…。しばらくは、三線で日頃の疲れがとれることでしょう。

## 岡田 隆介

4月上旬に、生まれて初めて入院、手術を経験しました。家族年齢が着実に上がっていることを知らしめた今回のエピソードは、ちょっとした我が家の”有事”です。家族は、楽しみではない映画の予告編をみたような気分になりました。有事より無事がいいに決まってるけど、絶対に避けられない日を迎えるためにこうした事は有らねばならないと受け入れました。

仕事から病院にはなじみがあったのですが、パジャマを抱えて正面玄関から入るのは初めてです。入って最初に意識したのは、治療する側と受ける側を分ける太い線です。受ける側の頼りなさに対し、スタッフの自信と潔さのまばゆいこと。ウチらの業界では、そのあたりをあいまいにするのが習わしです。少なくとも、スタッフが頼もしく映ることはないでしょうね。時間だけはたっぷりあったものですから、いろんなことを考えながら、毎日、ブルーな窓からピンクの桜を眺めていました。

## 竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

3月末に寺の境内地の一角に住まいを建てて、引っ越しました。それまでは、賃貸マンションから寺に通勤をしていました。

住職ではあるが寺に住まいがありませんでした。不住職でした。深夜や早朝の電話対応には苦勞をしたものです。家賃分をローン返済に充てて住居を建てることにしました。なかなか住宅ローンが組めませんでした。銀行で、住職が住宅ローンをするなんて珍しい、信徒に寄付を募るのが普通ですよと言われました。普通はしないらしいお寺の住宅ローンが何とか叶いました。担保設定上、境内の一角を分筆して建築しました。そうすると新築になります。寺の建っている地域は、市街化調整区域と言って住宅の新築が認められない地域です。特に就農者でない者が新築をするには厳しいようです。田舎に新たに人は住みにくいようです。田舎に老人が多いのは日本の住宅政策にも一因があるようです。なにはともあれ、新居ができました。寺の一角にアメリカンな家ができました。先日、留学から帰国した若い人が遊びに来て、家に入るなり「日本の家じゃない」と言いました。思わずにんまりしました。

## 川崎 二三彦

今年は居眠り運転による高速バスの大事故をはじめとして悲惨な交通事故のニュースが続き、京都府でも祇園や亀岡で死亡者多数の重大事故が発生した。そこで私もクルマ社会の現状について考えてみようと思う。ただし、皆さんにまずお伝えしておきたいことは、今私が所持している



自動車運転免許証には、ご覧のとおり「優良」の文字が刻印されており、裏面にも違反の記録など全くないということである。

\*

ある夜、国道を一人で車を運転していたときのこと。高級車がいきなりリターンして私の進路をふさぐ。

「ワリヤー、どういづつもりや！」

中から出てきた男性はいかにもがらが悪く、胸ぐらを掴んで威嚇する。きょんとしたまま話を聞いているうちにわかったことは、どうやら私の車がセンターラインを越えたため、危うく衝突しそうなものらしい。

「そうか、居眠り運転してたんだ」

と気づいて、あとは平謝りに謝って何とか切り抜けた。が、これはニアミス。居眠り運転というなら、停車中のタクシーに追突してからやっと目が覚めたこともあり、家族で遊園地へ出かけた帰途、タイヤが側溝に嵌り込む自損事故を起こし、ために怪我した妻と子どもが救急車で病院に運び込まれたこともあった。でもご安心あれ、これらはいずれも30年以上前のことである。

かつてバイクに乗っていた時、速度を守って左端を直進中、追い越した車が急に左折したため、あっという間にはねられるということもあった。しばらく動けず、休養中のアパートに見舞いにやってきたのが、その後結婚した妻だったような気がするが、もう忘れた。それはともかく、バイクがだめなら自転車しかない、10 kmの距離を自転車通勤しよう一念発起、ドロップハンドルの自転車を買ったのはよいとして、1週間後、薄暮の中を何かと借りがある妻の待つ自宅に向かって走っていたら、反対車線を直進していた車が突然右折してきて吹っ飛ばされたこともあった。が、ご安心あれ、これらも遠い過去の話。心配には及ばない。

さて、6、7年前のこと。信号で車を停止させていた私は交通ルールを遵守し、信号が青に変わったことを確認して発進させた途端、雷に打たれたような金属音を聞きつけて急停車した。ふと見ると、そばにはミニバイクが転倒しており、車の横腹には直線の傷がなまなましい。バイクを運転していたのは80歳を超えた老人。信号停止中に私の隣に並んだのだが、車が動き出したことに驚きバランスを崩したらしい。この人、転んだだけと思っていたのに骨折して救急車で運ばれ、1か月以上の入院と相成った。でもご安心あれ、私は警察に呼ばれて取調べを受けたけれど不起

訴となってお咎めなし、老人も何とか回復したはずである。

\*

というようなクルマ社会の現状を皆さんにもご理解いただけたと思うので、近況を報告する。ついこの間、車でスーパーに行き、所定の場所に駐車すべく慎重にバックギアを入れた。その直後、クルマが急発進してぐんぐんスピードをあげるではないか。後方発進だからもうパニック状態。急ブレーキを踏んでも止まらず、コントロール不能に陥ってしまった。

「危ない、ぶつかる！」

と、今度は夢中でサイドブレーキを引いたら、間一髪かるうじてセーフ。車は音もなくスムーズに停止した。

ふうっと胸をなで下ろした私は、あらためてあたりを見回し、すべてを理解した。買い物を終えた客が隣の車を発車させたための錯覚だったんですよ、これ。手にはまだ冷や汗が残っていた。

\*

えっ、「今まで生きていることに感謝せよ」ですって？

## 早樫 一男

○仕事の上では...、4月から相談を受ける機会を増やしました。昨年、長年の公務員生活を一区切りする際の願いであった「相談現場や相談業務に戻りたい」ということが充実してきました。

そもそも、大学での授業、心理臨床センターでの相談業務、そして研修講師など、

毎日、あわただしく過ごすことができていること自体、本当に恵まれていると痛感しています。

○個人的には...、長女が大学を卒業し、就職しました。長男・次男はすでに就職・結婚し、それぞれ子育て中です。

三男は引き続き大学に在学中ですが、夫婦中心の家族になる時期を迎えつつあります。

「家族のライフサイクル、発達段階を一つ一つ経験してきたんだなあ」と、ふと、感慨にふける自分の気が付くことがあります。

というような中で、公私ともに、これから

も、できることをできる範囲でやっていきたいと思っている今日この頃です。

## 西川 友里

いくつかの学校で、対人援助職養成をしています。

現在は4月入学をした社会福祉士養成通信課程の学生の実習先を探すため、担当学生に一通り面通しをしている真っ最中です。「今年もいろんな人が入ってきたなあ...」最近、福祉とは直接関係のない、新たなジャンルの専門職の方がたくさん入学なさいます。ちょっと前までは福祉施設の職員やケアマネが多かったのですが、ここ最近では学校心理士、少年刑務所の刑務官、警察の少年課の職員、経営学部の大学院生、元IT企業の重役さん等々。お話していると、新しい世界が広がるように思います。またそういった方々の中から、「NPO法人を作りたい」「社会企業家になりたい」と言う方が、若干ですが増えてきているように思います。震災から1年たったことで、改めて地域貢献の意味を考え、長期的で継続的な社会貢献活動とは何かを考える機運が高まっているように感じます。

ところで今回の本文に書いた父と母とのやりとりは、初めて公言したことです。母、長らく内緒にしていたゴメン。子どもの時の事なんで、時効ってことで、許してください。

## 中島 弘美

家族面接でときおり話題にあがるのは、両親の不仲です。

お父さんは一週間に一度しか家に帰ってこないとか、子どもたちが義務教育を終了したら離婚するとか、夫婦喧嘩を目撃した子どもたちが、親が離婚をしたらどちらといっしょに暮らそうかと考えていたり、両親の様子を敏感に感じ取っていることをたびたび目にしました。

昨年11月に開催された第3回対人援助学会で、「離婚を経験する子どもと家族の支援」の発表に強く関心を持ちました。アメリカなどでは、子どもを持つ親が離婚をするときには、特別なプログラムが準備

されています。日本の家族にも必要だなぁと思って、周りにいる社会福祉士や弁護士、離婚経験者に話をすると、みな同様に支援の必要性を感じていることがわかりました。

最近、そのプログラムについて少しばかり勉強させていただく機会があり、(対人援助学会会員のご紹介があって実現しました。ありがとうございます。)改めて必要だと再認識しています。

アメリカとは文化が異なりますが、離婚つまり親の事情によって、子どもの生活に大きな変化があるとき、子どもと家族に対して具体的に役立つ(たとえば、講座のような)ものの用意と、その講座を受講するためのシステム作りが必要だと思っています。

関心がある人たちが集まると、アクションが起これると思うのですが、みなさん、ご関心はおありではないですか？

## 千葉 晃央

「『北の国から』の再放送を連続でしているの観ました？よかったですわ～。この年齢になったからわかることも多くて発見でした。ほんで、倉本聰の本を探したけどみつからなくて」

「そうなんや、私はあの人の家族のみせ方あんまり好きじゃないわ、向田邦子の方がどちらかというとききやな。向田邦子読んだ？」

「読んでないです」

「そうや千葉君！あんた家族療法とか家族のことやっているんやったら、向田邦子読んどかなあかんわ」

そして読んだのが「阿修羅のごとく」

「先輩！読みました。確かに違います！なんというか、品というか、葛藤の描写というか」

「せやろ、女性作家やからかもしれんけど、といってもあの人自身は家族持たず生涯独身やしな。」

「おもしろかったです！次、何がお勧めですか？」

「う～ん『美は乱調にあり』瀬戸内晴美」

「瀬戸内晴美？」

「今は寂聴！」

「あの？」  
「そう、あの。大杉栄と伊藤野枝の話やで」  
「大杉栄...伊藤野枝...あの?!」  
「そうそう、あの?!」  
こうした先輩との会話がとても楽しくてたまりません!!!

## 三野 宏治

新年度になり秋田から群馬に引っ越しをしました。職場移籍に伴う引っ越しです。一年しかいなかった秋田ですが寂しさを感じます。引っ越しの日にゼミの学生が訪ねてくれて、二男の誕生祝を渡してくれました。引っ越しの作業中に庭の隅に腰を掛けて彼らと弁当を共にしました。どうという会話ではなかったのですが、大変楽しい時間でした。

新しい職場の研究室の窓からは赤城山がみえます。大きな赤城山を見ながめ、引っ越しの最中の楽しい時間を思い出しながら一人昼食をとっています。

## 浦田雅夫

いよいよ京都で、子どもシェルターが開所します。孤立無援でホームレスの子どもたち、家はあっても居場所がない子どもたち。そんな子どもたちが、安心できると思えるような場を提供できるよう、支援者のみなさんと取り組んでいます。ぜひご協力ください。 <http://www.nonosan.org/>

## 中村 正

勤務する法人の管理職をしてまる5年が経過し、6年目に入った。学校法人なので企業とはまるで異なる論理で動いているし、根は大学教員なので、どことなく雇われ管理職という感もある。とはいえ、マネジメントには責任が伴う。どちらかという学校は「永続性」がテーマなので、百年企業ということを重視したマネジメントにしたいと思っている。ミレニアム組織なのである。百年前にどのくらいの企業があっただろうか。これから百年後にどのくらいの企業が残っているのだろうか。それと比べると、大学はやはり百年後も持続させることに意義がある。そのためにはこつこつと

した教育と研究が欠かせない。基礎的なことを、どんなことでも知的な関心をもつ営々とした取り組みを支援するようになりたいと思っている。すでにいない百年後のことを考えて今できることを丁寧にしていきたいものだ。そのために忙しいなかで精力的に映画や演劇やおしゃべりを楽しむようにしている。この間もたくさんアートに触れることができた。アートはまさに時空を超えた価値をもっているからだ。

## サトウタツヤ

4月から慣れない仕事につくことになり、コールドールの海を泳いでいるような感覚。まだ2ヶ月しかたっていないのか、という感じ。毎回思うのだが、この『対人援助学マガジン』は、締め切りがきっちりしていてすごい。私など、1週間おくれ、1ヶ月おくれ、ついには1年おくれ、などという世界で生きているので、反省しなければ、と思いつつ、本年3月締め切りの原稿をどうにか完成させようと、5月末の今、もがいている。。。

## 大野 睦

水害、震災、竜巻、火山の爆発。すべてが自然の営みであり自然現象から始まることなのだろうが、それだけではない間接的人災の大きさを特に実感することがここ数年増えているが、その警鐘を私たちはきちんと受け止めることが出来ているのだろうかと考えることも増えている。自然の営みとはその厳しさ故の美しさがある。そのどちらも私たちが生きている世界なのだとし少し足を止めてみてはいかがでしょう。

ネイチャーガイド 大阪で生まれ育ち、大学を卒業後に屋久島に移住。有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

## 坊 隆史

最近、初対面の人から「男の援助について書かれていますね」と言われることが度々あった。どうやらネット検索で私の氏名を入力したら本誌がヒットするらしい。

連載第1回しか読んでいない方には「オチンチンの人」とも言われた。ウェブマガジンの力と恐ろしさを感じた。今号はもっと刺激的な内容なのでどのような異名がつか楽しみである。今後も私たちは対人援助学マガジンの過激派を目指していくつもりである。(ぼう たかし)

## 松本 健輔

カウンセリングルーム

HummingBird 主宰

<http://www.hummingbird-cr.com>

この四月から専門学校で教えるようになった。自分より一回り以上歳下の生徒相手にいろいろ伝えようと悪戦苦闘中。

その中で、たまたま体罰の話題になり、生徒達に体罰など暴力を使った教育の是非を聞いていた。実に8割以上の生徒が絶対どんな状況でも暴力はダメと。人の意識は確実に変わってきていることを実感。

## 団 士郎

ツイッターとfacebookがすっかり私の日常にとけ込んだ。多少時間は取られていると思うが、普段なかなか交流しない人と不思議な距離感でいられるfacebookが最近とくに楽しい。

元々DAN通信というミニコミ(郵送版)を長らく出していたので、ツイッターのような方式には馴染みがあった。

ワープロ、PC、携帯電話 ipod、itouch、iphone、ipad と道具も楽しんできた。道具好きでも手段マニアでもないが、新しい物で出来る新しいことが広がるのは好ましい。

先日の facebook での出来事はおかしかった。私が岡山の家族勉強会に向かうべく京都から乗った新幹線に、神戸からfacebook 仲間が乗ったらしい。「今、新神戸、これから新山口へ」なんて書いてある。「私も乗ってますよ、岡山までだけ」と送信。すると岡山到着直前、「今見ました、5号車にいます」と返信。私は13号車だった。面識のない人だが、そのうち会えるだろう。だんだん接近遭遇しているな思ったりした。

---

# 「月曜日のせいやな」

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 009

千葉 晃央

---

(ここで関わるか…やめておこうか…いや  
思い切って… なやむな～???)

こんな思いが一瞬にしてめぐるときがあり  
ます。その時、一つ思うのが

(今日、○曜日やな～)

ということ。そう、曜日が判断の根拠の一部になる時があります。暦通りの勤務形態(サービス利用形態)(土日祝休み)の福祉事業所、福祉施設(通所)を想定して触れていきます。そして、知的障害者の労働現場での、各曜日の様子、曜日が持つ意味や効果を考えます。

## ■週の始まり月曜日

どんな仕事でもそうかもしれませんが、一番「緊張」があります。

前日である休日の影響を受けて利用者は来られます。「表情」「素振り」「声」に現れているのですぐにわかります。

楽しい休日だった人は、そして、その高揚した気持ちをコントロールするのが難しかったりします。高揚感がどこまでも続いて疲れていく方、いつもより気持ちが入り

すぎて頑張りすぎて転んだり、人やモノにぶつかったりする方もおられます。中には、気持ちの高まりがひよんなきっかけで不機嫌にガラリ!と変わることもあります。

## ■「たのしい」と「怒り」の共通点

人の気持ちは、陽性感情(楽しい気持ち、前向きな気持ち等)と陰性感情(悲しい気持ち、落ち込みがちな気持ち等)を両極に、その間のグラデーションの中のどこかで考えられることも多いです。ですが、「たのしい」と「怒っている」というのは気持ちが高ぶっているというところでは、同じであって、それが時折一瞬にして入れ替わることがあるようにも思います。ですが、これをその筋の人に複数尋ねたりしてきていますが、あまりそういうことは言われていないというような返答をいただくことが多いです。「一般化」するのではなく、その人の特徴ということなのかもしれませんが、それだけのようには思えないのが私の実感です。どなたか教えてください。

休日が楽しかった人は、昨日のお出かけを思い出すだけで楽しいのです。

逆に、背を丸めている、目を合わせてこ

ない、すでに事業所の建物に入る前から大きな声を出していることもあり、そういった場合には休日に嫌なことがあったかもと考えます。家族にひどく注意を受けたり、知り合いに不幸があったり、自分や家族が体調を崩したり、自分が欲しいものが手に入れられなかったり、自分の食べたかったものが食べられなかったり。前の週の様子とはガラリと変わってくることもよくあります。

### ■連続性が唯一途切れる休み明け

逆にいうと、他の曜日は毎日ほぼ同じ利用者とほぼ同じ職員が顔を合わせるので、心の調子も体の調子も「連続」しています。その連続が唯一途切れるのが土曜日、日曜日などの休み明けです。

とても楽しかった話、とてもつらかった

話、どちらにしても、はやくその話を職員、友人に伝えたい、もしくは今の気持ちを表現したい。休み明けの朝は、そんな様子にあふれています。その場面がスムーズに行かなかった場合、もともとの思い、高ぶった気持ち、つまり通常とは違う気持ち（陽性・陰性とも）が背景にあるので、トラブルといわれるような出来事や行動につながることも多いです。

### ■援助職側の月曜日

このようなところは働く側である援助職側も同じです。休日をどう過ごしたのかに影響を受けることも多いです。

またもう一つ、職場に対する援助職の思いもありますよね。この対人援助学マガジンに連載中の団遊さんの経営する会社のキャッチフレーズに「月曜日が楽しみな会社」というのがありました。援助職にとっても



「月曜日が楽しみな職場」になっているのかというところですか。そういう職場をそういう事業所を作ることができているかです。それも利用者が思う「月曜日が楽しみな施設」になるためにも大いに大事なことの一つのように思います。

とはいえ、仕事を頑張ろう、仕事が楽しみにしても、心の高ぶり、緊張があるのがこの月曜日ですね。利用者も援助職も共通です。

### ■月曜日の実習生

事業所では大学生等の保育、社会福祉士、教員免許の実習を受け入れています。そのスタートが月曜日ということも多いです。ストレンジャーに対する反応は心理学でも定番ですが、施設でも同じです。多くの利用者が影響を受けます。若い女性には男性陣が、イケメンには女性陣がなど、福祉業界に限らず、どこでも同じです。ですが、その影響は結構大きいこともあります。

### ■作業の中心！火・水・木！

この3日間が一番作業の中心になります。この一週間がどんな様子かがみえてきます。水曜日、木曜日には、この週末までの作業の段取りを考えながら、作業をすすめます。週末に納期があれば、それを逆算して、時には今のうちに残業の準備、作業をする人の増員などの準備、対応をしなければなりません。そのためには、施設全体での、各作業室での人員の調整（利用者、職員ともに）を行わなくてはなりません。

知的障害者の労働現場では、これまでも触れてきたとおり、ロット（作業量、注文量）と納期に応えることができるかが勝負

です。そのため、このあたりの柔軟で適正な判断が職員には求められます。また、その判断に基づいて、全体がすぐに必要な体制に変更できる組織を作ることができているかも重要なポイントです。

### ■週末の金曜日

月曜日の次にいろいろある曜日です。まず、週末までの作業が忙しいという点です。職員も、利用者も作業をあげるのに一生懸命になります。時には、急な注文もあります。それにもできる限りこたえていかなくてはならないので、作業的には忙しくなることが多いです。

その忙しさとともに、利用者の方への支援を行っていきます。その利用者さんは週末の予定が気になりだします。友達には予定があって、私にはないということで気持ちが動いて、行動に出てしまうこともあります。

職員も今週を無事に乗り切りたいという思いがあります。事故やトラブルはもちろん回避したいです。利用者が楽しみにしている週末の予定を台無しにしたくないというのもよぎります。

親を安全基地、エネルギーの補給基地に例える話は、発達心理学等でよくある例えです。土曜日と日曜日は、その補給の時のように思います。ですので、その補給基地を意識しながらの支援が金曜日はあるように思います。

- ・補給基地があるから、もうひと踏ん張り！チャンスだ！
- ・補給基地まで、ひとまず安全に！無理せずに、次のタイミングで！

この両方がいえると思います。その利用者の特徴、支援目標の中での現在の進み具合等によって、このどちらかになるかは変わってきます。これが今回の連載の冒頭での援助職の思考です。

## ■「月曜日のせい！」

調子が悪いのを曜日にするのもよくあります。調子が悪いのは、自分が悪いこともあって、それもわかっているけど、そこに直面するのは、今はいや…。そういう時に悪者さがし、原因探しをするとつらいものです。深く考える、真実を追求する、正しいことをするよりも、今から頑張れることを重要視すると「月曜日が悪いねん！」というのは効果があることがあります。マイケル・ホワイトが提唱した「外在化」と説明できるのではと思います。

たとえば、月曜日に調子が悪いときは、

職員：

「月曜日が悪いんちゃうかな。月曜日やから、調子が悪くても、それがいつも通りやし、いいやん！」

「そっかいつも通りやん。」

自分を責めている人にも

「俺が悪いから…」

「ちゃう！ちゃう！月曜日が悪いねんで～」

「それもあるな～」

他罰的な人にも

「アイツが悪いねん！」

「えらい怒っているやん、金曜日が悪いんちゃう！」

「…そ、そ、そういえば今日、金曜日やな」

こういった自分のせい、ある人のせい、という犯人探しをせず、そのおこっていること自体の意味付けを変えることで気持ちが切り替わることもよくあります。(リラベリング、リフレーミングですね) このように、論理的な説明、正しい説明よりも、切り替わるきっかけとしての効果が大切な時もあります。もちろん、それだけでは不十分ということもあります。ただ、こっちの見方があると幅ができます。

先日、大リーグの斉藤隆投手が言っていました。チームメイトが「Today is new day.」

(今日は新しい日だ) と声をかえてくれることに救われると。よく似ていると感じました。

(写真：橋本 総子)



# 社会臨床の視界

(9)

## ケア・リーバー Care Leaver たち

- 「忘れられたオーストラリア人」への謝罪から考える -

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

### イギリス訪問

2012年3月下旬、10日間のイギリス児童福祉調査にでかけた。昨年も行ったので2年連続となる。大阪市立阿武山学園（児童自立支援施設）の田宮さんと徳永さん、大阪市子ども家庭相談センターの久保さんと一緒だった。その訪問先のひとつはイギリス第二の都市バーミンガム市から電車と車で1時間半程のところにある、全国から情緒障害などのある子どもを受け入れて治療的な養育をおこなっている SACCS サックスという団体である。性的、身体的、精神的虐待によるトラウマのケアを実施し、4歳から12歳の子どもを対象として入所型の回復プログラム、治療的養育、セラピー、ライフストーリーワーク、里親委託を展開している。そこでお話を聞いていて驚嘆したことがある。ケアの内容はもちろん勉強になったのだがそのマネジメントについてである。子ども一人あたりのいわゆる措置費のようなものがある。月額230万円近いという。何度も確認した。間違いではない。それは月額である。子どもの地元の自治体が負担している。子どもは50人程の定員である。なるほど児童福祉の進んだ国だと思った。イギリス全体は施設ケアではなく里親が中心の社会的養護体制を敷いているが、

この種の施設ケアも相当に濃密である。ひとつの寮には5人程度の子どもである。サックスではライフストーリーワーク（これは阿武山学園の徳永さんが精力的に日本の現実に即して実践している）の産みの親もディレクターとして采配を振るっている。小さな規模のグループホームと里親制度をもとにした社会的養護の仕組みが財政的な基盤の確立を基礎にして展開されているイギリス児童福祉の仕組みに感銘を受けた。

### 忘れられたオーストラリア人たちへの謝罪

もちろん里親を中心とした社会的養護の強化へと至る過程には紆余曲折がある。最近まで、「大英帝国時代」の負の遺産が児童福祉をめぐる存在しており、その後遺症もまだ消えてはいない。今回の連載はこの点に関わり、社会的養護が充実してくる背景を理解しておきたい。この「社会臨床の視界」連載の(6)は『臨床の知の植民地化』について - どんな言葉と文脈で対人援助を考えるか - と題してオーストラリアのアボリジニの子どもたちの白人化を意図した親子強制分離政策を吟味した。「盗まれた世代」Stolen Generationとして政府が謝罪する過程を追い、臨床の知と実践の課題に取り組むにあたって歴史的な文脈を重視すべきことについて記した。子どもがレイシズ

ム racism という同化政策のターゲットになった。その犠牲者であるアボリジニの子どもたちを「盗まれた世代」と位置づけ謝罪を行ったのは2008年だった。今回取り上げるのはケビン・ラッド首相 Kevin Rudd の「忘れられたオーストラリア人 Forgotten Australians」への謝罪である。2009年11月15日のことである。「忘れられたオーストラリア人と児童移民であった方々への国の謝罪 A National Apology to the Forgotten Australians and former Child Migrants」と題されていた。

その「忘れられたオーストラリア人」とは誰のことなのか。どうしてそのことがイギリスの話しと関連するのか。オーストラリアの首相は、1930年～67年頃まで、国内の複数の児童養護施設で子どもたちに対する虐待や強制労働が行われていたとして、この期間に入所していた約50万人に国家として公式に謝罪した。「われわれは今日、国家として皆さんに謝罪します。『忘れられたオーストラリア人』である皆さんは、幼少時に何の了承もなく、家族と引き離されてオーストラリアに送られた。申し訳ない・・疑問の余地のない悲劇である子ども時代の喪失を謝罪する」と。2004年に上院が行った調査などによると、家庭崩壊や母子家庭などの理由で児童施設に送られた子どもたちは、外部の監視のほとんどない施設で、体罰や精神的虐待、性的虐待、養育放棄、強制的な下働きなど心身両面での虐待を受けていた。中には、英国から移民として送られてきた子ども7000人も含まれる。子どもたちには、食事や教育、医療ケアも満足に与えられなかった。また、多くは両親や兄弟の顔も知らず、施設間をたらい回しにされていた。自分の名前さえ知らない孤児もいた。また、子どもたちを番号

で呼んでいた施設もあった、と謝罪のなかで述べた。

もちろんこの問題は受け入れ国となったオーストラリアの話である。しかし児童移民には送り出し国がなくてはならない。そのプッシュ要因はイギリスの植民地主義である。しかも「戦後システム」でもそれが生きていたのだから、子ども問題を扱う社会システムのなかに社会的排除要因が存在していたということになる。それをオーストラリアの「白豪主義政策 White Australia Policy」がプル要因として支えた。文字通りの共犯的關係である。植民地主義という磁場はかくも強く作用し、子どもを巻き添えにした。

#### それは一体誰のことなのか

ではいったい誰が誰に謝罪したということになるのだろうか。児童移民を含んだ「忘れられたオーストラリア人」とは誰のことか。その直接の名宛て人、それは Children's Home 児童養護施設にいた子どもたちのことであり、一般には、18歳までの子ども時代に施設養護生活を経験したことのあるケア・リーパー Care Leaver たちである。なかでも1920-1967年の間の児童移民体験を「失われた子ども時代 Lost Innocents」と特徴づけた。教育を受けるべき年齢の子どもたちが非人間的な労働や体罰を受けたとして反省と謝罪の対象となったのである。歴史的な児童移民政策を固有の問題軸として、移民後に収容された施設が虐待的な環境であったことから「子ども時代の喪失」という特別な経験をした者とケア・リーパーを位置づけて謝罪を行ったのである。

#### 映画『オレンジと太陽』のこと

児童移民問題を扱った映画『オレンジと太陽』(ジム・ローチ監督)がタイミングよく日本で封切りとなった。イギリスのノッティンガムのソーシャルワーカー、マーガレット・ハンフリーズ Margaret Humphreys の実践記録を映画化したものである。その原著は"Empty Cradles"として1994年に刊行された。現在は、"Orange & Sunshine"として2010年版がでている。都留信夫・都留敬子訳『からのゆりかご - 大英帝国の迷い子たち』(日本図書刊行会)という翻訳書がでている。イギリスの福祉はすすんでおり、「ゆりかごから墓場まで」と習ったことがある。「からのゆりかご」とは相当な批判である。イギリスの負の歴史、恥部のひとつがこの児童移民問題である。しかも遠い時代の話ではない。1967年まで続けていた「現代のシステム」がはらんでいたことなのである。表現は移民であるがデポートेशन deportation と原作では表現されていた。外国人の国外追放や物の輸送や移送を意味する言葉である。およそ13万人の孤児や貧困家庭の子どもたちが、政府の認可を受け、慈善団体や教会を送り出しと受け入れ機関として、オーストラリアなどに強制移民させられていたとされる。親の承諾も本人の同意もなく、しかもいつの間にか孤児とされ、なかには親は死んだとうそをいわれた子どももいた。

二人の子どもの母親であるマーガレットは、多忙の故に子どもとともに過ごす時間が少ないことに罪の意識を感じつつオーストラリアを行き来する。夫がよき理解者であることが救いだ。また、社会福祉部の上司の潔さが気持ちよく描写されている。1年の休職を欲しいというマーガレットに2年間かけて休職せずにがんばりなさいとい

い、児童移民について活動する条件をつくってくれた。1987年に家族再会のための支援を行う「児童移民トラスト The Child Migrants Trust」(以下、単にトラスト)がマーガレットによって組織された。オーストラリアのパースとメルボルン、そしてイギリスに事務所をかまえる。家族と祖国からの強制分離があり、社会からの無関心は本人たちがこの出来事を心理的に封印するように作用した。その長期的な影響を指摘し、丁寧な家族再会支援の必要性を訴えて奔走する。埋もれていた移民記録を探しだし、なによりも当事者たちの物語を聞く。マーガレットは児童移民の被害の物語を聞きながら二次受傷 PTSD と診断される。それほど過酷な児童移民の実態を明らかにしていく。

たとえば、歯科医家族のクリスマスに招かれて賛美歌を歌い、楽しい時を過ごした9歳の少年が直後にその歯科医らにレイプされたことを語る男性が登場する。ときには探しあてた母親の死を伝えなければならないこともある。逆に、児童移民トラストの事務所を置く西オーストラリア州では心ない人から脅迫も受ける。

児童移民の動機は帝国の人種的統一性を保持することであった。1947-1967年の統計ではオーストラリアへの児童移民は七千人から一万人とされている。オーストラリアの里子や養子としてではなく女子は家内労働者として、男子は肉体労働者として位置づけられ、大きな施設に入所させられた。バーナードホーム、フェアブリッジ協会、英国教会、キリスト教兄弟団などの団体があっせんした。オーストラリアの広大な大陸に散在する大規模で孤立した収容施設(アサイラム)だった。

## 「よき白い英国のための礎」 Good White British Stock としての児童移民

そのトラストが基本的事項についてまとめたレポートがあるのでそこから紹介しておきたい。"Child Migrants Trust-Submission to the Senate Community Affairs References Committee Inquiry into Child Migration (January 2001)"である。64 頁程のものである。

送り出し国のイギリスでは平時においても児童移民を意識的に政策として追求してきた経過がある。19 世紀からの移民政策の一環として児童がそこに含まれていた。第 1 次世界大戦後に本格化する児童移民政策といえる。その基本的動機は「帝国の人種の統一性」を保つことである。児童移民は「よき白い英国のための礎」 Good White British Stock、つまり、イギリスとの緊密な紐帯を築くための子どもたちといわれた。

1912 年に児童移民を促進させたチャリティ団体が組織された（フェアブリッジ協会）。オーストラリアでは子どもの受け入れ先となったファームスクール Farm School（農場主が土地を提供しそこで暮らしながら通う学校を自治体が運営していた）も建立された。西オーストラリア州は主な受け入れ州となる。当時のオーストラリアは人口減少に苦悩していた。第一次世界大戦で 6 万人のオーストラリア兵士が亡くなったことも重なる。二度の世界大戦はオーストラリアの孤立した地政学的な立場を強化した。少ない人口で脆弱な未来しか展望できないことの困難さである。日本軍によるシンガポールの陥落とダーウィンの爆撃が拍車をかけた。植民が衰退かがスローガンであったという。これを受けて政府による大

規模な移民政策にむかう。イギリスからの移民による経済発展と国力増強を動機づけた。オーストラリアの未来を担う「白人の子どもたちの移民」は最善の選択とされた。安上がりの労働者とするためであり、決して子どもの福祉のためではなかった。

オーストラリアの労働移民担当大臣は戦後の 3 年間で 5 万人の孤児移民を受け入れようとした。第 2 次世界大戦の敗戦国から受け入れ、英語風の名前に変えればいいのだという軍当局者もいた。しかし移送手段がなく 5 千人以下となった。移民は 3 歳から 14 歳までの子どもが対象となった。平均は 7 歳から 10 歳である。戦後だけで 1 万人の児童が移民とされたという説や 1920 年代から戦後までで 7000 人程度という数字もある。児童移民のための組織であったフェアブリッジ協会はオーストラリアに 2300 人の子どもを送り出したこと、カソリック教会、英国教会、バーナードホームはニュー・サウスウェルズに 2340 人を送り出したことなど歴史的な検証がすすんでいる。イギリス側では養育環境のよくない子どもの「新鮮なスタート」を支援するという大義名分をたてた。

戦後のイギリスでは里親が奨励され、大規模な施設ケアは閉じられていく傾向にあった。小規模で、家族のようなケアの志向である。しかし、オーストラリアではファームスクールのような大規模施設であり、家族を基礎にしたケアとは程遠いものであった。愛着の必要な時期をきちんとケアする大人が大規模な施設にはいない。子どもの感情と安全に配慮した環境ではなかった。イギリスで戦後から試みようとしてされていた児童福祉の基準からもれていたのが児童移民たちである。その子どもたちが民間団体をとおして移民とされていく。公的には管

理されていないので地方政府の統制からもはずれていく。また、肉体労働者や家内労働者に育て上げていくために障害のある子どもは除外されていた。さらに、白人以外の子どもたちをオーストラリアは受け入れていない。白豪主義政策があるからだ。

### 構築された孤児問題

孤児あるいは戦争孤児として児童移民を表現することは問題の構築性を物語る。孤児ではない子どもにもラベルが貼られていく。養子には親の同意が要るので孤児として構築されたのである。後にその定義が当人たちに混乱をもたらす。孤児だと定義された子どもたちはイギリスでのバックグラウンドを問うことが困難になる。ましてや孤児だから祖国を離れなければならない理由はない。また、収容された施設が子どもらしい教育と安全と保証するものであればいいのだがそうではなかった。孤児であることが罰のように作用した因果の関係とつつる。

教会、団体、政治家、そして大人たちに子どもたちは自らの出自について聞く。さらにその「新鮮なスタート」という意味づけの含意は何かと。子どもの親を探ることは子どもにとっては勇気がいる。どうして自分を放置したのかについての質問となるからである。仮に孤児であるならば施設ケアではなく里親か養子にすべきだった。受け入れ先で教育を受けていないこと、過剰な労働やそれがただ働きであったこと、不適切な取り扱いの後に続いた自殺、身体的・性的な虐待事件が明るみに出されていく。背信、欺瞞、うそ、道徳の倫理という面から宗教者が墮落し、ソーシャルワークの倫理が作用しないこの政策の評価は「戦

後システム」とかかわり広い視野から研究されるべき主題だと思う。それは日本でのイギリス社会福祉研究にとってもそうである。

これらのことも含めて児童移民体験の長期的な影響についてはあまり顧みられてこなかった。家族、友人、社会的コンテキストからの分離の影響が長い人生にもたらす影響のことである。イギリスに残ってさえいれば家族との再会が可能であった。孤児という定義で子どもたちがオーストラリアに送致されたということは、「世界にあなたを知る人はいない」という意味だ。「祖国はあなたを必要としていない」と解釈している児童移民もいる。喪失と当惑、拒否された感情と孤立感が問いとして基底にある人生。「ミルクとハチミツの国」といわれてやってきたオーストラリアである。ウマにのりながら学校に通い、道の両側には果物が実り、もぎ取り食べながら学校にいくと喧伝された。しかし、パスポートもなく、関係性も絶たれて、「私」の過去を示すものはない。出生に関しては闇のなかにある。きょうだいもばらばらになり、着いた翌日から労働に駆りたてられた。

子どもたちが施設をでるのは16歳である。多くの児童移民は孤立した地域での農場の家内労働者として雇用されていく。被虐待経験者に見られる対人関係障害、アルコール問題、低い自己評価、抑うつ、他の精神問題を抱える人もいる。もちろん成功している児童移民や何の問題も表面化しない場合もあるが、自らの出生家族、病気や治療の経過などの基本情報はどんな児童移民の場合でも欠如していることに変わりはない。喪失と剥奪のテーマはオーストラリア生活の出発点での苦痛や空白となっている。また、移民前後の事情に同じように苦

労があるともいえる。集約していえば「私は誰か」という出生にかかわるアイデンティティ問題である。子どもの情緒の発達、自己イメージ、親子関係や家族関係についての情報がいかに重要であることか。こうして児童移民体験はトラウマ的出来事となる。

その体験は具体的である。たとえば、罰として髪を刈られたことが辱めの典型であると語る人が多い。感情のダメージや身体への傷が残る人もいる。頭を殴られたことで聴覚に障害のある人もいる。宗教施設や養護施設で受けた傷をいまでも治療せざるをえない人もいる。断片化する自己についての情報のなかで自分を保つことの困難さがある。社会的不信もあり、トラストにも疑いをもってやってくる児童移民がいるという。これまでの児童移民体験はそこに関与する団体はそういうものだったと思わせるようだ。

また、児童移民の多くは孤児であるという大衆的に広まった意識、つまり偏見との格闘も体験している。何よりも切迫した課題は、イギリスの親や親戚が高齢化し、家族再会の時間がなくなりつつあるということである。

### 児童移民のためのソーシャルワークの専門性

マーガレットの取り組みからすると、児童移民経験のもつトラウマをよく理解したソーシャルワークが求められるのだと思った。しかも国際的な視野をもち、教会や国家からは独立した、反省的かつ柔軟な態度が要る。イギリスに残る親たちは子どもがイギリスで里子になっていると信じていた。そうではない事実を知った親、とくに母親

たちの感じたことはそうした環境に追いやってたことへの罪悪感や凍りついた罪の意識だという。そうした親へのソーシャルワークも求められたのである。加えて、この政策がイギリス政府や教会によって可能となっていたと知って、その落胆はさらに深くなる。これは層を成して蓄積している。

私はこのトラストの実践の総体は、社会と臨床のあり方を考える上で示唆に富んでいると思う。社会がこの事態を正確に認識しかつ承認すること、過去の問題であり当時としてはやむを得ない選択であったという誤った記憶をしないこと、児童移民ひとりひとりの個別的な体験と児童移民集団としての共通の体験の双方に配慮することなど、専門的なソーシャルワークであることがマーガレットやトラストの取り組みからみえてくる。それらは子ども時代のトラウマ的体験である喪失や孤立の理解と結びついた実践であり、特別なニーズの理解が求められる。無力感、個人としての統合性、自律性に脅威となる出来事が児童移民体験である。

家族再会へむかう技法は専門的である。家族のあらゆる記録を調査する。アメリカ、カナダ、南アフリカ共和国、オーストリア、オーストラリアでの国際的な家族履歴調査を試みている。生死の確認も重く、死を伝えることの特別な配慮がある。映画でもその場面が登場する。マーガレットが一年前に母親が死亡していた事実を伝える場面である。生涯で一度の大切なことを伝えるのに相応しい部屋を用意する際の感情の細やかさが描かれている。海のみえる部屋を用意するシーンがある。中年になった息子は思う存分に泣くことができた。家族再会のための調査は何年にも渡る可能性もあり、時には DNA 調査という司法鑑定も取り入

れる。もちろん調査者の二次受傷もある。事実はそうでないが、家族に捨てられたあるいは拒否された感覚を長い間保持してきたことも看過できない。トラストは児童移民体験の正確な理解と成人期生活へのインパクトを考慮し、自信と自尊心の回復を支援することを重視している。個人の体験をさらに広大な文脈においていく仕事ともいえる。大きな怒りを受け止める、帰属している感覚やよりよく生きていること感覚を回復する支援となる。

トラストは、国家や教会に代わって別の謝罪をする団体ではない。修復と回復の支援のためにある専門的ソーシャルワークである。児童移民体験の長期的な影響を探り、そのトラウマ対処を基本とした家族ソーシャルワークが基本である。施設ケアでの虐待の影響、急性不安が恐怖体験と共に襲ってくることへの対応のために家族再会を手伝い、個人の出自を知る権利の行使を支援する。

## ライフストーリーワーク - 私の物語をつくる

イギリスのソーシャルワークではライフストーリーワークはかなり浸透している援助技法であり、アプローチである。その重要性は社会的養護の基本とかかわる。そしてこの児童移民問題は歴史的な文脈でライフストーリーワークを位置づけるべきことを強調している。児童養護問題にとってどうしてこのアプローチが重要なのか、イギリスにおいてライフストーリーワークが何故、かくも隆盛しているのかを理解する背景として児童移民問題は大切なテーマだと感じた。

混乱、虚構、粉飾、欠落、封印してきた

ことから自分史を構築するための事実を探り出し、一貫したストーリーとして編み直していく作業が児童移民たちとともにおこなう家族再会という共同作業である。それを支援するソーシャルワークはライフストーリー再構築を意味する。マーガレットは「12000 マイルと 15 年間の時空を超えるソーシャルワーク」だという。子ども時代の欺きと誤情報をときながら、家族を中心にしたアプローチ、家族をめぐる社会臨床となっている。トラストによると、丁寧な再会準備なしにホテルであわせるというオーストラリア側での取り組みを行う団体があるが、急性トラウマを引き起こす可能性については無頓着であると批判的である。無力感や絶望を強化することにもなりかねない。トラストがそうしたやり方に抗議したところ、その団体は「児童移民はもう子どもではなく成人なのだ」という。こうした意識はこの出来事が歴史の一コマだったとか、やむを得ない選択だったという社会の意識の反映でもある。一種の社会的ネグレクトであり、そうすることで社会の側も罪の意識は減じられる。しかしそれでは児童移民たちが求める社会の側の理解には至らない。社会もまた謝罪と反省をとおし、そして児童移民たちの物語を聞くことで問題の共有をする必要がある。ライフヒストリープロジェクトはそうした意味で重要な取り組みとなるし、ソーシャルワークの観点からのライフストーリーワークもパーマネンシーという児童福祉の理念を具体化するものとして重要なアプローチとなる。

児童移民も含めたケア・リーバーたちのライフストーリーワークは本人のアイデンティティ問題の解決にとどまらず、社会の臨床と位置づけ、社会のもつケア・リーバーの理解と必要な支援を根拠づけるため、

社会のもつ物語構造を書き換えることへと  
接続されていくべきだろう。ソーシャルワ  
ークは元来、権利擁護を志向する専門職  
advocacy-oriented profession のフロンテ  
ィアだと私はとらえている。ソーシャルワ  
ークをとおして社会の問題性が変更されて  
いくダイナミズムと個別性を大切にす臨  
床実践が重なる地平をつくることできる。  
しかしそのクライアントは一筋縄でいかな  
い面ももつのでソーシャルワーカーの疲労  
度は高い。いずれにしても児童移民へのソ  
ーシャルワークの要の位置にはライフス  
トーリーワーク実践があると思う。

こうしたトラストの家族臨床的な支援の  
取り組みはなお持続している。1999-2000  
年には 84 家族が再会を果たした。依然と  
して児童移民問題は終わることはない。1967  
年が最後の児童移民だとしても、その時に  
10 歳の子どもはまだまだ若い世代だから  
である。しかしイギリスに残る親の世代に  
とって時間は少ないというジレンマがある。

### ケア・リーバーの研究へ

忘れられたオーストラリア人のなかでも  
児童移民は、児童福祉を争点にして、国家  
(植民地主義、帝国主義、レイシズム) 民  
間団体の役割、社会的養護のあり方が錯綜  
しあう事態のなかで持続していた。そして  
何よりも戦時だけではなく「戦後システム」  
においても存続していたことを看過できな  
い。その点からするとイギリスにおいてソ  
ーシャルワーク倫理やその固有性と権利擁  
護の視点などの専門性が確立していく過程  
にあったこととの整合性の説明が要ること  
になる。より根源的な問題としてある子ど  
もの自己を知る権利の確立、そして何より  
も「戦後システム」に内在していたことの

十全な把握、そのことのもつ社会臨床的な、  
社会の側の課題の明示という一連の研究す  
べきテーマが浮かび上がる。

さらにその「戦後システム」は現代の社  
会的排除課題として位置づけられるべきだ  
として、Leaving Care Debate が展開され、  
ケア・リーバー研究がイギリスですすんできた。  
それは何よりも社会的養護を経験した者  
のその後の生活の諸課題が多いことから、  
「若者問題」としての特性を色濃くもった  
研究と政策の双方にかかわる議論となっ  
ている。たとえば若い世代のホームレス、薬  
物とアルコール問題、心身の不健康問題、  
不就学と失業、社会的サポート資源の欠如、  
少年の売春、犯罪、ティーンズマザーなど  
の指標とケア・リーバー(社会的養護経験  
者)の相関は高く、社会的排除の課題とし  
てアプローチすべき研究主題となっている。

### これらをどう考えるのか - 立ち位置と想像力

さて問題は、この出来事を見る私たちの  
立ち位置についてである。同じように私た  
ちは「忘れられた日本人」を想起しなく  
てよいのだろうか。もちろん直接に関連す  
るのは日本におけるケア・リーバー、つま  
り児童養護施設生活経験者のことである。  
忘れられたオーストラリア人への謝罪とそ  
の後のケア・リーバーへの関心(少なくとも  
研究上の関心は若者の社会的包摂論とし  
て政策的関心をもたれ、イギリスやオース  
トラリアでは若者研究 Youth studies とし  
てすすんでいる)と同じように社会的養護が  
必要な子どもたちを想起し、そこでの養  
護の質に関心を向けてきたのだろうか。そ  
こまで関心が向かわないということは「社  
会的ネグレクト」ともいふべきなのだろう  
か。

「忘却」とは大げさな言葉だが、「無関心」と置き換えるとネグレクトに近い意味になる。「子どもの貧困」とおくと現代的な課題の一環として意味づけられる問題群となる。日本では児童養護問題として営々として研究が続けられているが、制度の改善やケア・リーバーの生活の改善はまだまだこれからである。

たとえば西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除 - 家族依存社会の臨界』(解放出版社、2011年)という調査書がある。ここでは生育家族と施設生活、学校から職業、児童養護施設生活者のアイデンティティの諸相が丁寧な聞き取り調査をもとに検討されている。生育家族のことは「頼れない家族・桎梏としての家族」とまとめられている。私が「男親塾」として取り組むなかからみえてくる虐待する家族の特性とも重なる。「生まれ育つ家庭がさまざまな資源に恵まれているか否かが子ども人生を大きく左右し、頼るべき親がいない、いたとしても不安定な生活を強いられている場合には、子どもの現在の生活と将来が非常に厳しいものになってしまうという日本社会の現実を、『家族依存社会』と呼ぶことができるだろう」(198頁)とまとめている。私なりに追加すれば、社会福祉全般に、「家族依存」にくわえた、「女性依存」(ケアワークのジェンダー問題があり、母性的なものへの依存ともいえるし、母子家庭問題として現出するので男性の責任が後退していく)、「民間依存」(たとえば貧困な児童養護施設の設置基準が改善されずに放置され、民間の法人に依存した現実があり、施設内虐待問題などの背景となっている)があり、排除の「社会システム」が作用している。「家族依存」は私的領域へと問題を閉じ込め、それを支える意識や文化が都合よく動員され、

錯綜した社会問題の重層化領域を構成していく。問題を解決する行動がさらに問題を蓄積させていくという多問題家族の様相を呈することになる。

大阪府・大阪市と連携して取り組む「男親塾」は児童虐待防止法という家族再統合事業の一環なので、社会的養護の質が貧しいと、虐待のあった元の家族へと子どもを帰すだけの取り組みのようにもなってしまう。これは私の本意ではない。「古巣に縊りを戻すのではなく新しい鞘をつくる」という視点と子どものための家族再統合という視点がないと、単に「家族依存」を強化する文脈に置かれていくだけになる。社会的養護の選択肢が一定水準で準備されることではじめて虐待対応としての家族再統合の実質化が可能となる。介入と保護の後に委ねられた社会的養護をとおして子どもの安全が確保される。そのことではじめて虐待する親もまた変化するための機会を得、虐待したわが子への謝罪と責任を果たすことができる。その上で、虐待した親にしかできないこと、それは子どもの心理的精神的負荷を除去するための、たんに家族の暮らしを再開することだけを家族再統合と呼ばない、家族の暮らし方の、「治しと直し」が要るはずである。とりわけ、性的虐待の場合は念入りな親指導となり、家族再統合は一般に適用できないことが多い。その中心は虐待する親の謝罪と責任の自覚である。今回のように国家や団体が虐待的であったのでその謝罪からすべてが始まるのと同じである。その選択肢としてせめて里親や小規模な施設などの社会的養護の仕組みが機能し、愛着形成が行われていくが望ましいことはいうまでもない。まずは子どもが安全な場所に置かれ、虐待されたことから回復する場の整備、それを可能にする臨床実

践を社会が用意すべきである。そのことで虐待親もまた変化へと歩み出す余裕ができるのだと「男親塾」で虐待親とかかわりながら思っている。たとえ家族が再統合できなくても、最低限、子どもにとっての親のあり方として、虐待親のもとに産まれたというネガティブな像だけで関係が切れてしまうのではなく、親もまた変わろうとして努力をしていたということが伝わるだけでも救いではあるし、親から離されるのは子どもの責任ではないということの理解だけでも回復にとっては大切だと思う。虐待する親のもとに生まれた実子は、将来、自分もまたそうなるのだろうかという不安を抱えることがあると「男親塾」に参加している被虐待経験をもつ虐待親は少なくない。

さらに、ケア・リーバーのケア終了後の継続的な若者支援のあり方へと接続されていくことが求められている。「脱青年期問題」という定式化にもあるように、たとえば長期化するひきこもり対応などがその象徴であるが、二十歳代いっばいに自立の課題が延長されていることに鑑みると、「家族依存」に陥らない仕組みの創出は、「女性依存」や「民間依存」の修正をとおしたケアシステム充実の基軸として置かれるべきだと思う。児童移民問題は「再会」というフェーズで親子関係をめぐる修復・回復・和解をとおしてそれを押さえ、出自をめぐる欠落を埋めていた。産みの親が育てられない事態への社会的な対応でも養親が重視されるべきだし、離婚と再婚による継親子関係の増加や虐待防止の観点からも「社会システム」にとっての親子関係の組み方は現代の争点を成している。

これらを含めてトータルにみると、忘れられたオーストラリア人への謝罪と共に日本のケア・リーバーたちを想起することは

映画をみた者の責任のように思えてくる。

## 産みの親が育てられない事情もあるだろう

そして想起すべきことはもっと身近な日常のなかに散見される。児童移民やケア・リーバー問題のもっと手前には、たとえば予期せぬ、望まない、育てられない、愛せない、不慮の妊娠と出産がある。そこから生じる子どもの養育をめぐる課題がある。産みの親が育てられない事情は本人の責めに帰すことのできない場合もあるし、虐待事例の場合もある。それらは介入と保護の事案となる。さらにその直前にはたとえば虐待予防としていわゆる「赤ちゃんポスト」が設置されているし、世界的にもドイツは進んだ取り組みをしている。子どもを捨てることを助長するのかという点と匿名では受け付けるべきではないという条件つきでやむを得ないものとして現実的な対応がすすむ。遺棄する母親と父親、しかし、それを傍観していただだけの私達も同じ罪なのではないか」と「赤ちゃんポスト」を開設した熊本の慈恵病院の看護部長が語る。「傍観者の罪」とは重い言葉だ。地域の病院としてできることをするという決意が伝わる。慈恵病院は妊娠に悩む女性のための相談業務が10年近く実施されてきた病院であること、つまり突然にはじめたわけではないことの理解が重要だろう。そうした相談活動からつかんだ実態がこの取り組みを必要なものとして確信させている。中絶できない時期になっていた、望まない妊娠で誰にもいえない、育てる自信がない、思いがけない妊娠である等だ。ここに指摘されている「誰にも相談できない事情」はあくまでも「社会的なもの」だ。

もちろん安易な不倫による妊娠や、刹那

的な交際による妊娠もあるのだろう。それらの一端にある父親の無責任さがなんといっても不問に付されていることに憤りを感じる。戸籍のことや世間体のこともある。これは家制度的な文化の要因である。妊娠、出産、養育という一連の過程がリスクとともにあることがよくわかる。しかもそれらは女性や母親に負荷のかかるリスクであることも見逃せない。「こうのとりのゆりかご」を必要とさせる社会的な事情をこそ見るべきだと私は思う。「こうのとりのゆりかご」を利用する親は育児放棄、つまりネグレクトそのものだが、そこに「社会」を読み取ることを忘れてはならない。母親の無責任さだけでは一面的だ。ゆりかごを利用した理由の上位に「戸籍に入れたくない」という項目があった。整理すれば、妊娠、出産、養育の孤立や寂しさと逡巡、そこから推測される関係性の病理と妊娠させた男性の無責任さ、戸籍や世間体という社会的差別と排除が連なる家族文化を生きているなどがそれらの理由からみえてくる。

ひとつの希望と感じられる点は「こうのとりのゆりかご」を利用する母親が刑法の保護責任者遺棄罪に問われる可能性のある棄児事例とは異なり、自らがそこに運び込むという揺れる気持ちをもっていることである。それは子どもを安全な場所に委ねたいという気持ちとして理解できる。「あかちゃんになにかをのこしてあげて」と書かれた掲示があるそうだ。最後にできる親の責任を訴えていることがわかる。自分はどんな経過で産まれてきたのか、そのしるしを子どものために残しておいて欲しいというメッセージだ。そのせめぎあいの、ぎりぎりの努力をしている様子が伝わる。こんな厳しい問いをすることが、看護部長のいう「傍観者の罪」への応答となるのだろう。

産みの親の、とくに母親の身勝手さ批判をこえていくことは、育てられない事情の社会的な面や男性の無関心さとジェンダー作用の結果の母親への負荷などの総体があり、そうした家族文化をつくっている側の責任も無視できない。社会臨床の視界には見たくないものも入り込んでくる。社会的養護を広げることの壁やケア・リーバーたちの生きにくさの背景にある社会の不寛容さを克服する課題の方が大きいと思う。

虐待対応だけでないにしろ、産みの親が育てられない子どもは増えていくだろう。離婚と再婚が増えているがそうすると子連れ再婚家族も増え、家族の再構成に課題がむかい、養う親としての機能が重要となる。財政規模は異なるが SACCS のような小規模のホームも創出されつつある。多様な形態での社会的養護が仕組みとして準備されるべきだし、それを支える家族支援も重視されるべきだ。

### さらに想起できることは広くある

たとえばテレビで公開肉親探しがなされた中国残留孤児たちのことをこうした文脈におくと急性トラウマはなかったのだろうかと思えてくる。1981年から厚生省(当時)が中心となって中国残留孤児の肉親探しが開始された。残留孤児が日本を訪れ肉親を探すようになるが、肉親と再会できた者はもちろんいたが、肉親が見つからなかった場合もある。そして日本への帰国を望む場合や中国で養親とともに暮らすことを希望する場合もあった。「残留孤児問題は棄民政策の結果」として損害賠償を求めたケースもある。

他には婦人保護施設の様相を描いたノンフィクションや芸術にも想像力を刺激され

たことを思い出す。たとえば沢木耕太郎の「すてられた女たちのユートピア」(『人の砂漠』、新潮文庫)である。さらに「女子の更生」を目的としたアイルランドの修道院での虐待を描いた映画『マグダレンの祈り』が重なる。現実の問題としては、ケア・リーバー問題の一環を構成する少年院や児童自立支援施設などの更生にかかわる領域でも課題の重なりが大きいと思う。

オーストラリア社会がこの間に行った複数の「謝罪」は教訓である。その後、多くの社会が直面するような若者問題にいきつく政策と思考の流れの中軸のひとつにケア・リーバーの現実がある。圧縮していえば、児童福祉卒業後の脱青年期課題である。ケア・リーバを「窓と鏡」としてみえてくるのは、「家族依存」「女性依存」「民間依存」や私的領域への閉じ込めという「社会システム」である。その焦点に「現代の親子関係」の置き方問題がある。社会的養護をはじめとした「関係性の組み換え」の焦点になっているともいえる。各論的には、親権のあり方、不妊治療との関連、養親制度の社会的定着の仕組みなどたくさんのテーマがある。この意味でも児童移民問題から学ぶことは多いのではないだろうか。

#### \*「福祉社会フォーラム」します！

今回の調査では、京都府立大学の津崎哲雄先生に紹介されてオックスフォード大学のロジャー・グッドマン教授を訪ねることとなった。日本の児童養護制度、民間児童養護施設、同族経営、大規模集団養護依存、低劣な職員定数基準、児童相談所の実態などの具体的な施策・制度の分析記述だけでなく、日本社会の特性の一断面をも呈示した人類学者である。彼の著作である『日本

の児童擁護 - 児童養護学への招待』(明石書店、津崎哲雄訳)が面白い。その津崎先生は児童養護問題研究の第1人者である。たとえば『この国の子どもたち—要保護児童社会的養護の日本的構築 大人の既得権益と子どもの福祉』(明石書店)などがあり、ここで紹介してきた事項と重なる分野の研究をされておられる。縁あって、「福祉社会フォーラム」という企画をご一緒させていただくこととなった。この秋の2012年9月27日の午後、京都府立大学で開催予定だ。阿武山学園の徳永さんがコーディネーターとなり、大阪市子ども家庭相談センターの久保さんも登壇することになっている。是非、お越し下さい。



# ケアマネの出会った 家族たち

## 9

### ～ 家族理解と家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

～ 「波風立てずに・・・」～

相談援助の場面では、利用者さんや家族の話はありのままに受容しなくてはなりません。けれども、利用者さんや家族の話を聞きながら、「どうも変だな。」と腑に落ちない時も正直なところあります。テレビのホームドラマを観ているような、なんとなく整いすぎている家族。本音が隠された展開になっている話の進み具合。そういう場面に出くわすと、少々対応の仕方に工夫がいるなど感じます。

特に、ケアマネジャーのところに相談に来られるのは、介護が必要となったご本人というより、介護をしているご家族や、独居高齢者を心配して相談機関に訪れる地域住民などの場合も珍しくありません。そうすると、実際にご本人にお会いする時に、どんな理由（目的）で面談するか、本人へどのように説明したら良いか考えます。相談に来た方々は、なるべく、穏便にことが進むといいな、余計な勘繰りをされずに、思うようなサービ

スにつながって、介護者や周囲の人が安心する方向に持っていかたいいな、という本心もストレートにケアマネジャーに要求することもしばしばです。この「穏便に」というのがくせものです。

家族が介護を担う場合、あるいは、独居高齢者の周囲で見守る近隣住民。介護の度合い（要介護度）よりも、それまでの家族間や近隣住民との関係性が、介護負担や心配ごとに大きく影響しているなど感じます。これまで、それぞれの歴史の中で様々なやり取りがなされての「今」がある。と考えると、改めて意見の食い違いで人間関係の中に波風を立てたくないと思う気持ちもわからなくはないのですが、そんな事なかれ主義的な物事の進め方が、人間関係をさらに脆弱にしていくのではないかとも思うのです。

時には、本音で気持ちをさらけ出してみる。多少のぶつかり合いはあったとしても、それぞれの考えや思いをお互いの耳で、心で聴いておく、というのは後々悪いことではないように感じます。

むしろ、気持ちを明らかにしておくことで、「誰にもわかってもらえない。」などと意個地にならなくて済むかもしれません。

### ～向き合う～

90歳のトキさんの長男である、正夫さんから、介護のことで相談があるとの連絡を受け、ケアマネジャーが初めてトキさんの自宅へ訪問しました。トキさんは、長男夫婦と同居していますが、3年前にご主人を亡くし、今は自宅から外出することもなく、家で静かに過ごしているとのこと。正夫さんと妻里美さんが心配するには、トキさんが家にこもりきりなので、だんだんと物忘れも出始めており、このままどんどん体が悪くならないか、という事でした。近所の人の勧めもあって、ディサービスにトキさんを通わせることがいいのではないかと、というサービス利用の希望です。一方、トキさんは、正夫さん夫婦と同居しながらも自室があり、好きなように一日を過ごしています。テレビを見たり、本を読んだり。時々庭に出て草花の手入れもするとのこと。90歳という年齢になり、今までのように機敏な動きはできないけれど、家事は里美さんに任せ、身の回りのことはなんとか自分でできている。改めて体調不良もなく、健康状態には満足しています。「もう90だから、それこそ、いつ病気になってもいいし、死んでもいいのですよ。」と話されます。そして、正夫さん夫婦が勧める、ディサービスについては、「今更どこかに出かけて行って、ワイワイ・ガヤガヤしなくても十分です。家にいて好きなように過ごしたいです。」とはっきりと意思表示されました。

### ディサービス

ディサービスに通って欲しい長男夫婦と、どこへも行きたくない本人の意向は真っ向から対立します。初回の訪問でもあり、サービスだけを無理に勧めていくわけにはいきません。日ごろの生活状況のアセスメントをしてから、次回は1週間後に訪問させていただくこととしました。長男夫婦

には、家族内で、サービス利用について話してみてください、と声をかけます。そうは言っても、もしかすると、本人と長男夫婦の話し合いはされないのではないか、なんとなくそんな予感がありました。

初回訪問の2日後のことでした。朝早くに、里美さんから電話がありました。電話口では「もう、介護が大変で私の体がダメになってしまいます。なんとか、ディサービスに通わせてもらえませんか。」と涙ながらの訴えです。先日、ケアマネジャーが訪問した後に、家族内でディサービスの利用について何か話し合いはしましたか、と尋ねると「お義母さんは、私の言う事はきかないので、話をしても無駄なんです。」と返答がありました。ディサービスを利用するにしても、ご本人の気持ちも向かなければ、無理やり連れていくわけにもいかないで、一度ご本人と、長男夫婦と、ケアマネジャーで話し合いをしましょうと伝え、予定されていた日から数日か早めて訪問することにしました。

### 話し合い

ケアマネジャーの2回目の訪問です。まず、長男夫婦が日中を過ごす居間で、長男夫婦、トキさん、ケアマネジャーで話合いました。「正夫さんご夫婦は、トキさんにディサービスの利用を勧められていますが、トキさんは、ディサービスには通いたくないようです。それぞれのお気持ちをここで、お話ししていただけませんか？」と問いかけました。すると、間髪を入れずに、里美さんが言葉を発します。それは、最近家の中に閉じこもりがちになったトキさんの健康への心配ではありませんでした。里美さんが、この農家の家に嫁いできた時から現在に至るまで、農家の仕事や大舅、大姑などのお世話、そして子育てなど休む間もなく仕事をしてきたこと。トキさん夫婦は60歳を過ぎるとすぐに隠居生活を始め、好きなことをして過ごしてきた。今、自分たちが60歳を過ぎて体の疲れもある中で、トキさんのお世話があるから、

好きなこともできずに、毎日が過ぎていくことに、精神的にも肉体的にも本当につらい状況だと訴えます。夫である、正夫さんの表情は至って冷静です。これまでも、里美さんから何度も相談されていたのでしょう。特に妻の強い訴えに驚く事もなく、口を出すこともなく黙って聞いていました。すると、やや不満げな表情のトキさんが、強い口調で言いました。「あんた(里美さん)は、私のことが邪魔なのだね。私がどこかに行けばいいと思っているのだね。私が邪魔であれば、どこへでも好きなところへやってくれ。吐き捨てるように言い放しました。里美さんは、トキさんの言葉を受けて「お義母さんは、私がすることはなんでも当たり前だと思っている。私はもう若くないから、疲れるし今までのようにはできない。少くらしい休憩の時間が欲しいです。お義母さんを邪魔にしているわけではありません。介護のサービスを使って少しでも協力してもらいたかったです。」と言いました。里美さんの目から涙がこぼれます。一通り、お二人(トキさんと里美さん)のやり取りが終わったので、ケアマネジャーは「では、どうしましょうか。」と二人の顔をみながら問いかけました。里美さんは、言いたいことは全部言った、という表情でトキさんを見つめています。トキさんはケアマネジャーに遠慮するように口を開きました。「すみませんね。家族の恥をさらしてしまって。私は、本当はどこへも行きたくないけれど、里美さんが行けというなら、仕方ないので、サービスというところに行ってみます。なんだかんだ言っても、今は里美さんのお世話になっているし、私がわがまま言うわけにもいけませんから。我慢します。」唇をかみしめ、湧きあがる涙をこらえながらの言葉でした。

#### 別室で

「では、サービスのことも含めて、トキさんとお話したいので、今度は、トキさんと二人でお話させて欲しいと思いますので、トキさんのお部屋にお邪魔させてください。」そう言って、ケアマ

ネジャーとトキさんは、二人でトキさんの部屋に移りました。

トキさんは自分の部屋に入り、いつもの椅子に腰かけると、ハンカチで目頭を押さえました。こらえきれない涙がこぼれ落ちます。しばらく沈黙の時間が流れます。

「トキさん、本当はサービスなどには行きたくない。でも、トキさんが折れなければ、ここでの生活は続かない、そんな風に思っている言葉だったのですか。」ケアマネジャーが問いかけると「里美さんには世話になっているからね。確かに、私は早くから隠居生活をさせてもらってラクをさせてもらっている。今は、返す言葉もないよ。でもね、息子は優しくしてくれるし、私はできることなら、この家にずっと居たいと思っています。だから、里美さんとは仲良くやっていかないとダメなこともわかっています。よく知らないところですけれど、サービスに行ってみます。」涙ながらにそう話しました。ケアマネジャーは「トキさんが、本当はサービスには行きたくないということ。自宅ですべて暮らしたいと思っていること。里美さんとも仲良くやっていくために、自分の気持ちに折り合いをつけたこと。私は、そのことをはっきりと覚えておきます。無念な気持ちも、悔しい気持ちも、私には届いています。」そう声をかけると、トキさんは「よろしく願います。」と言って涙をぬぐいました。

#### 利用

それから、サービスを利用するトキさんが少しでも楽しく過ごせるように、これまでの楽しみなどをお聞きしました。数か所あるサービスで、トキさんの知っている方がいるところを選びました。サービスの職員が事前面接に来た時には、トキさんのお部屋で、これまでの家族とのやり取りも説明し、必ずしも、喜んでサービスに通う気持ちにはないことも伝えました。サービス利用のきっかけは、決して納得いく流れではありませんでした。でも、家族が仲良くして暮らし

続けられる為の方法をトキさんは自ら選びました。ケアマネジャーとケアチームスタッフは、そんなトキさんの気持ちを支えることにしました。

ディサービスに通い始めたトキさんに、職員も配慮を重ね、趣味や仲間たちのおしゃべり、家での様子などを声かけしながら楽しんでサービスを利用してもらう時間を作りました。トキさんにとって、初めは抵抗があったディサービスも、人との触れ合いや、活動が楽しみに変わっていくことにそう時間はかかりませんでした。やがて、自分からディサービスに通う回数を増やしたい、という話になり、週に数回のディサービスははりきって参加できるようになりました。毎月のケアマネジャーの訪問では、長男夫婦とトキさんが別々に面談をしていましたが、いつの頃からか、同じ部屋で会話を交わすことができるようになりました。長男正夫さんが、「行きたくないと思っていたけど、今は楽しく通えるし元気になった。無理矢理でも行かせて良かった」と恩着せがましく話すとトキさんは、「若いもの言う事を聞かないと、家を追い出されるからね。」と冗談交じりに言葉を返します。何事もないように、穏便にすませたかった、トキさんと長男夫婦の物事の決め方が変わったのはこの出来事の後からでした。何か新しい対応が必要となった時には、トキさんと長男夫婦が別々に考えをケアマネジャーに訴えるのではなく、それぞれが思いを明らかにして、互いの主張に折り合いをつけることができるようになっていきました。その都度、満足度60パーセントと言ったところでしょうか。不満の40パーセントは、ケアマネジャーやサービススタッフがしっかりと認識しておきました。

### 穏便に

初めの頃、長男夫婦は、出来るだけ、トキさんとのやり取りなしに、事を穏便に運びたい気持ちもありました。けれども、そう上手くはいきません。ストレスの多い場面ではありましたが、心を開いて思いを明らかにしておく。物事は全てが納

得の上で進んでいるわけではないということ、双方が理解しておくことが必要だったのでしょう。険悪なやり取りの場面では、ケアマネジャーとしては、同席することも辛くなり、しばしば、その状況を早めに切り上げてしまいたくなることもあります。けれども、ケアマネジャーが居心地の悪さに付き合うのは、ほんのわずかな時間です。大抵の家族は、そんな居心地の悪さを何度も繰り返していかなくてはならないのです。吐き出したい、伝えたい言葉さえ、呑み込んで心の中にストレスとして残していく。ケアマネジャーは、誰かの味方ではなく、誰もの味方でありたい。そう考えると、居心地の悪い場面であったとしても、しっかりその場に付き合っ、向き合っ、それぞれの思いをありのままに受け止めることが役割だと思います。長男夫婦がケアマネジャーに求めていたのは、ディサービスにつなげる事ではなかったと思います。自分たちの長年抱えてきた母親との関係における葛藤への理解です。トキさんもまた、自宅で過ごしたいという願いを継続できるための支援をケアマネジャーに期待していたのだと思います。最も、トキさんは自分の中でどうすれば長男夫婦とうまくやっていくことができるのか、長年の知恵で落とし所を知っていたようですが・・・

### 60%満足

人生は、なかなか思うようにはいかないものです。理不尽なことも背負いながら、生きていくしかない時もあります。そんな時、悲しみや悔しい気持ちと一緒に歩んでいることを、「誰にもわかってもらえない」ではなく、「あの人は私の気持ちを分かってくれている。」そう思えたら、その後の歩みは少しだけ、ほんの少しだけ軽くなるかもしれません。ケアマネジャーが「あの人」になれると、本人も家族も満足度60パーセント不満度40パーセントでも、なんとかやっていけるのかもしれない。

\*プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。

# 街場の就活論 vol. 9

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ  
団 遊

## グローバル人材って、いったい、なあに？

「グローバル人材」という言葉がブームだ。企業の「グローバル化」とともに、この言葉も市民権を得てきた印象がある。

企業の「グローバル化」は、つまり世界市場で勝負できる企業に成長することを指すのだと思う。もう少し砕いて言うと、円以外の売り上げをいかに上げるかだ。決算発表の際に、総売り上げに対し海外売上比がどれほどだ、という情報もセットで提供されることが増えた。

同じ文脈で考えると、グローバル人材とは世界市場で勝負できる人材、ということになる。ところが「グローバル人材とは、どのような人か？」という評価は、少なくとも HR（ヒューマン・リソース＝人材業界）の世界では定まっていない印象がある。その結果「とりあえず英語ができること」が最初の足切りになり、授業を英語で実施するようになりベラル・アーツ系の大学が、新卒採用では人気を獲得したりする。

しかし、もちろん英語ができるだけのバカもたくさんいる。一方で、彼・彼女に英語力が備われば、これこそグローバル人材と呼ばれるのだろう、と

いう人材もたくさん知っている。

現在、世界市場で活躍する日本のビジネスマンをイメージしたときに、果たしてその中の何人がハナから英語を操れたのだろうか？ 英語ができることを意味がないとは言わないが、過大に評価するのもまた、日本的だと思う。劣等感の持ち方に、お国柄が出ている。

先日、とある人材会社が主宰するシンポジウムに参加した。その際に、このテーマが議題に上がり「グローバル人材をうまく輩出できない（とされる）ボトルネックは何か？」が話し合われた。その結論は「育成し、輩出すべき HR 担当者がグローバル人材ではないからではないか」と結ばれた。

世界市場で勝負できる人材は、世界市場で勝負できる人材にしか育てられない。考えてみれば、そりゃそうかとも思う。

「あなたの会社が本当にグローバル人材を育てたいと思うのであれば、まずはあなた自身には育成は無理だという現状理解から始めましょう。その先に、無理なりの何かが見つかる可能性が生まれ

まれるからです」と、登壇者のひとは話していた。なんとも自虐的なまとめではあるが、的を得ていると思う。

確かに、そんな風に考える人が増えたら、「TOIEC 点以上」とか「ビジネス英語検定 級以上歓迎」的な、横並びのグローバル人材育成戦略にも、また違った風が吹くのかもかもしれない。

## お金持ちに、なりたい！

私が約半年の期間で開催する大学の授業の最終目標は、自分はどんなことを大切に社会に出ていくか、その方針を漠然と決めるということだ。人生目標までは立てられなくても、こんな風になるのは嫌だな、と思うことはできる。嫌も、積み重ねると、なんとなく好きが見えてくるもので、いろいろなアプローチ方法で、自分の将来を考える楽しみを伝えようとしている。

そんな中「おっ、来たなっ！」と思うのが「お金持ちになりたい」を唯一絶対の目標に掲げる学生だ。ただし、日本人学生では、このような目標に掲げる学生は皆無。こう語るのは、必ず留学生だ。もちろん、日本人学生の中にも思っている子はいらるだろうが、口には出さない。そのように、日本社会が育てているのだろう。

「お金持ちになりたい」というモチベーションを否定する気は、もちろんない。しかし、せっかく出会った学生の人生目標が「お金持ち」というのも、なんだか寂しいなあと思う。だから、お金は結果に必ずついてくるものだ、ということを繰り返し伝える。しかし、なかなか響かない。出身国の影響も少なからずあると思う。そしてこれは、人はなぜ働くのか、という根本的自問に辿り着く。

この自問に関して、最近「なるほど」と思ったのが、サッカー選手の長友佑都選手が書いた本『日本男児』の中の一節だった。彼は文字通りの成り上がり選手で、地方のユースチームから大学を経てJリーグ、海外の弱小チーム、そして名門インテル・ミラノへと上り詰めた。

彼は著書の中で、名門チームとそうでないチームの違いを「一流クラブのサッカー選手は、それぞれにボランティア活動に熱心だったり、基金を設立したりしている」と書いた。さらに「自分がビッククラブに所属する選手であり続ける理由を、自らの手で作り上げている印象がある。そのプライドが、ほかに負けない原動力となっているようだ」と記していた。

人は働き始めると、まずは自分のために頑張るのだと思う。向上心を持ち、目標に向かう。これを仮にファーストステップとする。それを乗り越えると、セカンドステップは守るべき人の為や、これまで育ててきてくれた人々に感謝を表すために頑張るのではないだろうか。そして、多くの人は、このモチベーションで仕事を全うし、生涯を終えるのではないかと思う。

しかし、一部の人は、セカンドステップでは頑張り切れぬ状況になることがある。つまり、これ以上頑張らなくても、守るべき人を守ることはでき、また、周囲から「良くやった」と言われてしまうような状況。自分の内面から湧き出るものでは頑張る必然性を見いだせない領域だ。

思えばビル・ゲイツ氏をはじめ、経済界の大物は、すべからず慈善をモチベーションとしている。孫さんが東日本大震災に 100 億円を寄付したことも、ずいぶんと話題になった。誰もがこのような大金持ちにはなれないが「暮らしていくには十分」という状況に辿り着く人は少なくない。けれどもやはり人は本能的に働きたい・働くべきだと思うだろう。楽をするために働いてきたわけではないからだ。

そんなときに、「顔も知らぬだけのため」がモチベーションになるのではないだろうか。世界一のサッカー選手・メッシは「自分は自分を見て勇気づけられる子どもたちのために頑張り続けたいといけぬ。僕のコンディションとは関係なく、彼らの中には、待たないの状況にいる子がたくさんいることを忘れてはならない」と、何かのインタビューで語っていた。

「お金持ちが目標です」と語る彼らに、仕事はそう浅いものではなく、もっと深く面白いものだと伝えたいと思うのであるが、これがどうして、なかなか難しい。

文 / だん・あそぶ

アソブロック株式会社、有限会社 ea 代表、ホンブロック発行人、立命館アジア太平洋大学非常勤講師

---

# 心理療法が始まるまで

(9)

—コミュニティと病院で—

藤 信子

先日ある論文を読んでいて1つのパラグラフの中に、occupation, work, employment と出てきた (Martin-Baro 1994) ので job も加え、これはどのように訳すかと大学院生との話しになった。この論文 (エルサルヴァドルの内戦下における精神保健の問題) の文脈の中では順に、occupation は「職業、職」、work は「仕事、働き口」、employment は「雇用」、job は「仕事、賃仕事、役目、職務」かな・・・としながら、ではジョブ・コーチは職業訓練をしているわけではなく、職場のある仕事における役目を果たすことを援助している、

などと話していた。そこで思ったのは occupational therapist は作業療法士という日本語だけれど、どうして職業療法士ではないのだろう、と思った。今度知り合いの OT (作業療法士) にあったら聞いてみようと思う。これはこの論文だけでなく、work という単語が論文中に出てきた時に、仕事、労働、作業、任務、成果、研究、課題、職業、勤め、(ジーニアス英和大事典にはまだ作品、著作・・・と多くあるが) などからどの語がその文脈に適切かと、考えることが私の場合よくあるからだ。

この頃精神科の治療で、うつ病リワーク

(復職支援)ということをよく聞くようになった。横山ら(2010)によると、そのプログラムは治療目標として「再休職予防」をあげ、スポーツ、レクリエーション、職場場面を再現するような様々なプログラム、心理教育、集団認知行動療法などが実施されているという。Martin-Baro(1994)は、仕事は人間のパーソナリティの発達にとって基本的な根源であり、アイデンティティを形成する場合に最も関係する過程であり、人間にとっての実現や失敗の基本的な文脈だ、と言っている。これは内戦という状況で仕事がなく、毎日仕事を捜していることについて指摘しているからこそ、このように根源的なことばが出てくるのだが、今更ながら、仕事や職業、雇用などについて考えさせられた。そのような観点から考えると、リワークが単に身体の調子を復帰のために整えたり、作業や課題の遂行や達成度を見ることだけが主ではなく、対人関係などに焦点をあてる必要もでてくるのだろう。ただし、対人関係への洞察を求める心理療法は、復職という目標のプログラムに入れる時には、期間のある中でどのような目標を立てるのか、治療者とクライアントがどのように理解しているのか、個人の状況に合わせて治療を組み立てるのは、簡単なことではないだろう、と思う。

仕事、職業、雇用などについて身近な話

題を見ていくと、研究科での大学院生たちの研究テーマが浮かんでくる。先ほどのジョブ・コーチもそうだけれど、企業の「障害者雇用」についての研究もある。そしてこの障害者雇用というテーマを先ほどからの仕事と発達・アイデンティティ形成などの文脈から考えると、誰の問題なのかということが出てくる。「障害者雇用」というのは、雇用する企業側のことばで、雇われる人のことばではないだろう。このことばの背景には、法定雇用率ことがあるように、少なくとも聞く側の私は感じる。具体的な誰かについて、その雇用形態をどのように呼ぶのかは、その会社にとってその人が入社し一緒に働くことを、どのように考えるのかということに関わるのではないだろうか。そのように考える時、雇う会社としては、法的な名称などから離れ、自分の会社で何をしたいのかを考えてみることは、大事なことのように私には思える。事業や企画の名称は記号のようでも、やはり意味を託しているのだから、自分の会社はこうしたい、という気持ちを伝えるものを考えたらいいように思う。「障害者雇用」を「挑戦する能力のある人」「挑戦するチャンスを持っている人」「挑戦という使命、課題、チャンスを与えられた人」という意味で、「チャレンジド雇用」という名称変更した会社があるという(今野ら、2006)。このチャレンジドということばから、私は障がい児・者

の **challenged behavior** という用語を思い出した。「問題行動」をそのように呼ぶようになったのは、障がい児・者の行動が問題であるように見えるが、一緒にいる人が環境・対応を変えるように、という意味で **challenge** なのだという考え方である。この意味は大事にしたいと思っている。S社は「一緒に働く喜びを持つ仲間」という意識を共有できていたからこそ名称を変更し、それはやはり会社の皆にとって **challenge** という意味があったのではないか。たかが企画、プログラムなどの名称で貴重な時間を使いたくないと思う人も、この効率化を優先する社会ではいると思う。会社の理念、目標があるのでそれに合わせて、仕事をしてください、ということなのだろうか。全てがそこで決まることではないだろう。日常の現場でどのように考えるかという周りの人と話すことから始まるのかもしれない。名称、ことばをあまり侮らないほうがいいと思う。ことばの問題は思考に行き着く。どう呼ぶかを大切にすることは、自分の考えを大事に暖めることだと思う。

—文献—

今野義孝・霜田浩信 (2006) 知的障害者の就労支援に関する研究—S社の「チャレンジド雇用」. 『人間科学研究』文教大学人間科学部、第28号、69-78、

Martin-Baro, I. (tr.) Wallace, A. (1994) War and Mental Health. Aron & Corne (ed.) *Writings for a Liberation Psychology*. 108-121

横山太範・田中理香・北西憲二 (2010) うつ病リワーク (復職支援) プログラムの集団精神療法的検討— (2) 再休職予防を中心に—. 集団精神療法 26 (2) 134-139

# 誌上ひとりワークショップ

## (その5)

### ～ 家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「さて、今回は問題の仮説はその人なりの枠組の中で組み立てられているという話から、「枠のギリギリ外」というテーマに実習をしました。そのことが、援助者としての自分自身の枠を知り、広げることにもつながる、そういう意図でした。今回は、本児の仮説ストーリーの“承”の部分を手がかりにします。では、Bグループのお二人、前でお願ひできますか？」。

本児役:母は嫌い。けど、憎くいとは思っていない。なんだろう、この違い、先生、わかる？

援助者役:憎いと思うほど、深い気持ちじゃないってことかな？

本児役:その意味もよくわからない。だいたい大人って、自分のことしか考えていない、違う？けどね、わたしは絶対に母みたいな大人にはならない。あんな人生なら、生まれてこない方がマシだと思う！

援助者役:そうかぁ、そこまで思っていたんだ。

本児役:あの人の近くにいるとだんだん似てきそうで怖い。ほんとよ！だから家を出た…。

援助者役:お母さんと離れたら、違う生き方ができる気がしたんだね。

本児役:そう、わかるでしょ？

援助者役:気持ちは分からないくはないけど、でもいま起きているのはそういう単純な話じゃないだろ。

(拍手)

私:まだまだ続く様子だったけど、一応ここまでにしましょう。いかがでした？

本児役:はじめは、親身になって話を聞いてくれる感じで安心感がありました。味方だって気がしました。

私:もしかしたら、家出・同棲も理解してくれるんじゃないかって気がした？

本児役:そうです、そうです。期待しました。

私:それで？

本児役:ところが、しれっと“そういう単純な話じゃない”なんて言われてガックリ。だれも単純だなんて思ってないし、ムカついてやり返そうとしたらストップかけられちゃいました。

援助者役:彼女のゴールのど真ん中に吸い寄せられてしまって、あわててしまいました。

私:わかるな、その感じ！他の方、見ていてどうでしたか？

参加者:母親から離れるだけなら、一時保護所に逃れることもできたはずだけど…。

援助者役:そんなことを考える余裕がありませんでした。

私:どうなの、一時保護について。

本児役:絶対に行かないと思います。母親から離れることは家出理由の半分で、彼のところに行きたいというのが残りの半分だと思うから。

私:援助者の話は彼女からすればだいたい予想の範囲内だったからか、子どもの方は全然揺れている感じがなかったですね。

〔グループでは子ども役が揺れたらしいけど、披露してもらっていいですか？

本児役:母は嫌いだけど、憎いのとはちょっと違う。親なんて、そんなものじゃないかなって思うだけ。でもね、わたしは絶対に母みたいにはなりたくない。だから家を出たの。だって、このまま一緒に住んでいたら、母と同じになる気がするから。

援助者役:嫌いだけど憎いのとは違うって、具体的にどんな気持ちなんだろう？

本児役:うまくいえない…

援助者役:じゃあさあ、お母さんとは違う生き方って、どういうイメージかな？

本児役:え〜と、ちゃんとした家庭をもって…

援助者役:ちゃんとした？

本児役:そんなこと、わかるわけない！

(拍手)

私:子ども役はどんなふう揺れたのですか？

本児役:気持ちを聞かれて驚きました。嫌いだけど憎くないってのを、具体的に言えと言われて、あわてて自分の気持ちを見つめてみました。結局、うまく説明できませんでしたけど。

私:そんなに深く考えて使った言葉じゃなかったのに？

本児役:そうですね、言葉が先行していたところに、あわてて気持ちを追いつかせる感じかな。

私:うまい表現ですね。大事なところだけど、子どもにとっては答えにくい質問だったかもしれないね。本児役にしたら、それくらい自分で考えるよ、あんた専門家だろ！みたいな(笑)。

本児役:そうですよ。その反面、わかってたまるかという思いも…。

援助者役:複雑だったんですね。軽く尋ねたんですけど。

本児役:重いネタを軽く聞くな！

私:いいツッコミですね。で、援助者は母への思いを聞き出せたら、その後は？

援助者役:もちろん共感して、そのあたりをていねいにやっていこうと。

本児役:共感してほしい気持ちは強いです。

援助者役:それで信頼関係を築けたら、Aとのことに踏み込めるかなと。

本児役:そこは透けて見えました。

私:子どもはしたたかで、それほど揺れてなかったような…。

援助者役:ほんと、そうですね。

私:この家出・同棲って、母みたいにならないための本児の解決努力そのものでしょ。援助者として容認はできないけど、ねぎらうのは可能だよな。「すっごく大きな決断だったろうね、誰にも相談できずしんどかったね、迷いもあったと思うけどどうやって振り切ったの？」とか。その後でなら、「離れてみて母と違う生き様という実感はあるの？」とか、「あんまり変わらないなって思うのはどんなところ？」とか、「家を出る前の予想と比べてどう？」とか。それなら、枠ギリギリかな？

本児役:う〜ん、頭が混乱してきました。

私:たとえば、こんなのはどうでしょうか?もう一回、本児役でつきあってもらえますか?

本児役:母は嫌いだけど、憎いのとはちょっと違う。うまく言えないけど、ほら、親なんてその程度のものじゃないですか。

私:キミの友達は、だいたいそんな感じなの?

本児役:そうですよ。親に期待して痛い目にあっただ子はいっぱいいます。

私:哀しい話だなあ…。

本児役:先生、わたしは母みたいにはなりたくない。絶対にイヤ。だから家を出たんです。だって、ほら、このままずっと一緒に住んでいたら、母と同じで嫌な大人になる気がするから…。

私:嫌な大人か、その気持ちは分かる気がする。じゃあ、どのくらい離れるのとちょうどいいと思う?“嫌いだけど憎くはない”にじっくりくるのって何キロくらいの距離かな。

本児役:なに、それ?

私:ちょうどいいイヤさ加減をずっと持ち続けることができ、適度なストレスを味わえる距離だよ。どれくらいだろうね?

本児役:ちょっと先生、ちょうどいい嫌いは加減ってある?適度のストレスって何?意味がわかんないよ、説明して!(拍手)

私:どうもありがとう。あいまいで主観的な心の距離を、言葉じゃなく実際の距離に置き換えようと思ったんです。“誰のところ”じゃなく、“何キロ離れるか”という距離に。

本児役:わけが分からなくなりました、想定外で。

私:聞かれて混乱し、それが疑問に変わり、質問が沸いてくる、となると狙い通りなんだけど。

本児役:はぐらかされた感はありませんけど、「ちょうどいいイヤさ加減」とか「適度なストレス」とかに気持ちを持って行かれました。

私:ノンアルコールビールじゃないんだから、ストレスフリー・憎しみゼロなんてありえない。無い物ねだりなんかせず、自分にとってちょうどいい愛憎やストレスを保てる距離を探そうってことです。なにしろ、彼女が育ったのは極端な世界ですから、あこがれる家族や愛情もまた極端なものでしょ。有るか無いか良いか悪いか、のゼロとイチだけでできている世界観。もっとあいまいで緩くてぬるい話をしたい。そこから、「え?じゃあ、うちみたいなのも家族の一種?」みたいに。

余談ですが、インテリ落語家だった桂枝雀師匠が「緊張から弛緩への落差が大きければ大きいほど枠は揺れる」みたいな話を書いておられました。動物行動学の小林さんも似たようなことを書いてた気がします。

(ウ) 仮説“転”の部分から

では、次に行きます。本児役はまた交代してください。念のために言いますが、わざと外を狙わなくていいです。いつもどおり自然にやってください。本児役からゴールポストの内側だったか、それともギリギリ外だったか、それを聞いて確かめるだけです。Dグループ、お願いします。

本児役:Aといると、どんなことがあっても忘れられる。わたしはAを頼りにしているし、Aだってわたしのことを頼りにしてくれていると思う。信じ合える関係なんて、わたし、初めて。だからAには嫌われたくない。ずっと好きでいたい。

援助者役:なるほど。

本児役:こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もないから。さっきも言ったけど、家族のことはとっくに諦めてる。

援助者役：つまり、家族と違ってAさんを信頼してる。

本児役：そうじゃなくて、信頼しあってる。

援助者役：そうか。そんなふうにある場所があるってことは、とても素晴らしいことだね、けど、キミはまだ15歳じゃない？

本児役：15歳だと信頼関係はつukれないと言うこと？

援助者役：いや、違うんだ。成人が15歳と関係を持つと罰せられるんだよ。もちろん、結婚はできないし。知ってた？

本児役：マジ？うっそー！先生を信じてたからいろいろしゃべったのに、もうなにも話さない！

(拍手)

私：どうでしたか？

援助者役：これだけは言っておかないといけないと思って。

私：確かに大事なことです。本児役の方はどうでしたか？

本児役：完璧に予想通りです。淫行という言葉だって知ってましたから。ただここまでよく話をきいてくれたし、もしかしたら自分サイドで聞いてくれるかな、みたいな淡い期待もありました。やっぱりとまさかが半々くらいでしょうか。だから、裏切られた失望や怒りはそれほど大きな物ではないような気がします。やっぱりなあ、くらい…。

私：確かに、自分以外はあてにしないのが彼女の粹なものね。深手を負わないための仕組みというか…。もう別れざるを得ないというリアリティはもっているの？

本児役：はい、彼は逮捕されていて、もう合わせてもらえないだろうと。でも、実家に戻ることはないという強い意志もあります。

私：そうか、想定内だからこれくらい言われてもびくともしない？

本児役：そうですね。気持ちは揺れても決意は動きません。

私：子どもなりに現実を受け止めていたんだね。Eグループ、やってみますか？じゃあ、どうぞ。

本児役：Aといるといろんなことを忘れられる、Aとはお互いに頼りあえる関係だから。そんなのは初めて。Aには嫌われたくないし、ずっと好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もない。

援助者役：なるほど、Aさんといるとすごく安心できるんだね。Aさんも、まったく同じ気持ちなのかな？

本児役：たぶん、そうだと思う。

援助者役：じゃあキミたち二人は、逮捕とかされることも覚悟の上で安心や信頼を確かめ合っていたの？

本児役：どうだろ、よくわからない。

援助者役：そこがあいまいなら、Aさんの気持ちもあいまいってことじゃないかな？

(拍手)

私：なるほどなあ。本児役の方、いかがですか？

本児役：理詰めで、有無を言わさない感じ。

私：「分かりました」となる可能性は低いにしても、迫力は横から見ていても伝わってきましたが。

本児役：はい、上から目線の真剣さは痛いほど感じました。

私：予定調和的に説得と諦めにまとまっていきそうな、難しい話題ですよ。ちょっとやってみようかな、気が進まないけど。

本児役：Aといるといろんなことを忘れられる、Aとはお互いに頼りあえる関係だから。そんなのは初めて。Aには嫌われたくないし、ずっと好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もがない。

援助者役:キミはAと心でつながっていたんだね?

本児役:そう、わたしにとってAは家族だから。

援助者役:そうかな?家族って、身体の関係をもたなくても安心して一緒にいれるものだよ。心のつながりだけで、頼ったりあてにしあえるのが家族だと思うけど。

本児役:Aだってそうよ。

援助者役:そう?確かめてみた?

本児役:そんなこと、どうやって確かめるわけ?

援助者役:もし男性が性的なつながりだけを求めているなら、それを拒まれたとき、言葉遣いや思いやりの態度がごろっと変わるから。だったらそれは二セモノ、心はつながってなんかいない。身体関係を拒み続けるだけで、家族になれるかどうか確かめられるんだよ。確かな方法だから、しっかり覚えておいてね。

(拍手)

私:はい、ありがとう。ちょっと意識して心理教育的にやろうとしたんだけど、どうだった?

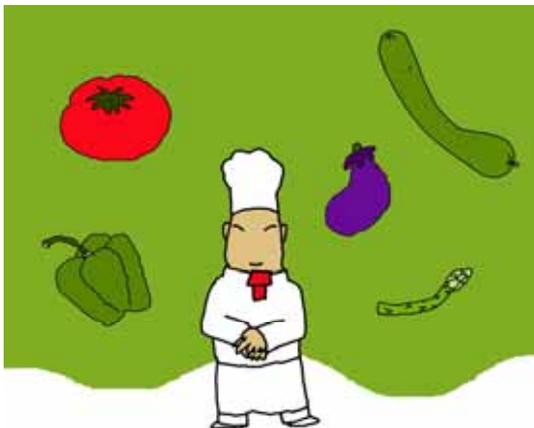
本児役:ど真ん中から説得が始まったという感じではなかったです。試してみる気になってました。

私:そうか。予想外の驚きではなかった?

本児役:心のつながり云々は予想通りでしたが、試し方があるというところは新鮮でした。もしいつか誰かからセックスを迫られる場面があったら、そのときにじわっと効いてくる気がします。

私:そうですか、わたしも参考になりました。

「今回は自分が疲れたので、ここで閉じます。さあ、あと一回です。お互い、頑張りましょう」。



## 家族援助レシピ

家族の法則 2

岡田隆介 著



このイラストは岡田隆介さんの「家族の法則2」の装丁画を依頼されて作ったもののうち、使用しなかった方のバージョンです。



の中の

子ども  
たち

## 第9回 「少年と自転車」

—セカンドベスト—

川崎 二三彦

### ある里子

2歳で乳児院から里親に引き取られ、そのまま高校を卒業した女性がいた。無事就職も決まり、何とか一人暮らしにも慣れてきた頃、担当児童福祉司だった私に彼女から電話が架かってきた。

「自分の苗字を里親の姓に変えたいんだけど、できる？」

彼女は幼い頃から里親の姓を名乗っていたのだが、いざ独り立ちしてみると、たとえば自動車の免許取得ひとつにしても、本名を記載するしかないのである。友人に免許証を見せたい彼女は、名前の秘密を知られることを恐れ、ずっと我慢していた。

「20歳になれば、独力で家庭裁判所へ姓の変更を申し立てることができるよ」

そう言って私は、里親の姓を名乗っていた期間が長期にわたることを証する書類を用意して彼女に渡した。

そんな彼女が、もう一つ頼んできたことがある。実の親を探してほしいというのだ。

「会ってどうしたい？」

何気なく尋ねた時の彼女の答えが忘れられない。

「決まってるやろ！ 張り倒してやるんや」

### 不都合な真実

この映画に出てくる11歳の少年も、父親を探そうとする点では彼女と同じだ。事情はわからないが、父は息子を施設に預けて身を隠しており、少年は、わずかな手がかりを頼りに無我夢中で父の姿を追い求めるのである。ただし、私が出会った彼女と違うのは、決して



「張り倒す」ためではないところだ。

「お父さんは引っ越したんだから、いくら電話してもつながらないよ。さあ、その受話器をよこしなさい」

電話の向こうから「おかけになった電話番号は、現在使われておりません。番号をお確かめになって…」というメッセージが流れるのを確認して、大人たちは少年の行為が無駄であることをわからせようとする。けれど彼は、決して受話器を手放さない。父が自分に内緒で姿を消すなんて、絶対あるはずがないと信じて……。いや、実のところ彼は信じてなんかいない。ただ、疑うという選択肢を持たないだけなのだ。なぜとって、疑えば生きてなんかいけないから。

私もその部類だが、大人は不都合な真実を子どもに伝えることを躊躇する。できれば機が熟すまで、つまりは彼や彼女が冷静にその事実を受けとめることができると（自分たちが）思えるまで、待ったほうがいいと考える。だが、子どもは違う。<今すぐ>なのだ。

周囲の大人は、だから真実が明るみに出ることを恐れ、子どもの必死さにせつなくなる。映画を観ている私も、いつの間に身を固くし、顔がこわばっ

ていく……。

### 自転車

さて物語は進行し、少年は、ひょんなことから週末里親を引き受けた女性とともに、父を探し続ける。そしてわかったことは、自分があるほど大切にしていた自転車（マウンテンバイク）を、当の父親が売り払ったということ。里親によって自転車が買い戻された途端、少年は大人達の制止を振り切って街へ飛び出していくのだが、その運転さばきの巧みなこと。パンフレットを読むと、映画製作はどうやら自転車の特訓から始まったらしい。確かに彼が自転車で駆け抜けるからこそ、映画はすごい緊迫感を醸し出すのである。大人の手をすりりとかわして走り抜け、あるいはせっかくの自転車を奪われて、今度は彼がどこまでも追いかける……。自転車は、つまりは暗喩だ。それは彼自身であり、また彼が最も大切にしているものの象徴なのだろう。



### セカンドベスト

自転車が疾駆する度に胸苦しさを覚えながら、ふと思いだした映画があった。「セカンドベスト／父を探す旅」だ (<http://bit.ly/HWTMds>)。20年も前の作品だが、父は服役していて養育が出来ない。そこに現れた独身男性が養親になることを申し出て、10歳の少年の心が揺れ動くのである。

\*

一方、本作での少年は、週末里親の女性にも支えられてついに父を見つけ、短い会話を交わし、そして拒絶される。その後は、さもありなんという

展開があり、再び父に対するいじらしい気持ちが表現され、再び拒否される。

とすると、こんな彼と付き合う里親女性も穏やかではられない。彼の行動に困惑し、自身の恋人との関係も脅かされて決断を迫られる。

こうした紆余曲折の後のラストに登場するのが、やはり自転車である。ただし、最後のシーンでは自転車は疾駆しない。その走りはあくまでも穏やかであり、周囲の風景に溶け込んでいるのであった。

\*

二つの映画に出てくる少年は、いずれも名状しがたい余韻を残して<sup>たびだち</sup>出発を迎え、幕となる。

「そうか、私たちの相談援助活動も、急所はセカンドベストにあるのかも…」

唐突にこんなことを書くと、読者の怪訝そうな顔が浮かぶけれど、考えてみれば、彼らは決して望んでいたものを手にしたわけではない。彼らの決心には悲しみが隠されており、現実を、つまりはセカンドベストを受け入れることで初めて<sup>たびだ</sup>出発つことができたのである。

だったら、援助者も同じではないのか。相談者とともに変えられぬものを受け入れ、受けとめ、セカンドベストの中にこそベストがあることを自覚する、この映画を観て気づかされたのは、そのことだ。

\* 2011 / ベルギー・フランス・イタリア  
\* 鑑賞データ 2012/04/01 109 シネマズ川崎  
\* 公式 HP <http://www.bitters.co.jp/jitensha/>  
\* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/16375>

#### <これまでの連載>

- |                |   |
|----------------|---|
| 第1回 「プレシャス」    | <a href="http://bit.ly/9qGWXm">http://bit.ly/9qGWXm</a> |
| 第2回 「クロッシング」   | <a href="http://bit.ly/rYwUnO">http://bit.ly/rYwUnO</a> |
| 第3回 「冬の小鳥」     | <a href="http://bit.ly/eGJ1d9">http://bit.ly/eGJ1d9</a> |
| 第4回 「その街のこども」  | <a href="http://bit.ly/hzhB9t">http://bit.ly/hzhB9t</a> |
| 第5回 「八日目の蝉」    | <a href="http://bit.ly/keXFwL">http://bit.ly/keXFwL</a> |
| 第6回 「いのちの子ども」  | <a href="http://bit.ly/pm8V0p">http://bit.ly/pm8V0p</a> |
| 第7回 「ラビット・ホール」 | <a href="http://bit.ly/wF8G4a">http://bit.ly/wF8G4a</a> |
| 第8回 「サラの鍵」     | <a href="http://bit.ly/Hf2MsL">http://bit.ly/Hf2MsL</a> |

## 子どもと家族と学校と

⑨

# 『留年する生徒ゼロのクラス担任』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

不登校状態にある生徒さんとその家族を長年、支援してきた。少しずつ世の中の関心も広がり、いまでは小学生中学生の不登校はかなり理解されている。

高校生になると気がかりなのは、欠席日数オーバーによる原級留め置き、つまり留年。次年度にもう一度同じ学年を繰り返すことになる。

「留年するぐらいだったら学校をやめる」とあっさり退学を選ぶ生徒も少なくない。特に高校一年生の中退が目立つ。

在籍高校から単位制通信制高校への転校や高校卒業認定試験の利用など、さまざまな制度が準備されているようになった。

選択肢は増えたが、やはり入学した高校において順調にすすんで卒業したいと思っている生徒は多いだろう。

そこで、あらためて気がついたことがある。

担任教師のサポートの素晴らしさだ。

ある高校の〇先生から紹介された生徒達は必ずと言ってよいほど短期間で解決しているのだ。そのクラスの生徒は留年するひとはいないという。

どういう対応のコツがあるのか、今回は、家族支援心理カウンセラーの立場から、留年する生徒ゼロのクラス担任。その動き方を五つにまとめてみた。

### 生徒対応のコツ

欠席理由の把握

家族との協力関係づくり

適切な専門機関を紹介

紹介後のサポート

地道にすばやく広い視野で動く



### 担任教員の生徒家族対応

CONには、「不登校で欠席日数が多く、留年するかもしれない」高校生が家族とともに相談に訪れている。

とても困っているのになんとかしたいという意識よりも、高校の先生から相談に行くようにすすめられたので、最初はしぶしぶ来所している様子だ。

担任による紹介の仕方がとてもスムーズな場合は、初回面接から、高校生の本

人と両親がそろって相談に来ることが多く、気持ちのよいスタートとなる。事前に担任が家族面接の重要性を家族に丁寧に伝えていることがうかがえる。

目立って特別な動きをするわけではないが、カウンセリングがうまくすすむように調整する担任教師がいると、カウンセリングに入りやすい土台作りができています。

では、クラス担任が、カウンセリングを家族に紹介するまでの経過について記してみる。



### 連続欠席の理由を明確にする

まず、受け持っているクラスの生徒が連続して欠席した場合、しばらく様子を見るのではなく、休んでいる状況を把握するために、ただちに保護者に連絡をとる。

単なる体調不良だといってあいまいな理由の欠席もある。ときに、制服を着て自宅を出たものの、学校に行っていないことがわかって家族もあわてたりする。

欠席の場合は、病院で診察を受けているのか、医師の診断はどうなのかを家族に確認し、なんとなくしんどくて家にいる状態だとわかると、不登校の可能性も視野に入れて今後のプランを立てていく。

保護者はわが子が不登校であることを現実に認めたくないため、見守っている間に、ずるずると欠席日数が増えて対応が遅れてしまう。そのような事態にならないように、生徒や家族に任せるとはせず、早く早めにかかわっていく。



### 家での様子を家族にきく

次にポイントとなるのは、気になる状態があれば、家族とコンタクトをとること。

家庭訪問して本人と話をします。ただし生徒本人と直接に話せないあるいは、会うことができない場合もある。生徒との関係をつくりながらも、並行して、保護者から生徒さんの様子を詳しくきく。

学校を休んでどのように日々を過ごしているのか、どのように家族がかかわっているのか、家族の問題点を詮索するのが目的ではなく、現在なにが起きているのかの情報を得ておく。あくまでも原因探しい悪者探しはしない。

○先生の話では、つねに家族とうまく話し合いができるとは限らないという。欠席日数が増えていくと、学校に保護者に来てもらい、家での生徒さんの様子をたずねようとするが、

「仕事があるから学校に出向くことはできない」と返事が返ってくることもしばしばある。それでも保護者となんとかあつて、顔を突き合わせて、家での様子を確かめる。

そうしているうちに家族にもこのままではいけないという問題意識ができてくる。

そこで、担任は、家族から得た情報をまとめて総合的に判断し、専門機関を紹介する。

◇  
専門機関につなげる

動きが早い。

「わが校の〇〇さん家族にCONを紹介しました。連絡があると思いますので、よろしくお願ひします。」

と電話が入る。

続いて、家族から申込の電話連絡があり、面接の予約がはいる。

「担任の先生からうかがっています」と私が電話口で話す、家族も安心するのか、簡単に欠席状況をきいて、こちらも事務説明をすますと、すぐに予約日時が決まり、初回面接へとつながる。

適切な対応で素晴らしいなと感じるとことは、不登校などで困った状態にある家族がどの専門機関にかかればよいのかとても的確に判断していることだ。

家族カウンセリング機関、思春期専門の神経科、あるいは総合病院、ときに、体の調子を整えるために整骨院、その上担当者が女性なのか男性であるのかも把握したうえで生徒と家族に適した紹介をしている。

まるで、ソーシャルワーカーのようなネットワーク力。なかなかここまで動ける先生はいない。

◇  
紹介しっぱなしにしない

紹介の仕方もかなり配慮がなされている。

家族は学校から専門機関にいくようにいわれると、やっかいもの扱いにされた

という思いや問題児扱いにされたという思いが生まれることがある。

これらは全くの誤解だが、もしもそのような思いの中で、医療機関の受診やカウンセリングに通うことになるとその後、学校との信頼関係や、相談機関とのつながりもぎくしゃくしてくることが予想される。

そのため、

「専門機関の方針にしたがって、高校側も対応して解決に協力したいので、相談に行かれたあとも、ぜひ、どのような状況なのか、お知らせください」

と伝える。

専門機関にまかせっぱなしにしない担任の姿勢は、生徒や家族をほっとさせている。

◇  
学校内関係者と情報交換

家族がカウンセリングに来られると、そののち、初回面接での様子を学校側に報告する。いうまでもなく、家族に了承を得てからの報告で、必要に応じてカウンセラーが学校訪問もする。

学校訪問時には、面接をすることによって判断したことを担任に説明しつつ、学校側の内規ルールの確認をする。

特に現在欠席日数がどのぐらいなのか、あと何回の欠席で、留年になるのかの数字を把握する。

学校の担任だけでなく、学年主任あるいは、クラブ顧問など、その生徒さんにかかわっている先生方にお会いして、生徒さんの高校の教室のできごと、クラ

ブ活動の情報などをうかがうと、知らない情報がぞくぞくと集まってきて、家族のことがいろいろな面から理解がすすみ多角的なものを見方ができるようになる。また、学校行事の特徴などをお聞きして、その準備をすることになる。

学校関係者と相談機関が連携することができるのも、調整役に動いてくださる担任の影響が大きく、関係機関の強いネットワークが生まれる。

カウンセラーは、面接室のできごとだけで、家族や生徒さんを理解できないので、関係者から一気に情報を集めることは、数回分の面接に匹敵するほど効果がある。



### 関係する機関が同じ方針で動く

不登校や問題行動に対して解決力のある教員の行動をみていると、特に秘策があるわけではない。ひとつひとつ駒を動かしていくように地道に動いている。ただしその取り組むスピードはかなり素早い。

そして、家族と歩調をあわせ対立しないように、一体となって問題解決する状況をつくっている。

また、それを同じく専門機関ともうまく歩調を合わせ、同じ方針を確認しながら、日々の情報が更新している。

各関係機関が得意分野を活かして、動くことができるように、担任教師の関係者間の調整が、問題解決への原動力となる。

担任は、欠席している生徒の気持ちを

理解することに関心が向きがちだが、子どもの保護者、そして専門機関の協力など広い視野で支えていく視点が必要だ。

スクールソーシャルワーカーも兼任しているような担任教員が増えることを期待している。

# 蝟螂の斧

(とうろうのおの)

## 社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第九回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

春休みの旅に大分県日田を訪れた。ここに行ったのは偶然以外のなにものでもなく、事前の知識は地名を聞いたことがあった程度だった。そこそこの歳になると、意外なことに遭遇する機会は減る。世の中には未知のことがいっぱいのはずだが、日常はたいてい既知の山になってしまう。そこで、昔のTV番組「遠くへ行きたい」の主題歌のごとく、知らない街を歩いてみたい、どこか遠くへ行きたい と思っただけである。

やってみると、これがなかなか面倒なことはすぐ分かった。「とりあえず、新大阪駅から西へ向かおう！」と思っていたが、新幹線出口であてもなく切符は買えない。春休みの混雑の中、座席を確保しようとしたら、行き先も希望時刻も定めていなければならなかった。

旅の目的を「知らない街を歩く」に決めたので、行き先は消去法で決定した。これまで下車する機会がなかった九州新幹線駅の一つ、久留米駅にした。この結果、その先の移動が、初めて乗車するJR久大本線になった。この沿線に日田や湯布院があることを知らなかった。断片的知識はあっても、それがどこなのか分かっていないものだなあと思った。

日程すら決めていなかったのだが、五日間、ひたすら知らない場所、初めての経験を優先に選択を繰り返した。結果的に日田二泊の後は、大分経由で佐賀関から九四フェリーにのって、四国・佐田岬の突端、三崎港の民宿に行った。そこから細長い半島を延々と八幡浜に出て、最後が何度か訪れたことのある松山市に行き着くことになった。知らない街があったら、もっと延長しても良かったのだが、選択と決定の繰り返しも疲れた。

二泊することに決めた日田の散策で、咸宜園(カンギエン)と遭遇した。咸宜は「ことごとく、よろしい」という意味だそうで、江戸時代に彼の地に開かれた私塾である。地元の豪商の息子、廣瀬淡窓(ひろせたんそう)が開塾者である。淡窓は江戸末期の儒学者であり教育者である。こう書いたところで、私がいかにそのことを知っているわけでもない。にもかかわらず、思いがけず興味を持ち、今その人物誌などを読んでいます。

研修、教育、人材育成は私の長年の関心事である。天領日田は江戸期には九州の要の地だったとはいえ、ここに結果的に九十年間、この時代の塾としては、一番長く世代をつないで存在し続けた民間の塾に大いに好奇心をくすぐられた。案内のおじさんの話を聞き、資料館をいくつかのぞき、参考文書を手にした。この場所に、全国から学びの徒が訪れ、寮生活をしながら日夜学んだ。そこからたくさんの人材が輩出したことを知って、気持ちの高鳴りを覚えた。若くして病死する者も少なくない時代に、学びに邁進した若者達を支え、自身は病弱のこともあって、ほとんど九州を出ることのなかった廣瀬淡窓という人の使命感を思った。

こういう人物に会えた旅は、なかなかいい経験だった。出発前に想像もしなかった人や物に会い、そこから影響を貰う。これからは、生きていけば、面白いことがあるだろうと思わせてくれた旅になった。

(2012/5/25)

## 1990年9月

9/5 WED 京都府総合教育センター・教育相談中級講座に話しに行った。3年目になるが、こういう講座の持ち方で、なにが達成できるかなあと思う。能力開発には非常に関心があるから、単なる頼まれ講師になりきれない

同じ京都府組織に属するというので、一度引き受けると、何度も依頼された。講師料も要らないし、業務時間内でも頼みやすいというので、依頼は繰り返された。受講生は府内各校に勤務する教師。時間帯は受講者も執務時間枠内だから多数集まる。

私が話すのだから、それなりに面白く聞いてくれてもいる。しかし、いかほどの効果、成果があったのだろう。「受講生が寝てしまうような講義ではなく…」とか期待されていたのかもしれないが、寝ないで楽しんで貰えるって、互助会の演芸会か？

教員のメンタルヘルスの取り組みだと位置づければ、それなりの意味は見いだせたかとも思うが、結局学校の抱えた課題への支えにはなれなかつたろう。

この経験があって、地域で教員のための家族理解勉強会を有志と継続開催するようになった。三カ所（草津市、茨木市、門真市）で開始し始めて十数年。今も続いているのは草津市だが、皆、熱心な人たちだ。

大雑把な教師批判は、世の中批判の放言と同じで意味はない。若手教員育成に力のない管理職がまだまだ居座っているのが惜しい。たくさんの学校長に会ってきたが、他業種の支店長や中小企業社長と比較して、管理者としての力不足な人が多いのはなぜ

かなあ。個々人の問題ではない課題があるに違いない。

9/7-8 FRI-SAT 施設中堅職員研修の二回目。川崎君をファシリテーターに「ベーシック・エンカウンター・グループ」を実施。変則的だが、僕は観察スタッフになった。

第一セッション90分間、完全に11人が沈黙を買ったのに驚く。後で、「こんな沈黙、生まれて初めての経験だ」と何人かの口から出ていた。

グループとして、つもりをしていたようなことが起こったとはいえないが、何か違った経験をした感じはあった。

一時期、エンカウンターグループが面白くて、度々出かけた。きっかけは、PCA（パーソン センタード アプローチ）1977合宿。日本精神技術研修所が主催して伊香保温泉で三泊四日実施したものに、遠路はるばる私が参加したことに始まる。（この時が、後々、いろんな繋がりを持つことになった佐治守夫さん、平木典子さん、内田純平さんらと初対面である）

それにしても90分の沈黙とは、相当な警戒心だ。

9/9 SUN 一時保護所に中三の女子が来ている。精神病の母と、暴力的な兄から逃れて、施設に行かせてくれとっている。しばらくここに居ることになる。そんなわけで、夜は宿直勤務。男の人と話せないという子だった。

こんな事情の女の子でも、夜勤体勢は男性職員一名だ。22年前の京都府京都児童相談所の一時保護所の静けさは感じてもらえるだろう。

今、日本中、どこを探しても、こんな空

気の一時保護所はないだろう。ほんの20年ほどですっかり変わってしまった。あと10年経ったら、その時には何を騒いでいるのだろう。それとも児童相談所は、すっかり寂れてしまっているのだろうか？

今だけを、声高に騒ぐものではない。長い歴史を振り返れ、ほんの数年前も振り返れ、そして未来を見ろ！である。

9/11 TUE 他の行事の関係で、午前中・受理判定処遇会議。午後、京都市から依頼されて、民生児童委員研修会で話す。会場がいつも労演で芝居を観る京都会館第二ホール。キャパのでかいのと、照明の熱いのと、音響にプロがいることを感じる。

舞台の袖で出番を待っている気持ちは、昔、学芸会の時に感じた気持ちと似ていた。あの時の方がドキドキしたけど。

職場に戻って個別面接。相互なぐりがき法がとても面白い。

いろんな会場で講演をしてきた。基本的にそこには何の思い出もない。あのステージで一度はやりたいと、歌手がカーネギーホールを思うような舞台は、講演にはない。

この研修会は当時京都市職員だった日高正宏さんに「ゲシュタルトセラピー」のワークショップを、施設中堅職員研修講師として依頼したことに関わっている。京都市当局から私の講演とのパーティーでなら市職員を貸し出すと言われたのだ。変なことを言うなぁと思った。

講演に関して振り返ってみると、最高でキャパシティ2000人くらいのホールで話したことがあるが、動員された人たちがざわついてきた記憶だけだ。むしろ少人数だった会場が記憶に残っている。

阪神・淡路大震災直後の豊中・庄内公民館での子育て講座シリーズ。シリーズ最終回として依頼されていたのが、震災直後の土曜日だった。予定通りやってしまいますと言われて出向いた。参加者2名。担当職員4名。そして私という結果だった。

9/13 THU 夏バテが来ている。特に気のすまないことをしようとすると、てきめんに体に出る。

心理判定員会議の助言者を頼まれていて出かけていった。畳に座っているのがしんどかった。夜は児相研セミナーの事務局会議で集まってもらったのだが、引き続き不調だった。帰宅して、何も食べずに寝た。夜中にやっと腹がへってきた。

体力だけではなかった記憶がある。自分のしてきた経過を、改変する目論見が進行していた。

なにごととも時と共に変化してゆくことを



否定はできない。しかし、・・・とってしまう我がある。変えるなら進歩を！と押しつけてしまう。変化が必ずしも前進とは限らない。そして前進だけが良いとも言えない。

分かっているが、そう思いきれない。だから後輩のすることに批判的な目がのぞいてしまう。そして、結果がたいしたことにならないと、それに落ち込む。

何もかも自分が仕切ろうなんて思うな。ずっと続けられるわけじゃなかろう・・・そう思っているのだが、やはり。

時代を振り返ると、おこなった事だけでなく、おこなえなかった事の記憶もなくなっている。

9/14 FRI みんなバタバタ出張していたりするので、バックスタッフなしで家族面接をした。4回目のこの母子家族は、当初の予想を裏切ってキチンと来続けている。あまりにも違う兄弟。出来のよくない弟に肩入れする母親。それを兄は黙って認めている。そこで今日は兄を主役の面接にした。

夜は久しぶりの編集者講座。筑摩書房の松田哲夫さん。氏の小学校時代、図画の先生が画家の安野光雅さんだったという経験を持つ同世代人。

先週欠席していたので、村松友視さん講義のテープを借りた。歩きながら聞いたが、とても面白かった。

家裁の審判で児相送致になったケースだった。裁判所の威光を使って、継続的に面接に来なければならないと思いこませた。

ルーズなところのある母親だから、ぬるいことを伝えたらグズグズになるのは見えていた。

継続的に出会う内に、とても特徴的な選択行動パターンを発見。このことは「不登校の解法」(愚弟賢兄)文春新書に詳しく書いた。

そして私は、自分には置き換えられない行動選択をする人の存在を知った。それは誤りではなく、私との違いだった。だから、私が正しいと思う未来像を、押しつけることは出来ないことだけが分かった。

母親は事件を繰り返す弟に肩入れし、つ

るんでいた。理解しやすい好青年の長男はこの一家では孤独だった。家族ってこういう事があるのだ・・・と驚きを持って見ていた。

夜の編集者講座。今考えても、よくこの時、思い切って参加し続けたなあと思う。多くはない受講者のほとんどが、関連企業の人だった。会社から業務として受けるよう言われて、来ているようだった。京都なんてローカル都市ではフリーランスのライターやエディターで食べていくのは大変だから、受講料の高額な講座に参加など出来なかったのだろう。私はそんな中の門外漢の感じで教室にいた。

9/15 SAT 久しぶりに家にいた。一日かかって「こども旅」の原稿を描いた。雨も降っていたし、敬老の日ということもあって、大津の古い鰻料理屋「かねよ」の出前を頼んで、母と一緒に飯を食った。元気な親父は友人の一周忌に行ってその後、麻雀。長男はクラスの友達のところへ、次男も友達と雨降りだから体育館で遊ぶと言って出かけていて帰宅は遅い。

22年前、こんな風に過ごしていたのか・・・と思い出すと懐かしいような、不思議なような、こんな時代があったのだ。

あの時、今の自分を想像することなど出来なかった。20年余りで、こんなに変化してしまうのか。そりゃ、42歳の人生と65歳の人生では、決定的に違う。誰にも起きることなのに、歳を取るって不思議なことだ。

9/16 SUN 昼過ぎまで寝ていて、その後職場に出かけた。先週から一時保護所に来ている子があるので、宿直のローテーションを組んでいるが、平日の夜にい

ろいろ仕事を入れるもので、日曜日しか泊まれなくなる。先週に続いて日曜日の夕方出勤。

この頃から既に、自分の家族のことは、妻に任せっきりだったことにも気づく。三人の子育てと、私の両親との途中同居。本当に良くやってくれていたんだなあと、今になって思う。

そして、これが相当無理をしていたのもあることが判明し、再度別居暮らしの選択に至るのは、まだ少し先のことである。そして父が亡くなったのを機に、再び同居暮らししたのだ。

9/19 職場周辺にも不穏な空気が渦巻いている。ただならぬ緊張がそこかしこにちらついている。半端じゃない台風が接近している。面接もキャンセルして、早々に引き上げた。風が夕方から本格的になってきた。ゴーゴーいう音に、夜中息子達と玄関を出てみたら、思わず大歓声をあげるほどの嵐だった。「半端やないなあー」とキャーキャー騒いでいたら、ばあちゃんに「ケガでもしたらどおすんの！」と親子で叱られてしまった。

あれから22年、祖父母は他界し、長男、次男は結婚、それぞれに一人ずつ子どもも生まれ、共に関東で暮らしている。末娘も東京に出て行って十二年。今では私たち夫婦二人で、かつて七人が住んでいた家に暮らしている。

これが家族というものだ。そしていつか、我々も世代交代してゆく。個人的には不思議な気がするが、客観的には、実に当たり前のことだ。

ほんの二十年前、私は今の暮らしを想像することが出来なかった。だから、今では

使い勝手の悪い、だだっ広い家を建てた。当然、先の十年後も想像することが出来ない。人はそういうものなのだろう。

9/21 昼休み、組合の学習会があった。支給された弁当を食いながら、給与の話を聞いた。こういう受け身の楽しさは、自主独立の人にはないだろうなあ。夕方家族面接を一つしてから、編集者講座。マガジンハウスKKの甘糟章氏。

夜中にまんが新聞の時事物原稿をFAX送信。どう考えても不思議で便利な機械だ。

FAXが便利なものだなあと感じる対象だった時代。オフィスにはあっても、家庭にある人は少なかった。マンガの原稿送信も可能な精度の高いFAXはありがたかった。ごくわずかな間である。

この後、PCが急速に普及してゆくことになり、出来ることの変化が、人々の発想そのものを変えていった。こんな渦中を、一つ一つ記憶して歳を重ねてこられたのは、幸運な団塊ジェネレーションである。

9/23 第九回心理臨床学会が始まった。川畑君が割に地味なテーマで発表をするので、参加者が少ないと辛いなあと言っていたこともあって出席した。ところがなんと、これまでの我々仲間内では最高の参加者数だった。レジュメが足りなくて慌てて追加してもらったりして、よかったよかった。それに比べて午後に出た特別テーマの内一つは、箸にも棒にもかからない無様なものだった。

夜は自主シンポジウムのコメントを依頼されていた。しかし自分がつもりして用意したものが全体と大幅にズレていて、気持ちがめげてしまった。

児童相談所をはじめ、臨床現場で働く人

たちが活発に学会発表するようになった先鞭はつけたと思っている。今では考えられないかも知れないが、スタート時期の心理臨床学会では、本当に現場からの発表が少なかった。

シンポのコメント内容はおぼろげだが、状況は記憶している。期待されているものを外さず、それ風なことを言うのが苦手だ。私の関心の持ち方が、皆さんの関心事ではないことがあるのは承知だ。しかしそれは、如何ともしがたいことなので、合わせるのは断念している。

人にはそれぞれ、思惑や魂胆があって、それをいけないとは思わない。ただ、他人の思惑に一枚噛まされるのは嫌だ。私は誰かの道具ではない。そういう気持ちがかんたん強くなっている気がする。これも老化現象の一つなのだろうが、それで良いと思ってしまう。

他の人の気持ちも尊重はしようと思うが、ご機嫌取りばかりもしてられないなんて、意地悪かもしれないことも思っている。

9/24 午後に参加した特別テーマ「家族への援助における工夫・個人療法と家族療法のメタストラクチャー」の発表はそれぞれに面白かった。

しかしこのごろの僕は以前のようにその会場で、質問や発言が出来なくなっている。要約して、ポイントを絞って話すのは捨てざるものが多すぎるようで辛いのだ。発表者も同じ思いで答えているのだろうと考えると話せなくなる。

夜の懇親会は例によって、物凄い数の出席者で誰が居るのやら居ないのやら。その後14人ばかりで六本木へくりだし二時半過ぎまで、下戸の僕は一生行かな

いだろう所へも付き合った。

ディベート文化をもてはやすようになって久しい。しかし私は、あれが面白くない。質疑応答が嫌になったのは、「良いご質問ですね。有り難うございます」とどこかで返されて以来だ。



「なんだ、この空々しいテーブルマナーのようなやりとりは！」と思ってしまった。

形式が主導する文化の中で、内容は確実に浅くなった。そして物知り、データ重視の百科事典人間が論証根拠を持って話すのが、賢い技になった。

結果の出ているものを集めて、整理して何か言うのは編集者だ。その勉強もしたから分かるが、彼等はクリエイターではない。

もう一からの発明なんてない！なんて言いくさに簡単に同意してしまわないのが大切だ。そんなことは分かっている。だからこそ、産みの苦しみがある。チョッチョと組み替えて、何かを言うような人ばかりになることには用心がいる。

9/26 久しぶりに職場に出た。二十日以上、一時保護所にいた少女の行き先を会議で決めた。言葉に表しがたい質の貧しさや、育ててもらえなかった人間的なも

のから、自分自身を守れるのは鈍感さしかないのかもしれないと思ったりさせられた子だった。

午後、府立城南高校(アジア大会女子重量挙げで銀メダルの子の学校だって)校内職員研修会で話をした。

とんぼがえりして彼女の最後の夜の宿直をした。一人で、こんなに長く居たのにほとんど男の職員には話さない子だった。面白いことを言ってやると、太めの工藤静香のような笑顔で弱々しく笑った。

太めの工藤静香は太めのキムタクと出会えただろうか？ 繰り返し、様々な事情を抱えた子達と出会って別れた。

あの時の年齢に22年を加算すると、今の彼等の年齢である。どこでどうしているだろう。おそらく、皆何とかやっているというのが正解だ。人は皆、何とかなるものだ。騒ぎすぎるのは、関係者の臆病な自己保身ゆえだ。

私は来談者に向かって出来ることをする。出来ないことは出来ない。それで仕方ないと思っている。自分の不安を、他者を動員して膨張させるような事はしない。

9/27-28 昨日泊まって、今日はまた一泊の福祉司会議だ。この一週間、家で寝たのが一日。全くなんてこった。この会議もそろそろ転換しかけている。

終了後、児相に戻ってセミナーの案内状の発送業務を福知山・宇治・京都各児相の人達とした。よく動いてくれるみんなの中で、嬉しく見ている幸せ。

この頃も今も、していることにあまり変わりがないことに驚く。人はなかなか変化しないようだ。

まあ、良いと思ったことを繰り返してい

るのだから、それで納得ではあるが。歳を取ったら、生き方が変わるというのは誤解の期待のようだ。今だめなものはずっとだめだということらしい。

9/29-30 泊まり明けの週末。昼頃まで寝ていた。何だかバタバタして準備ができていなかった来週のぼむ展のチェックが篠原社長からあった。「まんが新聞」が12月で廃刊になるとショッキングなニュースもいっしょに。これではいかんと思いき直して、土曜の午後から日曜にかけて、3点仕上げで宅急便で送る段取りをした。

やりたいことは皆、させて貰って生きていた。それは今も変わらないのかと思う。そうすることで届いたものも少なくない。

家族心理臨床の渦中において、マンガ家としての活動をし、講演や、講座を引き受け、時に出向いて受講する。

今と何も変わらない二十二年前である。



(写真は2011年春、イギリス視察に行った時のもので、本文とは関係ありません)

---

# 学校臨床の新展開

—⑨消えた子どもたちはどこへ—

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

---

## 学校に来ない子どもたちの背景

不登校のなかには、さまざまなケースがあり、背景に何らかの児童虐待が疑われるケースがあることは、これまでも何度か述べさせていただきました。こういうことをいうと「不登校＝児童虐待」ととらえる方もおられるかもしれませんが、冒頭にも述べたとおり、「さまざまな理由」があります。そして、そのなかに児童虐待が疑われるケースもあるのです。なかには、児童虐待の疑いがあり、学校がそのことを保護者に指摘した結果、保護者が子どもを登校させなくなり、最終的には、子どもが死亡するという事件（2009年：大阪西淀川小4女児事件、2010年：東京江戸川小1男児事件など）もありました。そのため2010年度からは、文部科学省と厚生労働省が連携し、「要保護児童対策地域協議会」で虐待ケースとして扱われる保育所、幼稚園、小中学校、

高校に在籍する子どもたちについて、毎月1回（努力義務）、学校から福祉機関（市町村児童福祉担当部局、児童相談所）へ欠席日数の報告がなされています。筆者が相談員としてかかわる学校へも月に1回市町村から状況調査が行われています。しかし、あくまでも「要保護児童対策地域協議会」で取り扱われているケースに限られています。

## 文科省の調査では

今年4月に文部科学省（2011年5月1日現在の学校基本調査）は、日本国籍を持ち市町村に住民登録され学籍があるにもかかわらず、居所不明で登校しない小中学が全国に1,191人いると発表しました。このニュースは、大阪府内で所在不明になった9歳男児の件と合わせて大きく報じられ、都道府県ごとに1年以上行

方不明の小学生の数がリストアップされました(朝日新聞 2012年4月20日付 朝刊記事)。

## 児童福祉施設などへの入所では

かつて、筆者は児童養護施設に勤めていたとき、保護者からの委任を受け、住民票の異動についての手続きを行っていたことがあります。

家庭を離れ居住型の児童福祉施設などへ子どもが入所する際には、保護者の同意に基づく施設入所の場合には、子どものみを世帯分離し、施設のある所在地に住民票を移します。そうすることによって、子どもたちは正式に施設所在地の学校へ籍が移ります。ところが、施設入所の場合でも、何らかの理由により一時保護委託の長期化や、児童福祉法第28条(親の意に反する入所)に基づく施設入所のケースなどについては、子どもを守る観点から住民票を異動させずに施設入所の手続きを取り、その子どもが義務教育年齢の場合、児童相談所や施設側が教育委員会へ願い出て地域の学校への通学を認めってもらうことができました。

## 子どもたちはどこへ

家庭から児童福祉施設への入所だけではなく、DV ケースなどについて家庭から母子で民間シェルターを利用する場合や

独自に避難する場合などにもこのようなことは生じるため、今回の文科省の調査のなかにも居所不明であっても、DV などによって緊急避難的に住民票を移さずに居所を移し、新たな地で保護者が教育委員会に願い出て、その地域の学校へ通学させるケースもあるのではないかと推測します。しかし、そのようなケースばかりではなく、なかには、借金から逃れるために親子で車上生活をするケース、あるいは、宗教団体の施設内で生活し、学校へは全く来ないということもあるかもしれません。オウム真理教事件で、児童相談所が子どもたちを一時保護した様子は今も目に焼き付いて離れません。

## 外国籍の子どもたちは

さて、今回の調査は日本国籍をもつ子どもたちへの調査でしたが、現在、日本には日本国籍を持たない外国人の子どもたちも少なくありません。そもそも、日本国憲法は、日本国籍を有する保護者に対して、その子どもに普通教育を受けさせる義務を規定していますが、外国人に対しての義務規定はないと解釈されています。そのため、国際人権規約に基づき、告知し、それに対して希望があれば、日本国籍を持つ子どもたちに準じたサービスの提供を行っています。もとより外国人には「住民票」というものがなく、「外国人登録法」による居住地の登録を行い、当該市町村教育委員会が、その登録内容に基づき、外国人の保護者に対して就学

案内を行い、外国籍の子どもが公立の小学校や中学校等への入学を希望する場合には、市町村の教育委員会が入学すべき学校を指定し、当該学校に入学させることとなっています。

通常、「住民票」は転出、転入という手続きが必要ですが、外国人の場合は、居住する先の市町村への登録という形しかとっていません。

文部科学省では、2005年度から2006年度にかけて1県11市を対象に外国籍の子どもたちの不就学についての調査を行っています。調査数以上に、深刻であると思われま。外国籍の子どもたちは、これまで、居住地の異動などの際、継続した行政サービスを受けにくい状況であり、就学に関しても転居を機に不就学になるケースが相当数に上ると思われま。  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/012.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/012.htm))

## 外国人も住民票を

このようなことから、今年7月より、「住民基本台帳法の一部を改正する法律」が施行され、外国人にも「住民票」が作成されるようになります。しかし、制度ができて行政は基本的に申請主義ですので、本人の申し出がない限り各種のサービスは受けられません。筆者は、ある外国人の行政手続きのサポートのために、役所に同行した際に感じたのですが、言葉が通じない、読めない、書けない、理解できないなかでは、「ややこしいから、

もういい」という気持ちになったり、「とても疲れる」ということを痛感しました。

## 子どもたちの立場で

さて、日本国籍のあるなしにかかわらず、子どもたちは、いつも親の事情や社会の制度などによって、安定した環境を奪われやすい立場にあります。学校という場は、近年さまざまに批評を受けることがあります。人の成長にとってはきわめて大きな役割を果たしている場ではないでしょうか。学力をつけることはもとより、育ちあい、気づきあい、支えあう場でもあります。子どもたちの安定した環境をサポートするために、心理的なサポートとともに、福祉的なサポートがますます求められるのではないのでしょうか。

## -2. 学びの森の風景

# 学びの森の 住人たち (4)

学校でもない  
学習塾でもない、  
<森>という  
学びの世界が  
投げかけるもの

北村真也

(アウラ 学びの森)

## 4. 複数のパースペクティブ

パースペクティブ (perspective) とは、「視界」のことです。私たちはみんな自分自身のパースペクティブを通してでしか、物事を認知することができないのです。そういう意味では、私たちの認知の世界に完全な客観性を担保することはできません。私たちは、あらゆる物事を主観的にしか捉えられないからです。

このことに気づいていることは、とても大事なことです。私たちが「正しい」「間違っている」とか、「うまくいっている」「うまくいっていない」とかという判断も、実はそれぞれのパースペクティブを前提としているわけですが、多くの場合、その前提があることに気が付きません。

教育の世界においてもそれは同じことが言えます。私たちの通ってきた学校は、近代教育という大きなシステムの上に存在しています。そして近代教育は、ある理想のモデルを前提として、そこに少しでも合理的に到達できることを考慮したシステムと考えることができます。この場合の理想のモデルとは、すなわち私たちの国を強力にし、豊かにすることのできる国民像であったことは言うまでもありません。明治の初期、いわゆる富国強兵という大きな国の意図の下で、私たちの国の教育の近代化は推し進められ、そこに理想の国民をモデルとするパースペクティブがすでに作られていたのです。

その後、敗戦によって軍事的な要素は排除されましたが、戦後は欧米の近代的な生活スタイルを一つのモデルとした、やはり

「理想」がそこにあり、その実現に向けた社会のシステム化が推し進められることになります。もちろん、そこには年々経済が発展していくことが、大きな前提となっていたわけです。

ところが 80 年代後半頃から、この近代化路線にある揺らぎが生じ始めます。それは消費化と情報化、そしてそれに伴うグローバル化へのうねりでした。

60 年代に始まり 70 年代に本格化する消費社会への流れは、私たちの生活そのものを物質的に豊かなものへと転換させてくれました（大阪万博は、その一つの大きな象徴でもありました）。そしてやがて私たちの社会は「一億総中流」とさえ呼ばれるようになり、劣悪な貧困や大きな格差のない安定した社会へと成熟していったのです。

しかし 80 年代後半から 90 年代初頭に向かう中で、私たちは「個」としての豊かさを追い求めるあまり、「地域」や「社会」のために何かをしていこうという動機を次第に失っていきました。つまり成熟期に入った社会は、消費化が個性化を促し、その個性化が新たな消費化を推進させるといった循環構造を作り出すことで、内需を拡大させ、経済的な成長を模索するようになったのです。私たちの様々な欲求が、消費活動に置き換えられていく時代。これがまさにバブルへと向かう私たちの社会であったように思います。

個性化への傾倒は、教育の世界においても顕著なものとして現れ始めました。「個性化教育」「ゆとり教育」などといったコトバが議論的になっていったのもちょうどこの頃のことでした。しかし、社会はやが

てバブルの崩壊へと突き進んでいきます。

バブル崩壊以降、私たちは成長を前提としたパースペクティブを放棄せざるを得なくなりました。しかし、その成長を前提として成立してきた様々な領域の社会システムは、そう簡単に転換できるものではありませんでした。ここに近代社会のシステムとポスト近代へと移行してしまった私たちの生活世界との乖離が生じ、そのギャップこそが、様々な社会問題を形作っていくという大きな構造へとつながっていくわけです。

そして 90 年代後半からの情報化の波は、個人と情報とを直接的につなぎました。それまでは、情報の伝達は人的な関係をその前提としてきましたから、いい情報を得たければ、いい人脈が必要だったし、さらにはいい人間関係が不可欠でした。ところが今では、インターネット環境さえあれば、誰でも、そしてどんな端末であっても私たちは様々な情報をたった一人で手に入れられるわけです。さらにそれらの情報には、国境なんかありません。私たちは、地球の裏側に生活する人たちの日常さえも、タイムリーに垣間見ることができるのです。

これまで見てきたように、私たちの学校教育を支える近代教育の前提となっていた理想のモデルが今となっては、かなり形骸化してしまいました。あるいは、唯一の理想というものが意味を持たなくなってきたといってもいいかもしれません。そこには様々な理想があってもいいわけですし、その理想のモデルがどんどん更新されていくようなシステムがあってもいいわけです。

そんな社会変化の背景を前提としながら、

アウラ学びの森は誕生しました。だからここには、絶えず複数のパースペクティブがあって、アウラに集う子どもたちや教師たち、親たちを様々な角度から見続けているのかもしれませんが。そして、それは平面的な視野の広がりにとどまることなく、立体的な視野を構成するのかもしれませんが。

以下に紹介するいくつかのエピソードは、アウラの森の日常の中で繰り広げられる風景です。そこには、階層的に存在するパースペクティブがあり、しかもそれらが並走していく様子が浮かび上がっていくのです。

### スタッフとの対話の中で

アウラには現在、私の他に3名の常勤講師と6名の非常勤講師が子どもたちの指導にあっています。6名の非常勤講師の内訳としては、2名の社会人講師と3名の学生の教務補助から構成されています。そして9名の講師の中には、私の元教え子たちも含まれています。そういった背景から、私とスタッフとの間にもある種の 徒弟的な関係 が見られるのかもしれませんが。私たちは生徒たちが帰った後、よく教室で今日の授業の様子について話し合いの場を持っています。

「今日の状況についてどう思う？」

「少し騒がしかったように思います」

私の問いかけに、K先生が答えます。

「生徒の集中度が低かったので、中には席を立ってウロウロする子もいました」

今度は、T先生が答えます。

「確かに、今日はいつもと違って教室の磁場が乱れていたように思う。私の視点は、個々の生徒に向けられているのではなく、全体の

磁場の動きに向けられている。それが乱れていたから、今日は問題があったのかもしれない」

「...」

私の話にも、二人とも今一つピンとこなかったようです。私はさらに話を続けました。

「磁場が乱れていったことの最大の原因は、キミたちが個々の生徒に視点が向きすぎて、全体の場に対する視点が失われていたことだと思う。例えば、K先生は〇〇さんに大きな声で数学を説明していたでしょう。すると、それに共鳴するかのように生徒たちも話し始め、全体に騒がしい磁場が現れていく。そんな中で、T先生も生徒に説明をしていたが、全体が騒がしいので、もっと大きな声で説明しないといけなくなり、そのやりとりが、また全体に伝わっていく。ここにある種の循環が生じ、その結果として磁場の

拡散が生じたわけ」

「全然、気がつかなかった...」

今度は二人とも、腑に落ちたようです。教室の磁場 のような目に見えないものを問題提起する時は、具体的な場面が必要です。彼らは、実際の場面を振り返りながら、その抽象的な概念を理解するのかもしれませんが。

「K先生もT先生も、目の前の生徒を指導することにだけ自分の意識が集まっていたので、全体の場に意識が向かなかった。自分の言動が常に場に対してどのような影響を与えるのかということに無自覚であった。キミたちとそれぞれの生徒たちとのやりとりも、常に場に対して開かれていることをわすれてはいけいない。それは連動しているんだ。だから、教師は、常に目の前の生徒を見ながらも、場の動きを感じ取らないといけいないんだ」

磁場という目に見えないものをどう扱うのかということ、そして自分たち自身もまたその磁場を構成している一部であるということ、いかに自分たちの視点が自分の目の前にしか開かれていないかということ、目の前を見ながらも、全体へのまなざしを持ち続けることの大切さを彼らは考え始めたようです。

次の週のアウラの教室の磁場はすっかり変わっていました。すっかり落ち着きを見せており、生徒たちの集中も深いものになっていました。あきらかに、K先生やT先生のかかわり方が変わっていました。もちろん生徒たちは、私が彼らに授業終了後に話した内容、いや話したことすら知りません。しかし、彼らはその変化をどこかで感じ取っていたのでしょう。だから、この変化は教室の磁場の変化として現れるのです。

このようにアウラにおいては、私 - 講師の間には 徒弟的な関係 が存在しているのですが、同様に、講師 - 生徒の関係にも同じような 徒弟的な関係 が存在しています。このことは、それぞれの講師が私から何かを学ぶ姿を通して、生徒が学び方を学ぶことを可能なものとさせます。

私たちが意識している 徒弟的な関係 は、伝統的な徒弟制とは少し性質の違った点があります。それは、外在的な権威が裏づけされていない点です。私 - 講師 - 生徒は、共にアウラという共同体の 住人 であり、一緒にこの共同体を作り上げ、それを維持するという役割を担っています。そして共に自律的に何かを追求しそこから何かを学んでいる同士であるという認識を持っているのです。したがって、私たちの意識する 徒弟的な関係 の中における権威の存在は、その関係の中から内面的に生まれたものであり、私たち

の存在が固定的な権威で維持されているのではないのです。

別の日今度は、小学生の国語を担当している先生と話をしました。小学生の国語の授業では、めいめいが自由読書をしてその内容をみんなに発表し、その内容を元に講師がファシリテーターとなってディスカッションを展開していきます。今日はC先生が始めてこの場を担当することになりました。そして授業終了後に、私とシェアリングの場を持ったのです。

「今日の授業はどうでしたか？」

「うーん、生徒の意見をなかなか展開させることができなくて・・・」

C先生は、うまくディスカッションを進行できなかったことを反省しているようです。

「そうか、どうしてうまく展開できなかったんだろう？」

「・・・」

C先生は、考え込んでしまいました。

「どうしてだと思う？」

「...いや...わからないです」

それから、しばらくして、私はC先生を呼んで話し始めました。

「ある考えを展開するとは、その考えを違った角度から捉えるということなんだ。A = Bではなく、Aということを中心に、そこから立体的な世界を作り出すことだと思う。例えばキミは以前、スチューデント・アパシーを卒論のテーマにするようなことを言ったが、スチューデント・アパシーとは〇〇であると答えたところで、それは機能的な知、すなわち記号でしかない、ただのインフォメーションにしか過ぎない。大切なことは、それを臨

床心理学、発達理論、社会学、文化人類学、教育学・・・様々な角度から捉え、かつその中に自分自身という存在を位置づけていくことで3次元の世界が構成されていくということなんだ。そうすることで、スチューデント・アパシーがリアリティーとなり、目の前に現れてくるようになる。この感覚が、キミに不足しているんだと思う」

「塾長、メモとってきていいですか？」

「いいよ」

「C先生は、真剣にメモを取り始めました。」

「この小学生のディスカッションは、ティーチングプランがない。つまり予定調和的ではないということです。生徒から、どんな発言があるかわからない。その発言を元に更なる質問を展開させなければならぬ。しかも、彼らを「うーん」とうならせながらも、自分の考えの展開に感動するようなものを・・・。そのためにも、さまざまな角度が必要なんだ」

「どうすればいいですか？」

「まずキミの卒論に向きあう姿勢を見直したらどうだ。目の前にあるコトから始めるしかないと思う。」

そのコトにまずこだわり、単なる記号からリアリティーを描いていくんだ。そのためには複数の視点がどうしても必要になってくる。だから違った角度からの知見を調べるわけ。このことがとても大切になってくる。そしてそのあるコトについてリアルな世界が描けるようになれば、そのやり方が見えてくる。

それをこの小学生の授業に活用してみてもどうだろうか？」

私のC先生に対するコメントは、私の大学生活とも密接につながっています。私が大学で吸収したことは、私自身の意識の中で編集され、あるいは経験化されて私の生活の中で

ごく当たり前のように表現され、それは講師を媒介としながらも生徒たちへと伝わっていくのです。このような多層的なコミュニケーションの形は、アウラという実践共同体の中においても日常的に展開されているのです。

ここに取り上げたエピソードには、階層的なパースペクティブが存在しています。つまりアウラの子どもたち、スタッフである教師たち、そして私自身です。さらには、教師たちは、子どもたちに対しての教師であると同時に、私に対してのスタッフであり、また学習者でもあり、私自身も子どもたちに対する教師であり、スタッフに対する雇用者であり、さらには大学院で研究活動続ける学習者でもあるわけです。たとえば学習者という観点に立てば、私はスタッフにとっても、子どもたちにとっても、学習者としての先輩ということになります。

このように一人の人物が複数の立場（役割）を持つことで、その関係性に幅が生まれます。そしてその幅こそが、実は複数のパースペクティブを構成するきっかけとなっていくように思うのです。

## 複数の視点

中1のK君は、分からない問題があるとすぐに先生の方へ質問に行きます。少しでもつまずくと不安なのでしょう、答えが合っているかどうかさえもいちいち先生に確認をしてもらっています。その日は数学を学習していましたが、いつものようにK君はお気に入りのT先生のとこりに張り付いて、質問をしていました。T先生は、K君にとって何でも質問に答えてくれる  
親切な先生 なのです。私は、そんなK君とT先生とのやりとりをT先生とは違った視点で

眺めていることに気がつきました。

K君は、一見するととてもまじめな模範生のように見えます。言葉遣いも丁寧ですし、ノートを見ても大変きれいな字で書かれています。しかし、彼の学習の様子をよく観察すると、実に巧みに「できない」ことが隠されていることが分かります。例えばそれぞれの単元の最後にやらなければならない小テストは、先に問題集でそれぞれの問題の解法を一つ一つ確認してから取り組んでいますし、テストの最中でも自分がテストをやっていることがわからないように先生に質問をしに行きます。そして何食わぬ顔をして、テストに合格しているのです。

私は、K君が再びT先生の方へ質問に行こうとして席を立ちかけた時に声をかけました。

「K君、じゃ、今度は僕が質問に答えよう」

K君は、一瞬不意をつかれたような表情を見せましたが、自分の問題集をもって私の席のところへとやってきました。

「何が分からないのかな？」

私がそう尋ねると、K君は

「この問題は自分でできたんですけど、次の問題がわからないんです」

そう答えました。

「じゃあ、自分ができた問題と、できない問題を見比べてみよう。まず、できた問題には3つのヒントが書いてある。行きの速さと、帰りの速さ、そして往復にかかった時間だ。ではできない問題のほうはどうだろう？行きの速さは？」

「時速4Km」

「帰りの速さは？」

「時速5Km」

「じゃ、時間は何時間？」

「…、問題に書いてないです」

「そうだろうか、この人は午前9時に出発して、午後4時に帰っている。ということは何時間かかったんだろう？」

「あっ、そうか、7時間です」

「ということは、君ができなかった問題は、できた問題と同じヒントが与えられていることになる。行きの速さと帰りの速さ、そしてかかった時間、この3つの速さが与えられていたわけだ」

「わかりました。ありがとうございます」

K君はそういって、席を立とうとしました。

「いや、ちょっと待って、僕が問題にしたいのは、どうして君がこの問題をできなかったのかということなんだ。この2つの問題は、全く同じヒントが与えられている問題なんだ。違いといえば、できた問題には、かかった時間が書いてある。できなかった問題は出発した時間と帰った時間が書いてある。だからこの問題を解くには、この時間を引き算しないとイケない。君は、この引き算ができなかったんだろうか？そんなことは、ないはずですよ。こんな引き算は、小2の子どもでもできる。だから君ができないはずがない。ということは、どういうことだろう？」

「問題をちゃんと読んでいませんでした」

K君は、申し訳なさそうな表情で私にそう告げました。

「まず、問題を読むこと、まず自分で考えること、そういうことをしないと、いつまでたっても、自分で問題が解けるようにならない。K君が積極的に質問することは、悪いことではない。けども、先生に依存することは良くない。大切なことは、数学の問題を通して、自分で行うことができるようになることだと僕は思うな」

私は、K君にそう答えました。

私の視点とT先生の視点には、はっきりとした違いがありました。T先生は、常に彼の数学の問題にその視点をおいていました。だから、彼の質問に親切に答えていた(答えを彼に代わって導いていた)のです。一方、私は彼の依存性や、できないことへの怖れにその視点をおいていました。だからできない問題への向きあい方にコミットしていったのです。私が、教科を媒介と考えるのはそのためです。子どもたちの教科への取り組みを見てみると、そこから彼らの生き方が見えてきます。問題をどう見るのかという認知のパターン、その問題に対しておこなわれる行動のパターン、そこには、その子ども自身の捉われのようなものが存在するのです。その捉われに気づき、自らそれを解放していく過程は、学びの持つ重要な本質のひとつだと思います。

多層的なパースペクティブ、それはアウラの森を舞台とした、「子どもたち」-「教師たち」-「私」という徒弟的な人間関係の中に表現されると同時に、一人の人間の中にも表現されていることに気がつきます。私たちは、一人ひとりの子どもたちと向き合いながら、彼らの多層的な側面に触れていくのです。そういう意味から考えると、アウラの森は私塾として子どもたちや親たちとの関係を築いているわけですから、私たちは教科の学習を媒介としているわけです。でも、媒介は媒介にしか過ぎず、私たちはそこから彼らの認知のあり方や、パーソナリティそのものをも視野に入れたかわりを試みているのかもしれない。

### 生活世界の中のコンテクスト

K君には、現在高1になるNちゃんという

姉がいます。実は、このNちゃんもK君と同じような認知のパターンや感情のパターンを持っていました。このNちゃんは、アウラにやって来るや否や、あっという間に成績をあげていった生徒でした。

「先生、テスト前に、これとこれとこれをやろうと思うのですが、もっと他にもやったらいい問題集を教えてください」

Nちゃんは、アウラのライブラリーからとってきた問題集を両手にいっぱい抱えて私の前に現れました。明らかに不安そうな表情が、顔を覗かせます。

「今回のテストに向けては、この問題集だけやろう。それだけでいい。ただしこれを完璧に仕上げてください。Nちゃんを見ると、僕にはNちゃんの不安だけが伝わってくる。Nちゃんは、テスト前いつもしんどいや。不安で胸がつぶされそうになるや。Nちゃんは不安やから、いっぱい問題集をやろうとする。でもやればやるほど、不安になる。これって、堂々巡りや。不安が不安を作り出し、その不安に駆られて行動した結果、また新しい不安がやってくる。これって不安に支配された人生っていうんや。同じ人生を生きるのに、こんな生き方っていやじゃない？その反対にあるのが、希望の人生や。夢や希望に動機付けられて生きる生き方や。僕は、Nちゃんがアウラに来て、自分の生き方そのものを考え直すことができたらいいなあって思ってる。不安におさらばして、そのかわり、希望と対話しながら生きていける術を身につけられたらって思ってるんや」

私がこんなことを話すと、なぜかNちゃんは目に涙をいっぱい浮かべていました。そしてうなずきながら、こういいました。

「わかった。そうします」

Nちゃんは、本当に良く頑張る生徒でした。吹奏楽部の部長と生徒会の役員を学校でもやりながら、勉強も人一倍よくやっていました。しかし、私にはそんな彼女がとても苦しそうに見えたのです。頑張りすぎる彼女の行動の背景には、彼女の大きな不安がありました。不安は、未来に対するマイナスのイメージです。だから彼女はそんな未来を実現させたくないからと日々努力を続けていたのです。

私からのメッセージは、その後彼女を大きく動かすことになりました。彼女は自分の第一志望の高校へと進学し、現在1年間の留学生活を送るため、カナダで生活しています。Nちゃんは、少しずつ希望に導かれた人生を送り始めているのです。

K君とNちゃん、その行動パターンには違いが見られます。K君は、他者への依存が強くあらわれていたのに対して、Nちゃんは異常なまでの頑張りが見られました。しかしその背後には大きな不安が見られます。そしてこの不安は、彼らの母親とも連動していることがわかってきました。それはNちゃんの受験を通して、顕著に現れてきます。お母さんは、Nちゃんの受験を自分の受験のように同一視しながら、その不安を表現していました。だから私は、お母さんに対してもNちゃんと同じメッセージを結果的に投げかけることになったのです。二人まとめて、同じようなコミットメントをおこない、それは二人の連動性からより大きなメッセージへと変容することになりました。だから、受験が終わる頃には、Nちゃんもお母さんも変わっていました。そして同じ年の7月に彼女はカナダへと旅立ち、お母さんは、しばしの子離れを経験することになったのです。

「生徒の学習から彼らの生き方が見えてくる」という表現の中にある彼らの生き方とは、知識理解 - 行動 - 認知 - 感情 と決して分断のできないコンテクストを持った生活世界 のことであり、学習とは、この生活世界 の中にあるコンテクストそのものを絶えず更新していく活動であるように思います。

子どもたちが内在化する多層性、それは個人という単位で完結されているものではありません。「生活世界」というファンクションを通して、家族とつながり、友達とつながり、地域社会とつながっているのです。だから、私たちはその子どもを通して、そこに彼らの豊かな世界をも見出ししていくわけです。

ヒトは決して、単純でモノトーンなシステムではありません。それは、複数のシステムが内在化された生態学的（エコロジカル）なシステムです。それを観察し、複雑に絡み合っている場合は紐解き、ある影響を与えていこうとする場合は、そこに様々な階層を同時に見つめそれらを理解する能力を身につけていく必要があります。そういった能力を、教師たちがいかに身につけていくことができるのか、これがアウラの森における教師たちの学びにつながっているのかもしれない。

### 私のコトバで語ること

高校3年生になるA子は、すでにAO入試で大学を決めています。留学経験がある彼女は、TOEICのスコアが800近くあり、それを武器に私立大学のAO入試にチャレンジし、見事合格を勝ち取りました。A子は大変前向きな高校生で、合格が決まった後も、ア

ウラで学習を続けたいという希望があり、私との話し合いの中で社会学の本と一緒に読むことになりました。私が選んだ本は、宮台真治の『14歳からの社会学』、毎週1章ずつ内容を要約し、コメントをまとめるという課題を私は彼女に課しました。そして、彼女の書いてきたものを元に週1回ディスカッションの機会を設けました。

A子は優秀な生徒です。彼女の書いてきたペーパーからもそのことは容易に察することができました。的確にまとめられた要約、そして自分の意見をその要約と対比させながら書き上げられる力は、彼女の普段からの読書量に支えられているのでしょう。

第1章は『自分と他人』というタイトルの章です。この章を通して宮台は、現代社会の持つ傾向として、個人化が進行することによって、他者の存在が見えなくなり、そのことによって、他者からの承認が得られにくい社会となり、そのことが自分の尊厳を揺るがしていることを述べています。これは、現代社会のもつ人と人との関係性を喪失させるシステムであり、宮台はこのシステムをいくつかの具体例をあげながら説明しています。

A子は、食品偽装事件や通り魔殺人親族殺人などの例を取り上げながら、私たちの共通前提の揺らぎを以下のようにコメントとして取り上げていました。

「現代社会において、食品偽装問題や通り魔殺人、親族内での殺人などといった共通前提を脅かす事件が毎日どこかで起きている。そして身近なことからは、つい数年前まで見ることのできた公園で遊ぶ子どもや家の前の道路で遊ぶ子どもの姿がほとんど見ることが

できなくなった。このようなことから、実際今の若者にとって何を信じてもよいのか、何を頼りにして生きていけばよいのかが分からなくなってきていると私は思う。(略)」

私は、彼女のコメントを読みながら、下線部の表現が気になっていました。『今の若者にとって - (中略) - と私は思う』という部分です。ここでは、今の若者と私は切り離されています。どこか離れた位置にある私が、今の若者を観察している、そんな視点から、彼女の文章が構成されていることに私は違和感を覚えたのです。A子の文章は、その後も理路整然と続いていきます。私を今の若者と切り離し続けながら…。そしてA子はそのことに気がつかない。

「A子ちゃんのコメントの中の今の若者には、A子ちゃん自身が含まれていない。自分自身を傍らに置いて今の若者について書くことは、簡単だと思う。それはいくらでも、コトバを並べて文章のかたちを整えるだけで書けてしまう。そうじゃなくて、今の社会、今の若者としての私という視点でコメントを書いてほしい。そうすると様々な葛藤が生まれるかもしれない。それを言語化してほしいんだ。A子ちゃんの生活、生き様と宮台真治の考えを照らし合わせることで、同意できる点、反発する点に気づいてもらいたい。そうしないと、深みが出てこないし、おもしろくない。ぜひ、それを次回のコメントとして書いてきてください」

私は、A子にそう告げました。

A子の他にも、私という存在をどこか離れたところにおいて、文章を記述しようとする生徒たちは結構います。これはアウラの生徒たちに限ったことではなく、大学生や大

学院生においても同じような傾向が見られるように思います。私 という視点が不明瞭な記述は、それが十分に吟味されたものでない限り、単にコトバを羅列したものになりさがつってしまう危険性を備えており、いとも簡単に私 自身によって切り貼りされたり、文脈を変更されたりするのです。

様々なメディアから多くの情報が発信されている生活世界の中で生きる今の子どもたち、彼らは様々な選択肢があるという自由を持っている反面、常に情報を選択しなければいけないという状況に追いやられています。そしてその選択の判断は、私 である子どもたち自身に委ねられていくのです。いわば情報過多の状況は、相対的に選択力の弱体化を促します。その結果、私 という存在から切り離されたコトバの羅列による記述が増えていくのです。そして私 という存在から切り離された記述は、言い換えると 身体 から切り離された記述であり、それは他者との具体的な関係を伴わない記述です。そこには、生身の人間が繰り広げる臨場感がありません。

子どもたち、あるいは、若者たちの生活世界もこのような社会の中に組み込まれている限り、同じ傾向を持っています。彼らの学びの世界において扱われる多くの情報は、彼らの生活世界と切り離されたところに位置づけられており、断片化された記号と化しています。そして彼らは、それをテストやレポートに向けて機能的に並べ替え、客観的な体裁を整えるのです。彼らにとっては、情報そのものが重要であり、その情報と私 との関係は、ほとんど問題にされることはありません。だから、A子のような記述をする生徒は他にもたくさんいるのです。

私 のコトバで語ることで、それは私

の生活世界を語ることであり、私 の生活世界と周囲に位置するモノ や コト、あるいは他者 との関係をあらためて再構築することです。私 という存在を決して切り離すことなく、その 身体 からの視点で周囲の環境 との関係を模索する時、そこに同化される瞬間が生まれ、私 と環境 との境界がしだいにぼやけていくのです。そして私たちは、その瞬間に新しい学びの世界を垣間見るのかもしれませんが。

発達心理学の浜田寿美男は、書き手自身の思いや考えが決して表現されていかない視点を「神の視点」と呼びました。そこには淡々と事実が列記されていくだけで、書き手がそこに何を感じ、どうコミットし、どんな行動をしていったのかということを読み解くことができない。

若者たちの視点が、神の視点的傾向を持つようになったことは、彼らのネット環境も大きく起因しているように思います。マウスを動かすだけで、緊迫した戦場のライブ映像さえ目にすることができる状況は、まさに「神の視点」そのものかもしれないからだ。

A子に向き合う私は、まさにその部分を指摘しました。「若者としてのA子」を模範生のような彼女の意見の中に登場させてみたかったのです。そうすることで、彼女自身が何かに気づき始める。すべてはそこから始まっていくように思ったのです。

## 生活者としての私の視点

2ヶ月間、宮台真司の「14歳のための社会学」と一緒に読んできたA子は、高校の卒業前にしばらくの間、渡米することになりました

た。大学も決まり、高校の授業も休みに入ったこともあり、卒業式までの間に以前1年間ホームステイしたホストファミリーのところへ滞在するのです。そのような状況を受け、私とのセッションも、打ち切ることになりました。本をすべて読むことはできませんでしたが、私たちは現代社会をどのように捉えるかを 視点 という観点で考えてみることを共有することができました。

A子との最後の授業で、私はこの本を読んだことでA子の中にどのような変化が生じたのかということを探ってみました。すると彼女からこんな答えが返ってきました。

「学校で 宗教倫理 の授業があったんですけど、その時に 私の存在構造と意志的思考をもとに子どもの誕生という場面を分析したエッセイ を扱ったんです。このエッセイでは、胎児は単なる細胞の塊であるという 事実的思考 に基づいた存在だけではなく、一人の人間であるという 意味的思考 に基づく存在としてとらえることの大切さが述べられていました。だから当然、私も胎児を一人の人間としてとらえることは大事なんだと思ったんです。でも、「もし学生の中に妊娠してしまったら、どう考えるだろう」って考えたんです。胎児を墮す選択肢がないなんて言いきれないような気がしたんです。学生の中に母親になる勇気がない。あるいは、自分には実現したい職業があって、出産すればそれをあきらめないといけなくなるかもしれない。あるいは、親はどういう反応を示すんだろう…。そんな考えが同時にいくつも出てきたんです。うまく言えないですけど、模範的な私の意見と、実際の私の意見が、分かれて存在するような感じがしたんです。他の人は、どう考えてるんだろう？模範的な答えではない、生身の人間としての考えはどうなんだろう？

あるいは、先生は、どうなんだろう？、って考えたんです。答えは出ないんですけど、塾長といろいろやりとりしたことで、私、そんな風に考えるようになって気がするんです。今までだったら、ただ模範的な答えを出して、授業が終われば、それまでだったんですけど、まだそのことが引っかって、アメリカの友達にも意見を聞いてみたいと思ったんです。だから、ホストファミリーのところに行くことにしたんです」

A子は、学校でも模範的な生徒でした。だからいつも模範的な答えを導いていたに違いありません。しかし、それは授業中のA子であって、生活者としてのA子の視点は、それとは切り離されたところにありました。だから、授業が終わるとA子は模範生から生活者に戻るのです。先のA子の言動から、彼女自身が模範生としての自分と生活者としての両方の視点があることに気づき始めたことがわかります。そしてそれらを統合しようとしたけれども、それは簡単じゃない。だから彼女は、他者の考えを聞いてみたいと思うようになったのです。この根源的な問題を周りの人間はどう考えているのだろうか？友達はどうか、あるいは先生は、そして外国人は…と、彼女の思いは広がりを見せていきました。そして様々な考えを聞くことで、A子の中に、さらにいくつかの視点が育っていくかもしれません。つまり根源的な問いは、簡単に答えを出せないがゆえに、多くの視点を必要とし、結果として問いの対象となるものをより立体的にとらえることで、理解を深めることにつながるのだと思うのです。

## コトバにならないコトバ

卒業したA子が、お土産を手にしてアウラにやってきました。

「いつアメリカから帰ってきたん？」

「塾長、私アメリカ行かなかったんです。向こうはすごい雪で帰れないかもしれないということだったので、急ぎよ、カンボジアに行ってきたんです」

「えっ、またどうしてカンボジア？」

「『地球の歩き方』って本の中に、海外ボランティア募集の記事があって、それでカンボジアに池を造りに行ったんです」

A子は、そういうとカンボジアで撮ってきた写真を嬉しそうに私に見せては、1枚ずつ説明してくれました。

「ここが子ども支援センター、親を戦争で失った子どもたちの教育をNPOが支援しているんです。みんなすごく勉強してて、この子なんかは、将来、医者になるって言ってました。私たち、日本の子どもと目の輝きが違うっていうか...、みんな大変な経験をしてきたのに、そんなこと感じさせないくらい元気に頑張ってるんです」

「なるほど、カンボジアは大変な内戦があったからなあ...、でも、子どもたちはそんなんや」

「暗い感じは、全然ないんです。それがすごいというか...。今でも地雷がたくさんあって、入れない場所もたくさんあるんです。ほら、この写真、ここは地雷が埋まってるところ。それから、これは川の上で生活している人たち、ここにも上がらせてもらったんです。こんなところで生活していることに、ショックを受けました」

「どんなショック？」

「何か、私とあまりに違いすぎて...」

「大変そうなの？」

「ううん、そんなことはない。みんな明るい...」

A子は地元の人たちの生活に触れて、カルチャーショックを受けていました。でも、そこにとどまらず、自分の生活との比較をはじめ、彼らが大変な生活を送りながらも明るく生きている事実に驚きをもったようです。そして、その明るさがどこから来るのか、私たちは、このままの状態で生きていいのか、様々な思いを巡らせていたようでした。

「実は、このツアーに両親は大反対だったんです。“危ない”っていうイメージがカンボジアにあったんだと思います。だから、このツアーは私のお年玉をためた貯金で行ったんです。でも、行ってよかった。ちょうど、大学に入る前だから、余計よかった気がする」

「どういうこと？」

「学生生活そのものが変わっていく気がするんです」

「それはよかった。じゃあA子ちゃん、今の思いを文章にまとめてみてよ」

「えーっ、難しい。どう書いていいのかわからないです」

「わからないから、それを言語化してみるんや。自分の生の体験、そこで感じた活き活きとした感情を、言語化してみる。コトバにならないものを、コトバにする作業をやってみるんや。英語で“Inter Language”というコトバがある。コトバになる前のコトバ、それを文章にしていく。大事だから、ぜひやってみてよ」

私は、彼女にそう伝えました。

A子と私との関係は、去年の暮れに宮台真司の『14歳のための社会学』と一緒に読んだことをきっかけにして本格的なものになってきました。私は、彼女の書いた本文要約に、彼女自身のパースペクティブがないことを指摘しました。文章の中に彼女の意見は述べら

れているものの、そこには彼女の生活がない。彼女自身の生活の中から紡ぎだされるような意見がなかったのです。すべてが客観的に書かれており、そこに書かれた意見と彼女の生活との間は切り離されており、そこに乖離があったのです。だから、私はそれらを統合することの大切さを話しました。A子自身の語りを育てるために…。そして今回のカンボジア行きは、そのことと無関係ではないように思いました。

「どう表現していいかわからない」とA子自身が話すその部分にこそ、彼女の語りがあるのです。彼女の体験は、それを言語化することによって経験化され、彼女固有の意味付けがされていく。そして、この経験化されたものが、彼女のこれからの具体的な行動を変容させていく。このことは、私の学びのイメージに大変近いものかもしれません。

アウラの森の中の「子どもたち」、「教師たち」、そして「私」。さらに子どもたちの生活世界にかかわる人たち、そしてその環境。それに加えて、それぞれの時間の流れがあるのです。私たちは、子どもたちや親たちとある限定された時間軸の中で出会い、そして別れを経験するのです。アウラの森は、決して「居場所」ではありません。ここは、そこにかかわる人、全員にとっての学びの場であり、変容の場なのです。そしてこの変容は、いつも限定された時間軸の中で生じるわけです。

だから日常の変化とは別に、時間軸に沿った変化の動きがあり、そこには日常を重ねていく中で、うっすらと浮かび上がってくる新しい世界があるわけです。

A子は、今アメリカの大学で学ぶ3回生

です。アウラを去った彼女が再び私の前に現れる日は訪れないかもしれませんが、彼女は今でも、確実に変容を続けていることだと思います。止まることのできない世界、それが学びの世界なのだと思います。

### 水槽の中の熱帯魚

アウラの森には、大小二つの熱帯魚の水槽があります。子どもたちは、よくこの水槽を眺めています。彼らが、そこに何を感じ何を思うのか、それは定かではありませんが、どうゆうわけか多くの子どもたちが水槽を見つめています。

この春から学校へ行けなくなった中3のH君が、アウラに体験にやってきました。校内の学力テストは学年2番、生徒会長までやっていたH君が、学校へ行けなくなるのは、春休みの陸上部の試合の日に休んでしまったことがその引き金になりました。新年度が始まり、生徒会長として様々な場であいさつしなければならぬこともあり、H君は、だんだん学校へ行くのが苦痛になっていったのです。そして2週目には、すっかり学校へは行けなくなりました。そんな彼がアウラを訪ねたのは、1学期がもう終わろうとしている頃でした。少し緊張気味にやってきた彼でしたが、私の問いにときばきと答えていたのが印象的でした。

「学校に行かなくなって初めて見える世界がある」

私は、彼の学習している席の横に座りながら話を切り出しました。

「学校にいる時は、学校が世界になる。テストの点数や、学年の順位、クラブの人間関係、クラスの友達、先生との関係…、それが世界のすべてになる。だから嫌なことがあっ

たら、それはまるで地獄のように思えてしまう。でもよく考えたら、学校なんて限られた世界だってことがわかってくる」

「そうなんですか？」

「私は、そう思う。小学校から中学、高校までは、一つの流れがある。そこでの勉強は、一つの答えに向かう勉強なんや。正しい答えが最初に用意されている。その答えに誰が早く正確にたどり着けるかで、評価が下される。無駄なことを考えれば、その分評価も下がっていく。だから効率よく学ぶことがいいということになって、みんなだんだん意味なんて考えなくなって、丸覚えをするようになってしまう…。その出発点はどこやったか、それは答えが一つであるということ。これが、高校までの学習の特徴なんや。でも、学校を卒業して社会に出ると、答えが一つに決まらないなんてことはよくある。例えば、君にとって幸せな人生って何？、生きがいを感じる仕事って？、どんな商品がこれからヒットする？…、みんなすぐに答えなんか出てこない。少なくとも覚えたら何とかなるようなものじゃない。これは、大学での学びも同じこと。答えを自分で作り出すことが研究なんや。つまり、君たちが高校を卒業した途端、社会には答えが一つじゃないことの方が多いうてことがわかるんや」

「なるほど…」

「でも、学校にいる時は答えが一つであるということが、実は例外的であることに気づかない。学校という世界に生きていれば、学校が世界のすべてになってしまう」

「あっそうか」

「そうなんや。ちょうどここに、熱帯魚がいるでしょ。熱帯魚にとっては、この水槽が世界なんや。すべてなんや。魚たちはこの世界の中でしか生きれない。でも、それを眺めている私たちが、実際にはいる。その世界を管理している存在がいるというわけなんや。

でも魚たちは、水槽の中で生活している限りはそのことに気づかない。そこから出て初めて、自分たちが水槽という限定的な世界の中で生きていたことを知るわけなんや。学校も一緒、そこから出て初めてそれが限定された世界であることがわかってくる」

「はい」

「学校に行けなくなったこと、それをキミはダメなことだと思ってたかもしれない。そしてダメなことだと思えば思うほど、ますます苦しくなり、キミは家から外へ出ることもできなくなってきたのかもしれない。でもよく考えれば、これはキミが今までいた世界を外から眺めることのできるチャンスなんだ。一旦、外の世界から眺めてみた時に、何かに気づくかもしれない」

こうしてH君もまた、アウラに学ぶ学習者の一人になっていきました。大変知的な彼が、ここで何を学び、そしてどう変わっていくのか、私は楽しみです。後日、彼は私にこんなことを言ってきました。

「塾長がこの間、言ってくれた“熱帯魚の話”、あれって、星新一の小説の世界みたいでした」

## メタローグ

メタローグ とは、G.ベイトソンによる造語です。彼は自身の著書『精神の生態学』の中の娘との対話の中で、彼の理論を再現していく。つまり理論と現実の娘との対話が、それぞれ違った層の中で同時に進行していくのです。このような多層性の中で同じ文脈が同時進行していく様を、彼はメタローグ と名付けるのです。

私は、その日もいつものように研修に来て

いたFさんと授業終了後に、今日の感想をシェアリングしていました。このシェアリングは毎時間必ず行っていて、その後彼女は自宅に帰ってから今日あったことを文章化して私にメールで提出してもらおうようにしています。そんな彼女から、今日の分のメールが届きました。以下は、その一部抜粋です。

「塾長とは、「学校」と「就職」についての話をした。日本は画一主義で、学校や就職のような示された一つの道から逸れると、驚くほど社会的評価が低くなる。「みんなと同じようにできないなんて、なんてだめなやつだ。」と。そんな世の中に合わせて生きていくのは機械的であり、没個性的だ。その中にいるときは何の疑問も感じないが、一歩外に出てみると狂っているとさえ感じてしまう。みんな同じ。みんな、価値判断を他人の手に委ねている。もちろんそんな風に流されて一生を終えたくはない。しかし、周りに流されず自分の道を歩むには人と違うことをする勇気が必要だ。そして、周りからどんな目で見られようと揺るがない自己、その自己を支える自信、個性。世間一般というものさしに立ち向かうにはこのようなことが求められる。こういった要素を埋めるにはどうしたよいか、学校という世間から抜け出した生徒たちとともに、オリジナルな生き方をさがそうと思う」

Fさんとは、Y子ちゃんとH君の話をしました。みんなが所属する学校という社会から離れて初めて見えてくる世界がある一方で、一旦ひとりであることを引き受ける勇気が必要になってくることを私たちは彼らの生き方を通して学んでいるような気がしています。こうした彼らが直面する課題を、私もFさんも自分ごととして捉えなおしていくのです。彼女から送られてきた文章には、彼女が彼女に充てた決意のようなものさえ感じ取れます。

ここアウラの森には、子どもたちと教師たちがこんな風に同じテーマに向かうことがよくあります。ただ同じテーマといっても具体的な対象の世界は違うのです。それぞれに違った面にながら、同じテーマに挑んでいくのです。そしてこの背景には、教師が子どもたちの直面する課題を自分ごととして捉えるという学びの過程があるのです。つまりY子ちゃん、H君の階層とそれに向き合う私の階層、そして彼らに向き合うFさんの階層、そしてそれを振り返るFさんの階層、そしてこの原稿を書く私の階層と、いくつもの階層が同じテーマ性を持って重ねられているわけです。そして、そこには絶えずキレイに重ねられていく複数のパースペクティブがあり、ペイトソンの言うメタローグの成立する世界があるのです。

(きたむらしんや 2012/5/20 脱稿)

# 『幼稚園の現場から』

## IX・おやこんぼプロジェクト

原町幼稚園（静岡県沼津市） 園長 鶴谷主一



みなさん、こんにちは！

ぼく、**くまんぼ**って言います。

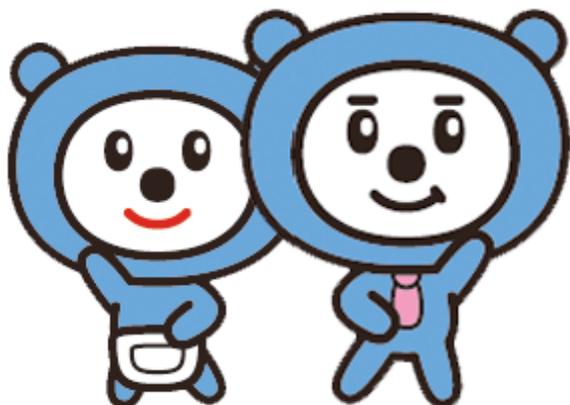
生まれたのは2008年の12月。

家族の絆を強くするって言うと大げさだけど、親子に愉快的な時間を提供しよう！っていう目的で生まれました。

まだ3歳だから、これからおおきくなっていくんだけどね、、今日は皆さんにもちょっとご紹介しちゃうってわけ☆

まずは、ぼくの家族を紹介するね！

**くまんぼママ**と**くまんぼパパ**、3人家族なんだ。



みんな家族がいて、

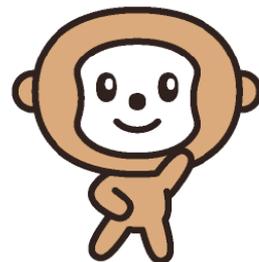
「おやこんぼむら」に住んでいるんだ。

友達も紹介するね！

**さるんぼ**

**ぶたんぼ**

**うさんぼ**



## ■おやこんぼプロジェクト までの道のり

平成 23 年度の沼津市内の幼児（3 歳～5 歳）の割合を見ると、保育園児約 30%、幼稚園児 70%です。さらに 70%の幼稚園児のうち、97%の約 3,500 人の園児は私立に通っています。沼津市は極端に公立幼稚園の少ない地域なのです。

沼津市の私立幼稚園 23 カ園が集まって、「沼津市私立幼稚園協会」を組織しており、主に教員や保護者の研修会などを計画しています。

どの幼稚園も公的補助を得て経営をしている学校法人という性格上、公の教育的活動、啓蒙活動をしていくことは責任として必要なことだと考えています。



そんなこともあって、今から 7 年前の 2005 年には、「早寝早起き運動」に取り組んできました。保育園も含めた全世帯の調査をし、早寝早起きの大切さをアピールしてきました。そこでわかったのは、ほとんどの幼稚園児はきちんと早寝早起きをしていたということで、安心したのですが、一部の生活リズムの悪いお子さんの生活習慣に見られたのが「幼児期からの過度なメディア接触」でした。テレビやビデオを夜遅くまでだらだら観てしまうために朝起きられない。

それでは、と「子どもとメディア問題」に取り組んで、幼児期からの過度なメディア接触の害を伝えていこうと、ノーテレビデーなどの運動に取り組みましたが、どうしても固いイメージで、とっつきにくい活動になり長続きしません。

とくに、普段からこういった運動の輪に加わらない意識の低い家庭への誘導こそ必要で、工夫しなければ

ならないところでした。

時は 2008 年、それまでの国のエンゼルプラン、少子化対策などで、育児支援という名のもとに、子育ての外注がぐんぐん進められていく流れの中、幼稚園という、比較的恵まれた家族環境の中で育まれている子どもたちと接している私たちでさえ、「親子の絆の弱さ」を感じはじめた園長たちした。

なんとかメディア問題と親子の絆の問題をうまくつなげて考えられないか話し合いをしました。

残念ながら私たち教育関係者ばかりでは、「教育的意義」や「啓蒙する！」という固さからなかなか抜け出せない。そこで、このマガジン「街場の就活論」を書いている団遊さんの会社「アソブロック」から柔軟な発想のもと協力を得ることにしました。

ここで提示されたキーワードは「間口を広げる」でした。みんなが「おもしろそう!」「やってみよう!」と感じる活動で、「やってて楽しく」、*かんたん*で長続きすること・・・

途中経過は省きますが、私たち幼稚園サイドとアソブロック社とその協力者の皆さんにより、「おやこんぼプロジェクト」が完成し、沼津市内の 23 カ園で、3 年と息の長い活動を続けていくことができたのです。単純に計算して約 6,800 人の子どもたちに「おやこんぼ」を体験させることができたのです。

そして、今年度からは静岡県私立幼稚園振興協会の事業計画において、静岡全県の私立幼稚園 240 カ園にこの取り組みが広がることになりました。一気に 40,000 人の子どもたちに！とりたいところですが、そこは私立の自主性に任せていますので徐々に広がっていくことになるでしょう。

これを機会に、マガジン読者の皆さんへも「おやこんぼプロジェクト」を紹介し、気に入って頂けたら、まずは「**おやこんぼ**」という言葉を使って頂き、もうちょっと積極的にやってみようかという方は、ご自分の家族や施設、地域でも取り組みを広げて頂きたいと願っています。



## ■おやこんぼプロジェクト

「おやこんぼってなんだ?」と思ってヤキモキして読んで頂いた皆さん、ゴメンナサイ。まずは、このネーミングの説明から。

**☆おやこ+コンボ (小編成のジャズ楽団) という造語で、一緒に楽しくやろうよ! という意味、加えて“くいしんぼ”“おいしんぼ”などのようにそのことが好き! という意味合いも込めています。**

たとえば、このような使い方をします。

- 子どもが…ねえねえ、おやこんぼしよう!
- お母さんが…こんどの日曜、近所の公園でおやこんぼしない?
- お父さんが会社で…今日はおやこんぼの約束だから早めに帰ります!

全国で「家族サービス」という言葉のかわりに使って頂けたらいいなと思ってます。

楽しさを前面に出して行うおやこんぼですが、その目的とするところをまとめておきます。

○おやこんぼプロジェクトの目的

1. 乳幼児期という短いけれども親子の絆を形成する上でとても大切な時期を意識してもらうこと。
2. そして絆を強くするための、家族のふれあう時間 (大切な時間) に気付いてもらうこと。
3. 親子のふれあう時間を大切にする意識を高め、家庭でその時間をつくり、過ごしてもらう。
4. 親子という単位から、地域や子育てサークルのような広い範囲の絆作りへと広げていく。

○期待できる効果

- 1) 親子関係が良好になり、子育ての楽しさがより高められること。
- 2) 父親が子育てに積極的に参加することにより、母親の育児ストレスの軽減。
- 3) 家族のきずな強化。
- 4) 親に大切にされたという記憶が形成される。→自己肯定感、情緒の安定
- 5) 親子関係が良好になり、早寝早起き、食事などの生活リズムが安定する。

○さらに

- 6) 幼稚園入園児の発達が健全化される。→良い保育ができる。
- 7) 家庭養育、幼稚園教育への理解が高まる。→幼稚園の存在意義。
- 8) なにより子どもたちの健全な発達が促され、健全な社会の構築に役立つ。



## ■テレビを消しておやこんぼ

おやこんぼプロジェクトには、様々な盛り上げグッズが作られて、活動の継続に力を発揮していますが、やることはいたってシンプルです。

**毎月 15 日に、テレビを消して  
テレビを消して生まれた時間で  
親子でなにか楽しいことをする！  
これだけなんです。**

静岡県内では、毎月 15 日に幼稚園児の家庭で、楽しいおやこんぼが繰り広げられています。みんなでやっている、というのが連帯感を高めて良いのかもしれない。

- ・親子で絵本を読んだ
- ・一緒に夕飯を作った
- ・お父さんが早く帰ってきて遊んでくれた
- ・近所におさんぽに行った
- ・カルタとりをした

などなど、報告されてくる活動は、なにか特別なことをしているわけではありません。

- ・テレビを消してこんなにゆったりした時間が持てることに気がきました。
- ・この日はお母さんのパートは入れないで家族で過ごす日としています。
- ・わが家では 15 日だけでなく毎日おやこんぼの日にしました。
- ・子どもがおやこんぼを楽しみにしています。

こんなふうに家族の大切な時間に気付いてもらえたという嬉しい報告も得られています。

## ■仕掛けいろいろ

シンプルな活動でも、それを始めさせ、継続させるにはいろいろな仕掛けが必要ですが、ここでは簡潔にご紹介します。

- 1：子どもがテレビを消したくなるアイテム**  
〔紙芝居…園で先生が読んであげると…家に帰って子どもが自らテレビのスイッチを消します〕



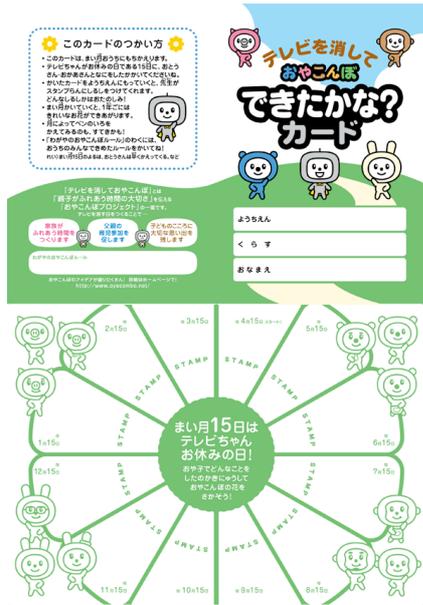
- 2：やりたくなるアイテム**  
〔テレビをお休みさせるかわいいバンダナ〕



- 3：続けたくなるアイテム**  
〔できたかなカードに記入して園の先生に報告！→がんばったねスタンプを押してもらえます〕



〔親子であそべるカードゲーム〕



詳しく知りたい方は、私の園やアソブロック社にお問い合わせ下されば嬉しいです。

oyako-hoホームページ：

<http://www.oyacombo.net/>

○全国に「oyako-ho」を広め、oyako-hoの思い出をしっかりとった大人が育ててほしい！こんな社会活動も子どもたちを育てる幼稚園としての仕事だと思うのです。

4：盛り上げグッズ

〔15日に園の前に立てる幟〕



学校法人松濤学園 原町幼稚園

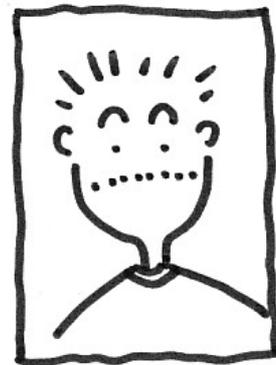
園長 鶴谷主一

幼稚園勤務29年（内園長10年）

<http://www.haramachi-ki.jp>

5：お楽しみグッズ

〔1年のさいごにもらえるごほうびシール〕



ツルヤシュイチ

# 福祉系 対人援助職養成の 現場から⑨

## 西川 友理

### A君の実習先での迷い

実習を終えたA君が、実習現場での経験を思い返して煩悶していました。

「職員さんは、“たかいたかい”をするのはあかんとも、ええとも、言わなかったんです。ただ苦笑いをして、じっとこちらを見て…なんか…俺、どうしたらよかったんでしょう…」

A君の実習先は、子どもを対象としたある施設でした。

A君は、その施設の職員から常々「子どもに危険な事はさせないでね」と指導

されていました。

ある日、利用者のBちゃんが、A君を物陰に連れて行き、

「“たかいたかい”して。」と言ってきました。

A君は“たかいたかい”が、職員の言っていた“危険な事”に当たるのかどうか、一瞬迷ったのだそうです。危険とも言い難いが、危険と言われれば危険な事だし…と、考えた結果、A君はBちゃんに

「誰にも内緒やで」

と言って、“たかいたかい”をしました。

Bちゃんは大喜び。その日から毎日、

BちゃんはA君を物陰に連れて行っては、“たかいたかい”をせがみ、A君はそれに応じていました。

そんな事が数日続いたある日、Bちゃんが何かの拍子に、職員に「Aさんに“たかいたかい”してもらった！」

と言ったのだそうです。言ってしまったから、Bちゃんは(しまった!)という顔をし、Bちゃんの話聞いた職員は、苦笑いしつつA君を見た、との事でした。

「ふうん…そんなことがあったの。」

「自分は間違ってたかと思ってます。ていうか、その時は間違っていないと思ってやったんやし。今も自分は間違えてないと思ってますよ、Bちゃんは喜んでたし危険でもなかったし。でも…。」

「うん…。」

『内緒やで』…ということは、ええと、そのお、たぶん…自分が…間違えてる、って思ってたってことか…ってこと、かなあ??」

「あのさ、思い返したら、なんで『内緒やで』って言うたんやと思う？」

「…迷ったのに職員さんに聞かずに、勝手に判断して行動したから。」

「うん。で、君は実習生として行ったんやよな。」

「危険かもしれへん、っていう迷いがあったのに、何かあった時に責任もとられへん実習生っていう立場やのに、勝手に動いた。」

「うん、そうやねえ。」

「でも、同じ種類の別の施設では、子どもを“たかいたかい”している職員もいたんですよ！俺、ボランティアで行った

時見たもの！」

「ふうん…じゃあ、君、今回実習で行ってきた施設の職員さんになったら、その時は“たかいたかい”する？」

「…しますよ。いや…やっぱりせえへんかもなあ…うーん…どっちやろ…」

## 施設の慣習・決め事

どの法制度にも「施設を利用している子どもに“たかいたかい”をしてはならない」などという一文はありません。この施設独自の、明文化されていない慣習のようなものでしょう。

多くの高齢者施設の職員は、個人の尊厳の保持を目的として、利用者に呼びかける際、田中さん、斉藤さん、というように、名字に“さん”をつけて呼びます。

“おじいちゃん”“おばあちゃん”と呼びかける職員は、まずいません。これも高齢者施設の慣習のようなものになると思います。「社会福祉施設の職員は、高齢の利用者に対して“おじいちゃん”“おばあちゃん”などと呼びかけてはならない」という法制度はもちろんどこにもありません。

ある入所型の施設に実習に行った学生は、

「朝、利用者が、複数名で散歩するコースが施設によって厳格に決められていた。」と話し、

「決められたコースを利用者が数歩でも外れた時には、職員がすかさず『〇〇さん、戻ってきて！勝手に行っちゃ駄目じゃないの！』と注意していました。」と少し不満そうに教えてくれました。散

歩中に事故が起こった時、スムーズに対応出来るようにそのように決めているのだそうです。散歩コースを明確に規定するというのも、当然ですが法制度には書かれていません。

TVや雑誌などでも時々紹介される、有名なデイサービス「夢のみずうみ村」<sup>注1)</sup>では、独自のプログラムとして施設内通貨を使った“おいちょかぶ”や“ルーレット”等の賭け事があったり、施設内にわざと段差や階段を設けて、利用者が体を動かすようにしていたりと、リハビリに関する様々な取り組みを行っています。

このデイサービスを利用している方の介護度の維持・改善効果は非常に高いとのことで、授業で「夢のみずうみ村」の紹介をすると、

「…すごい…なんか、楽しそう！」

「でも、賭け事とかやっていいの？」

「ていうか、よくまあこんなこと、やろうと思ったなあ！」

学生達は皆一瞬あっけにとられます。

施設独自の慣習・決め事は、学生から見れば

「いいじゃん、これくらい。何で駄目なの？」

「こんなこと規制して、意味あるの？」

と、言いたくなるようなモノがあります。

逆に、

「ええっ、そんなことまでしていいの？」

と言いたくなるようなモノもあります。

学生からは不思議ととれる慣習・決め事も、その施設において、様々な経験を踏まえ、考えられた結果、創り出されたモノなのです。

学生は、施設職員にそれらの意味を質問し、説明をしていただいたことで、納得できる時もある。「それってちょっと変じゃない？」という釈然としない思いを持ってしまう時もあります。

## 学生の学習内容＝法制度

社会福祉分野を学ぶ学生は、授業で法制度体系を学習し、実習の前には実習先に関する細かな制度を学び、実習施設そのものについて調べた後、実習に向かいます。

実習先である社会福祉施設は、学生が学んで来る現在の法制度に沿って運営されています。

だからこそ学生達は実習先において、それまで教科書で読んだことしかなく、抽象的にしか理解出来なかった法制度を、実体を持ったものとして体験し、理解出来るのです。

しかし、その一方で、先に挙げた事例のように、学生達が迷ってしまうような慣習・決め事があります。その大元となる根拠が同じ法制度なのに、なぜ学生達が戸惑うような事が起こるのでしょうか。

## 施設の慣習・決め事≡法制度

当然ながら社会福祉施設は、運営根拠となる法制度—社会福祉法やその他諸々の福祉に関する制度、民法、労働基準法、建築基準法など—の枠組みからはみ出すこと、つまり法令に違反すること

を、絶対に避けなければなりません。危険を回避するために、自主的に、法制度の枠組みよりも少し厳しく規制を設け、その規制の中で日々の支援をしている施設が多いように見受けられます。

冒頭の事例に挙げた「子どもに危険な事はさせないでね」というのも、その表れの一つでしょう。

また、法制度では自由度が高く設定されている事項についても、

「こんなに職員数が少ない状況で、出来ることなんて限られてるわよ。」

「自立を目指した支援？日々の衣食住の支援だけで手一杯だもんなあ。」と、自ら作った規制に縛られて、日々の仕事を、ただ、ばたばたとこなしていくしかない、という考えの施設もあります。

一方で、様々な方法で福祉サービスのあり方を模索し、独自の展開をみせている施設もあります。

法制度の枠組みの中で、利用者のニーズをより満たす支援をすることを考えている施設です。

「これは法令違反かな？ここを工夫すれば、法令違反にはならないよな？」と、様々な方法を考え、行政機関と話し合い、利用者とも契約書などを介して同意を得た上で、そのサービスを提供しています。

また、法制度の枠組みからはみ出しているおそれのある支援を行っている施設もあります。現在の法制度が不十分であるため、法制度の枠組みから外れた支援になるかもしれないと認識しつつも、「利用者によりよい支援を提供するために“こうする”」

という考えで支援を行っているところもあります。

いずれにせよ、施設職員が日々、当然と思っで行っている支援の中でも、法制度と照らし合わせたり、第三者から見た時に『ちょっとおかしいんじゃないの』と評される事は度々あります。

### 福祉施設が作り上げる自主規制

社会福祉法第3条には、福祉サービスの基本理念として、このように書かれています。

『福祉サービスは、個人の尊厳の保持を旨とし、その内容は、福祉サービスの利用者が心身ともに健やかに育成され、又はその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるように支援するものとして、良質かつ適切なものでなければならない。』

さて、子どもに“たかいたかい”をしない事は、その子どもの心身の健やかな育成に繋がるのでしょうか？

利用者の散歩ルートを厳密に定めることで、その利用者は能力に応じ自立した日常生活を営むことになるのでしょうか？

各々の施設が現在行っている福祉サービスは、良質かつ適切でしょうか？

どのような支援でも、ある面から見れば正解、ある面から見れば不正解。どちらとも言えます。

法制度にはシステムの大枠が書かれているだけで、現場で支援をする際、それをどのように解釈し実行するのかは、各々の社会福祉施設が考える事なので

す。各施設は、法制度に準じた形で、法制度をどのように解釈し、何について責任を持つのか、経験則から自主的な規制を作り上げています。それは施設の責任範囲を明確にし、自らのあり方を規定する事につながります。その結果、社会福祉施設は、厳密に言うと、法制度の枠組みに則って過不足なく運営されている所はない、とも言えます。

ちなみに、現場経験のある教員の場合、自らが経験した施設の自主的な規制について学生に語ることがあります。それは学生にとって勉強にもなります。しかし、その話は、一人の教員のある施設における経験、という偏った知識です。よって、やはり養成校の教育で最も尊重されるべきものは、各々の施設の共通基盤である法制度という事になります。むしろ教員は、自らが経験した施設内の自主的な規制が最も正しいように教えてしまわないように配慮し、まずは法制度をきちんと教えなければならないのです。

よって、法制度の枠組みを学び、それを正しいものと受け入れている学生にとっては、法制度と、現場の支援のあり方とのズレを感じて混乱することになるのです。

### あるべき枠組みと、実際に求められる姿

法制度と現場の支援でのあり方のズレに似たような事は、世の中ではよくあることでしょう。

ある集団が社会と折り合いをつけるために、何かしら本来の規定とは少し違

ったかたちで調整をとる事が必要な時などです。

私の父母の10回目の結婚記念日のこと。

照れ屋の父が、花束を買ってきてほしいと、お金を渡しました。

「ただし、お母さんに見つからんようにな。」と送り出してくれました。

父が母に花を贈るなんて初めてじゃないかな？と、わくわくしながら花屋に出かけ、母の好きな花を中心に花束を作ってもらい、こっそり持ち帰り、父に渡しておきました。

夕食の時に父が母にその花束を渡したところ、母は大喜び。

「わーっ、嬉しい、ありがとう！」

「うん。どういたしまして。」と父。

「私の好きなお花、覚えてくれてたんやあ！」

「う、うん。まあな。」

「お父さん照れ屋やのに、お花を持って帰るの、恥ずかしかったでしょ？」

「え？あ、う、うん、ちょっとな。」

(あの一、その花は私が買いに言って、私が選んだんやけれど…。)

後からこっそり、父だけに話をしました。

「お父さんの嘘つき！お母さん、お父さんが買って来たって誤解してるまんまやよ。」

「うーん、だってお母さん、あんなに喜んでたやん。…あのね、嘘やなくて、内緒ってこと。内緒と嘘は違うの。えっと、とにかく、うーん、まあ今回は内緒という事で…」

普段は見ない、しどろもどろの父…。うーん、まあ、いいか。

私が学生の頃、アルバイトをしていたハンバーガーショップ。

今でこそハンバーガーショップでは作り置きをしないようですが、当時はいくつか作り置いておくのが常識で、作ってから20分経ったものは、マニュアル上、廃棄しなければなりませんでした。

ある時、一人の女性が店内に飛び込んできて、

「すぐ作れるハンバーガー、何でもいいから、持ち帰りです1つ！」と慌てて注文してきました。

その時、作り置きのハンバーガーは1つしかありませんでした。

しかしそれは、今まさに破棄しようとしていた、作ってから20分を経過しようとするハンバーガー。

一瞬迷いましたが、女性の様子を見て、咄嗟にそのハンバーガーを袋に入れ、

「これでよろしければ、すぐご提供できます！」と差し出しました。

その女性は、その袋を引っ掴むとお金を放るよう払い、

「ありがとう！」と笑顔で店を飛び出していきました。

ある集団において、時に「こうあるべき」と信じられている方法とは、少し違う方法を求められる状況で、

「これでいい…かな？」

「この場合は、こうしたほうがいい…かな？」

と、悩みながら、自分の役割と、その場の状況を踏まえて、最良と思われる対応をとります。

あるべき枠組みと実際に求められる

姿のズレに出会うことは、私同様、学生達もそれまでの人生の様々な場面で体験してきているでしょう。特に目新しいことではないのです。

### 法制度と自主規制のズレを 実習で体験する意義

それでもあえて、実習という場でこのズレを体験する事は、社会福祉の専門職を目指す学生にとって、様々な意味があると私は思います。

法制度は“詳細な取扱いマニュアル”ではないと再認識することにより、法制度の解釈によって、様々な支援が出来る、つまり「法制度があるからこそ、その中で自由に支援ができる」という事を認識することが出来ます。

また、利用者と自分との間に、所属する施設の自主的な規制があることで、自分がしたい支援を闇雲に行うことも、利用者のニーズを全面的に適えることも出来ないということを知ります。そして、所属する施設の役割や責任を自覚した上で、どのような支援をすればいいか考えなければならないという認識が生まれます。

自分が施設職員になった時に、どんな自主的な規制を生み出すのか、責任の範囲を自覚するといったことを考える種にもなるでしょう。

法制度と施設の自主的な規制のズレに出会い、悩むことは、自分の認識とは違う、新しい価値観に出会った時に、頭から否定するのではなく、また考え無しに丸呑みにして全て受け入れてしまう

のでもなく、“疑問を持った上で、責任を自覚した専門職として、対応していく力”の萌芽にやがて繋がるのではないか、と思うのです。その芽は、よりよい専門職になるために必要な芽だと思います。

さて、ではどんな自主規制を作ろうか。

冒頭に挙げたA君は、無事卒業を迎え、将来的には「保育所をつくりたいから」と、働きながら保育、経営、法律の勉強をしています。様々な法制度を知り、現状の施設を知り、自分のやりたい保育を考え、どんな保育所をつくるのでしょうか。

その保育所で“たかいたかい”はするのでしょうか。

果たしてA君がどう判断するのか、やがて果たされる夢の実現を、楽しみにしています。

.....

注1)

「夢のみずうみ村 デイサービスセンター」

<http://www.yumenomizuumi.com/index.html>

山口市、防府市、千葉県浦安市にあるとのことです。

## 我流子育て支援論

(9)

### ～ 虐待における支援 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

虐待がクローズアップされてから、年月が経ち、殆どの対人援助職従事者はもう既に虐待に関する知識を持っていることと思う。従って今ここで虐待についてその定義だとか法律だとかについて述べるつもりは無い。

今回は、支援者として、①虐待に関するアセスメント、②虐待者・被虐待児の支援、そして、③支援者のための支援について述べたいと思う。

#### ① 虐待に関するアセスメント

虐待予防の検討会に参加していると、このケースが虐待として児童相談所で対応しなければならないレベルか、それとも保健師や相談員サイドで見守って行けば良いレベルかのアセスメントが大事になる。余程酷いケースでは通告することに迷いもないし、結果として児童相談所や警察の介入

があるので悩まないが、微妙なケースでは悩むことが多い。

乳幼児に限らず、こどもは力も弱く、ちょっとしたはずみに大けがや時には死に至ることもあり、100%安全というアセスメントはあり得ないが、出来る限り100%に近づけなければならぬ。

その為には情報が大事である。その家族成員について原家族も含め、どれだけの情報を集められるかが鍵になる。子どもに対し酷い虐待をする可能性があるかについての情報としては、「養育者が被虐待児だった可能性はないか」、「単に不器用なだけか」、「養育者に発達障害があるのか無いのか」、「精神疾患はないか」、「望んだ妊娠出産か」、「子どもに育て辛さはないか」、「再婚家庭や片親家庭か」、「子どもの兄弟姉妹が事故死などで亡くなって

いないかどうか」、「支援者は居るのかわからないのか」などである。

「養育者が被虐待児」だった場合は、虐待の連鎖で無意識に子どもを虐待してしまう事があるので要注意である。養育者の成育歴を聞かなかで、そうした事実を把握できれば、養育者を癒す事も並行して行っていかねばならない。被虐待児だったからと言って、必ずしも虐待するわけではない。被虐待児だったことを認識している母親が、自分が子どもを虐待してしまうのではないかと怯え、子どもに対してちょっとイライラを感じただけでも自己嫌悪に陥るケースにも出会う。そんな母親には、同じような思いをしている母親同士のグループがとても効果がある。それは、共通の、言葉を超えた思いがあるからである。

「単に不器用なだけ」の養育者では、彼らの子育ては見た目とても危なっかしいが、一生懸命やっている事が殆どなので、スキルを教えていけば良い。こういう場合は虐待とは考えない。要領が悪いために、子どものおむつ替えに四苦八苦している母親などでは、どうしたら、動く子どもを上手く扱えるかのノウハウを伝えていく。

「養育者に発達障がいがある」と、上手く子育てが出来ない事が多い。ADHD系では、片づけられない・注意散漫である事で誤飲や怪我に繋がりが、虐待が疑われる事が多い。又自閉系であれば、自分たちの養育の仕方に拘りがあって、無駄にエネルギーを使い、疲れてイライラしたり、自分の理想の子どもに当てはまらない児を受

け入れられず、虐待に発展してしまう可能性もある。こういう場合は養育者の理解と子育てスキルの伝授、拘りの修正などが必要になり、長期に渡り支援していかねばならなくなる。離乳食で7分粥と言え、正確に7分にしなければと拘り、離乳食づくりに何時間もかけていることもある。殆ど一日中台所に立っていると言う母親にも出会った。そんなことをしていれば当然養育に困難を覚える。上の子がいれば更に大変になり、上の子に辛くあたってしまったたりするのである。支援者は発達障がいについての知識をしっかり持たねばならない。

「養育者に精神疾患がある」場合は、医療機関との連携が大切である。保健所などの機関とも連携し、子育て支援において医師の助言なども受けられるようにしておく事が必要になる。母親の精神疾患も増えてきているので、支援者としては精神疾患の理解も必要になる。

「望んだ妊娠出産か」については、出来ちゃった婚（授かり婚）が多い現代では、妊娠が結婚より先になることもある。前に述べたように「道具」として妊娠を使ったり、「特に子どもが好きでもないが結婚したから作った」とか、「夫が望んだから仕方なく」、「DVで出来た」等の理由の場合は、子どもへの愛着が形成しづらい事もあるので要注意になる。親になることへの準備性の問題である。親になることは、それほど簡単なことではないので、それなりの覚悟が必要である。また、妊娠に対し受け入れの悪い母親で

は、被虐待の経験者も多い。

「子どもに育て辛さ」がある場合は子どもの発達確認をしつつ、特徴のある子どもへの関わり方を、発達支援センターなどと共同して伝えていかなければならない。育て辛い子に対してはどうしても厳しくしてしまいがちで、叩いたり、行きすぎになり易く、虐待と思われる事も多い。しかし、子ども自体に育て辛さがあるとわかれば、養育者は落ち着く。

「再婚家庭や片親家庭」では、養父母と子どもとの関係や、片親である事で後ろ指をさされないようにと親が頑張りすぎて、厳しくしてしまう事もままある。また、母親が女になってしまってネグレクトになることもある。そうした可能性を考慮しながらアセスメントをして行けば良い。

「兄の兄弟姉妹に不慮の事故による死亡者が居る場合」は、養育者がやり場のない喪失感や、自責の念から、残された兄弟に対しまっすぐ向きあえず、愛着形成不全が起こる事がある。

「支援者が居ない」場合は、煮詰まり易いため、要注意になる。これは以前から孤独な子育てと言う事で問題になっていたので分り易いだろう。

他にも、「DVがある」と既に虐待と認識しなければならないし、「経済的に困っている」とか「ギャンブル依存」も要注意である。

こうした視点を持って先ずは情報を集めることに力を注ぐべきである。

養育者が地元ですっと育てていれば、小中高での様子なども何処かで情

報が入るかもしれないが、転入者では情報は極めて少なくなる。アンケートに記入した文字や健診場面での様子、服装、待合室での様子、子どもへの関わりの様子などからも、様々な情報を得られるし、それらによって、養育者の性格などもある程度掴める。この様に、今得られる情報をとにかく集める事が必要であるが、そこには個人情報保護法と言う厄介なものも立ちはだかる。子どもの命を守るためには、迅速且つ慎重に、場合によっては対決姿勢も持って臨まなければならない。覚悟を持って臨む時に、保護法が邪魔立てになると、支援者の気持ちが一気に萎える。虐待については保護法を超えるべきと思う。

そして、医療機関、都道府県（児童相談所、福祉施設、保健所等）、市町村関係機関（児童相談、母子相談、生活保護等福祉分野、健康推進分野、民生児童委員・主任児童委員、幼稚園、小中学校、教育委員会、保育所、児童館、高校、託児所、町内会、発達支援センター等々）が、「要保護児童養育支援連絡協議会」等を通じて密に、スムーズに連携を取れるようにしておくことが大前提である。

必要な情報が集められないと、正確なアセスメントは難しいし、その後の支援計画も儘ならなくなる。

この連携で度々問題になるのが、児童相談所との関係である。

法律で定められた通り、虐待を発見して通告しても、通告した側の思惑通りには動かないことがある。目の前の

子どもを何とかしてあげたいと言う支援者の気持ちとは裏腹に、児童相談所は「養育者との関係」を第一に考えて、動きが鈍いケースも見受けられる。しかも結論として「地域で見守りを」と言われてしまうことも多く、しかもその指示は、具体性に欠ける。「どこを、どの様に、何時まで見守るのか。何がどの様に起こったら地域ではなく児童相談所に戻すのか？」等の具体的指示がなく、児童相談所の受理会議で、地域不在の欠席裁判よろしく、勝手に結論が出ていて、地域に上意下達的に伝えるというやり方では関係性・信頼性に傷がつく。地域に繋ぐ時に気を使い、地域が納得のいく形で繋ぐ事が必須である。

話が逸れたが、アセスメントの仕方には、サインズ・オブ・セイフティー・プログラムや虐待アセスメント・チェックリストなどのツールも様々登場しているので、そういうものを活用するのも一つであるが、一人で考えないことが何より大事だろう。何人かで考えると、極端に心配性な人も、妙に樂觀的な人も、ほどほどの人も混ざり、アセスメントのバランスが取れると思う。そして、皆で話し合う時に、参加者全員が個々に自分のアセスメントについて話することが大切である。検討会等で全く一言も話さずに終わる人がいないようにすべきで、参加者はその意識を持つべきだろう。感性は人それぞれであり、新人や古参に限らず、感じることを、思うことを自由に話すことで気づきが増える。その気づ

きを持って検討すれば内容が豊かになるだろう。

虐待アセスメントは、最悪のシナリオを念頭に置きつつも、その家族が頑張れているところを見逃さずに、辛目の判断をしていくことかと思う。そして、予防はもちろん、虐待が起こってしまったら、出来る限り早い段階で支援に入れるようにアセスメントしていくことが大切である。

## ② 虐待者・被虐待児の支援

虐待の連鎖を考えた時に、虐待者の支援と被虐待児の支援はかなり手厚くしなければならない。しかし、支援をしようとしても、中々入り辛いのが虐待の特徴である。

第一に虐待者に虐待の認識が無い。ほとんどのケースで、「自分も殴られて育った。そうやって躰けられたのだから、子どもも同じように躰けて当然。」と言われてしまう。「躰でやって居る事で虐待なんかじゃない！」と言い張る。そこには、そんなことを言われること、攻撃されることへの並々ならぬ抵抗感がある。そのような時に真っ向からぶつかっても上手く行くわけがない。何故抵抗するのか？

虐待予防のための母親のグループで話を聞いていると、殆どの母親が実親との関係が薄かったり、悪かったり、或いは被虐待の経験や、学校等でのいじめの経験があって、自己評価がとても低い。何が理由であっても、自分の行動を否定されることにとても過敏で抵抗感が強いのである。子どもが自分に似ていることで虐待的対応をしてし

もう母親もいる。そこには、不幸せな、時には悲惨な子ども時代を送った自分への否定的感情が見える。その理解も無いままに、ただ養育者の行動を否定しても上手く伝わる筈がない。

地域の支援者としては、養育者や子と出来る限り良い関係を作っていかなければならない。健診の場や育児相談で子どもを叩いてしまうと聞いた時、どういう反応をするか。赤ちゃん訪問で虐待が疑われる、或いは今後虐待に発展するのではと危惧されるときにどう対応するか。そこが鍵になる。酷い虐待に発展する前に、早い段階で介入できれば、虐待者も被虐待児も大きな傷を負う前に助ける事が出来る。特に母親への支援では出来ることが多い。

対応のポイントとしては、叩いてしまう母親の気持ちに理解を示すこと、叩かれて育った母親であるなら、幼少期の母親の辛さに共感すること、叩かなくても躰ける方法があるがそれを親から学ぶ事が出来なかったという脈絡の中でお話をすることだろう。子育ての大変さを受け止め、頑張っているところを認める事。そこから始めないと関係は作れない。

相手が父親（養父、義父も含む）の場合は対応が余計に難しくなる。第一、勤務時間の関係で父親に会うのが難しい。また、暴力的な男性の場合、女性の支援者の受け入れが比較的悪いような印象がある。父親に対しては、男性支援者の方が良いかもしれない。

前述の通り、筆者は MCG など、母親支援のグループに携わっており、それはかなりの成果をあげているが、父

親支援のグループは殆ど無いし、実施しても長続きしない。やはり「子育ては母親がするもの」という考え方が世間一般にあるからだろう。最近イクメンと言う言葉も使われ、育休を男性が取るなど、男性の育児参加も増えたので、将来的には、父親支援のグループも可能になるかもしれない。

人格障害や精神障害のある養育者と対処する場合、また、発達障がいのある養育者と対処する場合はどのような障害かを十分に理解することから始めないと失敗してしまう。

権力には屈するタイプ、権力に反発するタイプ、人それぞれなので、よく観察しよう。それにはやはり①でも述べたように情報を出来るだけ集めることが必要である。

さて、色々と努力して、養育者と関係が上手く持てたらどうするのか？

第一は養育者の成育歴の中での辛さを語ってもらう事だろう。トラウマを抱えている場合もある。場合によっては精神科や心療内科、或いはカウンセリングと言った支援も必要になるが、そこに繋ぐのも又ハードルが高い。一番繋ぎやすいのがカウンセリングだが、私設のカウンセリングは料金が高く、無料の所は殆ど無いため、繋ぎたくても繋げないことが多い。だからこそ、法整備によって、医療受診やカウンセリングを無料で、しかも強制的に受けられるようにすべきである。そうしたシステムの構築が急がれる。

カウンセリングや医療機関につなげられない場合は、保健師や相談員が支援を継続して行くしかないので、時間をかけて、細く長く繋がりながら、話を聞いていくことが大事になる。

養育支援訪問事業を実施している市町村もあるが、子育てに煮詰まって子どもに当たってしまう母親には大変有効であろう。訪問を重ねる中で、CSPなどの親支援プログラムを使うのも良いし、話を聞いてあげたり、育児スキルを伝えていくだけでも虐待予防になるだろう。

子育てをどれほど頑張っても誰も認めてくれない中で、煮詰まってしまう母親には、「頑張ってる」の一言の効果は絶大である。「出来て当たり前」と言われてしまっただけは、辛い子育てが嫌になる。

子育ては24時間365日休み無しなのだから、肉体的にも精神的にも大変である。それでも自分自身の育ちの中で、母親との愛着形成が出来ていれば、子どもを可愛いと思う事が出来て頑張れる。そうした基盤の無い母親にそれを求めるのは酷だろう。一つ一つ認め、褒め、自尊感情を育てていくことが大切である。

一方、被虐待児への支援であるが、こちらは何のプログラムも無いので中々大変である。最も身近で自分を守ってくれるはずの養育者からの虐待は、子どもの心にとっても深い傷を負わせるのは言うまでもない。その傷を癒し、次世代に連鎖させないために、その子に対し、生まれたての赤ちゃんから育

て直すように、変わらない愛情で受け止め、試し行動や心の荒れの表現も丸ごと受け止め、きちんと養育して行けば、子どもの傷がどれ程深くても癒されていく。もちろん、カウンセリングやEMDR・TFTなどのトラウマ処理に効果のある心理療法の活用も良い。そして大人との揺るぎ無い信頼関係を築ければ、本来親との関係性で得られるべき人間として存在することの土台を築ければ、その子はもう大丈夫と言える。

酷い虐待を受けた子でも、世代間連鎖をしていないのは、成長の過程で誰か信頼できる大人と出会えたからであろう。誰かに大事にされる経験、誰かに認められる経験、自分が存在しても良いのだと思える経験、そんなことが子どもの傷を癒し、凍った心を溶かしていく。施設職員に限らず、幼稚園の先生や保育所の保育士さん、学校の先生方など、その時その時目の前にいる大人が、その子に対し決して否定することなく、真正面から向き合い、理解し、受け止めていくことが大切であり、我々支援者に与えられた使命である。そして、成長に応じて関わる人が変わっていくので、連携していくことも必要である。我々支援者が、ずっと一生その子に関わって行けるわけではないのだから。

特に、虐待の二次障害としての発達障がいでは、どうしても否定的に対処されてしまうことが多く、それ故に更に深い傷を負わせてしまうことがあるので、要注意である。発達障がいの理解だけではなく、家族の状況をしっかり

り把握して関わっていくことが大切になる。人の話を聞けなくなってしまうほど、人への信頼を無くしてしまったら、自分が信じるものだけを信じて、誤った道に進んでしまう事だろう。何とかしてそうならないよう食い止めなければならない。

### ③ 支援者への支援

支援者の支援も大切である。前述のように被虐待児、虐待者の支援には、根気強く、長い時間をかけ、ジェットコースターのような感情の起伏に付き合い、尚且つ、揺らがない自分を維持し続けるだけの強さとエネルギーを持っていなければならない。そのためにはたった一人で頑張るのは無謀と言えよう。

支援者を支援するシステムも構築する必要がある。

地域の支援者を支援するのは誰か？

幼稚園や保育所、学校等では、同僚や先輩、園長や所長、校長等の管理職、保健センターや市町村であれば同僚や上司であろう。そして更に地域を支援する立場として児童相談所がある。支援者の心理的サポートをするには、専門の心理士などが居ると良いが、児童相談所はハードでもソフトでも一杯一杯で、そこまでの余力はないだろう。もっと人を配置し、虐待支援のセンターとして専門的な部署を設置することが必要ではないかと思うが、それが実現するにはまだまだ時間がかかる。その間に我々支援者が潰れないようにするために、地域は地域で関係機関が連携し、支え合う必要がある。関係機関

同士の連携の際に、またそこで守秘義務だとか、個人情報保護法だとか言っているのは、やはり上手く行かないのである。

顔の見える形での連携、個人情報保護法に縛られず、フットワークも軽く、連携に関わる誰もが自由にものを言える連携があれば、支援者が孤立し、バーンアウトすることはないだろう。

我々支援者の前に居る、虐待者と被虐待児、或いは虐待予防のために、今いるステージに応じた対応をして行くこと、そして、次の支援者に繋いで行くことが、支援として重要なポイントとなる。

この「次の支援者に繋ぐ」ということにも、多くの落とし穴が存在する。

就学前、保健師さんが一生懸命関わって、母親と良い関係を細々でも繋いでいたとしても、学校に入った途端に、保健師さんの関わりは大抵終わってしまう。そこで、家庭児童相談員や、学校のスクールカウンセラーなどに、いきなり繋がられるものでもない。繋ぐに当たっては少し時間を掛けて、一緒に面談をしばらく繰り返すなどすべきである。

繋がられる側からすれば、この間まで関わっていた人から、「今日から別の人になりましたのでよろしく」と言われたって、「はいそうですか」ということにはならないだろう。

また、支援される側が最初から話をし直さなければならないことも問題である。相談でも発達支援でもこういう事が良く起こる。この点は十分気を付けなければならない。子どもを叩いて

しまうことに、少なからず罪悪感を覚えている人や、支援されることに抵抗を感じている人に、又ーから話を聞き直していたら、「もういいわ」と言いたくなくなってしまうだろう。だからこそ、連携が大事なのである。情報をきちんと共有し、引き継ぎ、相談者（支援される人）に余計な負担を掛けないように気を付けなければならない。

それは、子ども自身についても同じ事が言える。子どもに何度も同じ話を聞いていては、返って傷口を広げ、そこに塩を塗るような事になりかねない。子どもの年齢にもよるが、子どもにはこちらから聞き出す姿勢ではなく、子どもから話し始めるのを待つという姿勢が良いだろう。

虐待支援では、子どもの目線で、子ども中心に考えるべきである。今年度より、民法および児童福祉法の改正に伴い、「子の利益のために」という言葉が重視されるようになった。児童福祉法 28 条の児童相談所の措置や民法 820 条の「親権の停止」など、法的根拠による虐待者からの子どもの分離や子どもへの対応が、以前よりほんの少しやり易くなった。

「子の利益のために」何が今大事なのか、そのために何がどうなれば良いのか、そのアセスメントをしつつ、支援内容を考え、支援者を支援する人も用意しつつ、長期に亘る継続的支援が必要なのである。

次回は発達障がいについて述べたい。

注：サインズ・オブ・セイフティー・プログラム、EMDR、CSP（コモン・センス・ペアレンティング）、TFT（思考場療法）等については、ネットでお調べください。

## 不妊治療現場の過去・現在・未来

連載 9

# 不妊と家族の相関関係

荒木 晃子

聴き手自身に、時間が必要だった。日を開けて、B子さんとのアポイントを取る。事前に、先日の女性心理士とのインタビュー内容をまとめ、メールで報告を済ませることにした。彼女が連絡を待ち望んでいることを知っていたからだ。送付メールに、次回はこちらから伺いたいことがある旨を書き添えると、彼女からは、「では、いつもよりゆっくり時間をとります」と返事があった。いよいよ、その時が来たようだ。

### 「生殖革命の物語 エピソード③」 ～そのとき、家族は～

「いつ話そうかと悩んでいたんです」  
あらたまった口調で彼女は静かに返答した。

「ほんとは、話すべきかどうか迷っていたのかもしれないし、もしかすると、全部は話せないかもしれないのです」

『わかりました。でも、あなたなら大丈夫。私を信じてください』と、こころのなかでつぶやく。ことばは不要だ。

「今日は、これまで伺った話の中で、あ

まり触れることのなかったご家族の話を聴かせていただけませんか？」できるだけシンプルに、そうたずねる以前から、目線は彼女を捉えていた。視線には、話し手に対する信頼と、聴き手がそれを聴くことへの責任と覚悟が込められている。その際、二人が共有する時空間には、おそらく時間の逆行が始まっていたのかもしれない。B子さんは、私からの質問に、いつになく重い口調で語り始めた。

「はてはて、どこから話せばいいのやら・・・」天井を見上げ、まるで観念したかのように「ハァ～」と大きく息を吐く。わたしは「あなたの思いつくままに」と一言だけ返した。覚悟してね、と言わんばかりにB子さんは苦笑いし、背筋を伸ばしながら椅子に深く座りなおす。

### キーパーソンとパワー

「先に、別れたパートナーの家族の話からね」彼女が最初に語る家族は、現在は家族ではない「モト家族の話」のようだ。

「いまとなっては、アカノ他人だから、あまり詳しくはいえないけれど。10数年

間、まがりなりにも家族だったから、その頃の家族の話をすればいいのよね？」

どうやら、話に登場するモト家族たちの、現在のプライバシーを守ってくださいね、と釘をさしたいらしい。私にはそう聞こえた。

「義理の両親は実家の両親とほぼ同年齢だったし、そういう意味では、実親とのギャップは感じなかったかもしれない。ただ、私はひとりっこ。義家族には、私たちが結婚した当時、すでに他家へ嫁いだ義姉には子どもがいて、義両親と一緒に独身の妹二人が住んでいたの。家業というか、義父は中堅会社の社長職で、モト夫はその専務。唯一の跡取り息子だったってわけ」

一気に早い口調で話す。ここまで聴いただけでも、不妊が問題になりそうな予感がする。「唯一の跡取り息子」という表現に、日本文化に由来する家長制度や後継者問題など、次世代につなぐ責任とその圧力を感じるのには私だけではないだろう。

「カレは・・・」眉間にしわを寄せ、一瞬言葉がつまる。

「いちいち面倒だから、モト夫のことをカレと呼ぶわね！」宣言するかのように前置きした後、「要は、私たちの結婚生活は、義父が経営する会社の一室に住み、そこでカレが働くことで成り立っていた。私は毎日事務所に出勤し、経理を担当してた。ま、経営管理というか、お金の流れを管理してたわけ。義父は苦勞して一代で起業した人で、仕事が命のワーカホリック。義母は良妻賢母、は言い過ぎかもしれないけど、その家の女性たちは皆、

夫を支えて生きていくタイプ、だったわね。女性は結婚し子を産んで家を守り、夫に尽くすのが女の幸せ。男性は、家庭を顧みず懸命に仕事だけに打ち込んでこそ、男の生き方、みたいなの。まあ、私たちの親世代によくあるタイプ。姉妹全員、もちろんカレも含めてみな高学歴でありながら、女性は家事と子育て、男性は仕事一筋、って、いまどき珍しいくらいの貴重な価値観だと思わない？」

貴重と呼ぶのがふさわしいかどうかは別として、現代家族の男性・女性の性役割として考えると、かなり古典的な家族観があったともいえるかもしれない。特に、企業や人間が集中する都心部ではいまどき珍しい、という表現がふさわしいだろう。

さらに、二人の結婚生活が「義父の会社に後継者でもあるモト夫が働くことで成り立っていた」ということは、二人の生活資金は義父の手中にあったとも言い換えられる。大学を卒業した後社会経験を積むことなく家業を継いだ息子夫婦は、原家族と切っても切れない運命共同体の関係にあったのだ。

家族システム論でいうところの、家族キーワードの一つにパワーがある。「お金」という権力は、家族のパワーにかわる恐れがある。つまり、お金というあからさまな力をもつ義父は家族全体を支配できるキーパーソンであったともいえる。そこにB子さんが家族の一員として暮らしていたのだと思うと、「時代が違う」のひとつでかたづけたいいけないように思う。それにしても、モト家族を語る際、B子さんがその都度私に同意を求めるの

が気になる。

「でもね、義理の両親もその姉妹たちも、本当にまじめで、気持ちの優しい人たちだったのよ。お正月や何か行事があると、みんなで集まっては、賑やかにおしゃべりしながら家庭の味を楽しんでいた。妹たちも可愛くて！ひとりっこの私にとって、初めての姉妹だったの。特に一番下の妹はまだ学生だったから、よく一緒に旅行に出かけたりしたわね～」

目を細め、頬をほころばせながら語るその顔には、懐かしいふるさとの思い出を語る時のように穏やかだった。

「そうね・・・いま思えば、決して悪い人たちではなかったわ。むしろ、家族思いの仲の良い陽気なファミリーって感じだったかしら。結婚した当初はね」ちら、と横目で私をみる。

「みんなよく集まるもんだから、話題が豊富な家族だった。義姉も義兄と一緒に、子どもを連れて頻りに里帰りしてたしね。姪はまだ小さくて天使のようだった。小さい子がいると、とにかくにぎやかで楽しいでしょ？私もカレも子どもが大好きで、その子を抱きながら“早く子どもができないかな～”って、笑いながらいつも言ってたの。そんな頃もあったのよ。でもね、結婚して2年ほどたつと、義母や義姉から“B子さん、どこかおかしいんじゃないの？一度病院に行ってきたら？”とか、“いい病院があるらしいから今度教えてあげる”とか、いろいろアドバイスが入るようになってね。私も子どもは欲しかったから、あまり心配かけてもいけないと思い、言われるままにあちこちの病院で検査したり、受診したりし

たの。でも、いくら検査してもどこも悪いところはないといわれるし、夫婦仲も良かったし。その頃は、子どもがいないことは、まだ、二人にとって、目の前の重要な問題ではなかったのよね」時折遠くを見る目をしながら、話はただ淡々と続く。

「前に話したことがあると思うんだけど、ある晩彼が古くからの友人とお酒を飲んで帰ってきた晩のこと、おぼえてる？」

4章でB子さんが語ったモト夫が絡んできた夜の話だ。『いくらお金があっても、子どももつukれないとは情けない。男なら、悔しかったら、子どもの一人ぐらいつくってみろ！』とお酒の席で友人に言われ、悔し涙を流しながら泥酔したエピソードのことだ。「その日から、二人の関係が少しずつ変わっていった」確かに彼女はそう語っていた。記憶にあるそのエピソードを伝えると、彼女は納得したようにうなずいた。

## 心配という名の干渉

「いまから私が話すことは、私にとってはとても辛くて、言いにくいこと。そして、あなたにとっては、聴きづらくて、聴くことが嫌になるかもしれない話し。それだけじゃないの。もしかすると、私のことが嫌いになるかもしれないほどの内容だと思って欲しい」わかりました、とだけ答える。

しかし、B子さんの緊張した表情は変わらない。いったい、私がB子さんを嫌いになる話とはなんだろう。からだに力が

入る。

「あの日から、家族みんなが変わった気がするの。もちろん私自身もね。あの後・・・」二人の関係が変わっていった、たしか、B子さんはそういったはずだ。でも、つい今しがた聞こえてきたのは、「家族みんなが変わった」ということば。変わったのは二人の関係だけではないのか？思わず首を傾げた私に向かって、ふっ、と笑みを浮かべ、そして消える。それには、どうリアクションしていいか分からない。B子さんは、構わず話を続けた。「少しずつ・・・一人ひとり、少しずつなんだけど、変わったのよ。その時は、何が何だかよくわからなかったんだけど、今なら分かるの。たとえば、義母は、親戚のだれだれちゃんが妊娠したらしい、とか、B子さんは痩せすぎてから妊娠しないんだ、とか、犬ばかり可愛がってるから子どもができないんだ、とかいろいろ言うようになってきた。義姉は義母とよく似た性格だったから、同じような感じだったかな。子授け寺や病院の情報なんかを集めては、何かのついでのように、私に連絡をいれてくれてたから」

一瞬自分の耳を疑った。いま私の耳に入ってくる言葉は、20年以上も前の話のはず、それは間違いない。しかし、またもや、先日、私が、現在治療中の女性から聴いた話とほとんど同じ内容なのだ。地方在住のその女性は、ひとつ屋根の下で暮らす大家族の中で、義両親や義叔母から同様のことを毎日のように聴かされ、「疲れ果て、もう精神的に限界だ」と涙をこぼしていた。同居自体は嫌ではない、とも言っていたが、これでは、いくら不

妊がテーマとなった会話を家族がしても、家族で不妊問題を話し合い、当事者夫婦に協力するというより、ただ単に、干渉しているにすぎないではないか。行き場のない怒りがこみ上げてくる。「ね？嫌な話でしょ？」嫌な話というより、むしろ、見えない圧力に押しつぶされていくような、知らないうちに空気が薄くなっていくような、息苦しさを覚える。

「自分で話していても、なんというか、モト家族の悪口を言ってるみたいで気分がよくないの。みんな悪気がないのは分かっていたし、よかれと思って言ってくれたんだと思うのよね・・・わかってはいたけど、うれしくは思えなかったの、その時は。あ、ちょっと待って・・・」口を一文字に結び、目を開けたままじっと考え込む。

「うん、いくら考えても、今でもうれしくは感じないわ。だって、慰めでもなく、励ましでもない、なんていうか、何もかもが、早く妊娠しなさい、というメッセージにしか聞こえないんだもの。それとも、私の受け取り方が歪んでいるのかしら？」

本当に、そうなのだろうか。B子さんの受け取り方が歪んでいたのだろうか。いま、私が聞いても、愛情ゆえの言葉には聞こえない。また、これまでの面接でも、数えきれないほどの当事者女性が同様の感覚を語っている。これは、つまり、当事者心理で聴くと、“そうとしか聞こえないことば”といえるのだろう。それに、たとえ、いかなることばがけでも、共に暮らす家族がみな時折そのことばをかけるならば、B子さんにとっての“時折”で

はなくなるではないか。

## お家騒動とおせっかい

このように、家族の中でさえ、不妊問題についての的外れな干渉は、たとえそれが些細なことであっても、当事者夫婦にとって、あまり歓迎されるものではない場合がある。特に、自然妊娠の末出産したため、“子どもができないことを辛く感じた経験”のない親世代（当事者カップルの実親は不妊体験者でないと仮定して）にとっては、これまで自分自身が経験したことのない問題が勃発したことになる。しかも、自分の血を受け継いだ実子に起きた血縁の継承問題となると、まさに他人事ではないはずだ。そのうえ、実娘もしくは実息子夫婦が“悩んでいる”のを知ること、さらに心配が膨らみ、何とか力になりたいと考えるのも親心からであろう。当然、そのように身内の不妊問題に、当事者夫婦を心配し、強い関心や問題意識を向ける身内が現れても不思議はない。家督の継承や世襲制度を抱えた血族関係の縁が深ければ深いほど、その傾向は強く表れる。また、この傾向は、都市部より、地方に暮らす家族の特色でもある。一例をあげると、ある地域に行くと、〇〇さんという名字の方が大勢住んでいる、といった地域のことをいう。現在も、本家・分家などの家督の継承が代々受け継がれる風習の残る地域には、その家に嫁いだ嫁と呼ばれる女性たちや、入り婿と呼ばれる男性たちに、血の継承を切望されることが多い。そこに

起きた不妊問題は、当事者夫婦の問題としてではなく、家族の問題としてクローズアップされ、お家騒動に発展するケースも実在する。このような家族形態をもつ場合、家族からの干渉が、不妊に悩む当事者夫婦の問題に、火に油を注ぐような事態を招くことには気をつけなければならない。

さらに、当事者にとって、不妊問題は、家の中だけの問題とは限らない。最近、働く女性も増加し、職場の人間関係にも「不妊にまつわる関係性の問題」が生じるケースが多い。女性が結婚すると、周囲の人たちから“子どもはまだ？”と聴かれることが慣習的にある。日常に、まるで挨拶がわりに常用されるので、子どもがいないことを問題にしていない人にとっては、わだかまりも、それを聴くことへの違和感さえもたないだろう。しかし、不妊を問題とし、さらに、不妊に悩み自分なりに努力している者にとっては、その挨拶は苦痛以外のなにものでもないのだ。たとえば、受験に失敗したばかりの学生に、“まだ合格しないの？”と聴く人はいないだろうし、ましてや、不妊は受験ほど、人生に於いての比重は軽くはない。あえて例えるならば、命に別条はないレベルの腫瘍が見つかった患者が、治療のために摘出手術を選択するのではなく、リスクも覚悟の上で放射線治療が始まったとたん、“もう病気は治った？”と尋ねられるようなもの。もしくは、原因が特定できない体調不良を克服すべく、食生活や生活習慣に配慮しながら、その体質改善を目指して日々努力する人に、“まだ治らないの？”と無神経に声を

かけるようなもの、といった方が近いかもしれない。いずれにしろ、健康な生活を目指し、治療もしくは体質改善の成功を願い、不安と期待のはざまを漂う患者に対して、そのような声をかける際に必要な配慮不足や、相手を傷つける場合があることに、注意を払う必要がある。

### だれが産んでも

「義母は同じ女性だから、まだ、まじったかもしれない。同じ料理好きということもあって距離も近かったし、私としては、嫁姑の割に普段から仲が良かったと思ってる。やっぱり、同性だしね。でも、義父からのひとは、かなりきつかったな。ある時、カレと三人で話す機会があってね、いつものように、子どもはまだか、って話になったのよ。カレは、私に気をつかい。あ、それまでも、ずっと真剣に不妊治療専門の病院に通院していたし、二人でできる努力は全部していたの。それに、“ある事件”が起きた後だったので、大変な状況の中にあっただけだったし。その頃が私にとって、一番つらい時期だったかもしれない。毎日泣き暮らす、ってああいうことをいうのね、きっと。唯一、そんな私の状況を知っていたカレは、周囲に対してかなり敏感になっていたんだと思う。カレ自身もその件に関して、だれかになにか言われるのを嫌がってたから」

“ある事件”？とは、初めて聴く話だ。びくっと、ことばに反応した自分が分かる。しかし、B子さんはそんな私に気付か

ない風に、ややスピードをあげ話し続ける。

「その時も、義父から切り出した子どもの話に対して、カレが“おやじ、もうその話はやめてくれ！”って強い口調で言い返したの。すると義父は“お前たちはそれでいいかもしれないが、私はそうはいかない。内孫がいないと、会社はどうなるんだ！誰が産んだ子でもいいから、早く連れてこい！お前の子なら、だれが産んでも孫は孫だ！”って、怒鳴るように言った。男性同士の喧嘩なんて、それまでに経験したこともなかったし、その場にいた私は、もう、怖くてしかたがなかった！からだが震えて、涙があふれて。義父が言った言葉の意味が一瞬分からなかったくらい、おびえてたと思う。でも、そのあと、ゆっくり、“ああ、私じゃなくていいんだ、誰でもいいんだ、義父はカレの子どもが必要なんであって、その子を産めない私はいらないんだ”って、いろんな思いが頭の中でぐるぐる回り始めて、その場を飛び出してしまったの」私は、何も反応することができなかった。

「いま思えば、あの時、あそこになきゃよかったと後悔してる。まあ、そんな展開になるとは、誰も思いもよらなかったんだけどね」固まった状態の私に、軽くウィンクしてみせた。私は瞬きして返す。

「似た者同士の親子だったのよね～義父とカレは。二人とも気が強くて、仕事のちの職人気質っていうか。自分の人生は自分で切り開く、みたいな頼もしいタイプの人だったわね。不妊の問題さえな

ければ、いい関係でいられたかもしれないわね～それはないけど！」声のトーンをあげ、私を気遣うように上目づかいで笑顔を向けた。「少し休みませんか？」本当は、そう申し出た自分自身に休憩が必要だった。

## エスカレート

少し長めの休憩を入れ、部屋に戻るとすでにB子さんが待っていた。「お待たせしました」、そう言い終わらないうちに話が始まる。

「さっきの、義父の話なんだけど。義父は、決して私に向かって怒ったわけじゃないことはわかってたのよ。その場に私がいなければ、きっと違う展開になっていたと思う。私もカレも、“自分たち夫婦の子どもがほしい”のであって、他の女性に子どもを産ませて自分たちの子どもにしよう、という発想はなかったの。その時はね」えっ？！っと、思わず声に出してしまう。彼女は、私にかまわず話を続ける。

「でも、義父は違った。彼には孫が必要だったのね。つまり、私たちが不妊に悩んでいることは、義父にとっての問題ではなくて、“孫ができないこと”自体が問題だったのよね。そうなの、まったく別の問題だったのよ」

彼女はまるで自分に言い聞かせるようにきっぱりと言い切ったし、まったく、その通りだと思った。夫婦にとっての不妊は、“自分たちの子どもができない”という、夫婦の問題であって、決して家督や

血族の後継者問題を優先してはならないのだ。義父にとっての問題は、“自分の血を継いだ孫ができない”、言い換えれば、世襲制度が存続できないことにある。ゆえに、“だれが産んでも（自分の）孫は孫”という発想になる。しかし、それは、夫婦の問題とは異なる問題である。そのことを重要視する義父の問題だったのだ。

このエピソードは、不妊問題を家族で共有する際に頻繁に起きる出来事である。自分たちの子どもができない、と悩むのが不妊当事者カップルであり、孫ができないことは、親世代の問題である。したがって、親世代の問題解決を、次世代の不妊当事者カップルに求めると、B子さんが経験したような「家族関係の問題」が生じることには注意が必要となる。ここに、家族システム論でいうところの世代間境界の明確化が、家族の不妊問題にとって、いかに重要なのが現れている。家族療法の実践に於いては、上の世代は下の世代に関わらないことが大切な場合もある。

## 境界破り

### i. 世代間

「家族の境界」というキー概念上、もともと、世代間境界が不明瞭な関係や、一方の世代からの境界破りが頻繁に起きやすい関係をパターンとして持つ家族関係があると、不妊問題はより複雑化する危険性がある。B子さんのモト家族の場合、義父が実息子に世襲制度の維持を求めることで、下の世代の不妊問題に干渉する

事態が起きている。義父が実息子に対して、“お前の子なら、だれが産んでもいい”という発想は、まさにその象徴である。また、そのことで、B子さんが、「夫の子を産めない自分はいらない存在」と自分の存在自体を完全否定されたような感覚に陥ったとすれば、それは当然であろう。かつて、ある政治家が“女性は産む機械”と公言し、人権侵害や女性蔑視の問題発言を指摘され、一時的に公職を追われたことがあるが、それと同様の発言を、直接個人に向けられたのだから、たまったものではなかったであろう。

「血の継承へのこだわり＝信念（ビリーフ）」と言い換えることができるこの発想は、ときに、親世代以上の世代がもつ場合が多い。それは、その家に受け継がれた家族観であったり、「しきたり」ということばで正当化されることもある。このような、刷り込みにも似た、強化されたビリーフを容易に変えることは難しい。ゆえに、いったん不妊問題が家族の問題にかわった場合には、当事者夫婦は、自分たちに起きた問題に上積みされる形で、親世代の問題である、次世代への継承問題を引き継ぐか否かの決断を迫られる状況に遭遇することを覚えておきたい。不妊は、世代間境界をこどもなげに破壊する脅威となり得ることもあるのだ。また、このようなビリーフが、当事者夫婦のどちらか一方にある場合は、さらに厄介である。夫婦が子どもをもつことそのものに、血の継承の動機付けが生じると、不妊問題の定義そのものが拡大し、はじめから夫婦の問題として解決する方向性から外れることも考えられる。その場合、

血の継承を優先するばかりに、家族の核となる夫婦関係の存続が困難となり、相手をかえる（＝離婚）、もしくは第三者の介入を得て血の継承を維持するという、より家族関係が複雑化する可能性が生じることに注意しなければならない。はじめに、夫婦が子どもをもつことありきで、その結果が世代間継承につながるのである。

## ii. 家族サブシステム

続いて、「家族内外の境界」という視点で本ケースを検証する。

まず、「血の継承＝夫婦の実子を得る」という視点で不妊問題の解決を求める当事者夫婦が、最初に訪れる割合が高いのは、生殖医療施設であろう。近年の傾向として、高度生殖医療技術が不妊問題の解決手段にかわり、「治療すれば妊娠できるはず」と考え、まずは夫婦だけで解決しようと試みる傾向にあるからだ。その場合、医学的に不妊問題を捉えると、男性不妊の場合と、女性不妊の場合では問題の傾向と、その解決手段が異なる。一例をあげると、B子さんのモト夫が男性不妊であったならば、B子さん夫婦に起きた出来事はまた違った形で解決していたのかもしれない。義父は、“だれが産んでも”ということばを使えなかったであろうし、自分の息子が原因で不妊問題が起きていることへは、実親として違った形で介入したと考えられる。義父が、あくまでも、血の継承にこだわるのであれば、場合によっては、後継者問題が、姉妹に及ぶことも予想できる。

他に、「女性に限定された後継者」の問

題が生じるケースもある。たとえば、有名美容室や老舗旅館の女将などを継承する場合や、後継者に男子がない場合だ。このような女性に限定された後継者の問題が、実娘の女性因子に不妊原因がある場合と、娘婿の男性因子に原因がある場合は、おのずとその問題に対する家族の対応も、その解決手段も変わる可能性が大きい。当然、医学的な対応も違ってくるだろう。たとえば、“実娘が子どもを産むこと”を優先するのであれば、男性不妊が原因の場合には相手（夫）をかえる（＝離婚）、国内でも戦後早期に始まった精子提供を試みる、などの手段がある。また、女性不妊が原因の際には、卵子提供から代理出産といった第三者の関わる高度生殖医療技術も国外にある。いずれにしても、血の継承へのこだわりが不妊治療の動機にある場合の、最終的な不妊問題解決手段には、夫婦の二者関係だけでは解決できない問題も、解決できるのだということを知っておくべきであろう。当初、夫婦だけで解決する為に訪れたはずの生殖医療施設には、夫婦どちらか一方の不妊原因に、第三者の介入を得て解決するほどの高度な医療技術をもつ世界水準の医療者たちが待っている。元来、医療者は患者の同意なく治療することはないが、患者が望めばそれができる。もし、第三者の介入によって子どもの出産に至った場合、夫婦という二者関係の問題にはとどまらない「複雑な家族関係の問題」に発展することを理解したうえで、不妊治療を進めなければならない。

以上のように、不妊問題を夫婦の問題とせず、血族の継承問題に置き換えるこ

とで派生する家族間の紛争は、その血族全体の問題として波及する恐れがある。ゆえに、家族にとって、不妊問題の対応手段を知ることは、決して不妊当事者だけに必要な知識ではないことが分かる。結果として、精子や卵子の提供、または代理出産等の第三者の介入により誕生した子どもたちは、その複雑な家族関係の中で育つことを余儀なくされることを忘れてはならない。周囲の大人たちの都合で、子どもが「ある条件ありきで、この世に誕生することを求められた」とするならば、その子の未来に制限や縛りがかかることが懸念される。子どもにとって、健康でなければならない、成績が良くなくてはならない、などの条件付きの養育者の愛情は、その子の成長と発達に有効に作用するとは言い難い。以上、不妊問題が血族の継承問題となった結果、当事者夫婦を中心に家族間で相応の準備なく子どもが誕生した場合、その血族の継承問題は、さらに複雑化し、次世代へと受け継がれていくことには留意しなければならない。

### iii. 家族の内と外

つぎに、「後継者問題の視点」で不妊を捉えると、不妊問題の新たな側面が垣間見える。B子さんの場合、継承するものとしては、義父が起業した会社のことをいうのであるから、社会的な問題としての側面があることは明確である。つまり、このケースの場合、「会社の後継者として孫が必要」とする義父の主張は、あくまでも、血族による企業資産の承継をいう、と解釈できる。本来、企業とは社会の一

部であり、特に株式公開されたものほど、株価等でその社会的価値が問われることとなる。聞くところによると、義父が社主を務めるその企業は、株式公開はされたものの、その株主はすべて血族で占められていたという。これは、一般に、国内の中小企業に多くみられる傾向で、会社を個人の所有物としてみる危険性を秘めている。最近では、血族による企業支配が続いた結果、経営破たん追い込まれた大企業などの報道もあるようだ。

また、不妊問題に限らず、社会的資産を相続する際の相続権をめぐる、家族内紛争が起きる事例も多いとされる。そこに、家族の外に相続権をもつ子孫がある場合には、より問題が複雑化する可能性がある。一般に、家族内トラブルは感情的で、家族以外の支援者の介入が困難なケースもあり、思わぬ重大な事件に発展するケースも少なくない。このように、不妊に限らず、後継者問題や世襲制などの社会的解決が必要な問題と、家族内で解決すべき問題、さらには、先に当事者夫婦で解決すべき問題などの、「必要な境界」を意識した問題解決を心がけなければならない。

このように、これまでのB子さんの話を、「構造的家族システム論上の家族の問題」として分析すると、「境界・パワー・サブシステム」という、家族のキー概念に関わる重要な問題解決のヒントが浮かびあがった。

## 覚悟

「さっき、言おうかどうしようか迷ったことがあったんだけど・・・」

瞬間的に、思わず身構える。これまでに、確認したいことを我慢して聞き続けていたからだ。今日のB子さんの話には、数えきれないほどの“気になるメッセージ”が盛り込まれていた。

「今日は、これまで伺った話の中で、あまり触れることのなかったご家族の話を聴かせていただけませんか？」

冒頭、そう口火を切ったのは私だ。しかし、今日のB子さんは、これまでに私が知る彼女とは、何かが違って見えた。その語りの背後には、まるで、「自分が話す以上のことをたずねないでほしい」といった、無言の裏メッセージを感じてしまう。まるで、B子さんが私に対して防衛線を張っているようでもある。「彼女は恐れている」この言葉が脳裏に浮かぶ。彼女は、「なに」を恐れているのだろうか？

おそらく、私ではなかった。彼女は、「それを語ること」を恐れているのだ。一瞬のうちに、かけめぐる思いは、B子さんの「恐れ」に共感した自分に次の指令を出す。気づかぬうちに力の入った自身の体の力を抜き、緊張した面持ち（だったと思う）の頬を緩めた。からだの力を抜くことに注意が向くと、唇を真一文字に結んでしまっていたことに気付く。あわてて大きく息を吸い、その後ゆっくり、時間をかけて、すう〜っと長い息を吐く。この一連の動作を、次の言葉が聞こえる前に、瞬時に済ませた。

次号へ続く

# 対人援助学 & 心理学の縦横無尽(6)

## 人物で見る「法と心理学」とその課題



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

### 【法と心理学の概要】

法や紛争処理に関わる人間活動に焦点をあてるのが広義の法と心理学の領域である。法学が規範の学であるのに対して、心理学は事実を扱う学である。規範は人間ではないが、規範を作るのは人間である。法に関わる現実の人間の活動から法システムを展望するところに法と心理学の特徴がある。

### 【法と心理学の歴史】

1893年にアメリカの心理学者キャテル(Cattell J.M.)は日常経験に関する記憶の確実性の実験を行い、これが裁判における証言の不確実性の問題を惹起したことから、法と心理学領域の研究を刺激した。フランスではビネ(Binet, A)が被暗示性の研究を行った。ドイツではシュテルン(Stern, L. W.)が新派刑法学者・リスト(Liszt, F. E.)と協力して目撃証言の曖昧さを研究し(1901)、『Beiträge zur Psychologie der Aussage (証言心理学への貢献)』という雑誌を創刊した。これは後に『Zeitschrift für angewandte Psychologie (応用心理学雑誌)』と代わり世界初の応用心理学雑誌となった。また、ドイツでは19世紀の末から心理学者が刑事裁判において専門家証人として登用されはじめた。



Cattell J.M.



Stern, L. W.



Liszt, F. E.



Binet, A.

1909年、慶応義塾大学の最初の法学教授を務めたこともあるノースウェスタン大学法学部長J・H・ウィグモア(Wigmore, J. H.)が『イリノイ・ロー・レビュー』において「ミュンスターバーグ教授と証言の心理学」と題した論文を発表した。



Wigmore, J. H

この論文は裁判記録の形式を採用したものであり、被告はH・ミュンスターバーグであった。その訴えの内容は、1908年刊行の『証言台で』と題された書籍においてミュンスターバーグ(Münsterberg, H.)が、法学者・裁判従事者の名誉を毀損したというものである。



Münsterberg, H.

心理学サイドからの裁判への批判は、それを受け止める法サイドからすると「能力について不正確で間違った真実ではない主張」であると受け止められ（あるいはフレーミングされ）、法関係者の名誉を毀損するものだという主張となったのである。

この論争の結果、法と心理の協働は少なく見ても50年は滞った。個別の研究は行われていたとしても、である。学融（トランス・ディシプリナリ）な領域としての法と心理を進めていくには、この歴史から学ぶことは多い。相手の学範（ディシプリン）を攻撃することが目的ではなく、融合領域を作ることにより、社会のあり方を良いものに変えていこうという姿勢こそが求められているのである。

さて、ウィグモアとミュンスターバーグの論争が停滞を引き起こしていたころ、心理学が捜査技術に応用される契機が高まりつつあった。虚偽検出である。イタリアの精神科医ロンブローゾ（Lombroso, C.）は被疑者がつく嘘を検出する方法を追究する中で複数の生理的指標（血圧・脈拍等）の利用を提案し（1895）、これが現在のポリグラフ検査の初源となった。スイスの精神分析学者ユング（Jung, C. G.）は、ある言葉に対する連想語を答えるときの反応時間が遅いことに着目した。これが犯罪捜査に取り入れられると、無言でいる時間が長い（反応時間の長い）ものは証言したくない内容を含んでいるのではないかと考えられることになり、虚偽検出の質問技法の基礎となった。これらをもとにキーラー（Keeler, L.）によって現在使用されているポリグラフが完成された（1932）。



Lombroso, C.



Jung, C. G.



Keeler, L

法と心理学の停滞がおきたアメリカでも 1970 年代以降、認知心理学の台頭と共に新しい興味が生まれた。ロフトス(Loftus, E.)が目撃証言(の歪み)研究に着手し、また実際の法廷に専門家証人として立ち、司法からの心理学のニーズを再び開拓した。

日本では、明治末期から大正初期にかけて法学者・牧野英一と心理学者・寺田精一による共同研究が行われていた。牧野はドイツ外遊中に新派刑法論者のリストに師事し実証的研究の必要性を理解した。寺田は大学卒業後、巣鴨監獄に勤めたこともある心理学者である。「供述の価値」論文(1913)は、目撃証言研究の先駆である。第二次世界大戦後の日本では、法心理学はふるわず心理学では虚偽検出、矯正といった分野が中心であり、法学では川島武宜により経験(主義)法学が導入されてその中で法心理学的動向が紹介された。甲山(かぶとやま)事件(1974)を契機として、心理学者・浜田寿美男が自白供述分析に取り組んだが、これは自白を強く求める日本の制度のもとだからこそである。2000年には法と心理学会が設立された。2009年に始まった裁判員裁判においては、裁判員の判断プロセスや法廷プレゼンテーションなど多様な領域で法と心理学の検討が必要となっている。



牧野英一

#### 【法心理学の課題】

犯罪や刑事法など、これまで関係の深かった領域については、現代的問題に対応することが課題であり、民事法や法意識などに関係する領域については研究領域の拡大と深化が課題である。

法制度が個別の国や文化に基づいていることを前提とした上で、共通の原理を追究することは法と心理学に課せられた使命の一つである。そのためには、法心理思想史のような領域が必要となるだろう。本稿においても、法と心理学の歴史を近代心理学成立

以降の出来事として捉えたが、そもそも、法思想の重要人物であるトマス・アクィナス、ホブズ、ロック、カントなどの人々は、それぞれ近世心理学史に関しても重要人物である。法が必要であること、法に従うこと、法により仲裁・調整すること、はいずれも人間の本性について考えることを含んでいたからであろう。



Kant, I.

日本においては、裁判員裁判が開始され、一般市民が一部の刑事裁判に参加することになった。これまで職業裁判官のみが事実認定や量刑判断を行っていた時代には、法と心理学が裁判プロセスに積極的に関与することは - 特に日本では - 無かったのであるが、今後必要な領域となる。自白尊重という文化のもとに行われる刑事取調べの可視化も課題である。

# 小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

## 8. 最終回 「怪獣たち」との別れ

### 尾上 明代

#### セッション終了について

前号まで、A 児童養護施設で行ったドラマセラピー治療セッションについて、開始から約10ヶ月のプロセスを詳述してきた。

その後1年2ヶ月ほど継続し、結局2年実施した時点で終了することになった。実は、もう少し続けるつもりでいたのだが、いろいろな事情が重なり、終了させるを得ない状況で打ち切ることになったので、私としても大変残念であった。また子どもたちにも、終了への心の準備に、ある程度の期間をかけることができなかつたことを申し訳なく思う。(男の子2人がA施設の事情で別の施設に移ることになったのである。それでも何とかA施設でセラピーを続ける方法がないわけではなかったが、助手の浩二さんがすでに施設職員を辞職していること、私が可能な曜日が変わったことなども含めてA施設の考えも聞き、打ち切りを決定したという経緯であった。)

これまでの記述からも理解していただけるように、5人の子どもたちには、感情表現や、仲間と協力して一緒にドラマを創りあげる楽しさを体験してもらうことができたと思う。攻撃的ないじめや過

度な性的言動が表出するドラマが収束していったのと反比例的に、自発性、主体性、表現力、創造力、他者への信頼もかなり育ってきた。終結しても良い時期だったのかもしれない。しかし、施設での暮らしそのものからくる辛さと、いつ親のいる実家に帰ることができるのかわからない不安、よってずっと親から見捨てられた気持ちを感じている、そのような状態が現実的に継続しているわけだから、終結時期を決めるのは難しい問題である。いずれにしても、全員の心身の状態が問題なくなってセッション終了、めでたしめでたし、となるのは無理であるし、今後はちょうど思春期真っ盛りになっていくので、一般的に言っても新たな課題とともにセラピーの必要性も、ずっと続くはずだ。

外的状況のために終わることにはなったが、でもいつかは終了することになるわけだから、逆に2年も続けられて良かったと思うことにしたい。

\* \* \*

#### A施設のセッションでの手法について

ここで、改めてA施設で行ったドラマ

セラピーの手法のエッセンスを提示しておきたい。特にセッション前半で、観客（他のメンバーたち）の前で、ドラマセラピストと子どもが対一で行う手法は、私が開発した「受容とミラーリングの即興ドラマ」というものである。

この手法の特徴として大変重要なことの一つは、セラピストがディレクターとしてではなく、一緒に演じる共演者という存在だということである。子どもたちと一緒に遊ぶので、プレイセラピーと同じものだと思われる方もいるかもしれない。プレイセラピーの理論や方法論から与えられた恩恵もたくさんあるが、それとの大きな違いの一つは、投影が可能なおもちゃや小道具をほぼ一切使わないことである。この点は、アメリカのドラマセラピスト、David Johnson の開発した「発展的変容」（これもドラマセラピストが自ら演じながらクライアントを導いていく手法）の理論と同じだ。おもちゃを意図的になくして、セラピストとクライアントが出会う。クライアントは、セラピスト以外に遊ぶおもちゃがないので、セラピストが「体現された遊ぶ対象」になり、対人関係に最大限のフォーカスをあてることができる。セラピストと関わるしかない状態におかれるのだ。つまり、クライアントの精神とセラピストの精神が、直接に語り合い、触れ合い、反応し、行きつ戻りつしながら、少しずつ前進していく、まさに「道行（みちゆき）」と言える作業だ。そうしながらセラピストは、クライアントの「感情の補綴（ほてつ）」を提供し（クライアントが今まさに必要としている感情をセラピストが、なり代

わって表現してあげて）、クライアントがその人自身のドラマを創ることに集中する。

A施設では、この方法で一人ずつの子どもたちが、即興ドラマを私と演じることで自発性や創造力を得て、その後の全員で行うドラマもできるようになっていった。そして、ドラマゲーム・個人のドラマ・全員のドラマなどを組み合わせたセッションを積み重ね、繰り返しと相互の **interaction** の中で、さまざまなプロセスが進展した。開始時期と較べて、子どもたちは明らかに自己を自由に表現し、グループで協力をしながら創造的に振る舞うことができるようになった。また施設での他の生活や学校生活でも、より積極的な態度が現れるなど、各子ども個人とグループ全体の成長が見られた。

\* \* \*

前号で記述したセッション以降は、大変うまくドラマができて良いプロセスが進む日もあれば、その反動のように、まったくうまく行かない日もあったりと、でこぼこ道ではあったが、これまでお伝えしてきたように、毎回大騒ぎをしながら、「怪獣たち」と私は、「楽しく苦闘」し合ってきた。

今号では、前号後のプロセスの中で、特に強く印象に残ったドラマと、最終日の様子を紹介し、「小さな怪獣たち」の連載を終わりたいと思う。

### 我が子を殺すドラマ

前号のセッションからしばらく経った

ある日のこと、いつものように大家族のドラマをすることになり、皆に設定や筋をどうするか聞いた。するとアンズが私に初めて「本当のお母さん役」を指定した。(それまでは必ずいつも「継母役」だった。)アンズは、自分を見捨てた(と間違いなく彼女が感じているであろう)現実の母親を、彼女なりに心の中で受け容れる準備ができつつあることを感じる。このような変化は、アンズが「離婚した母が戻ってくるドラマ」を演じたころから起き始めたように思う。

イチゴたちも、「本当の母親役」には反対しなかったが、でも「世界一怖いお母さん」になってほしいとのこと。理由は、「みんなで反抗するから！」ということだった。

するとリンゴが、「お母さんが、子どもやお父さんをみんな殺して終わるドラマ」を提案した。方法は、銃で撃つというものだった。私は「そのまま終わるの？ハッピーエンドにしようよ」と投げかけてみた。子どもたちは案を出し合い、「みんなが死んで幽霊になって仲直りする」というストーリーで、話がまとまった。

実は、この日の一回前のセッションで、おばけ屋敷ごっこをして遊んだということがあった。(部屋の明かりを消してお化けたちが思い思いのところに隠れ、準備ができると、部屋の外で待っていたお客役が入ってきて順路を歩き、お化けが出て来て脅かすというもの。お化けもお客もとても盛り上がった。特にリンゴはこの遊びをととても楽しんでいた。)  
「みんな幽霊になって」というリンゴの提案は、その影響もあったかもしれない。

しかしもう一つ、私の頭をよぎったのは、リンゴが実母から「これ以上、一緒に暮らすとあなたを殺してしまいそうだから施設に入ってほしい」と言われたという、以前施設から聞いた報告であった。母親が子どもを殺すということがどのようなものか、ドラマでやってみたかったのだろうか。とにかくもちろん、その筋書きに同意する。私は、後半の「幽霊になって仲直りする」ところが楽しみだった。

ドラマが始まり、私が「世界一怖いお母さん」を演じ始めた。すると子どもたちには、今までで初めてくらいの反抗エネルギーがあり、とてもよく反抗できた！

以前(特に初期のころ)は、反抗できずにいる感じが伝わり、私は相当手加減したが、それが不必要なほどで、大変良い傾向だと思う！しかも蹴ったりする「暴力」もほとんど「まね」だけでできるようになった。私を実際に蹴らずに「蹴るふり」なのだが、(イチゴとマツオは特に)とてもたくさんの負の感情を表現し、吐き出しているのが母親役を演じる中で実感としてよく伝わってくる。

そもそも、考えてみてほしい。つらい体験をもつ施設の子どもたちが、「自分たちが、怖い母親に怒られ殺される場面をやってほしい」とリクエストし、セラピストがそれを快諾して、そのようなドラマを演じている状況を。この連載の読者の方々は、今となっては特段の違和感もなく理解して頂けていると思うが、もし初めにここだけ読んだ方がいるとすれば、

かなり首をかしげるのではないだろうか・・・！

私が「怖さの演技」を手加減する必要がなくなったという意味を、別な言い方で説明するならば、この場が、「架空のドラマ、遊び空間」として、しっかり機能するレベルが大変高くなったということである。子どもたちが、そのことを了解している度合いが進めば進むほど、どんなドラマも可能になるし、危険ではなくなる。そしてクライアントが多くの負のエネルギーを解放することが、より可能になっているのに、しかも、より楽しく安全にそれができるといえることが起きる。今のドラマは、まさにそのようなレベルに到達したことを示している。

David Johnson は、次のように説明する。「クライアントが遊ぶ（演じる）ことが不可能な問題(the unplayable)を、遊べる（演じられる）ようになることが、セラピーのゴールである。なぜなら、この遊べない（演じられない）ものこそが（内面に潜んでいて）、私たちの源から私たちを妨げているからだ。そのブロックをはずすためには、ネガティブな問題を遊べるようにならなければいけない。そのようなプロセスは、多くの場合、繰り返しの途中で可能になっていく。」

つまり、初期のころから、子どもたちが加害者の役に同一化するドラマが頻繁に演じられるというプロセスが進み、少しずつ、被害者(弱い立場の役)を慰める役、加害者を赦す役などが、出現してきていた。そして、「子どもが怖い親に怒られ殺される」ドラマは、(5人のプロセスの進化は均一ではないものの)自分たちがい

じめられるという題材が、子どもたちにとってかなり「遊べるもの」になったということを示している。これは、今までの行きつ戻りつの繰り返しのドラマプロセスが可能にしたことだと断言できる。(男子2人のプロセスの進化度合いは少し違っていたが、これについては、後述する。)

以上のことを、異なった視点から次のようにも言えるだろう。中村雄二郎は、様々な感覚のなかで、身体的であれ、精神的であれ、痛みこそ全身にもっとも影響を与えるのだと言う。彼は「共通感覚論」の中で、個人の諸感覚を統合されるといわれる共通感覚を通して、痛みは全身の感覚に影響を与え、また身体・精神の統合に影響を与えること、逆にその感覚こそ、他者と最もよく共有され、他者によりよくつながることのできる源となり得ることを解説している。

つまり、深く強い痛みを持っている彼らこそ、その痛みと対峙し、理解できるようになれば、他者と共振する感情をより一層強く持てる可能性があると思う。加害者の役から被害者の役への転換、そしてその痛みを楽しみながら対象化できるようになるのは、その意味でとても大きな転換点である。

### マツオとスギオの大きな進化

さて、ドラマが進み、とうとう私が子どもを殺すくだりになったとき、アンズとイチゴがストーリーに反対して、新たなアイデアが出される。「母親が殺した、と思い込んだだけで、実は子どもたちは生きている。皆は死んだふりをしていた

だけ」というものであった。当初のストーリーを提案したリングも反対しなかったの、そのように変更された。その後の筋書きやハッピーエンドも詳しく決まった。いずれにしても、ハッピーエンドは私も当初から創りたかったの、大歓迎だ。このように高まった彼らの自発性、創造性を非常に好ましく思う。

いよいよ私が銃で子どもたちや夫を殺し、皆は予定通り「死んだ」。実は、このとき（またその前の、筋書きを皆で決めているときも）マツオとスギオの2人はどちらかという、嫌そうだった。彼らはまだ被害者の役は受け入れられないのだろう。でも全員の望みを聞くことは不可能だ。

ところが、面白いことが起きた。マツオとスギオは、殺された直後、突然2人で起き上がって（打ち合わせもなしで！）TVレポーターに成り変わり、マイクをもって「事件」レポートをし始めたのだ。まさに、そこで起きていることから距離をとり、客観的立場で、その場の状況を語るという選択をしたのだ。その後、マツオレポーターは、テレビ局のスタジオに戻り、ニュースキャスター席からカメラに向かって続きを話す。スギオは、（生放送のニュース番組によくいる）ディレクターとしてマツオの隣に座って指示を出す。アイデアもさることながら、演技としてもなかなか上手く、当然、他のメンバーみんなにとってもウケた。

さて現場で死んだふりをしていた家族たちは、母親がその場を立ち去ったあと、打ち合わせ通りこっそり起き上がる。このとき、テレビ局の男子2人はさっと「子

ども」に戻った。そして皆で警察に行く。

その後すぐ現場に戻ってきた母親はと言えば、死んでいるはずの皆がいないので大変驚き、母親も警察に行く。そこで皆が会って仲直りをし、東京ディズニーランドに行った。TDLではジェットコースターに乗って（実際に長机に乗る）ハッピーエンドというドラマであった。

マツオとスギオがレポーター役を咄嗟に自発的に行ったことは、驚愕と感動に値する。なかなか「遊べない問題」を、まさにドラマの中で自ら別の役や状況を創って、自他ともにとっても楽しいやり方で「遊べる」ように創りかえて対処したのだ。自発性を発揮して複数の役に入ったり出たりして創造的に癒されていく方向に向かったことは、非常に高く評価できた。

上述したように、女の子3人は、殺される（つまり被害者になる）役は、しっかりできるようになっていた。このことは、3人が連続セッションのプロセスを良く進み、攻撃者とだけ同一化していた役をやることから抜けだし、自分自身を弱い被害者として勇気をもって認め受け容れることや、攻撃者を赦して受け容れることができてきたということでもあろう。「子どもたちは実は死んではいなかった（母親を殺人犯にしなかった）、そして警察で会って仲直りする」という筋書きは、まさに攻撃者を赦し受け容れたのちの家族再生のドラマであると、私には思えた。）

また、前号までに記述した通り、それぞれの女の子と私との信頼関係がきちん

とできていたことが、そのまま反映されている。一方、男の子2人は、彼らの即興ドラマの技術とプロセスが、まだ女の子ほど進んでいなかったこと、(これと並行して私との信頼関係のレベルが、女の子ほどではなかったこと)がそのまま現れており、まだどうしても被害者の役になりたくなかったことが見てとれる。マツオとスギオは、もともとドラマ表現に照れる傾向があること、2人は大の仲良しなので、セッション中も、何かと気分が一緒、物理的にも一緒にいたので、1人ずつと私が心を通わせるチャンスが少なかったことも理由としてあげられる。

しかし、とても素晴らしいことは、彼らがここで(無意識に被害者の役をやりたくなかったとき)、たとえば突然加害者の役になるとか、ドラマ参加をやめてしまうのではなくて(そのようなことは、充分起こりうることだったのにもかかわらず)、突然、テレビレポーターになったことである。この行動により、自分たちは、嫌な役に留まっている必要はなくなり、また突然ドラマ参加をやめることでその場を壊してしまうこともなく、ドラマは続行できたのだ。しかも、ドラマ全体としても、とても良いアイデアでバラエティーに飛んだ楽しい展開を出現させたのである。

この2人が二年間に演じた即興ドラマの中で、私が一番印象に残るものであった。

\* \* \*

## 最後のセッション

さて、最終日が訪れた。セッション開始時、女の子3人は、ドラマセラピーが終わることをとても残念がってはいたものの、事情を理解し、受け入れ、私と和やかに話をする事ができた。しかし男の子2人の雰囲気は、荒れていた。セッションが終わることだけでなく、そもそも急に別の施設に行くことになったことが、つらいのだ。

セッションは、いつもと同じ構造にし、中心部分は二年間のプロセスを振り返るべく、床屋や家族のドラマを試みたが、うまく行かなかった。スギオが言うことを聞かず、ボールを持ち込みマツオとサッカーをしていて、柱に掛かっていた大きな時計に「間違っ」ボールが当たってしまった。

ガッシャーーン！！

ものすごい音とともに、ガラスが飛び散った。スギオの気持ちを本当にピタリこの時計が表現してくれた。幸い、誰にも怪我はなかった。普段、もしこのようなことが起きたとすれば、他の子どもたちから、悪戯をした子どもへ大変なブーイングが起きるのだが、このときは誰からもそのような発言はなかった。少しだけ、「あーあ」という、やっちゃったーという気分の声が女子から漏れただけで、あとは全員一丸となって黙々と協力して後始末をした。彼らを誇りに思えた。

最後のいつもの歌の時間に、プレイヤーの前に来て一緒に歌ったのは3人の女の子たちだけだった。

この後、全員ですぐ近くのファミリーレストランに行ってデザートを食べることになっていた。あとにも先にもたった

一度の「家族全員のお出かけ」である。セラピーの終了が決まったとき、私が施設に特別の許可を得てあったのだ。

皆はオーダーを決めるのに大変悩み、時間がかかったが、それも含めてこの家族メンバーでのデザートタイムを大騒ぎで楽しんでくれた。

これから、彼らにどんな人生が待っているのだろうか。二年間のドラマセラピーの思い出を目に見える形で残したいと思う。ルネ・エムナーも、「連続治療セッションが終わるときは、クライアントたちに写真などの具体的な思い出の品を渡すことは、別れに伴う痛みを和らげるし、未来において治療体験の記憶が薄れる頃に困難に直面したとき、その人を支えてくれるかも知れない。特に子どもの場合は、そのようなものが要だ。その子どもたちが、人生の中で多くの別れを堪え忍んできており、何かの終わりというものに直面するのに困難を感じる可能性がある場合にはさらにそうである。」と述べている。私は、前回撮った皆の写真をアルバムにし、1人ずつに手紙と共に渡した。リンゴがとても気に入っていた私のシャーペン（安価なものだが、キラキラ光る素材でできていたことから、彼女は大変羨ましがっていた。）も5本購入してあり、皆への記念品とした。

このパーティーと記念品贈呈を、プロセス最後の第五段階（ルネ・エムナーが提唱する「ドラマ的儀式」）とし、ついにこのグループは終結した。

## 別れ

私は車で女子3人をA施設に送り届け

た。穏やかにことばを交わし、3人とお別れの握手をしたあの夜のシーンを、何年もたった今でもはっきりと覚えている。スギオは1人で自転車に乗り新しい施設に帰った。最後にマツオを新しい施設に送る。車のドアを開けて降りたら、マツオは私を振り返りもせず、玄関へ向けて走って行くので、「マツオ君、握手！」と呼びかけると、すぐに戻ってきて、私の手をバチン！とぶって行った。私の顔も見ないで。

\* \* \*

## 終わりに

当時、二年前に出発した7人乗りの船・・・5人の小さな怪獣たちを乗せた船は、どこに行き着いたのか。決まった目的地があって出帆したわけではないが、これまでいろいろな場所を皆で巡り旅してきて、とりあえず一つの港に到着したことには違いない。

これからは、この7人で旅に出ることは、二度とない。それぞれが、旅の思い出をどこかにしまい、今後のそれぞれの旅の中で、そのかけらを思い出してくれればと願う。私にとっては、「ドラマを通して」格闘しながら彼らの「すべて」と全身全霊で関わった日々であり、さまざまな思いのつまった旅路であった。この船と一緒に乗り続けてくれた浩二さん、そして小さな怪獣たちとともにこのような旅ができたことを、船頭として心から感謝したい。

創作力と演技力をたっぷり発揮したドラマをきっかけに、攻撃性がほとんど消

滅していったイチゴ。強迫的にも思える性的な言動が一番強かったアングスの収束傾向と反比例するように起きた、彼女の積極的なドラマ参加と感情表現の高まり。初めは口もきいてくれなかった彼女と創れた信頼関係。リンゴの自己開示をきっかけに結べた、より確かなコミュニケーションの絆。ドラマでの表現も、また私が近づくのも一番難しかったマツオとスギオの自発性と創造力の高まり。確かに、このような変容が実現できた。しかし、今思い返せば、もっとこうすれば良かった、あんなことも試せたのではないか、などなど悔いもたくさん残っている。

彼らの生育歴や、施設での状況を考えると、感情表現、他者との協力、想像力、創造力を開発することが、どれほど重要なことかは、強調しすぎることはない。この連続セッションが、彼らの成長の糧として、少しでも役立っていくことを期待したい。

\* \* \*

私は最初、5人の「中」にいる「怪獣たち」をなだめようと格闘していたように思う。しかし、怪獣たちは、「中」にはいなかった。子どもたちは、「怪獣」の着ぐるみを着ていたのである。誰でも必要なとき、必要な場所では、そのような着ぐるみを着ざるを得ないのだ。着ぐるみを脱いだ彼らの「中」にいたのは、自分が選択したのではない環境に、傷つき、恐れ、これから様々に成長する可能性をもつ子どもたちであった。

この旅の「終着港」として、デザート

を食べた、あのファミレスをこの先一生思い出すことだろう。そしてガッシュャーンと落ちた大きな時計と、最後に私の手をぶったマツオの手を。

(完)

#### 文献

- 1 James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment (pp.67-86). Taylor & Francis Group.
- 2 Johnson, D.R. & Emunah, R. (eds.). (2009). Current Approaches in Drama Therapy. C.C.Thomas.
- 3 Lewis, P. & Johnson, D.R. (eds.). (2000). Current Approaches in Drama Therapy. C.C.Thomas.
- 4 中村雄二郎、(2000) 共通感覚論、岩波現代文庫
- 5 ルネ・エムナー、尾上明代訳 (2007)、ドラマセラピーのプロセス・技法・上演、北大路書房

# 家族造形法の深度

## 研修会のご案内

家族造形法を使った事例検討 その9

### 早樫 一男

1988年に家族造形法と出会い20年以上経過しました。最初の頃は、家族面接ケースで実施していましたが、ある時期から事例検討などで利用することが中心となり、現在に至っています。家族造形法の進行役はもちろんのこと、時には、さまざまな家族役を担ってきました。

事例検討や援助者自身の「原家族」をテーマに扱ったプログラム（京都国際社会福祉センター主催 対人援助者のための自己覚知「原家族と向き合う」 団士郎先生と共同講師を務めています）において、参加メンバーのテーマに即した、さまざまな家族造形法の展開を体験する中で、その面白さや奥深さに惹かれていきました。

ところで、先日、家族造形法を用いて事例検討している場面を第三者として、動画で見る機会がありました。

その時の率直な感想は、「いったいこれは何をやっているのだろうか？」というわかり

にくさでした。

なぜ、このような印象を持ったのかについて考えてみると、たとえば、カメラの角度や撮影意図との関連を無視できないということが浮かび上がりました。

動画は一台の固定のカメラで全体が降格で写るようにとセットされ、さらに、記録の意図を中心に撮影していたのです。非常に無機質なものであったと言えるかもしれません。

家族造形法を使った事例検討は、毎回、ある種のライブ感覚の中で、ケースと関わっているという実感があります。さらに、からだを通した感覚ともいえる肌合いや接触感、空気感や温度感を感じるようになるのです。もちろん、距離感が大きな意味合いをもたらすこともあります。

さらに、快・不快感、怒りや寂しさ、孤立・孤独感、居心地感等など、あえて言語で表現するならば、家族を造形すること（家族が造形されていくこと）を通して、何が

しかの「心情」が湧き上がってくる不思議さを参加者は感じたり、確かめ合ったりすることができるということが、家族造形法にしかない妙味であり、面白さであると言えるかもしれません。

撮影の仕方を考えることによって（例えば、カメラを複数にする、それぞれの家族メンバーの視点に合わせたアングルにする等など）、家族造形法の面白さが少しでも伝わるような工夫の余地はあるかもしれません。

映画やTVなどの映像を通して、見るものに感動を与えるといった場面では、事前にさまざまな手法や計算がなされた上で、訴えかける工夫や準備が充分になされています。

家族造形法も十分に撮影の準備がなされ、家族造形法の面白さや奥深さを伝える工夫ができない訳ではないかもしれません。

しかし、ライブ感覚からは距離が生まれた、作られた映像になってしまうかもしれません。

家族造形法の動画を第三者的に見る機会は、改めて、家族造形法の面白さや奥深さを伝えることの難しさを感じ、考えることができた時間となりました。

家族造形法を使った事例検討は家族としての体験に近づけること、援助者を含めたシステムについても考えたり、感じることができること、家族の変化のイメージを作ることによって援助の方向性を味わってみることができることなど、さまざまな発見が生まれてくるのです。

ということで、研修会の案内としては、非常に長い前置きになってしまいました。

家族造形法の面白さを動画や文章では伝えるにだけに、少しでも多くの人に直接伝える機会を作りたいと考え、次ページのような研修会を企画いたしました。タイトルは「家族造形法の深度 ～二日間 家族造形法 ざんまい～」です。

二日間の内容としては、以下のような予定です（あくまでも予定であり、告知もなく、突然、変更する場合がありますが、ご了承ください）。

- ① オープニングは、これまで、家族造形法を使ってきた早樫が家族造形法について語った後、参加者と家族造形法を体験します。
- ② 家族造形法を使った事例検討の経験を通して、古川先生・村本先生・興津先生の3人のゲストスピーカーが自由に語ります。
- ③ この機会に交流会も企画しています。立食形式で、自由に語り交流を深めたいと思います。
- ④ 二日目のスタートは、団先生の経験を通じた語りです。内容はお楽しみに。
- ⑤ さらに、「実践的事例検討」はジェノグラムと家族造形法のコラボレーション企画です。
- ⑥ ゲストスピーカーの岡田先生にも、フリーに語っていただく予定です。

家族造形法をキーワードにした二日間の研修。

初秋の京都を楽しんでいただけるかもしれません。

みなさまの参加をお待ちしております。

## 「家族造形法の深度」(研修会のご案内)

～ 二日間 家族造形法 ざんまい ～

○日時 2012年9月29日(土)13時(受付) ～ 30日(日)16時

○場所 同志社大学継志館2階 201会議室

(〒602-0932 京都市上京区新町今出川下ル徳大寺殿町345)

○定員 50名

○参加費 5000円

交流会費 5000円(立食パーティー フリードリンク付)

○タイムスケジュール(予定)

### 29日(土)

13:00 「受付」

13:30～15:30 「家族造形法を語る① そして、体験する」

スピーカー及び進行役:早樫一男(同志社大学)

16:00～18:30 「家族造形法を語る②」

ゲストスピーカー

古川秀明(ふるかわ家族カウンセリング研究所)

村本邦子(女性ライフサイクル研究所 立命館大学)

興津真理子(同志社大学) 他

19:00～「交流会」 寒梅館7階 「SECOND HOUSE WILL」

### 30日(日)

9:30～10:30 「家族造形法を語る③」

スピーカー:団 士郎(仕事場D・A・N 立命館大学)

10:30～12:00 「実践的事例検討:家族の物語を中心に」

進行役:千葉晃央(京都国際社会福祉センター)

ゲストコメンテーター(午前・午後とも)

岡田隆介(広島市児童療育センター)

12:00～13:30 昼食休憩

13:30～15:30 「実践的事例検討:家族造形法を中心に」

進行役 早樫一男、古川秀明

15:30～16:00 クロージング

○申し込み、問い合わせは メール [khayakas@mail.doshisha.ac.jp](mailto:khayakas@mail.doshisha.ac.jp)

もしくは FAX 0774-65-7097 (いずれも早極宛て)

○申し込み内容 名前、年齢、性別、所属、  
連絡先アドレス、携帯(電話)番号

○申し込み期限 8月26日(日)  
期限前でも定員になり次第お断りします。  
期限直前の申し込みは事前にお問い合わせください。

○その他

- ・宿泊が必要な方は各自で手配してください。
- ・参加費、交流会日は当日徴収します。
- ・家族造形法については、「対人援助学マガジン」のHPより、「家族造形法の深度」を参照ください。

※会場の案内



交通機関

- JR 京都駅から地下鉄烏丸線 今出川駅 6番出口から徒歩 5分
- 京阪電鉄京阪本線 出町柳駅から徒歩 20分
- 京都市バス 上京区総合庁舎前から徒歩 3分
- 京都市バス 烏丸今出川から徒歩 7分

# 旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

## ⑨組織

### 村本 邦子

「女性ライフサイクル研究所 20 周年を迎える」と題する連載を始めてしまったが、次号では研究所も、はや 23 年目を迎える。とりあえず十回あたりでいったん終えることにしよう。最終回は本タイトルに戻りたいので、今回は組織について書くことにする。初回では、組織に対する不信や嫌悪について書いた。一人で仕事をするつもりが、成り行きで仲間が増え、女性ライフサイクル研究所は少しずつ組織となっていったのだった。

基本的に私は高度な文明を好んでいない。本心を言えば、自分でそのしくみがわからないような機械は使いたくないし、生きるために自給自足をして、せいぜい物々交換をする程度でいいのではないか

しらと思っている。だから、スローライフを選択する人たちの気持ちはよくわかる。そうは言っても、投げ込まれたところは文明社会で、今のところそれなりに適応して便利さを謳歌しているが、選択肢がなくなれば、喜んで原始的な生活に飛び込んで構わないと思っている。シンプル・イズ・ベストである。

私にとって、大きな組織は複雑な機械のようなものだった。女性ライフサイクル研究所は、1 人から始めて、2 人、3 人…と何とか私の理解が追いつく形でスタッフが増え、少しずつ組織になっていった。そして、十年経って振り返った時、自分ひとりでは成し遂げられないことをやってきたことに感動した。一人ひとり異な

る人間が複数集まるからこそ、自分だけでは決してできないこと、もっと言えば、たとえ自分が何人いてもできないことができるのだ。量の問題ではない、質の問題である。月並みな表現だが、「1+1は2ではない」という一種の化学反応のようなものだ。ひょっとすると、文明も良いのかもしれない。私も年を取り、今や車に乗り、コンピューターさえ使っている。

仕事がよくできて、よく働く人ばかりが集まったからと言って、総体として良い仕事ができるわけではない。ずいぶん昔、リクルートが伸び盛りだった頃に聞いた話だが、彼らは採用試験にユングのタイプ論テストを使っていたが、会社にとって好都合な人材ばかりを採用しているとどうも組織としては何かに欠けることがわかったので、ごくわずかの割合で、わざわざ会社に不都合な人員を採用することにしているということだった。トリックスター的な触媒があって初めてクリエイティブな反応が起こるのだろう。妙に感心して聞いた覚えがある。あちこち欠けたる人間が集まって相補いあうからこそ、面白いものができるのだ。

そんなわけで、十年経って初めて事業の面白さを知ったので、せっかくだから、もう十年だけやってみようと思った。とは言え、私には、メンバーそれぞれが主体的な組織であることへのこだわりがあった。その実現のために、それぞれが自分のやりたいことを考え、実現し、お金であれ充実感であれ、そこから報酬を得るというしくみを維持してきた。いわば

一人一人が事業主であり、その総体が女性ライフサイクル研究所というわけである。次の十年では、最初の十年で少しずつ発展させてきたこのシステムをさらに洗練させることにした。この時点でも、まだ、私と他のスタッフとの間には力の差があっが、次の十年はそれを極力なくすこと、同時に、新しい人材を入れることにした。EAPの広がりとは無関係ではないが、会社の契約に基づく組織的な仕事も増えつつあった。

2002年に、まず有限会社を立ち上げたが、小規模組織とは言え、いわゆるオーナー会社ではない。最初は七百万の予定だったが、結果的に一千万の出資を合わせ、女たちの取締役会も作った。驚くなかれ、定款も自分たちで作成し、公証人役場や法務局へも行ったのだ。余談ではあるが、定款を作るために会社設立の勉強をしたが、「設立後3年は年中無休と思え」「まずは家族の理解を取り付けること。それもできないようでは、会社を回せない」というような教えがあっが、「ほう」と思ったものだ（なんていうのか、世の中のおじさま方は、そんなことを考えて会社を立ち上げるのかと・・・）。

もったも、この作業に疲れ果て、NPO法人を立ち上げる時には司法書士を頼んだ。こうして組織の発想が出てくる。自分で何もかもやるより、得手不得手を役割分担する方が世の中はずっと機能的に回るのだ。多くの人にとっては自明のことなのかもしれないが、これぞ文明の第一歩かもしれない。大阪と京都に新しく

事務所を借り、建築家（と言っても義兄だが）におしゃれで機能的な内装をお願いし、パンフレットはデザイナーを頼み・・・と多くの専門家たちの力を活用した。文明万歳。

新しい経営システムは大まかにはこういったものだ。正社員である事業主たちは、会社運営の資金を繰り出す責任を負っており、給料を自分で決めることにする。つまり、自分が稼がなければならぬ金額を逆算して、それを稼ぎ出す。非常勤である契約社員たちは、資金繰りの責任を負わず、その代わりいわば出来高払いとなる。だから、誰かに働かされているという人はいない。どんな時間帯にどれだけ働こうと自由である。稼ぎの多い少ないは、それぞれの選択である。もちろん、本人が望めば、誰でも正社員である事業主になることができる。

ただし、事務作業はペイしないので別枠で考える。会社がらみで入ってくる仕事、チームでやる仕事については、事前に責任と報酬の割合を明確にし、計算式を決める。ものの考え方についてもその都度話し合い、見直しを続けてきたが、十年もやっているのと、その手間を省くためにシンプルなルールができていく。結果的に納得したことは、大きな組織が給料の固定制を取るのはきわめて合理的だということである。完全なる公平性などない。互いの合意があるのみだ。

これで、それぞれにとって、主体的な選択としての仕事という意味付けはでき

た。あとは、良い仕事をする努力を惜しまないこと、勤勉であること、仕事を通じて社会に貢献するという意識などなど、プロフェッショナルとしての規範や姿勢は、リーダーが率先して模範となることを常に意識してきた。「子どもができたらい悪いことはできない」というのに近いものかもしれない。人としての不誠実さは自分を信頼してくれる仲間たちへの裏切りとなる。これは一人で働くより強みになるだろう。突き詰めれば、人は自分のためにではなく、大切に思う人のために頑張ることができるのみである。それから、互いに支え合うことや人生を楽しむこと。こういった空気は伝染する。うちの研究所の人たちは本当によく働く。身近な人を大事にして、人生を楽しもうとする。残念ながら、まだ伝染しきっていないのは「締め切りを守る」で、いまだにもっとも厳格なのは所長だけである。

それから、スタッフ間のコミュニケーション。スタッフの数が少なかった頃は、しょっちゅう会って話し合うことができたが、オフィスが大阪と京都に分かれ、人数も増えて、働き方もバラバラになったので、以前のようにコミュニケーションがスムーズに行くとは限らなくなった。そこで、ネット上でコミュニケーションをはかれるシステムを導入した。月1回集まって会議をもつ、テーマを決めて定期的に研究会を持ち、年1回は年報に原稿を書く、年1回は研修旅行で一緒に勉強し楽しいひと時を過ごす、クリスマスランチなどの年中行事や、NPOの定期的なイベントはスタッフの凝集性を高める

のに役立ってきた。大変でも結果的に充実感の得られる取り組みは組織メンバーのコミットメントを高める。

スタッフが良い仕事をするという目的を共有し、組織を好きであれば、自ら貢献しようとするモチベーションは高まるだろう。女性ライフサイクル研究所はスタッフ一人ひとりの総計である。20周年記念の時に、芸術教育研究所の多田千尋さんが、スタッフのそれぞれが自分の得意分野で研究所に貢献したいと努力工夫するところが研究所の素晴らしいところだと言ってくれたが、まさにそういうふうに組織を作ってきた。たまに、「研究所にとって自分は必要なの？」という問いが浮上することはあったが、研究所が誰かを必要とするのではなく、あなたが研究所を必要とするのなら、上手に使いなさいというスタンスである。誰かが抜ければ、そこに関わる事業はなくなる。誰かが加われば、そこに関わる事業が増える。スタッフの総計が女性ライフサイクル研究所という意味はそういうことである。もとより、来る者拒まず、去る者追わずのポリシーでやってきたものだ。別の言い方をすれば、誰か一人がいなければ研究所は別のものだった。

こうして少しずつ組織の力を理解するようになる一方で、私は立命館に勤めるようになり、年々、ここでも少しずつ組織に対するコミットメントは増していった。今では、この大きな組織のれっきとした一員となっている。そして、ここでも、組織という生き物を観察し学んでき

た。最初に知ったことは、組織では必ずしも常に全力をあげて仕事をする必然性はないということだ。自営で仕事をしていると、ひとつひとつの仕事を大切に行うことが次の仕事に結びつく。私の実感としてスタッフに言ってきたことは、「ひとつ良い仕事をすれば3倍になって返ってくる。ひとつ仕事を断れば、3つの仕事を失う」ということだった。そうすれば、仕事はネズミ算式に増えていくので、仕事がなく困るということはない。自営では常に全力で良い仕事をする努力が必要だが、大きな組織の仕事のなかには、たとえばあまり中身のない形式的な会議など、全力をあげて仕事をするよりも、多少なりとも気を抜いて力を蓄える方が良いものもある。選別が必要なのだ。

同じ理由で、自営でやっていると、ほとんどが自分にしかできない仕事ということになるが、組織的な仕事となると、他の人で代替可能ということになる。その人がその人でなければならぬ理由はない。むしろ、一定の均質性が保証されたものが量産される必要がある。これは気楽なことでもある。自慢することではないが（むしろ、批判されることかもしれないが）、私はこれまでの人生において仕事を休んだことがほとんどない。皆無とは言わないが、高熱が出ても、けがをしても、子どもが病気になっても、入院しても、地震や台風がきても、とにかくどうあっても何とかやりくりして、休まず働いてきた。それが職業人の責任だと思ってきたからだ。ところが、大きな組織になれば、そこまで思いつめて働かな

い方がいい。自分がいなくても組織は回るだろう。そうでなければならぬのである。この考えにはまだ慣れないが、それでも少しずつ馴染む努力をしている。

のふたつの課題は、他のスタッフたちに委ねるとしよう。

さて、研究所の今後であるが、この4月で、私が責任を持つ「あと十年」という約束の期限が切れた。もうほとんど私の力なしで回るようになっている。スタッフたちの心の中にはどこかで、なんだかんだ言って最後は私が何とかしてくれるだろうという期待があって、それがある限り組織は自律できないと思ったので、この2年ほどは本気で手を引く覚悟を示してきた。正直なところ、私の力が不要になったら、その時こそ、私が研究所をやめる必然性はなくなる。それがシステムとしての完成を意味するからだ。あといくばくか残っている課題は、当面の現状維持はできても、長期的な展望をもって事業展開ができるかどうか、次世代への引き渡しがうまくできるかどうかである。後者については、経営システムに関する私の誤算があった。正社員になったら運営の責任も負わなければならなくなるが、稼ぎが多くなればなるほど契約社員でいるより正社員になる方が得をするシステムを作っておいたので、新しい人材が育成され力をつければおのずと事業主が増えるだろうと読んでいた。が、結果的に、多くの人は選択肢があれば、リスクを負って自営で働くより固定給で安定する方を好むのかもしれないということがわかった。そうであれば、研究所の存在の意味を書き換える方が良いのかもしれない。いずれにしても、残されたこ

# きもちは、 言葉を さがしている



## 第8話

水野 スウ

### 出前紅茶@クッキングハウス

東京調布のレストラン、クッキングハウスは、10数年前からずっと、私にとってのとくべつな“学校”だ。そこは、心の病気を体験した人たちが、仲間とごはんをつくり、一緒においしく食事することを通して、元気と自信をとりもどしていける場所。レストランにやって来たお客さんも、クッキングハウスのメンバーとともにコミュニケーションの練習ができる場所。

ランチの後、長居をして、対人関係を練習するSSTやサイコドラマの勉強会に参加して帰る、という人が少なくないけど、まさに私もその一人。週一オープンハウスの「紅茶の時間」を続ける中で、私自身もっとメンタルヘルスについて知らなきゃ、とすごく思ったし、コミュニケーションの学びを深める必要性も痛感して、この不思議なレストランに、石川からたびたび通うようになったのだった。

そうやって調布に通ううち、いつしか私が、

クッキングハウスからお話の出前注文をいただくようになった。はじめて出前したのは8年前。この連載のタイトルでもある「きもちは、言葉をさがしている」という本を出した後、代表の松浦幸子さんから、メンバーやスタッフ、そしてお客様たちに新しい本のことを話してくださいね、とご注文を受けたことからだった。

以来毎年、今では恒例になった、4月の出前紅茶@クッキングハウス。昨年までのラインアップは、こんなふう。

- ・きもちは、言葉をさがしている
- ・憲法のおはなし①・憲法の主語は私たち編
- ・憲法のおはなし②・憲法改正もぎ国民投票編
- ・私のこころの旅
- ・「ほめ言葉のシャワー」から平和へ
- ・「ほめ言葉のシャワー」から春風のプレゼント
- ・「いのみら通信」の由来

4回目をのぞいて、話すテーマはすべて、松浦さんからのリクエストによるもの。本当になんて、

注文の多い料理店だ!(笑)って思うと同時に、「スウさん、次はこれをお願いします」と提示されるどのお題も、その時々私の関心事を的確にとらえたものばかりで、松浦さんの目のつけどころというか、日ごろから私をちゃんと見てくださってるのが感じられてうれしく、いっそう、自分が今、語れることを誠実に身の丈で語ろう、と思えてくるのだ。

「ほめ言葉のシャワー」というのは、クッキングハウスの学びにヒントを得て、8年ほど前から自分なりに展開しているお話とワークショップのテーマのこと。

出前の最後に、「あなたが言われてうれしい言葉はなんですか」と問いかけて、その場のみなさんが出してくださった言葉たちがあまりにすてきだったので、娘との協働編集で、同名のちいさな冊子にもまとめた。

3年前の出前では、その「ほめ言葉のシャワー」と平和がどうつながっていくのか、というリクエストをいただいて、娘と私とでそれぞれに語った。

7回目に登場した「いのみら通信」。これは、チェルノブイリ原発事故の翌々年から今に至るまで、細ぼそと出し続けている手描きの個人通信の呼び名。その本名が、「いのちの未来に原発はいらぬ通信」というのを知っていた松浦さんから、3.11後の翌月の出前には、ぜひその通信の由来を聞きたい、とご注文をいただいたのだった。

さて、この春のお題は、「心の居場所の原点」。

今年で29年目の紅茶、この12月で満25周年を迎えるクッキングハウス。こちらがたまたま先にはじめていたとはいえ、紅茶は水曜の午後だけ、つまり週休6日の、ちっともはやっていない、ただあいている、というだけの場所。クッキングハウスは週休1日の、全国からお客さんがみえる本物のレストランで、同時にメンバーさんたちの、職場で、居場所で、学びの場で、さらに訪問者の私たちにとっても、安心感や様ざまな気づきをプレゼントしてくれる場所で。

と、もともととても同列になんて語れっこない

のだけでも、それでもどこか互いに共通するもの／ことがある、と松浦さんが感じてくださっての、たぶんこのお題なのだろうなあ。そう思いながら、私自身、それを探しにいくつもりで語り始めた。

## 居場所の原点、私にとっての

居場所の原点、と問われて、まっさきに思い浮かんだ一つの場所があった。

たくさんの人から、どうして紅茶の時間をはじめようと思ったの?と訊かれるたび、「一緒に子育てする仲間がほしくてね、ただそれだけの理由で」と、私はいつも同じ答え方をしてきた。それはそれでできるとあって思うのだけでも、20数年ぶりに東京銀座のあるお店を訪ねて、そのお店の中に立った時、あ、ひょっとしたら、ここがはじまりだったのかも!といきなり時計が逆回りしはじめた。一気によみがえってきた、40数年前の感情と記憶。あの頃の私にとって、あそこってほんとはとくべつな場所だったんだ。

中学2年から3年にかけての半年間に、母を亡くし、兄が自死し、その後しばらくの私は、自分の人生の中で一番、心があぶなっかしかった時代だ。

わが家だけがほかの家庭とまったく違って見えて、なんで?なんで?と、胸の中で、怒りながらうねりながら、叫び続けていた。だけどその、なんで?は、学校でも家でも、表には決して出さない。その分、貯まっていくぐちゃぐちゃのきもちも、いつも紙の上に吐き出してた、鉛筆の芯が折れるほどの強さで。

今思えば、どのうちも違っているのが当たり前だし、またどの家庭にも外からは見えないそれぞれのブラックボックスがあるにきまっている。だけどあの頃の私に、そんなぐるりの風景は全然見えてなかったなあ。

私が高校1年生の時だったと思う。少し風変わりなところのあるボーイフレンドが、ある日、私を銀座の小さな画材屋さんに連れて行ってくれた。当時は帝国ホテルにほど近い、泰明小学校の真向

かいのビルの一角、ラッパのようなホルンのマークが目印の、そのお店だけがまわりとは明らかに違う空気。それが月光荘画材店だった。

天井からは貝殻やモビールや、麦わら菊や紅花のドライフラワーの花束がいくつもぶら下がり、床には、かつて海に浮かんでいた巨大なガラスの浮きだまや、蒸留水用だろうか濃い緑色の大きなガラス瓶、子どもならずっぽりはいりそうな花瓶、などがところ狭しと置かれていて、16の私は見るものすべてで目が☆になり、いっぺんでその場所に夢中になった。

絵の具や絵筆や鉛筆や画板や大中小サイズのスケッチブック、といった描く人のための必需品がずらりと並んだ横に、ちいさいドットのついた便せんやら、詩が添えられたポストカードやら、それに何より日記帖にうってつけの薄手のノートブックよりどりみどり！ 実際あの日以来、私の日記帖になった月光荘ノートは、どれだけその後の私のきもちの吸いとり紙になってくれたことだろう。

それからは一人でも、用などなくても、何も買わなくても、私は銀座のお店にあしげく通った。行くたびに、店主である、白髪ふさふさ頭の月光荘のおぢちゃんが、鼻眼鏡の奥からぎよろりと私を見つめて、「お～、お前か、よく来た、よく来たな」と言っただけ私を好きだけそこで長居させてくれた。

今でこそ私は当たり前のように、場、とか、居場所、とか口にしていて。けどあの頃はそんな概念も言葉も、まだ自分の中にはなかった、かけらほども。でもね、ふりかえれば確かにあそこは、まぎれもない私の「居場所」だったんだ。

## 月光荘のおぢちゃんがしてくれてたこと

学校という場で、私はだいたい浮いていたと思う。水野さんって変わってるよね、とよく言われたし、実際まわりと違っていたし、自分でも相当ヘンかも、と思っていた。そういう私に、おぢちゃんはいつも、何度でも、お前はお前でいいんだよ、というメッセージを直球で送ってくれていたこと

を思い出す。

まだ海のものとも山のものともわからない、たかだか15、6の女の子が、人生70年近くを生きてきたおぢちゃんから、ちっぽけな存在ながら丸ごと認められる。「おまいさんは、ほんとにおもしろいなあ～、いい、いい」と、おぢちゃんがうなずきながら言ってくれるたび、へえー、こんな私だけど、私は私でいいのかな、私にも何かきつといいところがあるんかも……みたいなきもちにさせてもらえる、月光荘はいつもそんな場所だった。

ごくごく若い時期に、信じてもいいと思えるおとなに出逢い、そのひとからOKをもらえる、受け入れてもらえる。それがその子の中にどれほどのちからを育ててくれることか。長いこと紅茶の時間をしてくれて、そのことの意味を今、痛いほど思う。

そうだったんだ、おぢちゃんは毎回毎回、ものすごいことを私にしてくれてたんだね。父とほぼ同じ年の明治生まれ。父に対してははるかな距離感があったのに、このおぢちゃんとのへだたりのなさはいったい何だったのだろう。

やがてこのおぢちゃんが、日本の画壇の名だたる人たちからも信頼されている絵の具職人であり、与謝野晶子さんがお店の名付け親であるという月光荘画材店の、創業者+店主であり、数々の伝説を持ってるとひとだったことが徐々にわかってきたけど、おぢちゃんと私の距離はまったく変わることがなかった。

おぢちゃんのこと大好きだったから、お店のカタログづくりのお手伝いを頼まれることは何にもましてうれしかった。学生の時に自費出版で出したはじめての詩集をお店においてもらえたことも、私にとってなんとおおきなご褒美だったろう。

でもほんとはもっと深い意味があったんだ。あの時期におぢちゃんと知りあえたこと、そのままの自分で居させてもらえて、来たい時にはまた来ようと思える、あの場所が私にあったこと。そのおかげで、私は、自分が一番私らしいと思える部分をずっと好きでい続けられたんじゃないかなんか。

通っていた十代のころは漠然としかわかってなかったことを、おとなになった私が、月光荘の懐かしい空気の中に身を置いたとたん、確かなものとしてそう思えた。それと同時に、「紅茶」という場の原点の一つがここにあったことにも、あらためて気づかされたんだ。

## 次に渡す

私は紅茶で出逢う人たち、とりわけ若い人たちに、まだそのひと自身は知らないまま持っているとくべつな something を、できるだけ伝えたい、ってずっと思ってきた。それって昔々に、少女だった私がおちちゃんにしてもらってたことだったんだ。

月光荘おちちゃんが亡くなってからもうずいぶんの年月がたつ。直接のありがとうはもう返しようがないけど、私がもらった分は、今とこれから先に出逢う次のひとたちに手渡ししながら返してゆこう。pay it forward、他の誰かに違うかたちで先贈り、ってきつとこういうことなのかもしれない、と今は思っている。

半世紀も前からの月光荘おちちゃんのご縁があったおかげで、「ほめ言葉のシャワー」の冊子も、現在、銀座のお店におかせていただいている。

昨年の夏はその月光荘のギャラリーに、親しい紅茶仲間が遺した「ちきゅう」キルトや「よだかの星」のキルトをかざり、娘が創ってきたこれまでの小冊子や紙もの雑貨をならべ、私は亡き友のキルトの前で原発を語る、という「つながる3人展」までひらくことができた。

何枚もの深い想いのキルトたちに囲まれたギャラリーの、「ちきゅう」キルトの前で、3.11 後に思う原発のこと、いのちの未来に寄せる想いのこと、そして過去の、月光荘おちちゃんとの出逢いのこと、などを語りながら、私のはっきりと気づいたことがあった。それは、この「つながる3人展」が、実は3人だけじゃなかったんだね、ということ。目には見えない、けど確かな存在として、月光荘おちちゃんともつながっての、これは「つながる4人展」だったんだ……と。

## クッキングハウスに行ったわけ

そもそもどうして私がクッキングハウスに行こうと思ったのか。

それは、様々な悩みや不安をかかえて紅茶の時間にくる人たちの話を、知識も経験もあまりない私のようなものが聴き続けていて、はたしていいものかって、一時期、とても不安だったからだ。

このまんまじゃいつか、私は紅茶を嫌いになっちゃいそう。私がおだやかなきもちで紅茶を続けていくためには、私にとって何か依りどころになる、芯のようなものが、必要だったんだと思う。ちょうどそんな時期に松浦さんと出逢って、それからすぐに東京のクッキングハウスを訪ねたのだった。

松浦さんの、誰に対してもいつも変わらない、「よく来てくれましたね」と人を迎える態度、話の聴き方、受けとめ方、耳の傾け方、わたしメッセージのきもちの伝え方、松浦さんのその在り方を支えている信念のようなもの、などなど。クッキングハウスに通えば通うほど、私の中に不思議な安心感が育っていくのを感じた。

紅茶は紅茶なりに、続けていくことにきつと何かしら意味があるんだ。知識よりも技術よりも、まっすぐな耳で人を聴き、その人の存在・beを受けとめることを、はやらない紅茶だからこそ、もっと大切にしていけば、それでいいんじゃないか。まだまだ私に足りない経験は、紅茶の時間をそのきもちで続けていけば、きつと自然に積み重ねられていくもの。

そんなふうになんかだんだんと思えてきたのが、自分なりにわかった。そして少しずつ、聴くことが前ほど怖くなくなっていく自分を、紅茶の中で、仲間の中で、発見していった。

## 聴くことの贈りもの

私にとって誰かを聴くということは、その人がこれまで生きてた人生の物語を、ほんの少しおすそわけいただくことで、それは同時に、私を映す多面体の鏡を育て、また、私の想像力を育てるこ

とでもあった、と前回のマガジンに書いた。

そして実際、たくさんの、しんどいきもちや、もう生きていたくないという人たちのきもちを聴いてくる中で、ある日ふいに、私ははっとしたんだ。若くして死を選んでしまった兄はあの頃、いったいどんなきもちでいたのだろうか、兄の話を聴いてくれる誰かが、心に寄り添ってくれる誰かが、あの頃の兄の近くに一人でもいたのだろうか、と。

十いくつかの少年だった兄を連れて父が、母と再婚し、私が生まれた。気が強くていつも前向きな母と、幼い頃に実母を亡くした、どちらかといえば内向き傾向の兄とは、なかなかそりがあわなかったらしい。

家の中には常に書生さんと呼ばれる他人がいて、父が面倒をみている、兄とは同じ年の郷里のいとこも同居していて。後になってそのいところから聞いた話では、はたちの頃の兄はよく、10日ほどふらっと家からいなくなるとは戻ってくる、という短期家出をくりかえしていたみたいだ。

今はもう80歳になるいところが、当時の水野の家をふりかえて、「あの家には、彼の居場所というもの、きっとどこにもなかったんでしょうねえ……」と、哀しい目で言った時、私は胸がずきんとした。兄にとってのあの頃のわが家の空気、というものが、いところがふと口にした「居場所」という単語から、よりリアルに私にも想像できてしまつて。

結婚して、家を出て、そこが兄の、居場所になるはずだったけど、結果としてはそうならなかった。幼すぎた私は、兄のきもちをほんのちょっとだってわかろうともせず、兄のしたことを、どうしてあんなことしたの？ なんで、なんで？ と問うふりをして、心の中でずっと責めてばかりいたなあ。

いろんな人の人生の物語を聴かせてもらってきて、やがて、私は兄のきもちがどんなだったか、遅ればせながら少しずつ想像するようになった。そのうちに、亡くなった兄を責めていつまでも赦そうとしない、そんな私でもういたくない、と思

えてきた。だってそれは、亡くなった兄の存在・beを、認めずに否定し続けてることだし、亡き人に対してのものすごく残酷なことじゃないか、と思えたから。

そこにやっとたどりつけたのは、間違いなく、たくさんの人が私にわけてくれた人生のpiecesのおかげだ。兄の死をそのように受けとめ直せたことは、「話す」よりもずっとbe的な行為に思える、「聴く」ことから私が受けとった、何よりの贈りものだった。

そんなきもちの過程を経て、兄の死後、40年も経ってからだったけど、私は義姉とはじめて、兄の死について語りあえた。その姉に対しても、どうかもう、これ以上自分を責めないでね、どうか自分を赦してあげてね、と心から伝えることができた。聴くことがいつまでも怖いままの私だったら、姉との、魂に響く対話なんてとうていありえなかった、と今でも確信している。

## Wonderが、またまたいっぱい

この日のお話の出前紅茶「心の居場所の原点」@クッキングハウスは、実はまだまだ終わらないので、続きはまた次号で。でも、ここで閉じる前に、出前当日、こんなサプライズがあったことだけは、やっぱり書き記しておきたいと思う。

私の話が終わったあとで、一番はじめに感想を言ってくださったのは、その日一番遠く、岩手からみえたというすてきな女の方だった。

この日はじめてレストランに来て一人でランチをし、今からお話会がありますからよろしければどうぞ、と初対面の松浦さんに声をかけられて、話の始まるぎりぎりの時間に、ほんとにたまたま、とびこみで参加して下さったのだ。

その彼女が言ったこと。「座ったとたん、もう涙、なみだ、でした。私が20代の時、おつきあいして結婚まで約束した恋人がいましたが、彼のお勤めしていたところが、今日のお話のはじめに出てきた月光荘だったんです。その彼が事故で亡くなってもうじき34年目、しかも明日は私の誕

生日。今日はまさしく、その彼に導かれてここに  
来たとしか思えません」

会場のクッキングハウスに、ええ～～！ って  
驚きの声があふれた。私も、聞いておもわず鳥肌  
が立った。こんなことが、こんなことって、ある  
んだろうか、でも、あるんだ、ほんとに、実際に、  
あるんだね。

いつもいつも思う。生きてることは、生きてく  
ことは、不思議がいっぱいだ。

うれしいも悲しいもびっくりも素敵もなみだも  
感動も怒りも切なさも美しさも空も風も心も、

wonderがいっぱい、wonderでいっぱい。  
Wonderfulという言葉の持つ本来の意味は、きっ  
とそこからきてる、と私は思っている。

そういう毎日毎日を、私たちは生きているんだ。  
そのことを、いつも以上に強烈に感じた、この日  
の出前紅茶@クッキングハウスだった。

ではでは、居場所の話の続きを、また次号で。

to be continued.

# やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 睦

## 第八章 暗闇が教えてくれること

### ■日食



つい先日、日本じゅうのあちこちで空を見上げるひとときがあった。地球から見える太陽の前に月が重なり、その部分が欠けて見え、そしてちょうど太陽の真ん中に重なった時にリングが見える金環日食。そのリングを見ようと、小さな子供からもうまもなく100歳というおばあちゃんまで、その瞬間を待ち侘びていた。こんなにまで一斉に空を見上げた日がかつてあっただろうか。少しずつ太陽に月が重なり、太陽がまるで月のように欠けてゆくのをたくさんの人が見ていたひとときである。

2009年、ここ屋久島では今世紀最も長い皆既日食が見られるということで、多くの観光客がその日に合わせて来島した。日本の陸域で46年ぶりとなったこの時の皆既日食は、奄美大島の北部や屋久島、そ

してトカラ列島など離島ばかりであったため、中でも特にインフラ整備の条件の良い奄美大島や屋久島には日食目当ての観光客が多く来島したのだが、残念ながらこの時の皆既日食はそのほとんどの島で天候条件が悪く、しっかりと太陽を見ることは出来ていない。しかしながら、この日のできごとには私に天変地異という言葉の意味を強く認識させてくれた。

曇り空ではあったが真夏の日中に、少しずつ暗くなっていき、セミが鳴き始め、街灯が点灯し、数分間は夜のように闇に包まれた。いつも当たり前のように太陽が昇れば朝がやってきて、太陽が沈めば夜になり、という日々の営みを日常として身体は自然とそのサイクルで動いているということ、そしてそのような日常のサイクルに変化が生じた瞬間が天変地異なのだと実感したのである。

### ■月食



2007年8月。日本じゅうで見られた皆既月食。月が地球の影となり隠れてしまうということで、月がその姿を現したとき

にはぼんやりとした色の月で、月が出たばかりの時に見られるその赤さとはまた違っていた。



先ほどの写真から約30分後の月。少しずつ陰からそのいつも見る月が見えてきた。この日はやはり月の明るさというものを実感し、ほんの一時間半ほどの天体ショーに感動したのだから、最後、その月が全ての姿を見せてくれた頃にはなんだかホッとしたのを覚えている。



## ■満天

昼でも夜でも、その空を見るとき私たちは見上げる、という表現をする。実際には地球上に重力で立つ私たちからその宇宙というのは上にも下にも広がっており、流れ

星が必ずしも上から斜め下へと見える訳ではないことで実感できる。

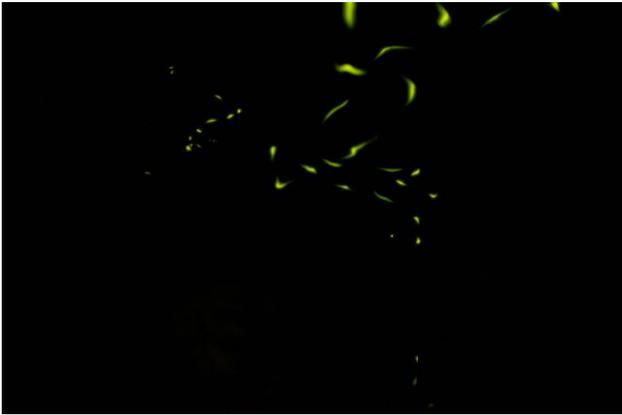


このような満天の星空は、本来どこにいても見られるものである。そして、それが見られないとしたら、月が明るい夜や雲で空が覆われている時なのだが、現実的にこのような満天の星空が見える場所はとても限られており、見られない要因を作っているのは、他でもなくまちの明かりであり、またそのようなものが少ない場所では空気も澄んでいるので、尚更きれいな満天の星空が見られる。

## ■ホタル

小さい頃、大阪に住んでいたが車で15分くらいのところにホタルを毎年見に行っていた記憶がある。今もそこではホタルが見られるのだろうか。幼少期の記憶として遠い過去になってしまっているが、今私が暮らしている場所は小さいけれど家のすぐ脇に川が流れており、家の周りでもホタル

が飛ぶのが見られるため、その時期はときどき家の全ての電気を消して庭でホタル観賞を楽しんでいる。



また、ウミガメが産卵にやってくる浜でもその中を流れる川があり、そこからやってくるホタルが海辺でも舞う姿が見られたり、島の至るところにある川でホタルが見られる場所があり、梅雨入り前の長閑な風物詩である。

### ■闇は何もかも隠すのだろうか

一般的に、闇という言葉には、見えているものを見えなくさせるとか、真っ暗で何も見えなくなるように使われているが、屋久島に暮らして、本当の闇はそうではないと感じるようになった。満天の星空も、夜空に走る流れ星も、砂浜の波打ち際やウミガメの甲羅で光る夜光虫も、そしてお月さまも、また夜空に広がる雲も、空を舞うホタルも、真っ暗な闇があるからこそ、その輝く姿を見せてくれていて、街灯がたくさんあるところ、街明かりが消えないところ、透明感のない海や空ではこの姿を見ることは出来ない。

本当の闇が見せてくれるものは本来そこにあるもの、本当の美しさではないだろうか。これが私たちの暮らすこの国の美しさなのではないだろうか。

そしてまた、空を見たりホタルを見たりという時間は自然の中で過ごすこと同様、都会の暮らしの中ではすぐに見られないこともあり、忘れがちなことなのではないだろうか。そんな忘れていたことも思い出させてくれる本当の暗闇の世界。多くの人がそんな世界に向き合う時間を少し取り戻すことが出来たらと、かなりお節介なことをその夜空に願う。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

# お寺の社会性

## 生臭坊主のつぶやき

### 七

竹中尚文

#### 1. 仏に会う

時々、「霊を見たことがあるか？」と尋ねられる。私は霊を見たこともないし、見たくもない。尋ねた人は、霊を見たことがあるのかもしれない。また、霊を見たとか、金縛りに遭ったという人にも出くわすこともある。私にはどうでもいい話しである。

仏に会うための修行をしているお坊さんの事を見聞きしたのかもしれない。その修行は大変に厳しいもので、生臭坊主の私には及びもつかない。だからと言って霊はないだろう。

仏を見る、仏に会うと言うのは、どういうことだろうか。「仏に会う」という表現は、おそらくキリスト教文化を背景に生きてきた人には奇妙な表現に思えるだろう。彼らの多くは、仏とは歴史上のブッダと理解するだろう。2400、500年も前の人物

には会えない。また、会うと言う発想そのものがない。キリスト教における神と仏教における仏はずいぶん異なる。

#### 2. 三種類の仏

仏をどのように理解するのか、三つに分けて説明したい。

まず、第一は歴史的存在としての仏である。ブッダである。2400、500年前にインドで実在した一般に言うところの「おシャカさま」である。

『ブッタとシッタカブッタ』(小泉吉宏著)で描かれるのは、それはそうだろうと思わせるものがある。それが真理と言え、真理が仏なのである。仏とは真理そのものなのである。仏とは色も形もない真理なのである。これが二つめの仏である。

色も形もないと言っても、奈良の

大仏があるじゃないかと言われるだろう。奈良の大仏は「毘盧遮那仏(るしゃなぶつ)」と言う名前がついている。名前のある仏は他に、阿弥陀仏や薬師如来や大日如来などある。仏に名前があるのはキャラクターがある。

「誰が私を救ってくれるのか？」  
「この仏様である」つまり救いの主体をはっきりさせるのである。誰が、なぜ、どのようにして、私を救うのかというストーリーが必要である。それは教理教学をともなった仏である。明確に信仰の対象となる仏である。

まとめると、一番目に歴史上に存在した仏。二番目に絶対的真理としての仏。三番目にキャラクターのある仏である。

この三つの仏の概念を我々は意識もせず区別もせずに使ってきた。私たちの暮らす社会は、仏教文化を背景としてきた。私はお寺で手を合わせる。この場合、はっきりとした信仰対象としての仏様に手を合わせている。また、実態の無いものに手を合わせていることもある。「いただきます」の合掌は食べ物を拝んでいるのではなく、「ごちそうさま」も食器

に手を合わせているわけではない。時には、人の真心に手を合わせていることもあれば、人の寛容さに手をあわせることもある。

### 3. 真理としての仏

色もなく形もない絶対的真理とは、法である。法とは仏法である。仏法であると言われてもよく解らない。

お参りで聞いた話しをしたい。そこに私がお参りに行くときの気分は、旅行気分である。きれいな景色のところである。急峻な山があって、その谷あいには村がある。山の緑から湧き出すかのようなきれいな空気を吸い込み、きれいな水が流れの音が快い。時間はゆったりと流れる。時間がゆったりと流れるのはお年寄りが多いからでもある。

そのうちの一軒で、おばあちゃんから聞いた話しである。そのおばあちゃんが嫁ぐ前に、お父さんがこう言ったそうだ。

「おまえ、つらかったらいつでも帰ってきてもいいぞ」

半世紀程も前の話だ。そのお父さんはきっと明治生まれの方だろう。立て前の台詞を言う世代だ。「一步、家の敷居を出たら、帰ってくるよう

なことは思うな」と言うだろう。ところが、お父さんの言葉は本音だった。

おばあちゃんが結婚した相手は長男である。舅も姑もいて、弟や妹が六人もいた。大家族の家に嫁いだのである。弟や妹が結婚をして独立する時にはできるだけことはしただろう。長男の家に嫁いだのだった。そんな中で自分たちの子供を育てた。

このおばあちゃんは、逃げ出したくなったこともあったかもしれない。もうこれ以上、頑張れないと思ったこともあったかもしれない。そんな時、おばあちゃんを支えたのは、お父さんの言葉だろう。だから、おばあちゃんは昨日のこのように父親の言葉を語った。「つらかったら帰ってきてもいいぞ」の言葉に込められた父親の思いをずっと大切にしてきたのだ。おばあちゃんの人生を支えた気持ちだったのだろう。

私は、この父親の生死を知らない。父親の娘を思う気持ちは、この半世紀間ずっと生き続けた。父親の命があろうとなかろうと、おばあちゃんを支えた真理である。生死を越えた真理である。色も形もない真理である。このおばあちゃんだけでなく、

私たちも仏に出会っている。

今、「絆」という言葉が語られる。絆は人と人の間だけではなく、死を越えた繋がりでもある。私のことを大切に思っている気持ちに気付いてもらいたい。私はあなたのことを大切に思っている、たとえ私が死んでも、いつまでも。どうかこの繋がりを一方的に切らないでほしい。

このおばあちゃんの子と娘は都会で働いて家庭を築いている。自分がそうであったように、おばあちゃんは子供たちとつながっている。

#### 4. もう一つの仏

仏の話にもう少し付き合っていたきたい。

ほんの数日前の話した。70代半ばのおじいさんが亡くなった。会社を定年後、夫婦でよく寺参りをしてくれた。「手を合わせて願い事ばかりする自分が恥ずかしくて」と言ってウチの寺に参ってくれるようになった。お参りをして「私たち、ニコイチです。でも、最近は二人で力を合わせても一人前にとどきません」と笑いながら言っていた。あんなふうになりたいと思わせる生き方だった。

枕経をあげるのにこのお宅を訪れ

た。おばあちゃんが泣きながら言った。

「私は何処に帰ればいいのか？」

「ここに家があるじゃない」

と息子さんが答えた。

「お父さんのいない家は、私の帰る家じゃない」と言って泣いた。

この家は3、40年前のニュータウンとして開発された場所の一角に建つ。ふたりで力を合わせて手に入れたマイホームである。月給袋とローンをにらみながら、一生懸命に働いたに違いない。このご夫婦にとって本当に大切なマイホームだったと思う。

それが「私の帰る家ではない」と言っておばあさんは泣いた。一般的なお悔やみの言葉に、「二人で建てたこの家を守って行ってね」という言葉を聞いたことがある。私も慰めに同じようなことを言ったことがある。このおばあちゃんの言葉は私の欺瞞をついた。自分の送ってきた人生で本当に大切なものは何かを言っている。

私の帰る家。私たちの帰っていくところ。それは私たちが再び出会っていくところである。私にはそれが

阿弥陀仏の世界である。人によって思うところは異なるかもしれない。この阿弥陀仏が、もう一つの仏である。

私の大切な人はどうなったのか。私はどうなっていくのか。私はいかに救われるのか。その救いはいかなるものであるか。宗教の教理の世界である。宗教の教理を体現した仏が、第三の仏である。

さらに、この教義を表す仏の話は別の機会にしようと思う。しかし、宗教の教理や信仰の世界に足を踏み入れたことのないと思っている人に、少し申し上げたい。恐れることなく、自分自身をよりどころにして、仏法をよりどころにしてのぞいていただきたい。

## 5. まとめ

仏に出会うことは、自分の人生と見つめることになればと思う。私は霊を見ると言う話しに、何かしら自分自身から目をそらせているように感ずる。人生に於いて涙することは望むものではないが、その時には必ず自分の人生と向き合うことが大切である。

## こころ日記

# 「ぼちぼち」

## (5) 大丈夫！ええ子やから…

脇野 千恵

教育現場でも、人手不足は深刻です。どこの学校も、教員数の約 2～3割は臨時職員で占められています。仕事の内容や量は、教諭と同じかそれ以上です。担任を持たされることも、重い責任を負う仕事の一つです。

新天地に転勤してまもなく、人手不足の名のもとに、担任をしないかと言われました。確かに担任はとてもおもしろいし、やりがいのある仕事です。しかし、正直報酬が高くて勤務年数が長い教諭が持つべきではないかと常々思っています。

そして、だれも持ちたがらないクラスや生徒がいると、必ずとっていいほど、事情を知らない新転任者にあてがわれることが多いのも教育現場の実態です。

こんなことを、どれだけたくさん見てきたことが…。

その学年は、一クラスの人数が 40

人でした。学年の要であるK子を誰がもつのか？という会議の中で、長い沈黙のあと

「じゃ、私が…。」

と、口にしていました。

まるで、そうなることが決まっていたかのようです。

K子は、運動能力が高く、小学校の時から地元のバレーボールチームに所属し、とても頑張っていました。中学校に入学してからも、やはりバレーボール部に入りました。学力も高く、どちらかというと顔だちも良く、笑顔が素敵でした。思春期真っ只の中学 2 年生というのは、教育用語では、“中だるみ”などといって、中学校生活にも慣れ、色々な意味において難しい年頃です。

K子は、小学校時代は優等生だったようですが、私と出会った 2 年次は、学習に意欲がなく、授業中は鏡に向かって化粧をしているか、寝ている。それが

飽きるとふらっと教室を抜け出し、保健室に行くというのが日課でした。

注意をすると、その顔でその言葉？と思うような暴言が返ってきました。が、放課後の部活動だけは熱心で、部活顧問の教師に対しては、敬語が使えました。

中学校の部活動について、色々な考えや意見があります。私自身は、もともと集団競技には関心がなかったのも、チームで一致団結とやらには一向に理解できませんでした。“連帯責任”という言葉も嫌いでした。チーム競技は今でも、どこか怪しく、どこか封建的で、指導という名の暴力が堂々とまかりとっているなと感じています。試合に勝つことは、顧問にとっての名誉です。また色々な意味においての道も開けます。そして子どもたちにとっては、顧問とのよい関係は、スポーツで高校進学を勝ち取るチャンスでもあるのです。だから、担任より顧問に作り笑顔で挨拶をする生徒が何と多いことか。担任として、なんか寂しいなと感じたものです。

K子もそんな生徒の一人でした。チーム競技では、試合に出られるかどうか、レギュラーメンバーに選ばれるかどうか、子どもたちが一番気になることです。K子もそのことについては、不安だったようです。

しかし、メンバーに選ばれるかどうかは、顧問の裁量です。K子は試合に十分使える生徒でしたが、日頃の学校生活の規律を守れていないことで、何度も

顧問から指導を受けていました。しかもその顧問は、生徒指導担当。担任として、彼女が茶髪、ピアス、喫煙と、段々エスカレートさせる行動を、知らせないわけにはいきませんでした。

K子の家族は、父は医療従事者、母は主婦。3歳上の兄との4人で暮らしていました。長男である兄は、とても優秀で、K子と同じく運動能力の高い子でした。部活動も卒業まで熱心に取り組んでいました。

学校現場では、教員の良くないところですが、兄弟がいるとついつい比べてしまうのが常です。K子もそうでした。

「兄ちゃんは、ええ子やったのに…」  
(きつと私の3人の子どもたちも、そうやって色々噂されていたことでしょう。)

K子の問題行動の度に、母親に来てもらいました。母親は、なぜそのようなことをするのか、ヒステリックに怒るばかりでした。

K子と母親の仲は段々と険悪な状況に陥っていきました。そんな最中、思春期にありがちな男女間の問題も持ち上がりました。深夜遅くまで帰らなかったりなど、担任としてどうしてやればいいのか、悩む毎日でした。

3年次になり、担任はやっぱり私しかいないと、K子を受け持つことになりました。

3年生の部活動は、夏の大会で終わ

りです。その大会に出場できるかどうか、K子も気がきではありませんでした。勉強もせず周りを困らせるような問題行動を起こしても、バレーボールだけは好きだったようです。しかし、顧問との関係は悪くなるばかり。部活へは行っていました。叱られることの方が多かったようです。あまりにひどいので、K子が目の敵のような扱いをされているのではないかと疑うほどでした。部活動に行っては、痛めつけられる日々でした。

最後の夏の大会は、何とか出場できたように記憶しています。

部活動が終わり、いよいよ高校への進路に向けての時がきました。K子の両親の願いは、兄と同じ進学校への受検でした。または、スポーツでの進学でした。

しかし、どちらにも無理がありました。

もともと勉強ができる子だったので、特に母親は希望校への進学にこだわり続け、躍起になって彼女を追い詰めていきました。家庭教師をつけられたり、外出を禁じられたりして、彼女は友達と遊ぶこともままならなくなりました。

ある日、K子はそんな生活から逃げるように、家出をしてしまいました。捜索願を出すなど手をつくし、ようやく彼女のいる場所がわかりました。

以前から交際していた彼の家にいるという情報が入りました。彼というのは、その地域では名の知れた、〇〇組関係

の息子でした。そのことは薄々感じていましたが、両親は寝耳に水です。まさかそんな人と付き合っていたとは、母親は嘆き悲しみ、父親はおろおろするばかりでした。

とりあえず、迎えに行くことにしました。学校としては、このことは両親に任せたいと考えていました。しかし、事情がややこしくならないように、担任と学年主任、そして父親で、彼の家に向かいました。

初めての者ばかり、一喝されないかドキドキでした。間違いならえらいことです。しかし、思いの他丁寧な扱いを受け、彼の母親から、

「しばらくお嬢さんを預かりたい。ただし、本人が落ち着けば、必ず自宅まで送らせていただきます」

踊りの師匠というだけあって、母親の着物姿は、“極道の妻”という映画シーンを思い起こさせました。

そのような対応に、父親はもう何も言えず、その場から立ち去るしかありませんでした。

しばらくして、K子は無事に家に戻ってきました。進路先は、親が決めた私学の高校でした。K子には、もうどこでもよかったのだと思います。すべてにおいて無気力な感じが伝わってきました。

K子の中学校生活はどのようなものだったのでしょうか？好きなバレーボールも、顧問との関係がうまくいかずぼろぼろになってしまいました。学習は、

いくら学力が高いとはいえ、やはり追いつかず成績は良くはなりませんでした。

K子は一体何をしたかったのか、どんな将来を思い描いていたのでしょうか。今さらながら、思い返されます。

卒業後、しばらく高校に通っていましたが、トラブルを起こし学校を休むようになり、休学したそうです。

その後、ダンスにのめり込み、家を出て一人暮らしをしていると聞きました。高校は、親の願いがあったのでしょうか、しばらく休学のままだったとか。いつか学校へ戻ってくれるのでは？という思いがあったのでしょうか。

今、K子の近況は伝わってきませんし、知る手立てもありません。親元を離れて元気にやっているのでしょうか？ダンスで生活できているのでしょうか？

私の前から巣立っていった子どもたちが、ちゃんとした大人になり、ちゃんと生活できているか、そのことが今一番気がかりなことです。

K子も幸せであってほしいと願っています。

(中学校教員 脇野千恵)

# セクシュアリティ相談を聴くコツ

坊隆史 松本健輔

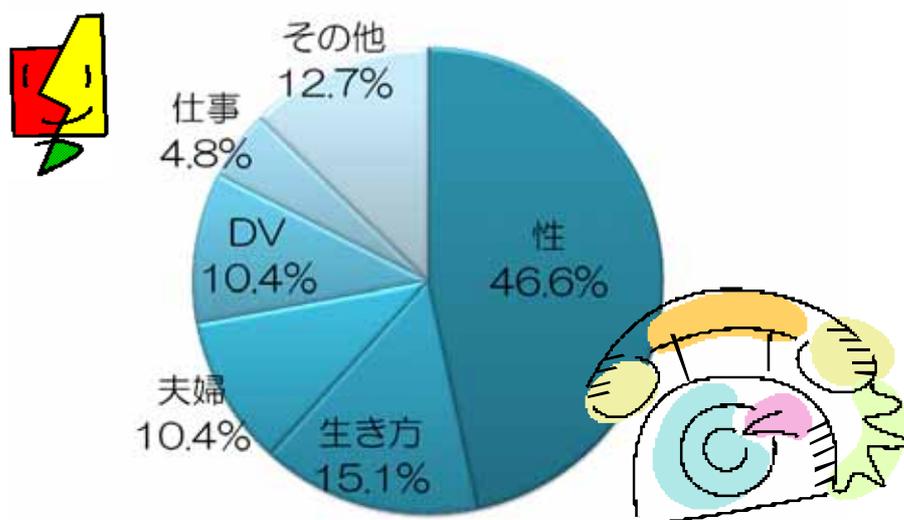
今回は男性相談とセクシュアリティについての基礎知識として、基本語句の整理と性に関する相談援助の基本的理念について述べた。今回は実践編として、事例と援助者の対応から男性セクシュアリティに関する援助について深めていく。繰り返しになるが、本連載は男性相談（男性の、男性における、男性のための相談）の立場から男性援助の実践を紹介するため、女性の援助者が同様の援助をしていくことは難しいかもしれない。その点をご留意願いたい。

## 1、男性相談における傾向

男性のセクシュアリティに関する相談は多いのだろうか。全国的な調査はほとんど見当たらないが、筆者（坊）が参加している本邦発の男性のための電話相談窓口である“『男』悩みのホットライン”の統計を紹介したい。

右の図は『男』悩みのホットラインの相談内訳である。相談としてカウントされた電話の半数近くが性についての相談である。民間団体ということ、匿名の電話相談ということもあるが、男性たちが相談先を求めているということも推察できる。内容は多岐にわたるが、大まかに分類すると、性器、

図、『男』悩みのホットライン 相談の内訳



実相談(1467件)の実績 16年間累計(2011年10月末)  
無言等 非相談(800件)はのぞく

性的嫌がらせ、性行為、性的指向、性的嗜好に関するものがある。こうした男性のための電話相談については、援助者の聴き方を含めて次回以降に紹介する。

## 2、事例からみるセクシュアリティ相談のコツ

ここからは典型事例を通して男性のセクシュアリティに関する相談のコツを紹介する。紹介する事例は実際にあった事例を組み合わせた架空事例であるが、相談のエッセンスは理解できるよう配慮しているのでご了承頂きたい。

コーラーまたはクライアントの発言は「**▲**」、ワーカーまたはカウンセラーの発言を「**△**」と区別している。

<Case1 A氏 30歳代後半 電話相談>

「**ここは何でも話していいのですか？**」

男性のための相談場面ではスタートとしてこのような前置きが多い。こうした前置きに対してワーカーは「**男性のお話でしたら、何を話されてもかまいませんよ**」と伝える。今回も同じように言葉を返すとA氏は次第に語り始めた。

「**あの…あれ…いわゆるアソコが……オチンチンが小さいんです**」

なかなか本題を話そうとしない。確かに性器を言葉にすることには抵抗があり、ためらってしまうことは理解できる。援助者も不慣れであれば双方が動揺するという状態に陥るので、性器に対する慣れは必要であろう。

「**小さいって、誰かに言われたの？**」

「**実は…中学生の時に、修学旅行のお風呂の時に同級生に股間を見られて『おまえ、チンチン小さいなあ』と言われたんです。それから卒業するまで何かと『小さい』と言われ続けました**」

語ろうとしない時は、コーラーが語り出すのを待ってもよいし、顕著にためらっているようであれば質問をしてもよいだろう。A氏の場合、ワーカーが一声かけたことで背中を押されたように語りだした。

「**それから自分に自信がなくなってしまい、引っ込み思案になってしまいました。大学に入学してから、周りがどんどん彼女をつくっているのに、自分はなぜだか勇気がわなくて…彼女ができたことなく今に至っています。だって彼女ができたならセックスをしないとイケないでしょ。『小さい』と言われるような気がして…、彼女をつくる勇気がわきません。おかげで結婚はおろか、その…恥ずかしいんですが…この年になっても、女性との経験がありません**」

A氏は堰を切ったように延々と胸の内を語り始めた。男性は喋らないイメージがあるが、「男は黙って耐える」という社会によって構築された“男の鎧”を

脱ぐと驚くように語ることができる。A氏も例外ではなかった。性器が小さいことよりも、それを出発点として性格および人間関係上の不全感をもって思春期や青年期を過ごしてしまったことが主訴であることが見えてきた。しかもA氏が語る内容には、男女交際は性交渉があるべき、男性がリードしなければならない、女性を満足させなければならない、といった伝統的な男性ジェンダーに支配されていることも推察された。

*<多感な時期に『オチンチンが小さい』なんて言われたら、傷つきますよね。すごくわかります。しかも、それからの人生にも影響が出ているのだから、あなたの傷つきは相当なものだとお見受けしました>*

ワーカーがA氏の思春期の傷つき体験、青年時代の異性関係について満足して過ごせなかったこと、それは今に至っていることの傷つきについて言語化したことでA氏の声が明るくなった。ここからは通常のカウンセリングのように傾聴を重ねた上で、伝統的な男性ジェンダーに縛られることなく自分らしく生きることでもできると指摘し、A氏らしい生き方を模索するための検討を行った。

*「これまでこんな想いを話したことがなかった。胸のつまりがなくなった気がします。また話を聴いてください」*

A氏は何かを見出したように、電話をかけてきた当初とは別人のような変化を見せて相談は終結した。

結局 Case1 では、コーラーの第一声が「性器が小さい」という訴えだったのに対し、性器の大きさに焦点をあてることなく終結した。この事例のように性器は男性相談の話題として頻繁に登場する。男性が性器について語った時、援助者は相談者の主訴が、性器そのものについてなのか、主訴を語るための伏線なのか、援助者を困らせるあるいは試そうとしているものなのか、または相談者自身の性的快楽を満たそうとしているのかを冷静にアセスメントする必要がある。そうしなければ表向きの主訴に攪乱されることもあろう。

Case1 の場合、性器が小さいことよりも、満たされない人生についての悩みが主題であり、性器の話題は「主訴を語るための伏線」であったと理解できよう。男性が性器について語る時、こうした視点をもって聴くことが求められる。

続いて事例を2つ続けて紹介する。ご自分ならどのように対応するかイメージしながら読み進めて頂きたい。

<Case2 B氏 40歳代>

*「痴漢を治したいんです。ストレスが溜まると通勤中に痴漢をしてしまう癖があって。先日、ついに現行犯逮捕されてしまいました。数日間拘留され、仕事も無断欠勤してしまい、家族や職場に多大な迷惑をかけてしまいました。幸い*

和解となり法的に裁かれることはなかったんですが、もう繰り返したくない。何とかしたくてあちこちの精神科を受診したのですが『ここでは痴漢の治療はできない』、『精神科は痴漢を治すところではない』と断られてばかりです。どうしたらいいものか… どこかいいところ（医療機関）をご存知でしょうか…」

<Case3 C氏 30歳代>

「私、ロリコンなんです。ロリコンであることに悩んでいるんです。大人の女性には全く興味がなくて、小学生くらいの女の子にはばかり興味があります。散歩をすると必ず公園に立ち寄って遊んでいる子どもたちを見ます。好みの子がいたりすると、つい連れて帰りたくなります。この前は思わず話かけてしまいました。

男性相談の現場では Case2 のように社会的および法的に逸脱した内容が語られることがある。さらには Case3 のようにこれから逸脱してしまいそうな危険性が高い相談が持ち込まれることもある。

こうした相談以外にも、聞くに耐え難い嗜好を語る男性がいる。明らかに非現実的でファンタジーを語ることで快感を得ていると見なした場合、あるいは援助者が傾聴できない内容の場合は相談を断ってもいいだろう。しかし、事実か虚構か判断がつきにくいように語る行為そのものが、男性の不器用さによる表現方法であると理解すれば、いささか傾聴しやすくなるものである。

性的嗜好は非常にデリケートな問題である。人は一つのことでも嗜好は多様であるのに関わらず、C氏のようにたまたま社会的に許容されない嗜好を持っていることで生き難さを感じている男性たちがいる。こうした逸脱的嗜好をもつ男性は、自らの嗜好を語ることさえ不自由しているのである。例えば<人にはいろいろな嗜好があるのに、あなたの嗜好がたまたま世間で許されないのは残念なことですね>という自分の嗜好が世間で許容されない無念さに沿いつつ、<好みの女の子が目の前にいるのによくガマンできましたね。大したものですよ>と欲求を抑制しているC氏を賞賛した上、<でも残念ながら、子どもに性的欲求をもつことは認められていません。子どもの性的な写真を持ち合わせることも許されていません>と逸脱行動をとらないように釘をさしておくことも重要である。Case2 のB氏に対しては、治療という手段をとらずに<金銭的余裕さえあれば、合法的に楽しめるサービスがある>と代替案を提示することもできる。性的嗜好の場合、倫理上の論理を伝えるだけでは相談として成立しないことも多い。合法的かつ現実的な選択肢を提示することで社会的逸脱行動を抑制させるように持ちかけた方が効果的なこともある。次の事例のような場

合はどうであろうか。

<Case4 D氏 60歳代>

「自分は妻が死別してから長年娘と二人で暮らしてきました。娘は残念ながら結婚にご縁がないまま適齢期を過ぎてしまいました。本人ももう結婚は諦めているようです。しかし性的な欲求はあるようで、マスターベーションらしき行為をしているようです。わかりやすい場所で行っており、自分を誘っているようにも思います。自分も妻と離婚してからご無沙汰です。父娘間で許されることではないとわかってはいますが、我慢できない自分もいます。抑えられない。今晚にでも禁を破ってしまうかもしれません。どうしたら良いでしょうか？」

Case4 の場合、「父娘で関係をもつことは道義上許されない」という道德上の説法だけでは相談者のニーズに応えられないであろう。＜誰にも迷惑がからず、双方同意のもとであれば仕方ないことが世の中にはあるかもしれない。しかしあなたの勝手な思い込みで行為に及ぶことは絶対に許されるものではない。またそういう関係が成立しても、外では話せないことだし、娘さんの人生を大きく変えてしまう可能性がある＞と念を入れておくことは必要であろう。これは援助者が父娘間の肉体関係をもつことを容認しているわけではない。あってはならないことだと明言した上で、「万が一」を想定した現実的な視点からの援助上のリスクマネジメントといえる。ここで留意する点は、援助者にとってはリスクマネジメントではあるが、その発言によって相談者が行為に及ぶことを許容していると感じさせないような言葉を選択することが重要である。

### 3、おわりに

いかがであったろうか。紹介した事例以外にも性的マイノリティで悩む相談など男性のセクシュアリティ相談は多種多様である。セクシュアリティは私たち人間にとって非常に重要な問題であるにも関わらず、泌尿器科などの場面を除いて、なかなか真剣に取り扱われてこなかったと思われる。とくに「強く、逞しく」という価値観の男性文化の中では、性的なことを語るのはいわゆる「猥談」くらいしか許されてこなかったのかもしれない。男性がセクシュアリティについて悩んでも、他人に語るのは恥とされ、セクシュアリティ関する悩みを持つこと自体が恥とされてきたのではなからうか。

こうした内容は、男性から女性援助者に対しては非常に打ち明けづらい。単に恥ずかしいという思いがあるかもしれないが、自分がセクシュアリティの悩

みを抱えているというのは重大な「男の弱み」であり、そのような弱みを女性に打ち明けるのはもってのほかという意識を持つ男性も多い。女性の援助者が対応すれば、いわゆるセックステレフォンとして扱われてしまうこともある。

筆者たちのような男性の援助者が聴く場合、同じ男性同士として、当事者性をもって聴くことができる。つまり、セクシュアリティに関する悩みは、男性が男性の悩みを聴くというスタイルが有効に作用している代表的な相談内容といえよう。確かにセクシュアリティについて真摯に向き合うことは援助者にとっても気恥ずかしい思いもあれば、聴きにくさもある。しかし、一人の男性がセクシュアリティについて悩んでいることを真摯に傾聴していくことは他の相談と何ら変わりないと思う。

性的マイノリティ、性犯罪などセクシュアリティに関する男性の社会病理や行動上の問題がますます注目されるようになってきている現在、一般論や伝統的な心理臨床モードだけでは対応しにくい相談が多くなってきているように感じる。セクシュアリティに関してはその典型であり、こうした相談に出会うと一見困惑もするが、男性援助の本質に出会うこともできる。うまく対応していくためには男性ジェンダーを意識した援助（Men's gender Sensitive Approach：M S A）の視点も必要であろう。

（文責：坊 隆史）

# ノーサイド

## 禍害と被害を超えた論理の構築

### ( 5 )

#### ～混乱からの脱出～

## 中村周平

今回は、入院中にあったラグビー部の指導陣や学校側とのやりとり、退院して在宅での生活に移行していくところについて触れていきたいと思います。入院していた当時、私は自分が負った障害のことで精神的にかなり余裕のない状態でした。それでも、事故についてはしっかりと原因を把握してくれているものだと思っていました。しかし、時間が経つにつれ様々なことが明らかになっていきます。また、現代医療の限界を痛感した両親は、在宅での生活を模索していくことに。それは、徐々にではありましたが、事故後の混乱から抜け出していっていることを意味していました。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親へのインタビュー」も引用しつつ、当時の私や両親の心境について書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=Hとする。

### 1 監督からの突然の知らせ

「あと、どんだけこんな日が続くのかな、いつ退院できるかも分からない不安だらけの日々を送っていた中、病院に見舞いに来てくださった監督の口か

ら、突然、私の首の上に乗ったかもしれない部員の名前が告げられました。

S:「最初は、事故が起こってすぐはそれ(事故のこと)どころじゃなかった。(中略)2月ですね。監督の方から...病室に突然来はって。(中略)病室に来はった時に僕は何も聞いてないのに『お前の首の乗ったのは○○やねん。でも許したってくれよ』ってパツと言わはって。僕自身もそれまで知らなかったので『あー、あいつやったんか』っていうのと、体も大きかったんで『あんなけ大きい子がのってしまったんやったら、こんなに大きな怪我につながるかな』っていう気持ちもありました。逆に監督が『許したってくれよ』って言ったときに、自分の中ではその子を責めるつもりは、その時からまったくなくて...もし、自分が逆やったらこれはしんどいやるなって。彼もその時乗ったことは自覚してるやるなって、これ逆やったら絶対キツイなって思ったんです」

I:「なるほど、うん」

S:「全然恨んでませんっていうことは監督に伝えて、その時はそれで終わったんですよ」

あのグラウンドにいた30人の部員誰もが、怪我を

する可能性があったし、誰かに怪我をさせる可能性もありました。事故の直接の被害に遭ったのが偶然、私であったというだけで、もし逆の立場だったら本当にどうしようもない気持ちに立たされていたのではないかと...そのことを考えたら、怪我をさせてしまった部員も、今辛い思いをしているのではないかと思っていました。

## 2 入院生活後期

### 1) 現代の医療に対する反発

募る不安を和らげてくれたのは、少しでも回復に向かって努力していこうと、気持ちを前向きにさせてくれる方々との出会いでした。事故後 1 ヶ月目に病室を訪れてくださったのは鍼灸師の方でした。両親は私の事故が起きる以前から、洛西近辺の中学校でラグビーによる大きな事故が起きていたことを耳にしていました。「そのご家族と会えるのであれば、ぜひとも会わせてほしい」。監督にお願いしたところ、すぐに会わせてもらえることになりました。実際にお会いすることができたのはご両親で、事故やりハビリのことなど、私の両親がこれまでなかなか聞くことができなかつたことを教えていただくことができました。その話の中で「是非訪ねなさい」と勧めてくださったのが、その鍼灸師の方でした。治療をお願いした当初、「治療は 1 年や 2 年で終わるものではないから...」と、この治療を施していく責任の重大性から断るつもりだったそうです。しかし、自分たちの周りの本当に多くの方々が直接治療をお願いして下さった結果、受けてくださることになりました。

また、遠く北の大地から発信された情報も、私を大変勇気づけてくれるものでした。私の事故から遡ること 9 年前、自転車の転倒である女性が頸髄を損傷する事故に遭われ、一時は、瞬きと自発呼吸しかできない状態にまで陥りました。しかし、以前から家族ぐるみで交流のあった男性の独学によるトレーニングと周囲の方々の支えによって、松葉杖で歩くまでに回復されました。その男性が数年後、事故の経緯やトレーニングについて詳細に記録したものをネット上に配信。「医師からは『もう歩けない』と宣

告されたのになぜ?」「どんなトレーニングをしたの?」その情報を知った同じ障害を抱える人達から数えきれないほどの連絡があり、また同時にその情報も全国に広まっていきました。

I: 「退院するときは、自分の体、動かへんという認識はあったん?」

S: 「そこはイレギュラーというか、他の人やったら、受容があって、残存の機能を使ったりハビリをすると思うんですけど。鍼の先生が事故後一ヶ月後から病室にはいって治療していただいていた...」

I: 「自分の入院してる、なるほど」

S: 「あと、北海道の方ですよ、この間の授業の時話してた。自転車事故で首やらはった女性の方を松葉杖で歩くところまで回復させた方がいはるんですけど、その人のところに親がコンタクトをとっていたので、(中略)こういう人もいるからあきらめたらあかんっていうのは親からも伝えられたし、いろんな情報ももらったりとか、鍼の先生も以前治療してはった人が立って歩くところまで回復させた方もいるっていう話もしてくれてはったんで」

事故後、ネット上で偶然その情報を知ったコーチがすぐにその男性に連絡し、つながることができました。その翌日には監督が数百枚にも渡る「事故の経緯やトレーニングについて詳細に記録したものを印刷し、病室に持ってきてくれました。「自分以外にも頑張っている人がいる」、その人たちの存在が漠然とした障害に対する不安を打ち消してくれました。

そして何より、現状を受け入れることに大きな抵抗がありました。

S: 「なんかそこまでいなくても、このまま終わりたいくないっていう気持ちが。思い描いていた「立って歩く」っていうのは、「元に戻る」っていうのは難しいかもしれないけど、ちょっとでも自分ができることを...自分の気持ちに正直になったら、今の病院のリハビリとか、今の現状を受け入れなくなかったというか、それに対する反骨心というか。医者があかんといつたから、今の医学が回復できへんというから、じゃあ全部諦めてしまおうかなっていうときに、諦

めたくなかったというか、なにかあるなら、それに頼っていったってちょっとでも自分の体が少しでも動けばいいなって」

I:「という、退院するときはそういう気持ちを持ってたわけや?」

S:「今でこそ、はっきり言えるけど、当時は医療に対する反骨心で動いてた気がしますね」

「最初から何もかも諦めてしまうのではなく、少しでも機能回復を、自分のできることを増やしていきたい。壮大過ぎるかもしれないが立って歩くことを最終の目標にしていました。どこまで回復するかわからないという不安は常にありましたが、現状の医療に対する反骨心が当時の原動力でした。

しかし、その思いが強すぎたことで「今自分でできること」であっても、ネガティブに感じるものは拒否してしまうということも起きてしまっていました。病院で「顎で操作する電動車いすに一度乗って見ないか」と、リハビリの先生方に勧められたときのことです。

S:「医療に対する反骨心の延長線上で、そのころとか、顎で使う電動のやつ(車いす)は使えたんですね。病院からもそれすすめられて...そこでそれを使ってしまったら、自分の中でそこで OK みたいな。本来なら間違った考え方やと思うんですけど、当時はなんかこんなすぐ使えるし、またほんまに必要なった時でいいし、それまでは、使いたくないと思ったんですね」

I:「そこらへんが偉いわ」

S:「もっと手で操作する電動が使えたり、自分でこげる車いすが使えるようにとか、もっと回復しているなら車いすとか使いたくなかったという思いがあり、自分で動けるものには頼りたくなかった。今思えば、自分でできることをしていかなかったとも言えるんですけど」

I:「その、ある種、自分の未来や自分の体に対して、ある意味期待もあったわけや?」

S:「そうですね」

当時、移動の際は常に誰かに押してもらわなければならない「介助式」の車いすに乗っていたため、「少

しでも動く部分を使って自分のできることを増やして欲しい」というリハビリの先生方の思いからだったと思います。事実、顎で操作する電動車いすであれば自分の行きたい時に行きたい方向に動くことができました。しかし、当時の自分はそれでは現状に満足してしまい「機能回復」への気持ちが薄れていくような気がしてなりませんでした。結局、電動車いすの訓練は一度だけで打ち切ってしまいました。

そして、手術前におこなわれた主治医からの宣告を、両親は私に伝えようとはしませんでした。

S:「リハビリとか機能回復についてはどう思った?」

(中略)

H:「医者からは回復の可能性はないって言われたやんか。でも今、回復してる人らでも、みんなそう言われてる、その中にも回復している例がある。そう言われても、回復しなくて、医者の言われた通り、そういう道をたどっている人が圧倒的に多いやんか。回復している人に共通しているのは、医者の言われた通りではなく、可能性にかけてとりあえず、体を動かし続ける、常に刺激を与え続ける。そのこと繰り返すなかで、今の医学の常識とかよりかは、回復してはるという事実もいくつか知ることができたから、その可能性にかけようと思ってるし。そういう人達がいるということは否定できないから周平がそうならないとは絶対に言い切れない。いつか、回復した人みたいになれたらいいよねっていう思いは常にあったし。今できること、いいって言われてることはなんでもしたい。あとで、あの時こうしてたらよかったのっていう悔いは残したくないなって。だから、そのことについて、協力してくれた、高校の先生も交替でストレッチをしに来てくれたり、友達に来てくれたりとか。一日の中で、なんども刺激を与えられるように、鍼の先生が来てくれるようになってからも、その先生がいない時間にできることを教えてもらったり(中略)ちょっとでも早い時期から、そういう刺激が与えられることはいいことやと思ってたし。その結果、100%歩くところまで回復するんやっていう、確信はどこにもなかったし。でも何もしなければ、お医者さんの言うとおりになってしまうんやろう。だから周平には明るい希望の面をで

きるだけ伝えたいと思ったし、それが、よかったかどうかは、結果として、どんなに厳しいかを伝えな  
あかんかったのかな？っていう思いはあるけれども、  
その時はそういうことがプラスに働くとは思えな  
かったから」

自分がどのような状況に置かれているかも把握で  
きていない私に、二度と歩けないという「宣告」を  
し、顎で使う電動車いすとマウススティックを使う  
ことに慣れるための「リハビリ」を受けさせることは、  
決してプラスにならないと考えたためでした。

そして、その思いは医師の言う「専門的」なりハ  
ビリ施設を見に行っても、揺らぐことはありません  
でした。そこでおこなわれている「リハビリ」も残  
存機能を鍛えることで、いかに早く社会復帰を目指  
すかということに重点が置かれて、動かない部分  
に可能性を見出す「機能回復」とは全く違うもので  
した。本来であれば、受傷直後運ばれた、いわゆる  
「急性期」の病院を出た後は「専門的」なりハビリ  
がおこなわれる病院への転院を考えるもの。しかし、  
私の場合、障害の程度が重かったために、その「専  
門的」な病院に受け入れてもらうこともできません  
でした。また、私や両親もその様な病院に転院する  
ことに大きな意味を感じないということもありまし  
た。

S:「最初主治医から『3ヶ月後には専門的なりハビリの  
病院に』って話もあったけど、結果的に鍼の先生か  
らいい噂をきかへんかったってのもあったし。何よ  
り病院に連絡をとってみたら、『上腕二頭筋に反応が  
ないひとは受け入れられない』、結果的に受け入れ  
てもらえないと。最初入った病院以降の行き先って  
いうのは、行きたくなかったし、病院の方からも受け  
入れ拒否という形になって」

(中略)

T:「周平が一般病棟にいたころに、他の病院にもたくさ  
ん見に行ったしな。いろんなことを総合してみて、  
周平がリハビリの専門の病院に行ったとしても、行  
けないというのもあるけれど、そこで回復するとい  
うか、回復のためのリハビリであるとは思えなかつ  
た。残存機能を鍛えるっていう、いわゆる日本の病

院で。そのころ日本で一番進んでたと言われる、大  
分の病院でも最終的には残存機能を中心にやって  
感じやったし」

「医師から可能性はないって言われた。けど、や  
らないで後悔するよりは、ダメもとでも、今できる  
ことをやりたい」。その思いを支えてくれる人たちの  
存在も大きいものでした。一人は、前にも触れた、  
自転車事故で頸髄損傷となった女性とトレーニング  
に当たられていた男性の方である。事故直後につな  
がることができ、「実際に回復して歩いている人がい  
る」という事実は、「残存機能」を鍛えることを目的  
とした日本の現代医療と比べて非常に期待を寄せる  
ことができるものでした。そして、もう一人は同じ  
怪我から回復された方の紹介で来てくださるよう  
になった鍼灸の先生。事故後一ヶ月から、病室に  
来て治療をおこなってくださったこの先生は、一  
治療家としてではなく、一人の人間として、私や家  
族の「これから」に協力してくださいました。「君が  
諦めない限り僕はこれからは付き合う」という言葉  
には何ものにも代えがたい心強さを感じました。  
その後、病院を出て、家でリハビリを続けていく  
ことを模索するようになっていきます。

T:「だから、在宅に賭けてみようよ、北海道の方  
のリハビリと鍼の先生の治療の2つに賭けて  
みよう、そのために家を改装するとか...それで、  
どこまで回復するかはわからへんかったけど、  
今の状態よりは悪くならへんやろうって」

H:「鍼の先生の話ではまずは3年。3年が5年、  
10年になってもあきらめずにがんばりたい  
っていう話はしてた。治療の経緯をみてい  
くなかで、周平は重症やってことはいうた  
から、歩くまでの回復はあかんのかなって  
のはどっかでちょっとずつ思わなあか  
んのはあったけど、何もせずにおいて、  
どんどん体がダメになっていくよりは...」

今の医療制度では、医療点数の関係でひとつの病  
院に入院していただける限界が、半年間とな  
っているため、3ヶ月を過ぎたあたりから  
転院を迫られていました。

S:「そういうのが続いたあとに一度、退院するという  
ことを踏まえて、日赤からすぐ退院するのは難しか  
ったし、とりあえず、洛西シミズに転院してから...」  
H:「とりあえず、日赤はそろそろ出てくださいという  
状態で5カ月いたから。難しかったというか、転院  
先としてリハビリ専門の病院っていうのは私らも望  
まなかったし、結果として、おいでとは言わなかつ  
た。在宅になるにあたって、日赤に主治医さんを持  
ったまま、在宅になるのは距離的にも心配やった。  
そやし地元で主治医を作りたいねって言うので。本  
来、急性期の病院から急性期への転院は、受け入れ  
る側からも困らるので、将来的にはリハビリ専門  
病院も考えなあかんのやけどっていう風な曖昧な感  
じでシミズには受け入れてもらった。なかなか受け  
入れ先が決まらへんから、しばらくはそこでって、  
シミズは受け入れてくれたと思うけど」

在宅に移るのであれば家の近くに主治医を見つけた  
という思いから、一度地元の病院に転院しました。  
そして、事故から半年が過ぎようとしていた2003  
年5月地元の病院も退院し、在宅の生活に移ること  
となりました。

## 2) 事故に対する温度差

事故から時間が経つにつれ「事故に遭った本人や  
家族」と「事故に関わった人たち」との間に、事故  
に対する気持ちの温度差を感じるようになっていき  
ました。

S:「家の近くに帰ろうってことになって、ただ、すぐ  
日赤から帰るが難しかったので、1ヶ月転院するって  
形で地元の洛西シミズ病院に首の専門の先生がおら  
れたので、そこに転院してそこから退院する手続き  
しよかって。そこに移ったのが4月の頭ぐらい」

I:「なるほど、なるほど」

S:「成章からもチャリンコで10分なんで...僕その頃、  
幼かったと思うんですけど友達が見舞いに来てくれ  
ると嬉しくて、なかなか会えへん友達やし、こんな  
け遠かった(第一日赤)のに来てくれて、洛西シ  
ミズやったらもう少しみんな来やすい環境になるん

かなって。監督らがなかなか来れずにはいったのも、  
こんだけ近くなったらちょっとぐらいは顔見せに  
来てくれはるかな、両親とも「最近、なかなか来て  
くれはらへんね」っていう不満ではないですけど、当  
初の気持ちからはちょっと離れてきてるかなって  
いうことを話してたところで。でも洛西シミズに移  
ってからさらに、連絡が途絶えるようになって、ホン  
マに週に1回来なくなって、月に1回、2回...顔  
を見たことがなかったですね。入院中の学校側との  
気持ちというのは、そんな感じですかね。睡眠導入  
剤も飲んでたりして、入院中の記憶が飛び飛びにな  
ってるのがあるんですけど。鮮明に覚えてるのは、最  
初はガッツリ関わってくれてはったのが、時間が経  
つにつれて少しずつ離れていったはるのかなって  
いう」

足が遠のいていくことに寂しさを感じていなか  
ったと言えば嘘になりますが、決して毎日顔を合わ  
すことを望んでいたわけではありませんでした。病  
院に来られないことで私の体の様子や、家族が抱  
えている悩みなどが共有されなくなっていくことを  
危惧していたのです。退院を見越して、家の近  
く(成章高校からも近い)の病院に移った後も監督  
やコーチが来られる頻度は少なくなっていくば  
かりでした。

その寂しさに拍車をかけたのが、監督が高校日  
本代表のコーチに選ばれたという話を本人から聞  
かされたときでした。

S:「許したってくれよって来てくれはったときにも  
う一つ言われたことがあって、JAPAN...高校日本  
代表のコーチに推薦されたから『俺、行ってくる  
わ』って言わはったんですよ。それって指導者  
にしてみれば名誉なことかも知れませんが、実  
績が認められたことやと思うんですけど、僕や  
家族からしてみれば『えっこの時期に』って  
いう...まだ事故から3ヶ月も経たへんうちに、  
家族もいっぱいいっばいいっばいときに  
コーチの推薦受けてどこいかはるんですか  
っていう気持ちが」

I:「それはわからんでもないわな。(中略)これ  
に対しては、えーっと思ったわけやね。それは  
そうやな、こっちは大変やのに」

S:「自分のことも全くわからへんし、家族は悩んでるのに」

監督の口から「行ってくるわ」という言葉を伝えられたとき、私は「おめでとうございます」と言うことができずでした。憤りや寂しさは一瞬のうちに通りすぎてしまい、ただ、そう言う他になかったのです。「僕はこんな状態で、家族も大変な毎日なのに事故はすでに過去のことなのか」と、込み上げてくるものがありました。

そして両親も、ラグビー部や学校関係者の足が徐々に遠のいていくことを直に感じていました。

S:「一般病棟に出てきてから監督や部長がだれか来てくれてはあったけど、なんか足が遠のいていくなっているのは母と話をしていた気がする。『今日は来はらへんかったね』という話が少しずつ増えていったような。忙しいのかなって」

H:「ラグビー部の首脳陣ではなくて、学校の先生方が交替で足を動かしてきてくれたりとか、気功をやっているご夫妻が気をおくりに来てはったりとかあったやんか。毎日が2日にいっぺんになり、一週間にいっぺんになり、1ヶ月にいっぺんになりってみたい遠のき方はしていた。ある日(監督が)マネージャーしてた子と突然やってきて、『実は首の上に乗ったのは』っていう話をしに来たのは1ヶ月後くらいちゃうかな?ひとりでは来づらかったのかなって。なんでかなって」

S:「仕方なかったのかなって思う。ある意味、事故から1,2ヶ月立ってきたら、部活のことずっとほっとくわけいかへんし、担任もってたら、ずっと来るのは難しかったかもしれんけど...当時の心境としては『(こなくなるの)早いよな』事故のこと過去のことにするのは早い。まだ僕ベットの上ですけど...みたいな思いはあったな。

ラグビー部の関係者が来られないときは、高校の先生方が交替で足を運んでくれていましたが、それも次第に少なくなっていきました。

そして、監督が、コーチの推薦を受けたという話は両親にとっても、事故に対する感覚の違いを感じる出来事でした。

S:「監督がジャパンのコーチの話をしにいったときに、僕の中で境界線ではないけど、形として、気持ちが離れていく出来事やったと思うけど。その時二人共いなかったよね。(中略)それって思うことあった?両親の目から見て」

H:「そういうことは辞退はしないのね、学校がこんな大変な時に、一人の子ども的人生が変わってしまった大きな事態を抱えている時に、そういうのって受けちゃうやんか。そういうのは家族で話していた気がする。やっぱり温度差というか...それはきっとあなたが同期生が卒業するときも、卒業する時の送別会で、監督やらコーチに手紙(自身の事故が過去のものになっているので考えなおしてほしいという内容)を渡したでしょう?そのあとに慌てふためいて、毎日のようにきた時があったやんか?そこで話している中で『周平のことを忘れていたのちゃう』『60分の1は周平のことと思ってラグビーをしていたんです』って言ったことがあったやんか。その感覚なんか。成章が認められて、少しでも強くなっていくために自分が力を蓄えることが、遠い意味ではあるけど、それは周平のため、あなたをいつか花園に連れて行くためっていう風にいえばそうなんやろうけどね。あなたの嫌いな体育会系の独特の理論というか。周平にそうすることが、きっと『僕のために』って周平が思ってくれたのとちがうかな。その時あなたが『おめでとうございます』っていうたのが、あんた大人やなって」

S:「とくにそれ以外にも考えられへんかったんやけど。それしか言えなかった。それが自分の中で覚えている、事故が過去のことなんかなって思ったという一つの出来事やったという」

「チームを少しでも強くして成章高校が少しでも認められることが、あの花園に連れて行ってやるのが、周平のため」と、考えるラグビー部の指導陣と、「少しでも息子や中村の家族に寄り添ってほしい」と、望んでいた家族との間に大きな感覚の違いが生まれ始めていました。

# それでも「遍照金剛言う」 ことにします

---

---

## 第4回

### 脱精神科病院「アメリカの脱精神科病院」

## 三野 宏治

現在、わが国の精神医療・保健福祉は転換期を迎えている。2003年に厚生労働省の精神保健福祉対策本部の中間報告が公表された。そこで示された重点施策に精神病床の機能強化・地域ケア・精神病床数の減少を促すという精神医療改革がある。この方向性はこれまでの精神障害者／病者ケアが「入院中心」であったことを国が認め、精神病床に入院中の患者約33万人のうち7万2千人が「受け入れ条件が整えば退院可能」である社会的入院患者としたうえで2013年までにその解消を図るというものである。この指針では具体的な取り組みとして包括的地域生活支援プログラム（ACT）などを活用するとしている。包括的地域生活支援プログラム（ACT）と銘打ってはいないが、2012年2月に多職種チームによるアウトリーチによって精神障害者が病気の再発や再入院を防ぎ地域生活を維持できることを目的とした「精神障害者アウトリーチ推進事業」が予算化された。予算（案）概要として24年度は785148000円が計上され、1箇所につき定額2804万円が助成される。さらに補助採択順位として、同一病院内でアウトリーチチーム設置と病床数削減を同時に行うところが最優先であり、次いで同一圏域でチーム設置と病床数削減、異なる圏域でチーム設置と病床数削減というように病床数削減を意識した設計となっている。

包括的地域生活支援プログラム（ACT）はアメリカで開発された手法であり、1963年にケネディが教書で謳った「精神障害者の地域ケア」を起点として始まった脱精神科病院政策の結果生まれたものである。わが国におけるACTの取り組みは千葉県や京都府、静岡県等で行われているが国によって認められたものではない。

アメリカの脱精神科病院が本格化したのは1960年代後半から1970年であるが、政策として地域ケアの整備が立ち遅れてきた。その中で退院を強いられた精神障害者／病者たちは地域で放置されていた。その精神障害者／病者に対して民間団体がおこなった優れた地域ケアシステムの一つにACTがあり世界的な広がりを見せている。

では精神障害者の入院治療から地域ケアという視点の変化はいつごろから言われたのか。入院先である精神科病院はどのように増えたのか。また、ACTなどの地域ケアのプログラムを有するアメリカはいかにして入院中心から地域ケアを遂げたのか。今後、「脱精神病院」に関しての論考に連載を費やすこととする。

## はじめに

アメリカにおける脱精神科病院の歴史的転機の一つは1963年に作成された「ケネディ教書」(Special Message to the Congress on Mental Illness and Mental Retardation. February 5, 1963)であるといえる。この1963年の大統領教書は翌年の10月に邦訳され、財団法人日本精神衛生会の機関誌「精神衛生」92-93号(昭和39年10月31日発行)に「精神病・精神薄弱に関するケネディ大統領教書」として掲載されている<sup>1</sup>。

教書の中でケネディは、州立の精神病院における精神病/障害者の置かれている現状を批判し地域でのケアを謳った。翌年1964年にケネディは暗殺によってその生涯を閉じるが、後年州立の精神病院から入院患者たちが退院させられる。教書におけるケネディの志向が脱精神科病院政策の原因の全てではないが起点となったのは確かであろう。ただ、教書におけるケネディの考えについては肯定的な評価が下される一方で、彼の死後に起こった脱精神科病院政策に関しては退院後の支援策や地域ケアのなさへの批判が多い。

そこで本連載で「ケネディ教書」に至るまでのアメリカにおける精神病/障害者へのケアと「ケネディ教書」後の州立精神病院の解体への経緯と実態について述べる。論をすすめるにあたり、まず本稿では19世

紀末からの精神医療の状況から1909年のピアーズの精神衛生運動に至る経緯を述べる。そして1930年代に行われた州立精神病院の調査を紹介する。

## 19世紀までの精神障害者/病者ケア

「精神病・精神薄弱に関するケネディ大統領教書」(以下、ケネディ教書)で脱精神科病院の方向性が示されたのは1963年であるが、本章では脱すべき精神科病院がいかに誕生しその性質を変えていったかについて述べたい。

19世紀の初頭まで精神障害者へ対する処遇は保護と隔離が中心<sup>2</sup>にしたものが主で、治療に関しても拷問的治療が多くみられた。八木・田辺は著作で18世紀の治療について、「18世紀の治療は主として苦痛と恐怖を惹起することであった。生理学者のブラウン(1735-1788)は、「患者を威嚇し、恐れさせ、自暴自棄に駆り立てる」ことを推奨し、ライルは『精神病に対する精神療法の応用に関する狂詩曲』(1803)の中で文字通り熱狂的に「無害なる拷問」を提唱した。患者を正気に戻すために水中に投げ込んだり、大砲を発泡したりして、怒りや嫌悪や苦痛を惹起することが有益であると信じた。」と述べている。また、古代から中世にわたって普及した治療法に吐下剤と瀉血があり病気の種類を問わず用いられたようで、精神医療に関してもアメリカ精神医学の父といわれるラッシュ(1745-1813)も吐剤・下剤・瀉血を「三位一体」

として推奨した。これは精神病の原因が殆どわかっていなかったため、ある仮説に基づいての処遇であった。例えば精神病に対する瀉血と吐下剤の使用は「悪い酵素によって変化した液体が絶えず精神の上に作用しその均衡を乱す」(ウィリス：1621 - 1675)や「脳の中に血液が多すぎるのがあらゆる精神病の原因になる」(コックス：1762 - 1822)という推測によって多用されたと考えられる。前掲したウィリスは「患者たちを医薬で治療するよりは物置小舎などで拷問や 苛責を用いて処遇するほうがずっと早く治ることがある」と述べたことから、当時の拷問的な治療は精神病の治療方法の主流であったようである。

これら拷問的な精神病治療の状況を改革した人物がフランスのピネルであった。1793年にピセートル救済院の精神病棟の医長に就任したピネルは「鉄鎖と暴力」を廃止し、転任したサルペトリエール救済院でも精神科病院の改革を行った点においても評価を受けている<sup>3</sup>。ピネルは病院改革のなかでモラルトリートメント(道徳療法)を取り入れた。

モラルトリートメント(道徳療法)とは、ピネルやイギリスのテュークやイタリアのキアルジ、ドイツのライル、アメリカのディックスなどによって精神科病院に導入された治療活動の総称である。精神障害者/病者と職員(医師や看護師など)が花壇の手入れや食事をともにするなどの関わりを持ちその関わり中で回復を図るというものである。原則的に小規模(多くても250人以下)で行われていた。モラルトリートメントの一部は作業療法の源流としても認識されており、精神科医の秋元波留夫は著

作(1991)の中でアメリカの19世紀初頭から後半のモラルトリートメント(道徳療法)に関しての医師たちの論文を紹介している。例示するとベンジャミン・ラッシュ(1745 - 1813)<sup>4</sup>は「心の病気に関する医学的探求と観察」(1812)の中で「運動、特に乗馬。労働、ことに屋外の労働はさらに有効である」と述べており、やトーマス・S・カークブライド(1809 - 1883)<sup>5</sup>は「精神科病院で行われている抗菌と隔離の習慣は好ましくない」と述べている。

ヨーロッパにおいてはピネル以外にも精神科病院の改革等の事例が少数派であるとはいえ存在していた。たとえば、フランスの病院の改革がヨーロッパ各国に波及した以前から同時にドイツのミュラー(1755 - 1827)、イタリアのキアルジ(1759 - 1820)、イギリスのパーフェクト(1755 - 1827)・ハスラム(1764 - 1844)などが精神障害者/病者の人道的な処遇を主張した。フランスではそれまで一般病棟の中に精神科病棟が併設されていたが1838年法以降、精神科病棟は独立施設とされた<sup>6</sup>。このようにヨーロッパ各国には精神科病院改革の波及とともに進んだ施設が作られていく。他方、アメリカにおいての精神障害者/病者の処遇はヨーロッパとの比較において若干歩みが遅い。精神科病棟が一般病棟に併設された事象はヨーロッパのそれと同時期であるようだが<sup>7</sup>、ピネルの病院改革の波及し道徳療法などがアメリカ大陸で展開されだすには時間を要した。それはヨーロッパとの地理的な問題と、18世紀の後半に独立を果たし開国・建国の事業に労力がさかれ19世紀に入っても政治経済が不安定であり社会的混乱が続き医療にまで関心が及ば

なかったことなどが考えられる。

### アメリカの黎明期精神医療の状況

前述したベンジャミン・ラッシュやトーマス・スカターグッドなど、アメリカの医師一部もイギリスなどの施設に学び帰国後に東部の州に精神科病院が建設される。紹介したトーマス・S・カークブライドも同時期に合衆国精神病院長協会（The Association of Medical Superintendents Psychiatric Hospitals for the Insane）の創設（1844）に参加している。

この合衆国精神病院長協会はアメリカ精神医学会（APA = American Psychiatric Association）の源流である。

精神科病院の開設に尽力した医師たちとともにアメリカの精神障害者／病者に対する処遇改善に尽力したのがドロシア・ディックス（Dorothea Dix）であった。当時モラルトリートメント（道徳療法）が処されていたのは主に私立病院であり、その数も決して多いとはいえなかった。つまりモラルトリートメント（道徳療法）を受けることができたのは、その費用を払うことができた一部であり、多くの精神障害者／病者は放置されたままであった。看護の立場からではあるがドロシア・ディックス（Dorothea Dix）は州立病院を設立する運動を推進させた。ドロシア・ディックス（Dorothea Dix）に対する評価は在日アメリカ大使館のホームページ「アメリカの歴史の概要」に次のように記されている。

監獄の問題や、精神障害者のケアの問題に取り組んだ改革論者もいた。懲罰を強調する監獄を、罪人の更正を行う刑務所に変える努力がなされ

た。マサチューセッツ州では、ドロシア・ディックスが、悲惨な状態の救貧院や監獄に閉じ込められていた精神障害者を救済する運動を主導した。彼女は、マサチューセッツ州での改善に成功した後、南部にも運動を拡大した。1845年から1852年までの間に、南部の9州が精神病院を設立した。

（EMBASSY OF THE UNITED STATES IN JAPAN About the USA 2012年5月11日閲覧）

このようベンジャミンやトーマスらの医師によって精神障害者／病者に対するケアの質が高められディックスの運動によって量的な拡大が図られた。しかし19世紀の終わりから州立精神科病院の巨大化が始まる。モラルトリートメントは小規模の集団で行われる療法であるため、肥大化した州立の精神科病院では実施が困難である。加えて経済的なコストを下げるために賃金の高い医師が減らされ代わって看護助手が多く雇用された。このケアの担い手の交代はモラルトリートメントを不可能にするだけでなくケアの質の低下も招くこととなる。19世紀末までに州立精神科病院は巨大化し、平均で400人以上の入院患者を抱えることとなる。ある病院は1000人を超える患者を収容していたという記述もある。

また、入院患者の多さに加え、南北戦争（1861年 - 1865年）で政府の財政が悪化し、精神医療に経済的な面で大きな影響を与えることとなった。当初から新たな州立病院には十分な資金が与えられていなかったことに加え、経済危機と患者の急激な増加は病院内での処遇を劣悪なものにしていく。これらの患者増大と財政的な問題から

リクリエーションプログラムや教育的プログラムといったモラルトリートメントの実施が不可能となり、州立精神科病院からモラルトリートメントがその姿を消すこととなる。当時の州立精神科病院の予算の少なさと処遇の酷さについては以下の引用に詳しい。

その建物は 1834 年にはセミノール・インディアンの襲撃に備えての武器庫であった。1877 年、武器に代わって患者が入られ、名前は「収容所 (アサイラム)」とかえられたが、このフロリダ州立病院は依然として倉庫のままであった。ただ在庫品が変わったにすぎない。(中略) 五千人以上の患者を収容していた。その建物は荒れ果てて、職員は不足し、患者は定床数以上に過密に詰め込まれていた。(中略) フロリダ州立病院が人間倉庫であることは何も例外ではない。それに似た幾百もの精神科病院をこの国のいたるところに見出すことができる。そのうちの一つがアラバマ州のタスカルーサにあるブライス州立病院である。(中略) しかし、この正面の裏側では、何の治療もないのである。管理スタッフを除くと、最近まで、五千人の患者の監督にわずか二人のフル・タイムの精神科医が勤務していたにすぎないし、学位のある心理技術者たった一人しかいなかった。病棟は悲惨を極めていた。(Ennis 1972)

モラルトリートメントの衰退した原因が経済的な要因からケアの担い手の交代とそれに伴う質の低下を促した以外に、医師たちの精神病への悲観的な考えがあったとの指摘もある。宗像はモラルトリートメントが不可能になった要因の一つを「精神病の原因を生物学的に見出そうとし、心理

社会的治療法 (=モラルトリートメント) では治療不可能というイデオロギーを強くした。治療不可能であるならば金をかけても仕方がないということで、州立精神科病院の治療的雰囲気は失われ、陰惨な収容所と化していった」(宗像 1984) と指摘している。同様の見解に (全国精神衛生連絡協議会 編 1969) 次のような記述がある。

では、道徳療法が衰えた原因はなであったか。その第 1 は、社会的・経済的变化のために、患者をやめる人としてあたたかく遇しようとする余裕がなくなったことであろう。その端的な現れは、病院は増床につぐ増床をおこない、できるだけすくない費用で長期間患者を隔離しておいたほうが安全だという、社会防衛中心の考えにみられよう。病院でも患者が十分な世話をうけられなかったことはあきらかである。当然のことながら、このころの退院率はおおきく低下している。

またダーウィンの適正生存説から、患者は淘汰されるべきだという考えが生まれた。また、ウィルヒョウの細胞病理学の影響も大きかったといわれる。つまり、他の疾患では細胞の変化がみられることから、精神病のさい脳細胞の回復不能の変化を予想し、悲観的に考えたのである。クレペリン (E.Kraepelin, 1856-1926) の早発性痴呆学説 (1899) は、この悲観論を臨床面から理論づけたこととなった。(全国精神衛生連絡協議会 編 1969)

複数の要素によってもたらされたモラルトリートメントの衰退だがその後完全に消滅したわけではない。前掲した吉岡らの記述によると、いくつかの病院はモラルトリートメントを基盤とした作業療法を続けて

おりその後普及している。モラルトリートメント衰退の要因として細胞病理学の影響があることは述べたが、精神疾患の原因を細胞病理学に求めた結果として精神科外科手術（ロボトミー）といった治療方法が出現している<sup>8</sup>。

このように 19 世紀のアメリカの精神障害者 / 病者へのケアは精神科病院の開設とディックスの運動よっての量的拡大は経済的理由や医学的な精神病理解などの複数の要素よって質の低下がもたらされる。次章では質の低下が著しい 20 世紀初頭精神障害者 / 病者へのケアの状況と改善策について述べる。

### 1900 - 1930 年代のアメリカの精神医療と精神衛生運動

1830 年代にはじまったドロシア・ディックスの精神医療改善の働きかけは、1845 年から 1852 年までの間に南部の 9 州が精神病院設立するという成果を生んだ。しかし、その後の南北戦争（1861 年 - 1865 年）に伴う経済の危機的な状況と入院患者の増大は、州立精神科病院におけるケアを治療的なものから遠ざける。それはモラルトリートメントの衰退からも明らかである。治療的な方向性を失った州立精神病院の性質を The Group for the Advancement of Psychiatry（1978）は次のように記述している。

ドロシア・ディックスの、気の毒な人人に対して道徳療法を供給するという目的はかなえられないことが間もなくはっきりしてきた。50 年もたたないうちにほとんどの州立病院は巨大化し、貧しい経済性のためバラック様の施設となって

しまい、病気の快復よりもむしろ悪化を促進するものになった。多くの病院は田舎へ退却を強いられ、また土地が安いからと人里離れた遠い場所に建てられた。社会的孤立、専門的なものに使う資金と刺激の欠如、そして低い給料基準のために資格のある精神科医を引き付けることが困難であった。その結果精神病者が“苦しめ悩ます鎖につながれる”ことはほとんどなくなったが、彼らは無視され軽視されるようになった。

（The Group for the Advancement of Psychiatry 1978）

このアメリカにおける 20 世紀初頭の州立精神科病院の状況については前掲した『アメリカの精神医療』と同様の指摘が多い。たとえば秋元（1991）は「今世紀の初めアメリカでは州立病院の荒廃と墮落が起こり、クリフォード・ビヤーズ Clifford beers の厳しい告発『わが魂に逢うまで A Mind That Found Itself』1908 年に遭遇しなければならなかった」と述べている。

州立精神科病院を中心とした精神障害者 / 病者への処遇の悪化に対して先の秋元の記述に見られるクリフォード・ビヤーズ（Clifford beers 1876-1941）は精神衛生運動という行動を起こす。ビヤーズは 1890 年にエール大学を卒業し、寡黙な抑うつ状態から興奮状態に推移するといった精神病に罹る。そして 1900 年に自殺企図のために精神病院へ入院させられ、その後数か所の精神科病院を転院する。その際の医師や看護師たちからの暴行や強圧的な態度をまとめ、1908 年に『わが魂に逢うまで A Mind That Found Itself』（1908）を出版する<sup>9</sup>。同時期の 1909 年 2 月 19 日、精神病患者へ

の世間の関心を喚起し、予防を促進する手段として全国組織全国精神衛生委員会（National Committee for Mental Hygiene 後の全国精神衛生連盟 National Association for Mental Health）を組織する。ピアーズとともに精神衛生運動の中核を担ったのが精神科医の A.マイヤーであり彼らを中心に設立された全国組織全国精神衛生委員会は精神科病院の処遇改善とともに、当事者運動の先駆けとしても位置付けられている。で劣悪な処遇をしていた精神科病院の改革も行われた。ピアーズらの活動は 1948 年に世界精神衛生連盟（WFMH）設立といった展開がなされる。

20 世紀初頭におけるピアーズの精神衛生運動と同時期に入院治療とは別の形のケアの萌芽がみられる。まず、ニューヨーク博愛学校（New York School of Philanthropy）のアレクサンダー・ジョンソン（Alexander Johnson）とニューヨーク州慈善援護協会（New York State Charities Aid Association）のハマー・フォークスが精神科病院を退院した人の追跡調査を行う。ジョンソンとフォークスは過去 3 か月間に州立マンハッタン病院を退院した患者たちを追跡する。退院後 3 カ月という短期間にもかかわらず、所在が確認されていないもの 1/3、残りの者は症状の軽減・再発の危険のある状態であったり再発して症状が悪化しているという結果を得る。

これらの調査の結果は 1905 年の全米慈善矯正会議の席で発表され、精神科病院から退院した人に当座の援助を与えることが言及され、患者の社会的環境の整備は再発予防と治療に効果があるという結論に至る。1907 年にはニューヨークでアフターケア

事業が開始される。ニューヨークアフターケア事業は「退院した貧窮者に対して当座の扶助や援助、訪問をあたえる」というもので州の慈善援護協会の監督・指示によっておこなわれた。このニューヨークの取り組みにたいして他州も関心を示しソーシャル・ワーカーが精神病院に雇用されるきっかけとなった。精神科病院へのソーシャル・ワーカー雇用の例は 1905 年のマサチューセッツ総合病院（Massachusetts General Hospital）のキャボット（Dr R.C.Cabot）、キャノン（I.M.Cannon）、ペルトン（G.Pelton）によって事業化されたという記録がある。また、1913 年にはボストン精神病院のジャレット（M.C.Jarrett）による家庭歴の調査が行われ、1926 年には全米精神科ソーシャル・ワーカー（PSW）協会が設立されている。加えて、1914 年から 1918 年にたたかわれた第 1 次世界大戦により生まれた大量「戦争神経症」に対して PSW の需要が高まり、1918 年にマサチューセッツ州のスミス・カレッジ（Smith College）で戦時緊急コースとして、アメリカ最初となる高等教育機関での PSW の養成がはじまった。

これら精神科ソーシャルワークの萌芽は当時の精神医学の潮流と関係していると考えられる。アメリカの精神医学会は 1900 年代初頭にはフロイトに注目している。中井（1999）によるとそれはヨーロッパで精神分析学が知られる 4 年前だという。当時のアメリカにおけるフロイト主義は精神生物学と融合し力動精神医学となり発展する。この力動精神医学に影響を受けたメアリー・リッチモンドがケースワークを展開したのが PSW の実践活動の理論的基盤にな

ったと考えられる。力動精神医学が広まった背景には第1次世界大戦によるアメリカ国内の経済成長と好景気がある。第1次世界大戦で債権国となったアメリカは高度経済成長を迎える。この好景気に後押しされて1920年代の精神病院では個人診療所と同じように力動精神医学を実践していった。力動精神医学の開拓者の一人でありピアーズとともに精神衛生運動を先導したAマイヤーは1922年に「作業療法の哲学(The Philosophy of Occupation)」という論文を発表している。前述したように作業療法はモラルトリートメントにその源流を求められる。では同時期における州立の精神科病院の状況はどのようであったのだろうか。

前章で述べたように州立精神科病院の治療的雰囲気なくなり収容施設化した要因には、精神病を生物学的要因に求めたことと経済的な理由にあることは述べた。力動精神医学は精神病を生物学的要因に求めた治療とは異なるアプローチを行う。Aマイヤーの著作「作業療法の哲学(The Philosophy of Occupation)」に見られるようなモラルトリートメントを起源とした療法がそれにあたるのだが、はたして収容施設化した州立精神科病院で作業療法を行うことは可能であったのだろうか。筆者の管見では州立精神科病院でモラルトリートメントが盛んに行われたという資料は見つけれなかった。しかし1920年代にアメリカ好景気であった時期は短く1929年には世界恐慌が起こっている。短い好景気の期間で巨大化し僻地に移された州立精神科病院における処遇が大幅に改善されたとは考えにくい。また、1930年代におこなわれたアメリカ医学会(AMA)の精神病院調査では、

州立精神科病院の処遇の悪さが報告されている。

アメリカ医学会(AMA)の精神病院調査はジョン・グリズム(John Grimes)がその任にあたった。グリズムは州立精神科病院174を訪問調査し、「病院は入院患者で一杯であり、病院スタッフは看守のようであった。格子がつけられ、閉鎖病棟で食事は貧弱。治療ではなく社会防衛のために収容されている」と報告書している。しかしこれらの報告内容を改訂するよう求められ拒否をしたグリズムは解任される。ここからも1920-30年代の州立精神科病院の処遇の劣悪さは想像できる。

#### 小括

ここまで述べた中では精神障害者/病者への病院でのケアの変遷が精神病に対する医療的な理解の変化によってなされると捉えられるだろう。また時を経てソーシャルワークなどの治療とは別のケアも出現する。しかし本稿で述べた精神障害者/病者へのケアは概ねよいものとは言い難い。その理由を精神病に対する医学的理解に求めるだけでは不十分であろう。精神病についての医学的理解が劣悪なケアの環境を生み出したこと以外に、経済・社会的な要因もケア悪化(=治療すら行わない)といった状況に影響を与えている。

ディックスは放置されている精神障害者/病者に適切なケア提供するために活動を開始した。彼女の活動の結果として州立精神科病院が建設された。しかし、ほどなくして州立精神科病院には収容されるがケアは行われることなく院内で放置される事態となった。その状況を告発したピアーズは

精神衛生という新たな視点と活動を行ったが、彼が著書に記した1900年の州立精神病院とグリズムの調査した1930年代の州立精神病院の処遇はほとんど改善されていない。次回はその後の州立精神科病院における精神障害者/病者の状況について述べたい。

#### 参考文献/資料

- 秋元 波留夫 1987 『精神障害者の医療と人権』 ぶどう社
- 秋元 波留夫 監修 共同作業所全国連絡会 編集 1988 『アメリカの障害者リハビリテーション』 ぶどう社
- 秋元 波留夫 1991 『新 作業療法の源流』 三輪書店
- Committee on Psychiatry the Community 1978 *The Chronic Mental Patient in the Community*=1980 仙波 恒雄・高橋 光彦 監訳 『アメリカの精神医療』 星和書店
- Ennis, Bruce 1972 *Prisoners of Psychiatry*=1974 寺嶋 正吾・石川 毅 訳 『精神医学の囚われ人』 新泉社
- 蜂谷 英彦 村田 信男 編 1989 『精神障害者の地域リハビリテーション』 医学書院
- 蜂谷 英彦 岡上 和雄 監修 2000 『精神障害者リハビリテーションと専門職の支援』 やどかり出版
- 石川 信義 1990 『心病める人たち』 岩波新書
- 一番ヶ瀬 康子 1963 『アメリカ社会福祉発達史』 光生館
- Jacques Hochmann 2004, 2006 *Histoire de la psychiatrie* Presses Universitaires France, Paris = ジャック・オックマン 阿部 恵一郎 訳 2007 『精神医学の歴史』 白水社
- 宗像 恒次 1984 『精神医療の社会学』 弘文堂
- 中井 久夫 1999 『西欧精神医学背景史』 みすず書房
- 日本精神保健福祉士養成校協会 編 2009 『精神保健福祉論』 中央法規出版
- 野田 正彰 2002 『犯罪と精神医療 クライシス・コールに込めたか』 岩波文庫
- 鈴木 淳 1969 「精神病院の機能分化」 『精神医療の展開』 pp78-108 全国精神衛生連絡協議会 1969 医学書院
- Trattner, I, Walter 1974 FROM POOR LAW TO STATE *A History of Social Welfare in America*=1978 古川 孝順 訳, 『アメリカ社会福祉の歴史』 川島書店
- 八木 順平 田辺 英 1999 『精神病治療の開発思想史 ネオヒポクラティズムの系譜』 星和書店
- 財団法人日本精神衛生会 1990 『アメリカにおける精神障害者のコミュニティケア』 全国精神衛生連絡協議会 編 1969 『精神医療の展開』 医学書院
- 在日本アメリカ大使館ホームページ About the USA  
<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/j/jusaj-ushist5.html> 2012年5月11日 閲覧
- 橋本 明 「わが国における精神科ソーシャルワーカーの黎明(その1)」  
<http://www.lit.aichi-pu.ac.jp/~aha/doc/ishigakikai2008.pdf> 2012年5月11日 閲覧
- 立命館大学「生存学」創生拠点  
<http://www.arsvi.com/d/ps.htm> 2012年5月11日 閲覧
- 心と社会 No.100 31巻2号 100号記念座談会 - 日本の精神保健 過去・現在・未来 -  
[http://www.jamh.gr.jp/kokoro/00\\_zadan3.html](http://www.jamh.gr.jp/kokoro/00_zadan3.html)  
2012年5月11日 閲覧

---

<sup>1</sup> <http://www.max.hi-ho.ne.jp/nvcc/CK4.HTM>にて邦訳、原文が閲覧できる。また、野田正彰 2002 『犯罪と精神医療 クライシス・コールに込めたか』岩波文庫 pp263-276 に邦訳が掲載されている。

<sup>2</sup> 8 世紀のアラビアには精神障害者 / 病者のための施療院が開かれた。八木・田辺のよるとバグダットとフェズに 700 名、ダマスカスとアレppoに 1270 名、カイロに 800 名が収容されており、アラビアの影響を受けたスペインでは 15 世紀になって、セリヴィア (1409)、サラゴッサとヴァレンシア (1410)、バルセロナ (1412)、トレド (1483) などに精神障害者 / 病者の施設が開かれた。また、スペインが征服したメキシコにも 1567 に施設ができ、フランスでは聖ヴァンサン・ド・ポール (1632) が救癲施設を買い取って幾人かの精神障害者 / 病者を住まわしたという。その後、ヨーロッパでは 17 世紀後半から収容施設や救癲施設に隔離・監禁され始めた。

<sup>3</sup> 精神保健福祉士養成のテキスト 日本精神保健福祉士養成校協会 編 2009 『精神保健福祉論』中央法規出版 においても、「1793 年、フランス革命期の象徴的出来事として、第一次精神医療革命と呼ばれるパリのピセートル精神病院長であったピネルによる「病者の鎖からの解放」がある。その歴史的評価は別れるところであるが、少なくともこの出来事が、精神障害者を人として位置づけようとする近代精神医療の成立の大きな転機になったことは間違いのない事実である」とされる。

ピネルへの肯定的な評価の一方で、ピネルの業績はピネルの子孫や弟子の過大評価がうんだ「神話」にすぎないという批判がある。注で示した八木・田辺は「ピセートルとサルペトリエールの改革は元患者の看護師ピュサンとの共

---

同事業とみなすべきである」という主張や「収容院改革の動きはピネル以前からあり、ピネルの仕事は彼の独創ではなく先人の業績におうところが多い。ピネルの成功は先人によって指示された改革を実行に移したからであろう」というスムレーニョ (ピネルの子孫) 主張を紹介している。ピネル以前の収容院の改善の動きとして、フランスのコロンビエ (1785) やトゥノン (1788) の論文や、ダカンの著書 (1791) に現れており、ドイツのミュラー (1755 - 1827)、イタリアのキアルジー (1759 - 1820)、イギリスのパーフェクト (1755 - 1827)・ハスラム (1764 - 1844) などが精神障害者 / 病者の人道的な処遇を主張してきたという。同様にイギリスのコノリーがピセートル病院の見聞録 (1838) の次のような記述「怒り狂った精神病者たちは床の上に眠り、無力なものは藁の上に横たわっていた。その藁はめったに取り替えられはしない。看護人たちは依然としてだらしない格好をし、乱暴に振る舞い、棒や鞭や思い鍵で武装し、野生の犬を引き連れて病室にやってくるのだ」と示しているが、ピネルは 1826 年に没しているためコノリーがピセートル病院を訪れた時期はピネルの死後の可能性が高い。また、ピネルの弟子であるエスキロールはサルペトリエールをピネルから引き継ぐが彼の治療的野心は政府と関係をもつことで社会防衛役割を果たす収容所構想を受け入れ、精神障害者 / 病者の治療と彼らの自由を制限した 1838 年 6 月 30 日法の制定に尽力したという指摘もある。(Hochmann 2004, 2006)

ピネルが全く患者の自由を制限しなかったというそうではないようだ。ピネルは「瀉血やムチ打ちなどの処遇は受け入れがたいものである」としたが、「社会的刺激を受けすぎて飽和状態になった思考を秩序あるものに戻す」ために

治療の前提として隔離が必要であるとした。Hochmann はエスキロールがピネルのこのような考えをさらに推し進めたとの分析を加えている。

- 4 秋元(1991)によるとベンジャミン・ラッシュ ( Benjamin Rush ) はピネルと同年代の人でイギリスのエンジンバラで医学を修め帰国した。その後、トーマス・スカターグッド ( Thomas Scattergood ) の無拘束・作業を原則とした施設に影響を受けて精神病患者の診療を行うようになったという。トーマス・スカターグッド ( Thomas Scattergood ) イギリスのヨーク・リトリートで新しい精神病治療を学び帰国した人物である。
- 5 トーマス・ストーリー・カークブライド ( Thomas Story Kirkbride ) はアメリカの精神医療の開拓者の一人とされる人物であり、病院改革の指導者の一人である。
- 6 1950 年代の整備計画ではそれが改められ、3 等級に分類した病院のうち、第 1 級 ( 定床 500 以上で、わが国の県立中央病院クラス ) 病院には、脳神経科や膠原病科とならんで、精神神経科を設けるように定め、1960 年代には第 2 級病院も併設対象としている。( 鈴木 1969 )
- 7 たとえば、1728 年にロンドンの Guy 総合病院に併設精神病棟が開設され 1752 年にペンシルベニア一般病院、1792 年ニューヨーク病院が併設精神病棟を開設している。( 鈴木 1969 )
- 8 柿谷はロボットミーについて次のように説明している。

「モニッツ ( Egas Moniz ) によって発案された療法は、前頭葉を切除するというものであり、彼はノーベル賞を受けている。アメリカでは 1936 年から 1955 年の間に 5 万人もの人がロボットミーの手術を受けたといわれている。フリーマン ( Walter Freeman ) がトランスオービタ

ル・ロボットミーを開発し、短時間で多くの手術を可能にした。それは麻酔を使わず、電気ショックで眠らせている間に、手術用のアイスピックを両目の上に突き刺すというものである。」( 柿谷 2004 )

ポルトガルのモニッツ ( = モリス 1949 年のノーベル賞受賞者 ) がロボットミーの創始者であるが、八木・田辺 ( 1999 ) によると 1890 年のスイスでモニッツ ( モリス ) 以前の精神科外科手術の例があることを述べている。

日本においてもロボットミー施術の記録はある。例えば 1967 年発行の『精神科医療体系 ( 改訂 )』( 社団法人 日本精神病院協会 ) には次のような記述がある。

「たとえば 1935 年 ころから始まった、いわゆるロボットミーという精神科外科が、日本では 1942 年 ( 昭和 17 年 ) ころから取り入れられて、終戦後 47、8 年 ( 昭和 22、3 年 ) ころから広く行われた。その後その効果が狭い範囲に限られていることや、薬物療法が発展してきたために、まもなく下火になり、今は特殊な病気の非常に精密な手術に変わってきた。」1975 年に日本精神神経学会が「精神外科を否定する決議」を可決し、現在ではロボットミーは行われていない。但し、法的に明確に禁止されているわけではないようである。

- 9 精神病院入院時の体験をつづった『わが魂に逢うまで A Mind That Found Itself』の出版は、新たな精神生物学的理論や精神分析理論による精神病予防の可能性を惹起し児童相談所や地域の診療所の発展を促す。また Trattner ( 1974 ) は『わが魂に逢うまで A Mind That Found Itself』について次のように記している。「3 年の入院生活ののち、退院するにあたって病院への拘禁という処遇方式に付きまとっている弊害を白日の下にさらし、自分とおなじ残虐な行為を

---

受けている他の人々に救いをもたらすことを決意する。5年後の1908年、ハーバード大学の心理学者であったウィリアム・ジェームズ (William James) やスイスからの移民で広い影響力を持つ精神科医アドルフ・マイヤー (Adolf Meyer) などの協力を受け、自分が精神的に崩落した過程、自分の受けた非人間的な処遇、回復の過程、精神病者の処遇改善を記述した。」 (Trattner 1974)

---

**JACK NICHOLSON**  
**ONE FLEW OVER**  
**THE CUCKOO'S NEST**



# 「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い ～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～



(4)

## 山本菜穂子

### ●協会、3年目に

平成24年5月19日、青い森のほほえみプロデュース推進協会の第3回総会が開催されました。そう、協会を設立して3年目に入りました。会長(服部理津子さん)が再任され、理事が一部交代し、新たな2年間とともに歩む体制が固まりました。私は、協会設立後、さらにこの仲間たちへの尊敬と信頼を強めていることを感じます。皆さんの生き方が素敵なんです。病気をしたけれど、「ほほえみ」と出会っていたから前向きに乗り切れたと語ってくれる人がいます。この活動は元気の素だと生き活きと話す人がいます。様々な事情で一時活動から抜ける仲間がいても、去る者は追わず来る者は拒まず、いつでもあたたかく迎え入れる雰囲気を持つ集団をつくってくれています。そして、自分の時間を惜しみなく使って、積極的に意欲的に講習先を開拓しながら講師に出向いてくれる人たちです。最高に頼もしい尊敬できる仲間だと感じます。

平成19年度に県の事業を開始して、講師になる人材の養成を始め、平成20年度にかけて徐々に講師側の仲間を増やしつつ、初年度の11月くらいから仲間と一緒にほほえみ

プロデューサー(1時間程度の講習を受講し、普段の生活の中で「自らがほほえみ、周囲からほほえみを引き出す」ように心がけてくれる人たち)を養成し続けてきました。平成22年度からは協会の活動となり、平成19年度から平成23年度末まで、ほほえみプロデューサーは延べ32,322人になりました。活動が県から協会に移行してからも毎年年間3千人以上のほほえみプロデューサーが誕生し続けています。まだまだよちよち歩きではありますが、細くても息の長い取組になればいいと今も設立当時と変わらず願っています。

### ●春の

#### 「ほほえみプロデューサー講習会」

32,322人を養成しているこの「ほほえみプロデューサー」の養成については、講習会の依頼を受けて、そこに協会から講師を派遣するというシステムで動いていますが、協会設立以降、毎年続けて依頼してくれるお得意様も出てきています。その一つが、春の青森県新採用者研修です。

今年度分は、4月から5月にかけて5回開催されました。対象は、新

たに採用された県・市町村等の職員（全員ではないのかもしれませんが）で、ここ3年の経験から言うと、毎年、300～400名の受講があります。その人たちが60～80人くらいずつに分けられ、それぞれ月から金まで5日間泊まり込みで、公務員としての自覚と意識の確立、職務遂行に必要な基礎知識と職場への適応力を養うという研修です。年齢は18歳から上はほしい40歳代くらいまで。男性2対女性1といった割合です。

その研修の初日に、「ほほえみのコミュニケーション」ということで1時間20分の時間をもらっています。で、これがなかなか評判がいい。まあ、それから1週間、共に過ごす人たちと一緒にほほえみづくりのワークショップをするという内容になりますから、緊張もほぐれ、早く居心地の良い空気をつくれるということもあるのでしょう。

協会設立以降、私自身がほほえみの講師として出向く機会は当然ずっと減りました。（みんな自立したので。その過程はそのうち。）でも、この新採用者研修だけは、必ず私が引き受けて仲間と一緒に出向いています。それは、「ほほえみの7か条」を伝えることと同時に、将来、公務員として何かを企画する可能性のある人たちに、青い森のほほえみプロデュース事業で経験したことを伝えておきたいと思っているからです。何か一つでも参考にしてもらえることがあればという老婆心（この漢字って何

だかドキドキします。）です。

### ●紙上で講習体験してみませんか

老婆心で語ることはこんなことです。

現在配属された職場が自分の希望とは異なると落ち込んでいる人もあるかもしれない、でもまずは、今現在を一生懸命経験してみようよ。「今」「今」を一生懸命生きてみると、そのことが必ずあなたを次のステップに連れて行ってくれる。嫌な「今」でも、そこから得たことが、きっと将来、あなたの役に立つ時が来ると思うから。うううん、役立たせてやろうと思って経験してみたらいいと思うから。そして夢を持てたら、諦めずに願い続けてみようよ。それが善いものなら、きっとそれをかなえるチャンスが訪れるから。それが、私が経験的に言えること。

この研修、時に、受講中に泣き出す人もいますよ。どこで泣くかって？そうですね～、ほほえみの7か条の第3条と第4条、「たいへんねー」「でも、こう考えてみようよ」が多いかな。新採用公務員のみなさんは、生真面目な人が多いです。見るからに自信たっぷりの人も中にはいるのですが、半月から1か月半、職場で一生懸命やってきた、でも、当然うまくいかないこともたくさん感じてきて不安そうな表情の人もいます。

第3条と第4条では寸劇を見てもらいながら、こんな話をします。

☆♪☆♪☆♪☆♪☆♪☆♪

協会専属アクトレスたちによる寸劇

### 母と娘の会話 A

母：(暗い表情) ねえ、ちょっと聞いてよ。病院に行ったら、血圧が高いって言われて、ずっと薬を飲まなければいけないと言われたの。ショックでさ。

娘：だから、しょっぱい漬け物はやめろって言ってあったでしょ。言うこと聞かないからそういうことになるんじゃない。薬飲めばいいんでしょ、頑張るしかないじゃない。

母：・・・・・・(人が落ち込んでるのに、そんな風に言わなくても・・・・)

### 母と娘の会話 B

母：(暗い表情) ねえ、ちょっと聞いてよ。病院に行ったら、血圧が高いって言われて、ずっと薬を飲まなければいけないと言われたの。ショックでさ。

娘：あれ～～これまで何でもなかったのに、急にそんな風に言われたらショックだったよね～。お母さん、お医者さんも薬も嫌いだもんね～

母：そうなんだよ。(あんたに、しょっぱいもの控えろって言われていたのに、守らなかったもんね～・・・・)

娘：でも、お母さん！これで医者嫌いなお母さんにも主治医ができたということよね。な～んだ、良

かったじゃない。しょっちゅう健康チェックしてもらえて、これからずっと元気でいられるかもしれないね。私より長生きしたりして。

それに、あそこのお医者さん、イケメンだって評判だけど・・・(^\_-)

母：そんなこと、考えなかったよ。そういえば(^\_^);、お父さんより格好いいかも (^\_^)v

辛い人を笑顔にしてあげたいと思ったら、励ます前に、いったんその辛さを受けとめてあげようよ、そして、その辛さはこんな素敵なことのおかげになる可能性があると思うよと伝えてあげられたらもっといいよね。それが、第3条と第4条です。

そして、もう一つ。あなた自身が辛いとき、辛さは一人で抱えなくて良いんだよ、ということなんです。

保育所の保護者会で講習をしたときに、「母子家庭の母です」という方から次のような感想をいただきました。

「子どもに対してすぐ怒ってばかりいました。どうしてかなと思っていたのですが、私自身に辛いことがたくさんたまりすぎていたんだと気がつきました。辛いことは誰かにしゃべっていいんだと聞いて、涙が出そうになりました。それがわかっただけで、今日から子どもにもう少し優しくできそうな気がします。本当にありがとうございます。(原文のまま)」

この講習に歩いていると、愚痴を言ったり、弱音をはいたりすることを「悪いことだ」「弱虫のすることだ」「だらしのないことだ」と思っている人が大勢いることに気付かされます。皆さんの中にもそういう人、いませんか。このお母さんのように辛さがたまりすぎていたとしたら、ほほえみは入っていかれない。辛さを少し外に出すことができたなら、出した後に空いた隙間にほほえみが入っていき、そんな気がしませんか。

弱音をはくことや、愚痴を言うという行為は、とても勇気のいることだと私は思っています。誰だって他人に対して自分のことを「何でもできるスーパーマン」だと見せたいと思うから。そうじゃない自分を他人に表明するなんて絶対勇気がいるんです。でも、やっぱり頑張ってもできないこともあるし、苦手なこともあるんですよね。一生涯、誰にも助けてもらわずに独りで生きることはどうしたってできないって経験的に思うから。だったら、上手に弱音をはいて、助けてもらいながら長くほほえんでいようよって思います。これは、皆さんに言いながら、春に転職になった私自身にも言い聞かせているんですけどね。(\*^\_^\*)

以前、強い人になりたかったら弱音をはきなさいって教えてくれた人がいます。(団さんでしたよ、覚えていますか?) なんだか意外なことばでしょ。それは真実だと私は思っています。もし、みんなにも苦しいことがあったら、勇気を持って弱音を

はいてみようよ。そして強くなろうよ。

そうそう、弱音をはく相手にあなたは一方的に迷惑をかけていると思うかもしれないけれど、本当にそうかな。あなたが弱音をはく相手は、あなたの信頼を勝ち取った人なんです。あなたのおかげでその人は、自分には他人の手助けができる力があるということに気づけるし、それは本来その人の喜びになることなんだと思います。だから、ちゃんと感謝はしましょうね。あなたのおかげで助かった、ありがとうって。

さあ、そして最初に戻りますが、逆に勇気を出してあなたに弱音を聞かせてくれる人がいたら、あなたはその人に信頼されているんです。解決できなくてもまず受けとめてあげるところから始めましょう。そんな相互関係が、職場や家庭や地域にできたら、ずいぶん気持ちが楽になると思いませんか。それを皆さん自身から始めませんか。それが第3条と第4条でした。

☆♪☆♪☆♪☆♪☆♪☆♪

#### ●ほほえみづくり

4月から約3か月。これを読んでいるあなたは、今、お元気ですか。

あなたの職場の、学校の、家族の新人さんは、ほほえんでいますか。

春の変化の時期です。もし、笑顔をなくしかけている人がいたら、ほほえみを引き出す関わりがなされた

らいいな、今回はちょっとそんなことを書いてみました。

辛いとき、それは私がそうだったように、チャンスの入り口かもしれません。

そんな風に考えられたらいいなと思います。

最近、「菜穂子さんって前向きですね～」と言われることが増えました。もともと、マイナス面ばかりを考えて、石橋を叩いて壊すまで渡らなかった人がね～と思うと何だか不思議な感じがします。でもきっとそれは、“不幸”と思われることに出会ったときに、これはどんな“幸福への入り口”だろうと考える癖が自分の中に定着してきたからだと思います。小さい心がけも、続けると、大きな変化になるんですね。

さあ、泣いたり、笑ったりしながら、全員寝ない、寝ることのできない（いろいろとやらせるので）新採用者研修1時間20分の一部を書いてみました。そして、この研修の最後には必ず、受講生の皆さんも一緒に「ほほえんで、笑って、あたたかく、ゆとりのある青森県づくり」を手伝って欲しいと伝えています。

そうしたら昨年度は、観光部門の新人だった受講生が、「観光連盟の関係団体の研修会に取り入れましょう。」と進言してくれて、県内のホテルの従業員、タクシー運転手さんたちへの研修などが実現しました。ちょっと素敵だと思うんです。そんな広がり方って。

皆さん、青森にお出でください。駅前で、ほほえみプロデューサーの運転手さんがお待ちしているかもしれません。♪

## ●コア笑いプロデューサーの悲劇(?)

さて、講習会の様子を見てもらいましたが、協会専属アクトレスは、もちろん、コア笑いプロデューサーと笑いプロデューサーとなった仲間たちです。ここには標準語で書きましたが、これはもちろん地元のことばで行われます。これがなかなかやっぱり浸透度がいいのです。すごく上手だったり、すごくズッコケだったり、いずれもいいんですよ。（そんな感覚をみんなで共有できるまではそれなりに時間がかかりましたし、努力が必要だったんですよ。）

さあ、話を過去に戻します。平成19年度、私と一緒に「コア笑いプロデューサー講習会」を受講した33人の仲間たちは、4泊5日の講習会の最終日に高柳先生から、これから始まる各地区の「笑いプロデューサー講習会」に講師助手として参加するように要請されました。もちろん、事業開始段階でそういう構想ではあったのですが、私はドキドキです。嫌かな～行きたくないよな～大丈夫かな～みたいな。そこに参加しても、コア笑いプロデューサーに対しては、旅費も講師助手としての報酬費も何もないんです。自らの意志でこの取組に賛同するのよね！だか

ら一緒にやるんでしょ！行くわよ！というスタイルです。実は、4泊5日のコア笑いプロデューサー養成講習会に関しても、受講料は無料ですが、宿泊費は参加者負担をお願いしていました。講習スケジュールには、日中の講義が終わった後も、翌日までにチームで仕上げる宿題があり、参加者には「宿泊せずに通う」という選択肢は無いのに、です。その段階から、すでに参加者の意識は「お客様」ではなかったと言えるかもしれません。いずれにしても、次の笑いプロデューサー講習会への参加に関しては、高柳先生がそのカリスマ性を発揮し、強引に進めてくれました。みんな、いろいろな思いがあったかもしれませんが、その勢いに流されつつ、でもそのことをまんざら嫌でなく、心地よさそうに巻き込まれてくれる多くの仲間がそこにいました。そこはすごいです。天才のなせる技です。

そして、そんなコアの仲間たちの反応は、私たち事業担当者をさらに本気にさせたと思います。この人たちは裏切れない、大事にしたいと。

このやり方（旅費や報償費をかけずに、自らの意志で手弁当で参加してくれる仲間をつくること）を選択したことは、後にこの取組を県の事業から独立させ、継続的な取組とする時にも、大きな大きな本当に大きなポイントだったと思っています。旅費や報償費があるから行く、無くなったから行かない、というようなトラブルはよく聞く話です。それが

最初から無いのです。でもだからこそ、この取組が継続するためには純粹に、「参加した人が心地よい、意味があると感じる取組」である必要がありました。そのことに、この頃私がしっかり気付いていたかということ、まだまだぼんやりだったような気がします。私も、コアの仲間も、本当にこの取組の自分にとっての意味を実感できるようになるのは、まだもう少し後だったと思います。

こうやって書いてきてみると、走りながら初めて見えてきたことのなんと多かったことか。よく迷子にならなかったものだ、とつくづく思います。高柳先生の先導があったことはもちろんとても大きいと思います。それともう一つ、熱くなりやすく不安にもなりやすい私の弱音や愚痴を、他の3人のほほえみ隊が冷静に丁寧に聞き取って安定させてくれ、それからあきれずに、相談や議論に付き合い続けてくれたことが、何のために誰と何をするのか、そのことがぶれないために、とても大事だったのだと思えます。なんだかすごいことですね。綱渡りみたい。何一つ欠けても今の状態は無かっただろうと思えてきます。

さて、次回は笑いプロデューサー講習会を経験して、私たちがどう変わっていくのか、そんなことをお話ししたいと思います。びっくりするようなことが起こるんですよ、これがまた。

# 男は 痛い !

國友万裕

第3回

ノルウェーの森

## 1. 僕の本モエロス歴

最近、ある先生にしつこく頼んでいる。「俺を男にしてください」と……。

断わっておくけど、僕はゲイじゃない。男の人とそこまでの関係になったことは一度もない。でも女性恐怖なので、女性ともほとんどつきあってこなかったし、本モエロスな感情を男の人に抱いたことは何度もある。

不登校で、3年くらい引きこもった後、僕は大学に入るために予備校に通った。予備校とは言っても小さな塾みたいところで、入学する学生はわずか40人くらい。しかも、どんどん抜けていくので、最終的には20人足らずの人数になってしまったと記憶している。大手の大学に入ろうと思っている奴は、もっと有名な予備校に行こうとする。僕はそれまでが学校にも行けず、勉強もしていなかったので、大手の予備校に通う自信はなかった。

幸いなことに、中学時代に一緒だった子、すなわち、僕の過去を知っている子は、この塾には一人もいなかった。熊本市の中心地にある塾なのだが、国鉄の駅が近かったせいもあって、熊本市の外の田舎の学生たちが主だった。

そこで毎日、顔を見ていた男の子に僕は明らかに恋をしていた。結局、1回として話もできなかったのだけど、彼を見ているだけで励まされた。彼と同じ学校に通っているのが楽しくて、ほとんど休まずに学校に通った。

高校は東京だったらいい。親が急に熊本に転勤することになって、それで熊本で浪人生活をするようになったみたいだった。結局、

彼は熊本の小さな私立大学に行くことになって、もう思えば、30年近く会っていない。もう会う術もないだろう。彼も僕のことなんかどうに忘れてるに違いない。

京都の大学に入って、そこでも好きな男の子はできた。彼には積極的に何度もトライした。狂おしいくらいの熱愛だった。ストーキングまでしていた。彼は、僕を疎ましく思いながらも情にほだされて、3回生くらいの頃には、どうにか飯くらいは一緒に食べてくれる仲になってくれた。彼は大学の付属校からエスカレーター式に大学まで来た人で、体育会系だった。僕が彼にホモセクシャルな感情を抱いていることにも気づいていたが、それでも付き合ってくれた。思えば、彼とももう25年会っていないなあ。四半世紀だ。

僕は基本的におっとりしたやつが好きだ。これまで好きになった男の人は、大抵、お坊ちゃんタイプであり、ひねくれていない、貧しさを感じないタイプだ。これは、類は友を呼ぶということなのかもしれない。僕自身も、お坊ちゃんタイプだ、素直だ、ナイーブだ、垢が付いていないと言われる。

前にどういう自分になりたいかという心理テストを受けたことがあるのだが、僕は自分を少しスライドさせた自分になりたいのだという結果がでた。まったく違う自分になりたいというのではなく、自分と似ていて、でも少し違う人。似て非なる人というところだろうか。そして、僕はそういう男性に恋してしまうのだ。

おそらく、僕は10歳の時点で、男としての成長が止まってしまっている。10歳くらいから男らしさ恐怖症になってしまった僕は、自分が男であることを受け入れることがずっと

できなかった。そのことで、僕は、普通の連中が、男同士で楽しくやっている中学・高校のときに、友達もできず、欲しいとも思わず、自分の殻に引きこもっていったのだ。

思えば、入った中学が僕にはあっていなかった。家の近所の公立中学だったのだが、市内でも一番柄が悪いとされていた中学である。周りは不良っぽいやつばかりで、先生のほうも、生徒を威圧できるような先生でないとやっていかれない。まるで少年院のような雰囲気だった。

そのなかにあって、気が小さくて、苛められっ子の僕は自分が同一化できる男子が見つからなかったのである。僕は次第に自分の殻にこもり、小説や映画の世界に出てくる男性たちに恋をするようになっていた。生身の友達はいらなかったのだ。

18歳の時に予備校時代の彼と出会って、「生身の友達が欲しい」願望が大きく刺激された。コペルニクス的な僕の心の大激変だった。しかし、10代、20代と友達は一向にできなかった。僕は、不登校になったことで、間違っただストーリーを生きてしまったのだ。不登校の子が珍しくなくなってきたのは、比較的最近のことである。今では大検に合格したとかフリースクールを出た子は多くいるし、そういう子の存在が認知されているが、僕が20代の頃までは、よほど変わったやつと見なされていて、そんな過去を知ったら、周りの連中は引いてしまう。日本人は集団主義。自分と同じストーリーを生きてきた人間でなければ、心を開こうとしない。違ったストーリーを生きてきた僕は、自分の過去に触れられるのを恐れて、極力誰とも付き合わずに20代を生きた。

30 になって、自分の人生を見つめなおさざるを得ない出来事が起きた。僕は、心療内科に通い始め、カウンセラーの先生たちにも、「どうしても男の友達が欲しいのだ。とってもし仲のいい友達が……」と話していた。34 歳で、メンズリブ(男性解放運動)に参加した。しかし、そこで出会った男性たちは僕のイメージしていた男性とは違っていった。一向に男友達はできなかった。

友達をつくることはほとんど諦めかけていた僕に、突然神様が贈り物をくれたのは 37 歳だった。36 歳でメンズリブの幹部の男性と確執を起こし、グループから締め出された頃だった。まさに捨てる神あれば、拾う神あり。しかも、それまで求めていたような男性が僕の前に現れた。一流大学の付属高校から大学へと進んだ人だから、おっとりしたお坊ちゃんタイプ。僕と波長はピッタリだった。普段は仕事で一緒になるわけでもないのに、最初のメール交換から交際は着々と進んでいき、男同士のエロティックな関係も味わってきた。会うと必ず、大阪のスパワールド。2 人で風呂に入り、プールに入り、飯を食い、マッサージを受けたりして、たっぷり 3、4 時間過ごす。そういう付き合いがもう 10 年以上続いている。彼とは他のところでも一緒に風呂に入っているの、もう何 10 回もお互いの裸を見ていることになる(笑)。

それから、以前、同じスポーツクラブに通っていて、今は東京に行ってしまった 30 過ぎの友達とも、彼が京都にいた頃は、二人に汗をかいた後、クラブの風呂に一緒に入ったものだ。それと東京に移って行かれた鍼灸の先生とも東京の銭湯で風呂に行った。

また大学の先生で、僕を可愛がってくれる

先生も徐々に始まった。教え子の男の子たちのなかにも慕ってくれる男の子はいる。そんなわけで、今は男に不自由していない(！?)。僕の悩みを受け止めてくれる男の人は大勢いるからだ。

僕は男の人が好きになると、その人と一体になりたいと思う。予備校の頃の彼の時は、彼が勉強しているんだから、俺も勉強しなきゃと思って、勉強したものだ。大学の頃の彼は体育会だったから、俺もスポーツができるようにならなきゃと思って、3 回生の頃からプールに通い始めた。僕は、男性とセックスをしたいとは思わないけど、男の人の体にそられることはあって、でも、一緒に風呂に入ると、その欲望は解消される。お互いの裸を見せ合うと男の友情は深まる。俺たちは、男同士なんだという気持ちになって、いつの間にか、恋が友情に変わっている。

いま、ある男性を口説いているのは、その人は、これまで付き合ってきた男友達と違って、ジェンダーやセクシュアリティの勉強をしていて、その部分で、僕のことを理解してくれているからだ。ジェンダーの抱え込みは普通の人にはなかなかピンと来ないので、他の男友達にはその部分だけは打ち明けられない。しかし、その人だったら、理解してくれるから、その人に友達になってもらえれば、俺もいよいよ一人前の男になれるという思いがあるからだ。

上手くいけば、女性とも交際できるようになるかもしれない。

## 2 . 男はみんな、男が好きだ！

男が男を好きになるという感情は決して、

異常なものではない。

村上春樹原作の映画『ノルウェイの森』も、最初に、高校時代のキヅキ（高良健吾）と主人公ワタナベ（松山ケンイチ）がフェンシングのような遊びをしていて、それを直子（菊池凜子）が真ん中で見ているところから始まっている。すなわち、最初に向かいあい、見つめあっているのは、男2人である。この後、直子とキヅキは幼なじみで、恋人同士だということが語られる。さらに男2人が並んで下校する様子、ビリヤード場に遊びに行く様子が描かれ、それに並行してプールで泳ぐキヅキ、彼の濡れた背中に身体をよせる直子の仲が描かれていく。とても幸せそうな高校生3人に見えるのに、ある時、突然、何の前触れもなく、キヅキが自殺してしまう。それがこの物語の発端である。

その後は、大学生となって東京に出てきたワタナベと心を病んで田舎の療養所に入院している直子の関係が描かれていくのだが、キヅキがすべての始まりとなっていることはきわめて示唆的と言っていいだろう。フロイトのエデッス・コンプレックスでは、父殺しが、男子が女性との恋愛関係に入る前の成長のステップとなるわけだが、ここではキヅキという友人が死んでいなくなることが、主人公たちの大きな出発点となるのである。

キヅキが何故自ら死を選んだのか？ そのことについては詳しくは語られない。しかし、語る必要もないのかもしれない。僕が目撃したのは、ワタナベは最初、キヅキのほうと親しくて、キヅキの彼女だからということもあって、直子とつきあうことになることである。

### 3．裸になるのは、男らしさの証明！？

僕は、中学くらいの頃、身体の性と心の性の違和感に悩んでいた。

僕は、4年生くらいまでは女の子の前で裸になることも、母親と一緒に風呂に入ることもまったく平気だった。

今でも思い出すのは、3年生の夏の頃だ。あの当時までは曲がりなりに男の子だった僕は、プールの時間が終わると、仲良しのユキちゃんと教室まで走ったものだった。当時、男子たちは、プールの時、おちんちんを隠さずに着替えすることを「むちん」と言っていた。女の子が教室にいと、腰巻きをして海水パンツを脱がなきゃいけない。「女子が戻ってくる前に、教室に戻って、むちんしようぜ」と、男の子同士で廊下を走るのが楽しかったものだ。思えば、あの頃は一番幸せな時期だった。

それが5年生くらいになって思春期になると、僕は男らしさに疑問を持ち始め、男の友達は少なくなり、身体を見られることを極端にいやがるようになっていった。とりわけ嫌だったのは、夏場の身体測定のときた。前々号にも書いたが当時の担任の女の先生は、マッチョ好きで、男子に男らしさを強いる人だった。毎月、身体測定があるのだが、この先生は、女子には何も言わないのに、男子には、夏場なんだから、教室で上半身裸になって、保健室まで歩いていけというのだ。

僕はこれが死ぬほど嫌だった。同じ裸になるのでも、プールとはモードが違っているからである。プールは、上半身裸が規範だけど、必然性のないシチュエーションでの裸は男らしさの誇示なのである。しかし、他の男子は

平気みたいだ。やはり俺は異常なのか……？

男が裸になることを恥ずかしがるのが、決して異常な感情ではないことに気づいたのは、大人になってからのことだった。10年ほど前に、男性問題の分科会に参加したのだが、そこで、当時40くらいだった男性が、次のように語っていたことを記憶している。

「高校の健康診断の時に、保健室で体重をはかった後、上半身裸のままレントゲン車まで行けて言われて、ほんのちょっとの距離だったんだけど、女子たちとすれ違ったんです。今だから言えるけど、あの時は、やはり恥ずかしかったんですね。男だから、恥ずかしがっちゃいけないって思っていたんだけど……」

また何年か前にある男子学生からジェンダーについてあれこれ質問を受けた。彼は、どうみてもマッチョ系だから、男尊女卑的なことを言うのかと思っていたら、そうではなかった。いろいろなことに問題意識を持っているみたいだったのだが、その1つは、やはり羞恥心の問題だった。

「プールの時間、僕の行っていた学校では、男子は廊下で着替えさせられるんですよ。女子はちゃんと着替える場所があるのに、皆、ブーブー言っているんです」

女子の更衣室をつくるんだったら、男子もつくって然るべきなんだけど、おそらく予算の関係なのか。なぜか、今でもプールの更衣室は女子のみというところが多いみたいである。この頃は、男子だけを特別扱いしたら問題になるのだけども、女子を特別に扱うことは依然として問題にされない。

そうそう、10年ほど前だ。新聞に、「体育

祭の棒倒しを男子全員上半身裸でやらされて、それを女の子たちが楽しそうに見ているのが恥ずかしい」という男子高校生の投書がのった。それに対して、「男は人前で肌をさらすことが許されているのに、今は男が細かいことを気にするようになった。男が弱くなったと言われても仕方がないだろう」という女性読者からの投稿が出たと記憶している。

「本当に女ってやつは、困ったもんだなあ」と思ったものだった。女が差別されると怒るくせに、男を差別していることにはまったく気がついていない。「女性は羞恥心をもつことが許されているのに、男性は許されないのだ」と解釈せず、「男は肌をさらすことが許されているのに、女は許されていない」と解釈してしまうのである。

もちろん、僕も男同士で風呂に入るのは好きだし、男同士で裸になるのは楽しい時もある。しかし、自分が好きで裸になるのと、学校の先生から強制されるのでは別問題である。ジェンダーはセックスと一緒だ。好きな相手とセックスするのと、嫌いな相手から無理矢理レイプされるのでは、同じセックスでもまったく意味が違ってくる。

肌をさらすことを強いられることは一つの男性問題である。僕は裸を女子に見られるのが恥ずかしいと思う性格だったから、俺は男じゃないんじゃないかと思いだめたのだった。同一性障害である。どうにか治さなきゃいけない。

僕が大学の頃、スポーツを始めるのにプールを選んだのも、プールだと、自分の上半身を露出するということになるから、そうしていくうちに男になれるのではないかという思いがあったからだった。公の場で、乳首を露

出するのは（笑）男らしさの証明である。

そんなわけで、僕のプール歴は、もう27年に及ぶ。プールで裸になることにはすっかりなれたので、今では普通の男性よりも、肌をさらすことに抵抗はないと思うが、だから男らしくなれたかという別問題だ。

僕が男らしさ恐怖症に陥った大きな原因は、女の先生から「男らしさ教育」を受けたせいである。その先生に悪気はなかったのだが、僕には、「男子を女に都合のいい男に教育しようとしている」女性教師にしか見えなかった。これでは、女から男へのセクハラである。やはり、男らしくなるためには男性の力が必要だ。僕は男の友達が増えるに連れて、相手から男の部分も吸収して、男になっていくんだなあと思っている。いろいろな男性と同一化することで、少しずつ、自分の男としてのアイデンティティが築かれていくのである。おかげさまで、男の友人は増えたので、もう一息で、俺だって男になれる。今、先生を口説いているのも、その先生が最後のステップだという予感があるからである。

僕はもう48だし、50代くらいは、「俺は男だ」という確信を持って生きていきたい。「あと2年の間に男にしてくださいね」と僕はその先生に懇願しているのである（笑）

#### 4. 男は構築されるもの

『ノルウェイの森』で面白いのは、女性との恋愛と男らしさの構築の場面がほとんど交互に現れるということである。

ワタナベは直子とセックスをする仲になりながらも、同じ大学の緑（水原希子）とも交際し始めるのだが、直子や緑との交際のシー

ンの後、ワタナベがプールで泳いでいる場面、あるいはバイトで力仕事をしている場面が挿入される。また長沢さん（玉山鉄二）という先輩の男性との交際の場面も挟まれる。

これは男が女と交際するためには、その一方で、男らしさを構築することが不可欠であることを示している。これは、バダンテール、渡辺恒夫、ギルモアなど、さまざまな学者が言っていることなのだが、男であることは女であることよりも不安定なのである。男は元々染色体の関係で女よりも弱い。男として生まれた時点で、男は負け組だという言う人もいる。

したがって、男は常に、自分の男らしさを確認していなくてはならない。僕は、不幸なことに、10歳でジェンダーの問題に目覚めてしまったため、それを意識せざるを得なかった。しかし、そのことを知っている人が世の中にどれだけいるだろうか。女性はもちろん分からないだろうし、男性でも、男性ジェンダーを受け入れていくことに苦労しなかった人は、男のアイデンティティが女よりも不確かだということを意識していない。実際には、男が男らしいことをしようとするのは、男のアイデンティティを立て直す欲求が深層心理にあるからなのだけど、そのことを普通の男性は気づいていないのである。男性学や男性運動がいつまでも広がっていかないのはそのせいだ。男のほうが性のアイデンティティが弱いということを、まずはわかってもらわなくてはならない。

ワタナベは友達を作りたくないという学生で、言ってみれば、引きこもりである。僕もこの心理はすごくわかる。僕などは、男の友達が欲しいと思う反面、男の友達ができると

心が乱れるという思いがあった。僕は自尊心が低いので、周りの男子たちのほうが遥かに幸せそうに見えたし、自分の劣等感を刺激される。それが怖かったのだ。僕が40くらいになって、やっと友達ができるようになったのは、ようやく僕が、それまでの長い遅れを取り戻してきたからである。

ワタナベを演じる松山ケンイチは少年のようなあどけない顔で、この役を演じるのは彼以外には考えられない。また映画全体の澄みわたったような雰囲気にも注目してほしい。この映画はプールの水や山の雪が美しく描かれ、冷たい触感がある。それは男っぽい汗や臭いがしない世界であり、それが松山のキャラクターにもぴったりはまっている。これから男になっていく、さなぎのような持ち味が彼にはあるからだ。『ウルトラミラクルラブストーリー』(2009)で、彼が演じたのはアスペルガーの青年役だが、アスペルガーや不登校も男が8割だということを、世間の人は知っているだろうか。

松山ケンイチは、今やすっかり売れっ子で、日本の若手男優の代表的存在になりつつあるけども、これは彼が、アスペルガーの役を演じて、じっくりくるキャラの持ち主だからである。現代の男性問題を訴えるのに、もっともふさわしい男優と言えるかもしれないのだ。

## 5. 女性とのディタッチメント(分離)

『ノルウェイの森』では、ワタナベの女性体験に必ず他の男が関わってくる。まず、直子との関係にはキヅキが関わっている。2人はセックスの最中でも、死んだキヅキのこと

を思い出している。緑との関係にしてもそうだ。「私、彼氏がいるの」と緑。「何となくいると思っていた」と言うワタナベ。

この映画で描かれる恋愛は、基本的に三角関係なのである。これも、男の立場から考えた場合は、同一化の問題である。ワタナベは、他の男性と同一化しつつ、女性と付き合っている。他の男性と女性を共有しているということになる。

「お前もつらかったんだろうけど、お前が直子を残して死んでいったから、俺だって苦しいんだ」と死んだキヅキに語りかけるワタナベのモノログ。しかし、ワタナベがなぜ、ここまで直子にこだわるのか。彼女は、単なる友達の彼女だった人に過ぎない。なのに、彼は彼女を愛し抜こうと努力する。これはとりもなおさず、彼がキヅキに同一化の欲望を抱いていて、キヅキを内面化するには、直子との愛を貫く手段しかないからである。直子を知れば知るほど、キヅキにも近づいていくとワタナベは思っている。直子を求めることでキヅキを求めるといふ、欲望の三角形がここに存在するのである。

村上春樹の小説について研究された本を読んでいると、「ディタッチメント(分離)」という言葉がしばしば出てくる。

ワタナベと直子や緑との関係には、彼女たちが他の男にもとらわれているとせいである種の距離感が生まれる。さらに、ワタナベ自身も、直子と緑、両方とつきあっているのに、ここにも距離感が生まれる。この映画で描かれるのは、男1人と女1人がべったり愛し合うような関係ではないのである。

緑との交際の場面で、緑とワタナベは雪の中を歩いていくが、2人は腕を組むわけでも、

手をつなぐわけでもなく、離れて平行に歩いていく。これが、この映画の男女関係を象徴する場面である。分離しながらも、女を愛す……それが、この映画のテーマであると思えるのだ。

僕が大学に入って1週間くらいたった頃だ。朝の大教室。僕は一人で座っていた。教室は閑散としていて、僕はそこで授業が始まるのを待っていた。すると、突然、右側から声が聞こえた。女子学生が立っていた。

「ねえ、通てんの？」と彼女。

「いや、下宿です」と僕は、なんだ！？この女は??と思いながら答えた。

「どこから来てんの？」

「九州です」

「九州のどこ？」とさらに彼女はプライバシーに踏み込んでくる。

「熊本市……」

「そんな感じー」と彼女は予想があたったという顔で言った。

だけど、僕は不愉快だった。一体、俺のどこが「熊本」なんだ？ 後になって、この彼女が、同じクラスの女の子だということがわかった。しかし、この時点で僕は、まだ彼女の顔も名前も記憶していなかったのだ。彼女は、僕のプライバシーを探っていたのだろうか。

僕が女性を怖いと感じるのはこういう時だ。女性と付き合っていると、女性のペースに巻き込まれるような気持ちになってくる。女性のほうが親密さへの敷居が低いし、他人のプライバシーを詮索したがるからである。

これを回避するためには、ある程度、女性とは距離をおいて付き合わなくてはならないと僕は思っている。とりわけ、僕みたいに男

としてのアイデンティティに自信のない男は、女性と近くなり過ぎると、自分の男の部分が脅かされるような気持ちになってくる。女は男を去勢するのである。

おそらく、ワタナベも、まだ男としてのアイデンティティに自信がないのではないか？ だから一人の女性に深入りすることを躊躇しているようにも思えるのだ。

## 6 . 一人の女性と付き合うために。

ワタナベの先輩の松村は初美（初音映莉子）という恋人がいる。外務省に就職が決まり、海外に赴任されることになった松村に、初美のことはどうするのかと尋ねるワタナベ。これに対し、松村は、「俺は結婚はしない。俺が海外に行く間、他の男と付き合うか、俺を待つかは、俺の問題じゃない。彼女の問題だ」と語る。松村は、たくさんの女たちと関係をもった経験のある男である。一方の初美はそれを知りながらも、松村への愛を捨てることができない。

初美は、3人で会食した際に、ワタナベが他に好きな女性がいながら、松村と一緒に女の子を取り替えて遊んだことがあると聞いて、ワタナベに激しく詰め寄る。「あなたは、そういうタイプの人じゃないと思うけど」と。「僕もそう思います」とワタナベ。初美の言うように、ワタナベは、松村のように遊びで、たくさんの女性とセックスをするような男ではない。しかし、ワタナベには、一人の人を愛し抜けるという確信も持てないのである。

「あなたみたいに確信をもって人を愛せるってすごいなあ」とワタナベは語る。しかし、初美は、この数年後に自殺したという設定に

なっている。やはり、確信をもって人を愛することは不可能だったのだろうか。

とりわけ、男の場合は、これまで述べてきたような同一化の問題が絡んでくるので、余計、女性を愛するまでの段階にたどり着くステップがややこしくなる。僕が女性を受け入れられないのも、この年になってお恥ずかしいけど、やはり、男としてのアイデンティティが未熟だからだ。男性との関係の方が楽しいと思うのは、男の人は、僕の男のアイデンティティを高めてくれるからだ。しかし、女はそれを侵食しようとするのである。

男の友達は何人いてもかまわない。僕が何人の男と付き合おうが、そのことで他の男の人との関係がくずれないわけじゃない。しかし、女性だとそうはいかないだろう。また女性の場合は、往々にして、一人の男を所有しようとするし、一人の男に依存しようとするので、それを疎ましいと僕は感じてしまうのである。

映画では、この後、直子が自殺し、直子と同じ療養施設に入院していたレイコ（霧島レイカ）がワタナベの元を訪れて、レイコの誘いで、2人はセックスをすることになる。彼女は自分のなかに直子を内面化するために、ワタナベとセックスすべきだと考えるのだ。「直子や私の分も幸せになってね」と彼女は去っていく。

その後すぐにワタナベは緑に電話をする。すなわち、ワタナベが緑と真面目に恋愛しようとする決意にいたったことを示唆して、映画は終わっていく。

この映画、死と女がテーマだ。僕の感想は、それを強引に男の自己構築の問題にこじつけたものと思う人もいるかもしれない。しかし、男にとって死イコール女であることを忘れち

やいけない。これは世界的に有名なフェミニストのシクスーも言っていることだし、シェールがオスカーをとった『月の輝く夜に』（1987）という映画を覚えていらっしゃるだろうか。あの映画で、イタリア系アメリカ移民の母が、夫の浮気に疲れて、ある男に尋ねる。

「なぜ、男は女を追うの？」

「さあ、死が怖いからかも」

「ありがとう。私の質問に答えてくれて」

そう、男にとって女は、死が怖いものと同じくらいに怖い。だから、ある種の男性は、常に女性（死）とセックスしていなければ、その恐怖から逃れられないのである。僕は、その逆パターンで、女が怖くて、まともに付き合うこともできない。ワタナベは、様々な葛藤を経て、どうにか女性との恋愛にたどり着いたみたいだ。俺も、こういう日が来るのかなあー。50 近くにもなって、何を言っているんだ？ と言われるかもしれないが、キヅキや直子が死を選んだのと同じで、心の病気はなかなか治らないのだ。

そして、同一化の問題に関して言えば、女よりも男のほうがはるかに苦労するということ。そのことを世間の人に分かって欲しいよね。

本当に男って、痛い！ よね。

# 援助職のリカバリー

## 《2》

～たぶん、私は「新型うつ」でした～

袴田 洋子

先日、NHKで「新型うつ」の特集が放映され、ネット上ではその感想や批判も含めて、「新型うつ」に関して話題になっていました。番組では「新型うつ」について、「他責」であり、「仕事には行けなくても趣味や旅行は楽しめる。従来の概念を覆す新たな心の病」と説明されていて、現代の若者に多いそうで、多くの企業が悩んでいるとのことでした。

で、番組を観て、ちょっと驚いてしまいました。「あれ、かつての自分のことだ。私、取材を受けたっけ？」と思うほどでした（苦笑）。今回は、そんな20代の頃を振り返ってみようと思います。

### 電車通学との闘い

幼なじみたちのように4年制大学に進学しても就職できるコネはない、だから手に職を持たなくちゃ、じゃ、看護婦になろう、でも学歴で差別されるのは嫌、なるからには絶対大卒ナース！ということで運良く、新設の看護大学に入学できました。

当時の私は、流行の服を着こなす元気な女子大生、というよりは、念願のオートバイに乗ることを目標に、体育会系の

自動車部に入る男顔負け？な女子学生で、同じ自動車部の他学部の1年生の彼（恋人）もできました。

しかし、入学してから間もなく、大きな壁にぶちあたりました。東京・荻窪の自宅から神奈川県相模原市の大学まで、自転車 電車 バスで約2時間の通学は体力的にとてもきつく、それまで地元の公立の小、中、高校への通学経験しかなかった私は、予想どおり、くたびれました。大学の一般教養の授業終了後、部活を終えて自宅に戻るのは、夜の10時半過ぎ。夕飯食べて、風呂に入って寝るのは0時を過ぎ、翌朝、6時に起きて2時間かけて大学に行くというのは本当に大変で、そのうちに私は、大学近くにアパートを借りている自動車部の仲間や彼のアパートに、たびたび泊まるようになりました。

私の外泊率が高まるにつれ比例したのは、父親の機嫌の悪さでした。年頃の一人娘が外泊してばかりいれば、親として心配しないわけがないでしょうが、大工職人で口数の多くない私の父親は、「心配」が「不機嫌」という表現になってしまっていたのかもしれませんが。

## 父親が怖いワケ

私が小学校に上がる前、私のためにピアノを買ったかった母親と、そんなもの必要ないという父親は、毎日口喧嘩をしていて、ある時、怒った父親が「そんなにピアノが欲しいかよ！」と言い、逃げる母親の腕をつかんで頭を湯のみ茶碗で殴ったことをきっかけに、私の中では、父親 = 恐怖というものが出来上がっていました。なので、父親を二度とあんなふうに怒らせないよう、常に機嫌を察知し、狭い自宅の中でなるべく父親と顔を合わせないようにしようと、家にいる時はそればかりを考えていました。母親は、私と父親の間にたって、色々神経を使ったようでした。

そんな怖い父親をかわしながらも、大学1年目の日々は、楽しい部活動、初めてできた恋人、で忙しく過ぎて行きました。まずは四輪免許取得のために教習所に通い始めました。夏休みは、実家に帰省している彼に会いに行こうと、教習所近くのスーパーで、初めてバイトもやりました。そしてお金を貯めて彼に会いに行き、地元の彼女と別れていなかったのね、ちゃんと別れてくれたの、信じていいの、大学で待っているからね、電話ちょうだいね、電話するね、離れるのは淋しいよ、とすったもんだしながら夏休みは終わり、大学の後期授業が始まりました。

## 若気の至り

9月も終わる頃、生理が来ないことに気づき、妊娠したと思いました。彼と一緒に泣きながら私の母親に土下座して伝え、母親から教えられた病院にいき受診、数日後に中絶手術を受けました。あまり

にもひどい事をやらかしている、という自覚のせいか、病院からの帰り道、何を考えていたのか思い出そうとしても、思い出せるのは、「何も考えていなかった」ということです。それと対照的にはっきりと思い出せることは、「お父さんには内緒だからね。言えないよ、こんなこと」と母親が言ったことでした。

看護婦になるというような者が、看護大学で学んでいるような者が、人の命を救う職業につくような者が、こんな事をする。自分は人殺しである、という一生償えない罪を背負ったんだ、と思いました。こんな事をする人間が生き続けていられない、とも思いましたが、死ぬこともできず、もぬけの殻、魂が抜けてしまったような、当時を思い返すと、そんな状態だったように思います。なんとかやり過ごせた理由は、今、思うと彼に「依存」していたからでした。

## 「見捨てられ不安」？

彼との関係に一喜一憂しながら、授業をさぼり、彼のアパートに入り浸っていた私は、彼の在籍する学部と看護学部のキャンパスが大学2年目になると離れてしまうため、彼と「遠距離恋愛」になるのが不安でたまりませんでした。また、将来は彼と結婚して赤ちゃんを持つべきだ、みたいな思いもありました。そうして、こんなに自分のことを好きでいてくれる人は、きっといない、という思い込みとのめり込みで、別れの日がやってくるのが不安であり、でもその不安を解消するためには、授業もさぼって彼の部屋に入り浸るといふ、まさに「依存症」の状態でした。

日常生活に支障が出ているのに、わか

っちゃいるのにやめられない。あの焦燥感、不安感、恐怖感はとても嫌なものです。

そして、当然、授業をさぼりまくったツケはやってきました。後期試験が終わって、春休みに入った3月、掲示板に「留年者」として、私の名前が貼り出されていました。看護学部のような、看護師国家試験を受けるためのカリキュラムが決められている学校は、その学年のうちに取得しなければならない単位数が決められており、単位が足りなければ2年生に進級できなく、私を入れて3人の看護学部1期生の留年者がいました。この時まで、自分が留年するなど想像もしていなく、目先の不安(=彼と離れる不安)がいかにか大きかったか、と、今、意味付けができるように思います。

### 母親の「選択と決断」

留年になった事を母親に告げても、母親はそんなに驚かなくなったように記憶しています。中絶手術をして、留年までした娘を責めたくないと思ったのかもしれませんが。それどころか、「お前、バイクの免許、取りに行ったら」と言ってくれました。こう思い返すと、母親は母親なりに私の事を気遣っていたのかもしれませんが。

さて、問題は恐ろしい父親です。私の外泊が多いことで、母親は「お前をかばいきれない」と言っていたほど、父親の不機嫌は頂点に達していました。その父親に私が留年したことを伝える、と想像すると、また殴られるだろうか、どうなるだろうか、あまりの恐ろしさに想像さえも出来ず、「お父さんには、言えないね」という事になりました。そうして、母親が「選択」したのは、「別居」でした。

当時、母親は老舗のハンカチメーカーの工場で正社員としてハンカチを縫う仕事をしていて、ぎりぎり母子で暮らせるくらいの収入はあったようでした。その母親も電車通勤できて、私は大学にバイク通学できる東京の日野市というところにアパートを借りて、私と母とで二人暮らしをすると母親が言い出し、あれよあれよという間に、アパートを契約していました。引っ越しは、母親の友人と、自動車部の同級生の男子部員3人に手伝ってもらい、2トントラックをレンタカーで借りて私が運転し、夜逃げのごとく完了しました。

### 「アディクション」と「他責」体質

「初めての恋愛」で始まった大学生活は、とても楽しいものだったけれども、「2年生になったら遠距離恋愛になってしまう」という大きな不安と、「彼は地元の彼女と別れていなかった」という事実で、とても苦しく激しい恋愛になってしまいました。当時は、「こんなに自分のことを思ってくれる人は生まれて初めて」という思いだった自分ですが、援助職の今の自分が、大学時代の自分をアセスメントすると、依存症とみだてることができます。

誰かと一緒にいないと不安を感じ、寂しくてたまらない。心の中は、穴のあいたバケツのように、注いでも注いでも満たされない。自分でも何を渴望しているのかわからないような飢餓状態で、とにかく漠然とした不安から逃れるかのように、次の彼としょっちゅうバイクで出かけながら、なんとか2年に進級できました。しかし、1年のウラの、落とした単位の授業だけ出ればよかったのんびりした

生活とは変わって、看護学部の2学年は、ほぼ専門科目の授業でびっしり、私は再び、大学を休みがちになっていきました。でも、ガソリンスタンドのバイトやツーリングには行くわけです。そう、今、流行の「新型うつ」にそっくりです。

実は、大学2年の「不登校」の時に思っていた感覚を数年前、思い返したことがあります。わかったことは、級友たちに小さな「不満」を抱いていた、という事でした。何に対する不満か？ 我ながら呆れて、ここで告白するのも嫌になるほどなのですが、理由はこうです。「授業を休んだ時に、出席してる人が代返してくれてもいいじゃない、だって仲間でしょう？」

恐ろしいほどの「他責」と「甘え」です。「仲間なんだから、これくらいしてくれたっていいじゃないか、お互い様なのに、みんなが休んで、私が出席している時は、代返どんどんしてあげるのに、助け合うってことでしょ」と思う自分は、そんな風に思わない(ように見えた)級友たちに、不満を感じていました。さらに「なんて思いやりのない人たちなんだろう、人を助ける仕事に就くタマゴの集まりなのに」などと思っていました。そんな不満があって「不登校」になっていたようだとはアセスメントした時は、もう最高に自分が嫌になりました。しかし、この感覚こそが「共依存」というものであり、「アディクション」の不健全さをよく理解できると思います。

### 求む、「自己肯定感」

「すべては競争 ~と比べて~」という他者評価にすぎた生き方、「相手がしてくれないから自分は なの

だ」という他責の思考。いずれも、自分はこれでいいのだ、という「自己肯定感」を持っていない、自分が人生の主役になれていない状態です。さらに「依存症」気質によって、寂しさを埋めようと人に甘え、すがり、生活に支障が生じるようになる。どう考えても、このままではこの先良い事が起こりそうには思えませんが、その通りで、何も違うことを取り入れないので、この後も私は、下手な生き方を続けていくこととなります。

こうやって自分の生きてきた物語を言葉にして思い出してみると、「自己肯定感の低さ」がキーワードになっているように感じます。

他者と比べてどうだ、他者からどう思われているか、ということではなく、「自分が好きなことをやる、自分がやりたいことをやる、それでいいじゃない」で生きることのラクさと、健全さ。

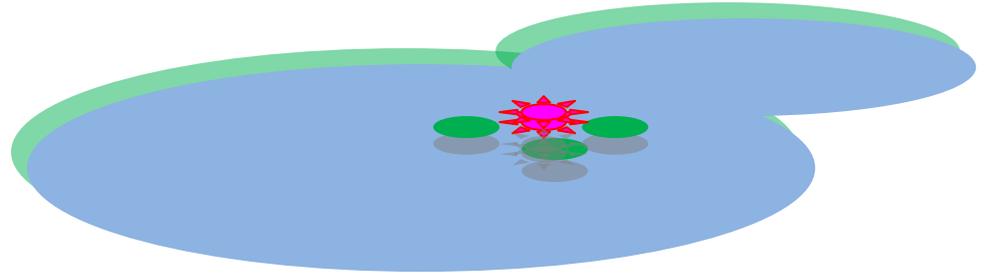
この「自己肯定感」を持っていない人が持てるようになるには、どうすればいいのか、今、私自身がそこにチャレンジしているのかなと思っています。

今回は、大学3年で始まる病棟実習の頃を振り返ってみようと思います。

しゅう せん か にっ き  
周 旋 家 日 記 (2)

仏教との再会—退蔵院襖絵プロジェクト

乾 明 紀



新しい価値づくりのために人を紹介したり、想いをカタチにしたりするために人を支援する「周旋活動」は、私自身が主役にならない場合が圧倒的に多いものだ。自分が主役にならないことについて、私は人間が出来ていないので、寂しい想いや悔しい想いをすることもある。しかし、その一方で、それまでの私が持っていなかったビジョンや価値観に出会う楽しみがある。また、私が知らない世界のことを非常によく知っておられる「その筋の専門家」の方の想いをカタチにすることは非常に刺激的だ。どんなに手間暇がかかっても周旋活動について手を出してしまうのは、この出会いが楽しく、自分を大きく成長させてくれることを脳が記憶してしまったからだろう。

「その筋の専門家の想い」が非常に魅力的であれば、「想いをカタチにしていく」という援助行動は強く駆動される。そして、その過程で私は大きく学ぶのである。私にとって大きな学びとは、他者の価値観を自らに取り入れることと、オーダーメイド的に実行される「想いをカタチにしていく」援助行動を通じて、自らの手で方法論を発見していくことである。この2つがたまらなく面白い。余談だが、この面白さを教育の仕組みの中に入れようとしているのが、サービス・ラーニングというものだろう。立命館大学にも2008年にサービス・ラーニングセンターというものが立ちあがったが、私もサービス（援助）しながら、大いに

ラーニングしているのである。

さて、私にとって周旋活動は、事の大小を問わず常に自分を成長させてくれる存在であるが、ときに私の人生に大きなインパクトを与えてくれるものがある。ここ最近の周旋活動の中にも、そんな予感を覚えたものがある。それは周旋活動を通じた「仏教との再会」である。

「再会」としたのは、私は子供のころ浄土真宗の寺院を拠点にボーイスカウト活動をしていたし、前々任校は、佛教大学だったからである。しかし、深く仏教に帰依していたわけではなく、浄土教についてもほとんど無知と言っても過言ではない人間だった。そんな私が、仏教と本格的に再会したのは、2010年に、妙心寺の塔頭、退蔵院の副住職と京都市が主催するある審査会でご一緒したご縁であった。

私と副住職は、京都市の未来像をアートやデザインの力で政策提言されたものを評価する審査員であった。当時、私は京都造形芸術大学の教員で若手アーティストの支援活動（これもナカナカ面白い取組みだったのでいずれは紹介したいナ）をしていたので、そんな活動を紹介したりしながら副住職と話をしていると「うちのお寺には慶長年間の方丈に、慶長年間の襖絵があるのですが、これは重要文化財であり、常に外に出しておくとうらやまが傷んでしまいます。だからといって襖を外して

おくと耐震的にも弱くなるので、普段は、白い襖をいれているのですが、それでいいのかって思うのです。だから、芸大生に何か描いてもらうことってできないですかねえ？」ということをおっしゃった。周旋家の血が騒ぐ瞬間である。仏教との再会はこんな会話から始まった。もちろん二つ返事で「できますよ！」と答えた。

早速大学に戻り周旋活動に入った。私は周旋とマネジメントのプロだがアートの専門家ではないので、その筋の専門家の知恵と実践を借りなければこの企画は完成しない。京都造形芸術大学は、感度の高い教員が多いので、周旋に全く苦労はなかった。私の上司であったプロジェクトセンター長に相談し、現代アーティストの椿昇氏をディレクターに迎えた。芸術と社会の関係をストイックな姿勢で考え続け、創作活動をしている椿氏は、「パンクなアーティスト」（山口,2002）とあだ名される人物であり、最初から鼻息が荒かった。

周旋活動には、消極的な人を積極的にするところから周旋する場合と積極的な人同士を周旋する場合がある。今回は、100%後者だ。ストイックに価値創造をする喜びを知っている「禅の専門家」と「アートの専門家」の出会いは、周旋家という触媒が必要ななかったかのように化学反応を始めた。私はいつのまにか周旋家から傍観者になっていた（マネジメントはしていた

が…。傍観者になれるのが最高の周旋なのかもしれない。

禅とアートは、いずれもが行動を伴いながら、世俗的なものからの超越を目指すものである。前者は厳しい修行を通じ、後者は売れる保障のない創作活動を通じそこに至ろうとする。そんな両者の融合が、社会的地位を超えた、最高の価値の創造に向かうのは必然であろう。副住職は、「自分の目が黒いうちには価値がわからないものを創りたい。この時代では評価できないもの、100年先の未来に残るようなものが残せたら」と語った。これが、今回のプロジェクトで求める作品の質となった。

一方、アーティストでもあり、大学教授でもある椿氏は、この取組にある狙いを持っていた。「欧米ではアートは市民の買って飾るといふ自然な楽しみに支えられていますが、日本では明治以後『芸術』は特別なものとされ、市民は遠ざけられてしまいました。結果的に若い画家が生きてゆけないという19世紀までの日本は考えられない貧弱な環境」になったことを嘆き、「京都という歴史のある土地に眠っていた歴史的資産と芸術系大学やアーティストが集中するという状況を融合させ、多くの若い画学生に誇りと夢を与え、欧米マーケット主導のまま内需システムを構築できなかった我が国のいびつな状況に一石を投じる」（椿,2011）ことであった。「いろんな

人に勇気を与え、社会を活性化する。あなたはなにしろクレイジー！」（山口,2002）とも言われる椿氏である。この取組も彼にとってはひとつの作品であり、内なる想いが爆発していた。アーティストのモチベーションと禅の関係について、仏教学者の鈴木大拙（1940）は、次のように述べている。「芸術的衝動は道徳的衝動より原始的であり、生得のものである。芸術の訴える力は端的に人間性に食い込む。道徳は規範的だが、芸術は創造的である。一は外部からの挿入で、一は内部からの抑えがたい表現である。禅はどうしても芸術と結びついて、道徳とは結びつかぬ。禅は無道徳（unmoral）であっても、無芸術（without art）ではありえない」。

傍観者になった私には、副住職と椿氏が私にとっての老師だった。そして、2人の言動を通じて、お釈迦様が私に「お前はどこに向かって生きようとしているのか？」と質問されているように思えた。

鈴木大拙（1940）『禅と日本文化』北川桃雄訳、岩波新書、

椿昇（2011）『退蔵院 21世紀障壁画プロジェクト企画書』

山口裕美（2002）『現在アート入門の入門』、光文社新書

# トランスジェンダー

## をいきる

( 1 )

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

## 1 はじめに

「自己」を研究素材とした一風変わった修士論文を中心に

「修士論文」と聞くと、執筆者も読者もなんとなく固いイメージがある。実際、私も 2011 年度に修士論文を執筆したときは、毎日机にへばりつきながら、パソコンの音声ソフトを利用して、ああでもなく、こうでもない、というように、顔の表情を堅くしながら書いていた。

しかし、私の場合、そのような堅い表情で書いていても、ある種の楽しみや発見を見出すことができた。それは、修士論文の研究素材になっているのが、「自己の男性性エピソード」だからである。

この修士論文は、視覚障害・FtM (Female to Male 身体・書類上は社会的に女性、ジェンダーは男性) トランスジェンダーの自己のライフストーリーの中で、日常生活のさまざまな場面において、常に社会に内在する「男らしさ」を意識しながら、その一方で、「男らしさ」に対して矛盾や葛藤を抱き、そのつど問題提起しながら、社会との共生や再統合に焦点を当てた自分史を、自己物語を通してエピソード分析をした当事者研究である。したがって本論文は、男性性の自分史に焦点を当てたエピソードを中心に記述していながらも、そこから社会に内在する普遍的なテーマを見出そうとしているのである。この「自己

の男性性エピソードから、社会に内在する普遍的なテーマを見出そうとする試み」が、この修士論文の一風変わった特徴であり、これから連載していく内容も、かなりインパクトが強いものと考えられる。

#### エピソード記述としての「自己物語の記述」

自己の男性性エピソードを、ただエピソードとして記述しただけでは、社会に内在する普遍的なテーマを見出すことができないばかりか、「個人の問題」と捉えられ、「問題の個人化」に繋がる。社会の普遍的なテーマを見出すには、自己のエピソードに、一定のストーリー性を持たせることが必要だ。

そのエピソード記述として試みたのが、「自己物語の記述」である。この「自己物語の記述」の手段として、「自己内対話」を取り入れた。「自己内対話」とは、もともと複数存在している自己のあり方を、あえて2人の自己に象徴化させた上で、その2人の自己の対話によって、これまでの自己の男性性エピソードについて、インタビュー形式で対話し、それを対話文として自ら記述していくことによる自己省察を主目的に編み出した方法である。この記述方法は、単なる自分史の中から、時間軸に沿って男性性を構築していったプロセスを記述するのではなく、それぞれの体験が構造化されていく中で、単なる私個人の体験ではなく、社会の普遍的なテーマも含めた「ハイライト化された男らしさ」として記述しているのである。

ここでは、自己の男性性エピソードと、そのエピソードを記述している「自己」との間に、一定の距離を置くことで、自己の男性性エピソードを客観的な視点で捉え返すことによって、問題を社会化し、「怒る」、「怒鳴る」などの一見「不の感情」とされる事柄をも赤裸々に物語ってしまうことができる。ただし、そこに至るまでには、自己の男性性エピソードや、それに伴う一見「不の感情」とされている事柄を、個人化するのではなく、社会化するという明確な目的がなければ達成できないことにも留意したい。

また、応用人間科学研究科の授業のひとつであるドラマセラピーという芸術療法による演出や場面設定・集団精神療法によるグループ内での笑いの共有という重要な要素を、「自己内対話」に取り入れたことで、相互に笑いを引き出すことによる本音の部分への気づきや、思わぬ質問から生じる議論の深まりや感情のもつれなどを、ありのままに可視化しながら記述したことも、「自己物語の記述」の特徴である。

#### 「自己内対話」の基本になっている自己の「多声性」と「ドラマセラピーの授業」

では、「自己物語の記述」だけで、果たして、自己の男性性エピソードと、それを記述している自己との間に、一定の距離を置き、一見「不の感情」とされている事柄をも客観的な視点で捉え返した上で、赤裸々に物語ってしまうことができるのだろうか。ここで重要になってくるのが、「自己物語の記述」の手段になっている「自己内対話」である。

前述したように、「自己内対話」は、もともと複数存在している自己の中から、あえて

二人の自己に象徴化させている。この「自己内対話」の基本になっているのは、視覚障碍・FtM トランスジェンダーという事情から、自己の人生が、現在でも常に「多声的」であるからだ。この「多声的」というのは、思春期という不安定な時期に起こりやすいが、視覚障碍・FtM トランスジェンダーという、社会的マイノリティーな状況の中で、常に社会の矛盾や葛藤を覚え、問題提起しながらも、その一方で、社会との共生や再統合を図ろうとしている。つまり、思春期のような不安定な状況が、中年期に差し掛かった現在でも継続しているため、常に自己の中で、多声的な状況が、自己の人生の中心を占めている。

しかし、そのような状況をただ不安定視するのではなく、修士論文では、複数の声を、以下の二人の自己に象徴化させてみた。

身体・ジェンダー共に男として一致している理想の男像である「ザ・オトコ」(インタビューA)は、身体・ジェンダー共に男の視点で自己を眺めながら、男性性のエピソードを客観的に浮かび上がらせる質問をしている想像化された自己である。したがって、あくまで「想像化された自己」であるので、厳密にはその男性性に誇張性・捏造性が多分に吸引されている。一方、身体は女・ジェンダーは男と言う2つの性別の間を常に揺れ動く現実の自己「FTM トランスジェンダー」(インタビューB)は、そのようなAの質問に悩み、困惑し、時には怒りをぶつけながらも、今まで構築してきた自己の男性性を、語りの中で振り返っているリアルな自己である。したがって、社会の環境や意識・法制度などによって、常に「間」を揺れ動く存在であり、境界人であるからこそ見えてくる脆弱性・フラジヤイルな部分を常に意識させられている。このようなドラマ的なディスコースによって、AとBの人間的な対話を通して、多声的な声が相互に対立している声ではなく、交響音楽のように調和の取れた和音として響きあっていく複数の声として再統合されるプロセスを踏むことを目指そうとしている。ちょうど、1曲の音楽を2パートに分けて、お互いの声を聞きあいながら合唱するという感覚である。

「対話的自己物語」から見えてきた、自己特有の男性性

「自己物語の記述」は、対話的自己物語として成立した。この成立の背景は、創造された男らしい自己「ザ・オトコ」(A)」と、現実の自己「FtM トランスジェンダー (B)」の二項対立的な特徴を浮かび上がらせた。

その結果、男性性エピソード分析のために創造かした「ザ・オトコ」(A)」の存在によって、「FtM トランスジェンダー (B)」が構築してきた男性性の中に、通例であれば気づかない男性性を浮かび上がらせ、自己物語の記述によって可視化することで更に明らかになった。つまり、「FtM トランスジェンダー (B)」のライフストーリーにおいて、常に男性同士のホモソーシャルな関係性を意識していたり、どのような些細な現象からも、時には一般に女性性の高い行動様式とされる事柄からも、男性性を見出そうというセンシティブな心性が浮かび上がってきた。(詳細については次回以降に連載する)そこには、自己の女性または女性性嫌悪に繋がる表現によって、より男性性を構築しようとする心性が明らかにな

っている。このため、自己の中の女性性を不のイメージとして誇張している表現が多いが、それは自己の中にあった誇張された男性性が内面的にイメージされていた女性または女性性嫌悪の性質を含んでいるからである。この誇張された男性性は、社会によって構築された男性性・自己によって構築した男性性・更に男性性を追求するあまり、誇張せざるを得なかった男性性など、さまざまな性質を持つ男性性の集合体であり、現実の男性性との調和を図ろうとしている作業を通して、自己の入り乱れた男性性が明確になったことで、女性または女性性嫌悪に繋がる表現が多用されていることに気づかされた。このこと葉、視覚障害・FtM トランスジェンダーの自己のライフストーリーに置いて、「視覚障害」と、「女性の身体」を不のイメージと位置づけた上で、誰よりも強く男手あろうとした結果であろうと考えられる。

終わりに 次回からの連載に向けて

冒頭でも詳述したように、この修士論文の目的は、自己の男性性エピソードを記述しながらも、それを単なる自己の体験だけに留めることなく、社会問題との関わりの中で、自己の体験から浮かび上がってきた問題を社会化することにある。したがって、「対人援助学マガジン」でも、できるだけ修士論文の目的に沿って連載していきたい。ただし、連載の内容については、修士論文では扱わなかったことも取り入れてみようと考えている。

この連載は、手記でもなく、日記でもなく、単に時間軸に沿った自分史語りでもなく、病語りでも病気語りでも、ましてや障碍語りでもサクセス・ストーリーでもない、自己の男性性変容のプロセスを通した確かな当事者研究として位置づけておきたい。

# 役場の対人援助論

岡崎 正明

(広島市)

## はじめに

「福祉事務所」。保育所や障害者手帳・介護保険・生活保護など、誰もが聞いたことのある行政サービスの窓口（お役所）。そこが私の現職場である。

お役所に行く人の用件は大抵が“手続”である。「住民票をとる」「税金・保険料を納める」など、ごく事務的・書類的な行為。窓口対応の時間は長くても十数分そこらであり、そこで家族の事情が語られたり、対応者が質問をしたりすることはまず無い。転入届を出しに行行って「どなたがこちらに住むことを決められたのですか？」などと聞かれた人はいないはずである。

しかし「福祉事務所」は若干違う。無論“手続”が最後にはつきものだが、それ以前に「保育所の空きはないか」「介護が家族だけではできない」「生活がやっていけない」といった“相談事”が時に語られることがある。窓口対応の時間が、1時間以上かかることも珍しくない。そこでは様々な事情・問題が語られ、助言やサービス提供が模索される。

だがけして“治療”や“セラピー”が行われる場所ではない。

「手続以上、治療未滿、時々相談」、そんな感じか。

どこかで聞いたようなフレーズだが、とにかくその辺りが「役場の対人援助」のテリトリーである。

ここではそんな福祉事務所の窓口の現在と、対人援助職の視点から見えてくるあれこれを語り、「役場の対人援助」の可能性を探ってみたいと思う。

## コンテクストを掴む窓口対応

最近よくつかわれるリスクマネジメントという言葉。ときどき勘違いしてリスクを

無くすことみたいに使う人があるが、そうではない。マネジメント（管理・調整）という言葉を使っているように、その意味はゼロにすることではなく「できるだけ減らして、コントロールしたい」ということだ。そもそもこの世にリスクゼロなんてありえない。この瞬間に、自分の上に隕石が落ちてくる確率はゼロではない（かなり低いけど）。

お客様のクレームは、お役所にとって「リスク」のひとつである。だから可能な限り減らす努力をするべきものだが、ある程度は存在し続け、付き合っていないといけないものといえる。

しかし、今よりもっと効果的に減らす道はまだある。数年間福祉事務所の窓口において、そんな思いを抱いている。多くの職員ががんばってよい対応・接客をしようとしているのだけれど、どうも今のやり方は少しもったいないというか、工夫が足りないというか。

お役所ではどこでも大抵「親切対応月間」だとか「さわやかあいさつ運動」みたいないろんな取組みをしている。それはそれで悪いことではないし、かけ声としては間違っていない。民間でも同様の取組みは多い。

ただ、では具体的にどのように良い接客というものをやるのか、となると、あまり明確な答えが準備されていない。業務自体はさんざん合理性や理屈を大事にするのに、である。

そもそも親切な対応とは何を指すのか。正しい敬語とお辞儀の角度のことだけではないだろう。「親切」といわれると、心根とか人柄の問題のようにも思える。他人にやさしさを表現するのが苦手な人もいるはずだ。そんな人はどうするのか。具体化・行動化しにくい目標に思えてならない。

そこでもう少し理屈のある窓口対応があったほうが効果的ではないか。そうして思いついたのが「コンテキストを掴む窓口対応」という視点である。

先ほども書いたが、お役所に来る人は何かの用事がある。窓口で用件を伝え、その用件が済めば目的を達成して帰っていく。非常に分かりやすい。だから通常、来所者の発言する用件の内容（コンテンツ）を正確に捉え、それを満たせばよいはずである。そしてそれならば大抵のお役所はできている。「婚姻届をください」といわれて、離婚届の紙を渡す職員はいない。

それでもクレームが減らないのはなぜか。それはクレームの多くが、「コンテンツ」でもめているわけではないからだ。もちろん手当が出ないとか、用件自体で怒ることもあるが、そうだとするとそこに何か、その人の真意や文脈・意図（コンテキスト）が見え隠れする 경우가少なくない。勘違いや誤解、単純な言葉の間違いなども含めると、コンテンツ（表面上の発言内容） コンテキスト（そのウラにある真意や事情）という状況は、かなりの頻度で起こっている。

例えば先日、障害者福祉の窓口で男性の来所者が来て大きな声で話始め、ベテラン職員が対応する場面を見る機会があった。

来所者 「市営住宅に入りたいんだけど！」  
職員 「(？ 係が違うが) どうかされたんですか」  
来所者 「チラシを作れ言われたけど、俺はよう作らんのよ」  
職員 「チラシですか？」  
来所者 「係がまわってくるけど自分はようせん。でも近所の人が『なんでで  
きんのんか！』って怒るから・・・」

よく話を聴くと軽度の知的障害者の方で、地域で一人暮らしをしている方だった。自治会の当番が回ってくることで近所の人とトラブルになったとのこと。最初は興奮気味だったが、職員がしばらく話を聞いていくと、徐々に冷静に。最後には相談機関を紹介すると「ありがとう」とお礼を言って帰って行かれた。

最初のワンフレーズ「市営住宅に入りたい」だけでは、その後の展開は誰にも想像できない。コンテンツだけに注目すれば「ここじゃないんで」と、市営住宅の係に案内することになるが、それで問題解決が本当に図れただろうか。クレームに発展したかどうかは分からないが、まったく違う展開になったであろう。次の窓口でトラブルになったかもしれない。

このベテラン職員は相手の発言の文脈・意図をしっかりと探って理解し、それに応じた対処をした。ただ「ベテランだから」「人柄いいから」だけではなく、コンテクストを掴むという、コミュニケーションの論理から見て、適切な対応をした結果なのである。

福祉事務所には、表向きは手続のことをいうが、実は小脇に事情や問題を抱えたお客さんが来ることが多い。誰にもぶつけられない怒りや不安、「なんでこんなことになったのか」「本当はこんなはずでは・・・」などなど。

そんな本人の真意とか文脈とかを感じとって、ちょっと“聴く”姿勢をもつ。大事にしてあげる。それだけで話がスムーズになり、冷静になれる。お互いの勘違いや誤解が減り、当然クレームも減る。運がいいと笑顔でお礼を言われたりもする。そうするとまた「いい対応をしよう」となる・・・。そんな良い循環ができれば、全体のクレームが起こる確率は、かなり減らせるのではないだろうか。

「親切に」「まごころこめて」のお題目より、「コンテクストを掴む」の方が、論理的で具体的で、取組みやすいと思うのだが。



## 告知

### 対人援助学会第4回大会

は2012年12月8日(土)

神奈川県立保健福祉大学(横須

賀市)で臼井正樹大会長の下、

開催です。詳細は次号で!

編集長(ダン シロウ)

200頁程のこんなカラー版マガジンが、大したコストもかからずに簡単にだしてしまうのには相変わらず驚きがある。そして、それがやろうとする気持ちひとつだというのには、もっと喜びがある。

何かが実現できるかどうかには、様々なファクターがある。同様に、何かがなかなか実現できないのにも、多様な要因がある。それを私は、結局は意志の問題だと思っている。

「生物の進化過程において、速く走りたいと思ったものが馬になった!」という非科学的かも知れない考え方が好きだ。この雑誌の試みも同じ事だと思う。

だから、若い世代の人達に、行動基準の中心に意志をおいて、成功するか失敗するかは時の運であり、それを支配することなど誰にも出来ないという覚悟を決めたら、あらゆる事は、やるか、やらないかだけだと伝えておきたい。

そしてやってみたら、案外上手いくものなのだ。扉は開きたくて、叩かれるのを待っているのかもしれない。

いよいよ次号が第10号。正直ここまでやれる

とは思わなかった、と書いた方が可愛いのだろうが、残念ながらそんなことはなく、最初から当然だと思っていた。

執筆者の一人、サトウタツヤさんは遅れの無い定期刊行に感心してくれているが、「手段が整っていたら、きちんとやれるんだよ私たちは!」と、誰にというわけでもないが、そう言いたい気分だ。

でもやっぱり大したもんだ。執筆者の皆さん、有り難うございます。

編集員(チバ アキオ)

「はい、これ!」いつも通り出勤した施設で利用者の方がチラシをくれた。普段そういうことをしない方だったので「ナニ?ナニ?」と思ってチラシをみると「被曝ジェノサイド!放射能バラマキ絶対反対!」ととても勢いのある字で書かれた見出しがでかかど書かれているのが目に飛び込んできた。それは被災地のがれきの受け入れを反対している人たちが印刷、配布したもので、その中を読んでいると、がれきを受け入れた場合、がれきの処理をする清掃工場の近くの地域に影響が出るというものだった。そこには、処理する施設から一番近い福祉施設として私の勤める施設が実名入りで掲載されていた。...って、いきなり当事者???そうなんです。こういうことを経験する、今の「時代」の雰囲気を感じます。時代に影響を受けたもの、受けていないものがあるならば、対人援助学マガジンは後者に重きを置いているマガジンだと考えています。それこそがこのマガジンのアイデンティティだとあらためて思います。

## ご意見・ご感想

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

学会時にも販売しましたが印刷版対人援助学マガジン(1号~8号各1000円・全巻統一価格にしました)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

## マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438  
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

# 対人援助学マガジン 通巻9号

第三巻 第一号

2012年06月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第十号は2012年9月15日

発刊の予定です。

原稿締め切りは8月25日！

執筆の方はスケジュール表に

記入を！

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1  
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1  
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

このイラストは映画「君に読む物語」の短文の挿絵として書いた。

映画はDVDで、かなり偏見たっぷりな先入観を伴って観た。そしてまあ、そんな物語だったのであるが、反省した。

心が動いたのである。ありそうな、いかにものお涙ちょうだい、老人の愛物語なんてと思っていたのにである。

自分が歳をとってきたせいかもしれない。人は勝手なもので、自分がそこに近づくと、了解度がアップしたりする。

夫のことが分からなくなる妻、これが何とも切ない。その妻に、何度も何度も自分たちの若い頃の恋物語を読み聞かせる夫。

しかし「美しい物語・・・」とは言ってくれるが、それが自分たちの物語であることは記憶からこぼれ落ちてしまっている。

映画の老女は、つかの間、記憶を取り戻すのだが、又忘却の中に行ってしまうのだったようだ。

そうだったかなあと本も読んだのに記憶がおぼろげだ。私が惚けてどうする。

ま、そのような話だったんじゃないかと思うが、歳をとってきて、いい加減なことばかり言うようになっているから仕方がない。そんな話の映画であってもなくても、支障はないでしょう。

2012/06/15 団士郎